

第52回日独スポーツ少年団 同時交流 報告書 2025



BERICHT DES 52.JAPANISCH-DEUTSCHEN
SPORTJUGEND SIMULTANAUSTAUSCHES

..... 第 52 回日独スポーツ少年団同時交流報告書

目 次

第 I 章	ドイツ研修の旅 ——日本団派遣の記録	1
■	団長団総括(団長・総務)	2
■	全体プログラム(前半)	15
■	地方プログラム	17
■	全体プログラム(後半)	40
■	引率指導者レポート	41
■	団員レポート	53
■	テーマレポート	71
■	お世話になった方々	77
第 II 章	ドイツの友を迎えて ——ドイツ団受入の記録	79
■	全体プログラム(前半・東京)	80
■	地方プログラム	81
■	全体プログラム(後半・東京)	141
■	ホストファミリーの声	142
第 III 章	実施概要報告	151
(1)	日本団派遣	152
①	実施要項	152
②	日本団事前研修会(オンライン)	156
③	日本団の編成	157
(2)	ドイツ団受入	158
①	実施要項	158
②	ドイツ団の編成	160
③	ドイツ団受入通訳一覧	160
(3)	日独スポーツ少年団国際交流協定書(2024-2027 年)	161

あとがき

第 I 章 ドイツ研修の旅

●日本団派遣の記録



団長団総括

～ドイツのスポーツ文化の不易流行を思案した旅～

日本団団長 行貴 鉄平

はじめに

第 52 回日独スポーツ少年団同時交流の日本団は、団長団 3 名、指導者 10 名、団員 56 名の総勢 69 名により結成されました。今年は総合型地域スポーツクラブや大学といったスポーツ少年団以外からも参加者を募集し、昨年度の日本団(総勢 55 名)に比べて多くの参加者を得ることができたのは本当に嬉しいことでした。また、総務の小松氏や庶務の岡本氏をはじめ経験豊富な指導者の方々に参加していただいたことは、団長として大きな安心材料となりました。

初めての顔合わせとなる事前研修会(5/17-18)では、共通テーマ『『スポーツ×SDGs』～スポーツが拓く社会の持続可能性～』に関するディスカッションの準備に向けたミーティングを重ねましたが、対面ではなくオンライン(zoom)研修会という制約もあり、団員メンバーの様子を見ていると期待よりも不安の方が大きいように感じていました。しかし、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいてドイツ渡航の直前に行った結団式(7/29)では、期待に満ち溢れた団員メンバーの堂々とした宣誓を聞くことができました。5 月から 7 月までの間に参加者が各グループでしっかり準備を重ねてきたことを窺い知ることができました。

その後、我々は同日の夜にドイツへ旅立ち、全体プログラム-前半-(7/30-7/31)、地方プログラム(8/1-8/11)、全体プログラム-後半-(8/12-14)といった 16 日間を無事に過ごすことができました。ドイツ最終日の全体報告会での各グループの発表は、充実した地方プログラムの様子を報告してもらっただけではなく、何よりも自信に満ちたリーダーの発表を聞くことができ、私自身が「ホット」した気持ちになれたことを今でも覚えています。長いようで終われば「あっという間」の日独同時交流となりました。

さて、「はじめに」が長くなってしまいましたが、今年の団長団総括は、総務との役割分担をさせていただき、小松氏に団長団の行程に基づく報告を行なってまいりますので、団長は、自身が感じたことを自由気ままに報告させていただきたいと思いません。



日本団結団式での団長挨拶

新たな試み

今年の日独同時交流は、新たに 3 つの実践を試みました。まず、1 つ目は、先にも示したようにスポーツ少年団メンバー以外の総合型地域スポーツクラブや大学から参加者を募集したことです。日独同時交流は半世紀を越える歴史を有し、これまで数多くの参加者を得てきましたが、近年はスポーツ少年団登録者数とともに、その参加者数も年々減少しています。このような素晴らしい国際交流活動をスポーツ少年団だけではなく、ジュニア・ユース世代の若者にも体験していただきたい。日独同時交流の始まりは、スポーツを通した青少年の国際交流により戦争のない世界平和を実現していくための取り組みであったことを考えると、その原点に立ち返った「古くて新しい試み」であったのかもしれませんが。その結果、今年は 3 名(総合型地域スポーツクラブ:1 名、大学:2 名)の参加者を募ることができました。団長団は、ドイツ最終日に 3 名にインタビュー調査をさせていた

できました。スポーツ少年団の関係性を持つメンバーの輪の中に入るのは大変だったようですが、プログラム自体は大変満足いただいたようでした。また、今後の参加者増加に向けて協力は惜しまないということでしたので、この日独同時交流の価値を知る新たな仲間を得たようで嬉しかったです。

2 つ目は、シニア・リーダースクールとの中継を行ったことです。団長は長らくシニア・リーダースクールの講師をさせていただいていたこともあり、近い将来、日独同時交流に参加してくれるメンバーに国際交流の魅力をダイレクトに伝える機会をどこかで試みることができればと考えていました。団長団の公式訪問の合間を検討し、時差-7 時間の障壁もありましたが、8/8(金)13 時(日本時間 20 時)にドイツと日本のオンライン(zoom)中継を執行することができました。日本側(シニア・リーダースクール)は 3 日目ディスカッション発表会後の時間帯で参加メンバーもクタクタな状況であったと思いますが、我々が伝えたドイツでのプログラムの様子やドイツ人による日独同時交流の魅力についての話を真剣に聞いていただき、さらには質問もいただくなど、短い時間ではありましたが今後につながる有意義な試みとなりました。

3 つ目は、スポーツリーダーとしての資質・能力に関するアンケート調査を実施したことです。日本スポーツ少年団では令和 2 年に指導者・リーダー規程を改定しました。その際にリーダーに求められるリーダー像と具体的な 3 つの資質・能力(①コンセプチャル・スキル、②ヒューマン・スキル、③テクニカル・スキル)が提示されました。また、令和 5 年度以降のジュニア/シニア・スクーリングでは、この 3 つの資質・能力を培うことを念頭にいたカリキュラムへと改定がなされています。日独同時交流は、リーダー養成研修の 1 つの機会として位置付けられています。また、この機会を通じてどのような資質・能力を培うことができるのか、単なる海外旅行ではなくスキル UP の機会である根拠(エビデンス)を得る新たな試みとして渡航前と渡航後の 2 回にわけて調査を実施させていただきました(調査結果は別の機会に報告させていただきたいと思います)。このような日独同時交流の効果を測定する試みは、詳細は異なりますが、ドイツ側ではすでに実施しており、今後は、日本とドイツとの内容を合わせた国際比較ができればと思います。



シニア・リーダースクールとの中継を準備中

ドイツのスポーツ文化の底力

団長団は、いくつかの訪問地において「クラブ(市民側)」や「連盟(行政側)」の方々から地域スポーツの現状と課題についてお話を聞く機会を得ることができました。団長は 2012 年に総務として初ドイツ訪問を果たしましたが、あれから 13 年の月日が経ちます。もちろんドイツにおける地域社会の変化を感じることができましたが、同時に地域スポーツの変わらぬ姿も確認することができました。

第一に、「クラブ(市民側)」でのお話で感じたことですが、以前は多様な種目や多様な世代のサークル活動を中心としたクラブ活動の姿を目にしていたのですが、今回は健康づくり教室やフィットネス機器でのトレーニング場など高齢者を中心としたクラブ活動へと変化していると感じました。ドイツにおける高齢化は、日本に比べればなだらかですが、確実に進んでいることが窺えました。しかしながら、その運営は多くのボランティアによって支えられ、クラブが社会的交流の場として機能している姿を窺い知ることができました。安価で様々なスポーツ機会を提供するクラブの存在はドイツのスポーツ文化の変わらぬ力強さだと感じました。

第二に、「連盟(行政側)」でお話を聞いて感じたことですが、以前は「移民」や「障がい者」などを対象としたインクルーシブ政策の充実に関心した記憶がありましたが、今回は戦争(ロシアとウクライナ)の影響もあり一般市民にまで経済的格差が広がってきていること、その背景から青少年犯罪が増えてきていることなどを背景に、青少年の健全育成やスポーツ権を保障する政策展開として学校の全日制や学校での部活動を多くの州で検討されているという、つまり日本とは真逆(日本では学校の部

活動の地域展開が進められている)の地域スポーツ政策がドイツでは展開されているという変化を感じることができました。また、行政はクラブに対して、これらの社会課題をスポーツで解決するための多種多様な補助金・助成金メニューを新たに設定している様子などをお聞きすることができました。このように新たな仕組みの構築により、「クラブ(市民側)」のエンパワメント(市民が協力して社会課題を解決しようとする力)を支援する「連盟(行政側)」の姿勢(体制づくり)は、ドイツの変わらぬ「民主主義を大切にする社会規範」や「クラブの社会的機能への期待の高さ」の表れであると感じました。



スポーツクラブの施設を見学
たくさんの方からお話を伺いました

不易流行

今回の日独同時交流で感じたドイツのスポーツ文化は、昔からそこにあるものではなく、人々の弛まぬ努力により培われたものであるということです。

常に変化する社会課題の解決にスポーツは何ができるのかを問い続けているからこそドイツではスポーツが多くの人に受

け入れられている文化となっているのでしょう。

日本には松尾芭蕉が示したときされる「不易流行」という言葉があります。この言葉は、「時代を超えて変わらない普遍的な価値(不易)と時代の変化に合わせて変化していくべきもの(流行)を調和させる概念」です。日本においてもスポーツが多くの人の受け入れられる文化となるためには何が必要なのか。また、日独同時交流の価値を多くの人に認識してもらうためには何が必要なのか。ドイツのスポーツ文化から感じた「不易流行」(変わらぬものと変えなきやいけなものを調和させること)の実践は、今後の日独同時交流のテーマとしてみても良いのではないかと思います。



時には糖분을補給しながら、日本とドイツのスポーツについてディスカッションを重ねました。

さいごに

長いようで終われば「あっという間」の日独同時交流でした。そして何よりも、半世紀に渡る日独同時交流の歴史の1ページを繋ぐことができ「ホッと」しています。

このような充実した日独同時交流を終えることができたのもドイツスポーツユエグント(dsj)の役員・スタッフをはじめ、通訳、コーディネーター、ホストファミリーの皆様が受け入れに際して入念な準備をいただいたおかげであると思っています。日本団を代表して感謝の意を記したいと思います。

また、16日間おはようからおやすみまで共にしてくれた、団長団メンバー(総務:小松洋介氏、庶務:岡本咲子氏、通訳:鹿沼輝与志氏、エスコート:クリスティアン・コンラード氏)とは様々なお話ができて本当に楽しい時間を過ごすことができました。ありがとう。



dsjのスタッフの皆さんと。大変お世話になりました！



素晴らしい通訳とエスコートでした。ありがとう！

次世代に繋ぐ同時交流 ～ドイツのスポーツ環境の光と影を肌で感じた 2 週間の記録～ 日本団総務 小松 洋介

はじめに

第 52 回日独スポーツ同時交流に際し、公益財団法人日本スポーツ協会少年団課をはじめ、各都道府県スポーツ少年団、市区町村スポーツ少年団、各単位団の指導者、保護者、引率指導者の皆さん、そして現地でのプログラムにおいて大変ご尽力いただきましたドイツスポーツユエグント(dsj)事務局ならびに日本部会、地方プログラムの受入団体の皆さん・ホストファミリーの皆さん、そしてなにより両国の人を言語でつないでくれた通訳の皆さんに心から感謝を申し上げます。



1661	Timisoara	06:40	06:35	arrived
328	Singapore	06:45	06:25	Baggage
1673	Cluj-Napoca	06:50	06:35	arrived
961	Beijing	06:50	06:25	Baggage
217	Tokyo [HND]	06:50	06:30	arrived
2131	Dresden	06:55	06:55	arrived
1667	Sibiu	06:55	06:40	arrived
2153	Stuttgart	06:55	06:50	arrived
1331	Reykjavik [KEF]	07:00	06:30	arrived
1707	Sofia	07:00	06:45	arrived

dsjの皆さんが早朝から空港で出迎えてくださいました。

日本団事前研修会(5月17日～18日)

4月の派遣内定を受けた指導者、団員は事前研修に参加しました。私も以前、2015年の第42回の同時交流で北海道グループの引率指導者で参加したときは、東京に集合して研修会を行っていましたが、今回はオンラインで開催されました。

開会式の前の団長団、引率指導者ミーティングでは初の顔合わせとドイツへの長期間の引率という事もあり、指導者の皆さんの緊張が画面越しにでも伝わってきました。

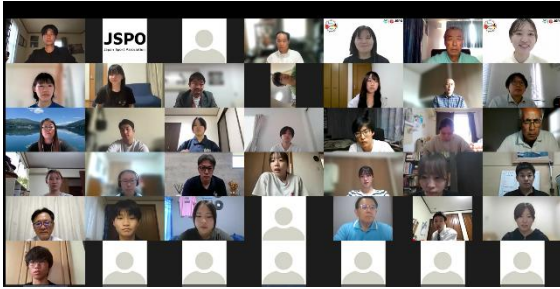
私からは、「団員の皆さんにはこの同時交流を通じていろいろな経験をさせてほしい。そのためのサポートをお願いします。」とお伝えさせていただきました。

さらに今回、スポーツ少年団員に加えて、総合地域スポーツクラブから1名、大学参加者2名が本交流事業に参加することになり、彼らに向けて JSPO 及び JJSA についてのレクチャーが行われました。

開会式の後、事務局岡本氏より本交流事業について及び派遣スケジュールの説明があり、レクチャーでは拓殖大学国際学部石川一喜准教授より本交流事業の共通テーマである、『『スポーツ×SDGs』～スポーツが拓く社会の持続可能性』というテーマでレクチャーしていただきました。

グループディスカッションでは全員がオンラインということで私もそれぞれのグループのトークルームは入り内容を聞いていたが、初めて会う団員もいる中で、引率指導者、団員ともにコミュニケーションをとるのが難しそうな印象を受けました。個人的には事前研修会は対面が良いのではないかと感じました。

2日間の事前研修会を終えて、各グループは本番の派遣に向けてさらに準備を進めました。



事前研修会(オンライン)の様子

東京集合・結団式(7月28日～29日)

7月28日、派遣団員は国立オリンピック記念青少年総合センターに集合しました。

期待と不安と重たいスーツケースを抱えた団員・指導者は今まで画面越しでのコミュニケーションだったものが、いざ対面となったものの、まだまだごちなさの残る雰囲気でした。

全体会の後に、櫻井麻美先生による「ドイツ講座」を受講しました。本交流事業の通訳など経験の豊富な櫻井先生のお話からドイツに関する基礎知識や実用的なドイツ語のレクチャーを受け、団員に皆さんの気持ちさがさらに高揚していたように感じました。



ドイツ講座:ドイツ語であいさつの練習

2日目、29日の午前中はグループごとの自由研修となり、15時15分から日本団結団式が行われました。行實団長が用務の都合上、この日からの登場となり、これでようやく日本団が全員揃いました。

行實団長からの挨拶のあと、日本スポーツ少年団旗、ペナントが授与され、各グループリーダーから誓いの言葉が述べられ

ました。いよいよ出発の時を迎えて日本団の気持ちが高まっていくのが感じられました。



団旗とペナントの授与(結団式)

旅立つ前の最後のプログラムが、第51回総務の田中久美氏から「派遣の心構え」のレクチャーがありました。昨年度の派遣の様子などを紹介いただいて団員もこれから始まる事業でのイメージがついたように思います。

夕食を終え、いざ出発です。

バスに荷物を積み込み羽田空港へ向かいました。今回、日本団は全員同じ便での搭乗ということで非常に有難かったです。



出発前に空港で集合写真

ドイツ到着 7月30日(水)

15時間に及ぶフライトは中年男性の私には非常に長く感じましたが、体調不良の団員も出ることなく無事にミュンヘン空港に到着しました。

到着口のロビーでは多くの dsj スタッフや団長団通訳の鹿沼輝と志さんや皆さんが出迎えてくれました。

個人的には10年ぶりにマティアスと再会できてとても嬉しかったです。

とても懐かしいと感慨に浸っていたのですが、外に出るとなんと気温が18度でした。日本団総務として、団員の皆さんへ「体調崩さないように、体調管理は万全に」などと日本出国前に伝えていたにも関わらず、ここまでの涼しさは予想していませんでした。過去の本事業の経験もあり、タカをくくっていたかもしれません。長袖など持ってきておらず若干寒い思いをしました。

感動の再会の時を味わい、宿舎であるミュンヘンのスポーツシュレに移動しました。朝早い到着だったため、まだ部屋に入る時間ではなかったのですが、ドイツ側のご配慮により、希望者はシャワーを浴びることができました。ご配慮に感謝いたします。

シュレに到着後、体育館でオリエンテーション、午後から団員はスポーツシュレ内でスポーツ活動、指導者はミーティングを行いました。



10年ぶりにマティアスと再会！（写真右端）



シュレに到着して最初のプログラムはシャワー！
ロータリーでスーツケースを開けたのも良い思い出です。

7月31日(木)

この日は、朝から日本団はバスに乗り込み、まずはアレアンツ・アリーナに向かいスタジアムツアーに参加しました。テレビで見たことはありましたが、実際に見るととても迫力でした。



午後はグループごとに市内のオリエンタリング。団長団はミュンヘンオリンピックパークを見学しました。BMWの博物館にも寄りましたが、時間がほとんどなくじっくりと見ることができなかったのが残念でした。

団長団の夕食は dsj 理事である、キルステンハーゼンプッシュ氏とベニーフォルクマン氏、そして「日独スポーツ少年団同時交流のお母さま」である高橋範子さんの夕食会でした。湖のほとりのレストランで素晴らしいロケーションでした。



オリンピックパークを見学

8月1日(金)

いよいよ今日から地方プログラムのスタートです。

団長団は各グループのお見送りをします。地方プログラム受入担当者との初対面で緊張している様子も見えました。見送り

をしている最中に、過去の指導者交流で北海道に来てくれた、アンナレーナさんが会いに来てくれました。僕の Facebook を見て駆けつけてくれました。2歳の娘さんも一緒に来てくれてお菓子をプレゼントしようと思いましたが、警戒されてしまいました…。各グループの見送りをした後、東海グループに合流しました。

団長団は、行實団長、岡本庶務の私たち3名のほかエスコートのクリスチャン・コンラード(コニー)さん、通訳の鹿沼輝与志さんの5名。コニーさんは2013年の日独スポーツ少年団指導者交流で北海道に来た以来の仲です。シュエレに迎えに来た時には本当に嬉しかったです。期間中はコニーとずっと一緒に過ごせることでとても安心しました。

キルヒハイムへ移動し、テック城を見学してキルヒハイムのスポーツクラブのクラブハウスを視察しました。1885年に設立された体操クラブが発祥のクラブで今はフェンシング部門がクラブの中心となっているそうです。キルヒハイム市4万人の人口の中5,000人がこのクラブの会員だそうです。

団長団は見学の後、東海グループの歓迎会に同席し、団員たちが各ホストファミリーと帰宅するのを見届けました。



東海グループと一緒にクラブハウスを視察

8月2日(土)

東海グループと一緒にリヒテンシュタイン城を見学しました。あいにく雨でしたが、晴れていれば素晴らしい景色であったろうと思いました。午後のローラーライダーも悪天候で中止となり残念でした。一番楽しみにしていると言っていた庶務の岡本さんはとても残念がっていました。



昼食は地元の郷土料理をいただきました。

8月3日(日)

エスリンゲンのスポーツパークを見学、1845年から続くクラブでした。

サッカースタジアムや体育館フットサル競技場、ビーチバレーコートなど広大な敷地のスポーツパークです。

サッカースタジアムはエスリンゲンのサッカークラブが管理していますが、それ以外の施設はクラブが管理運営しているとのことです。日中の体育館には近隣の小学生が体育の授業で利用するとのことでした。

昼食後、団長団は関東Ⅱグループが交流しているリンブルグへ移動しました。



地図を見るだけで広かつ充実した施設であることが良くわかります

8月4日(月)

リンブルグ・ヴァイルブルグの郡役所にて表敬訪問を行いました。郡のスポーツについてレクチャーを受けました。急な修繕や消耗品など購入のためにワンストップで助成を受けるなどの支援が充実しているようでした。午後はリンブルグの大聖堂を見学しました。



特徴的な建物がたくさん！



リンブルグでの表敬訪問

8月5日(火)

この日はシニア・リーダーズスクール会場との中継テストを行い、ランゲンダーンバッハのスポーツクラブである多様道場の施設を見学しました。市の土地を借りてクラブのメンバーだけで立派な道場を作られていました。会員の協力を得ながら地域

に根差した素晴らしいクラブです。日本の武術を取り入れながらオリジナルもあるユニークな武術です。



多様道場での夕食の様子

8月6日(水)

ケルン体育大学を見学しました。この日は団長団プログラムの日となりました。私自身は2011年の指導者交流以来のケルン体育大学の訪問でした。

約6,000人の学生が学んでいるこちらの大学の学費は半期で313€(約5万円)です。入学試験は様々な種目の実技試験で選考されるそうです。夏休み期間だったこともあり、学生はまばらでしたが、グラウンドでは子供たちのスポーツキャンプが行われていました。



14年ぶり2回目のケルン体育大学

午後はケルン市スポーツ連盟を訪問しました。クリスティーナさんからのレクチャーを受けました。人口約130万人のうち35万人がケルン市内にある約700あるスポーツクラブに加入しているそうです。クラブは今年新たに7つ増え、市民のクラブ会員数も増加傾向にあるとのこと。ドイツも収入格差の

拡大による青少年の犯罪率の上昇を防ぐために、青少年をスポーツに引き込む取り組みが多くされているそうです。

その後向かったケルン大聖堂も迫力が凄まじかったです。



ライン川越しにケルン大聖堂と夕日を眺めました

8月7日(木)

エッセンへ移動し、ちょうど仲良く外でお昼ご飯を食べている九州グループに合流しました。その後、ツォルフェアイン炭鉱業遺産群を見学しました。当時の炭鉱の過酷な労働環境を学ぶことができました。



九州グループと一緒に炭鉱業ミュージアムを見学

8月8日(金)

ノルトラインヴェストファーレン州のスポーツユージェントを訪問しました。理事のダニエルさんのレクチャーを受けました。お仕事はエネルギー会社の社員をしながらボランティアでスポーツユージェントにかかわっているとのことでした。

隣接する施設の「スポーツと体験の村」は1960年に建設さ

れ、262人が宿泊可能で年間の利用者数は21,000人。平日は学校の修学旅行、土日はクラブの合宿などで活用されており、サッカー、卓球、武道の青少年の利用が多いとのこと。運営は州の補助金でユージェントが運営しているそうです。レクチャーのあとにシニア・リーダー学校の会場と中継を行いました。参加者にとってもドイツを意識する良い機会になったと思います。日独スポーツ少年団同時交流に参加するリーダーが増えてくれることを願います。その後、オランダのベンローに行きハイデンまで移動しました。



ノルトラインヴェストファーレン州スポーツユージェントを訪問



隣接する宿泊可能なスポーツ施設

8月9日(土)

ハイデン市庁舎へ向かい市長へ表敬訪問を行いました。市長にも温かく迎え入れていただき、ハイデン市について市長自らレクチャーしていただきました。子供たちに手厚い行政支援が行われている印象でした。

レクチャーの後は、九州グループの受入先であるチェスクラブを訪問しました。1962年に設立されたチェス単一種目のクラブとのことで90人の会員で運営されています。団員たちの

ディスカッションも見ることができ、日本の団員もしっかりと各自の意見を述べていたのが印象的でした。ここまでエスコートしてくれていたコニーに元気が無いなど思っていたところ体調が良くないようで我々のワゴン車で休んでいたようです。旅の初めからハイテンションで我々団長団を楽しませてくれたコニーにも疲れが出てきていたようです。幸い、休憩の後少し復活してくれたので安堵しました。



ハイデン市長を表敬訪問



チェスのクラブハウスを訪問

8月10日(日)

この日は翌日の各地から集結する各グループの出迎えるためフランクフルトにあるヘッセン州スポーツ連盟スポーツシューレへ移動しました。夕食は今までお世話になったドイツ側の皆さんとの答礼夕食会でした。この日、マティアスとミュンヘン以来の再会の果たし、夜遅くまで話すことができました。日本の青少年のスポーツについてたくさん質問してくれたり、日本に向かう前のドイツの団員にラジオ体操を体験させる動画を見せてくれるなど、マティアスは本当にまじめなナイスガイです。高橋範子さんからこの事業が始まった経緯を伺い当時の様子を知るこ

とことができました。「交流をした友達のいる国に爆弾を落とそうとは思わないでしょ！」印象的な言葉でした。



夕食後の一枚！

8月11日(月)

フランクフルトのシューレの隣にあるドイツスポーツ連盟とドイツスポーツユース事務局を訪問しました。宮下香織さんの案内の元きれいなオフィスを拝見しました。

午後からは各グループが地方プログラムを終えてフランクフルトに集結しました。

各グループの団員は疲れの中にも充実した顔つきが印象的でした。ここで受入担当者とお別れとなるグループもあり、涙のお別れも見えました。いろんな想いが込み上げてきたのでしよう。思わずもらい泣きをするところでした。

夜は指導者ミーティングを行い、各グループからの報告をいただきました。

この報告をまとめて翌日の団長団評価会へのまとめとするものですが、各指導者の皆さんの報告が非常に情報量の多いもので今後の本事業に役立てられるものだと思います。



団長団、dsjの皆さんでグループの出迎え準備

8月12日(火)

ドイツ滞在最終日はグループ毎にフランクフルト市内を散策しました。約10年ぶりに訪れたレーマー市庁舎は相変わらずの迫力でした。午後は団長団評価会、日本団全体評価会、さよならパーティーとなりました。各グループの出し物など最後の思い出の場面になったものと思います。



フランクフルト市内を案内していただきました



沢山の関係者の方が集まってくださったさよならパーティー

8月13日(水)

いよいよ帰国の日です。朝8時過ぎから荷物を積み込みバスでフランクフルト空港へ出発しました。

別れを惜しむ団員達、出発ゲートを進み見えなくなるまで手を振ってくれていた dsj の皆さん、スタッフや通訳の皆さんが期間中、本当に親切にさせていただいたことに感謝いたします。羽田空港には14日朝にほぼ定刻通りに到着し、行實団長による解団式の後、無事に日本団は解散となりました。



無事に全員がドイツから出国できほっと一息

おわりに

私にとっては、2011年の指導者交流、2015年北海道グループの指導者として、日本スポーツ少年団の活動開発部会員として、2017年の役員交流以来の参加となりました。この交流で知り合った皆さんが変わることなくこの事業に関わってくださり両国でつながっている事業だと感じました。

これからは今回の団員が主役となり次世代につながっていくことを願うばかりです。

近年、日本側の参加者が少ないことは大変残念な事であり、我々スポーツ少年団関係者がこの事業のすばらしさを地域の多くの団員や指導者へプロモーションしていかななくてはならないと感じました。

私は北海道スポーツ協会で現在、スポーツ少年団、総合型クラブなどの業務に関わっている中で、ドイツのクラブを視察できたことは今後の業務に役立つことばかりでした。ただ、日本が参考になっているドイツのクラブでも課題はあり、それに向けて改善しようとしている姿は見習いたいと思います。

改めて、期間中、団長団のエスコートをしてくれたコニー、あなたの陽気なキャラクターは毎日、最高に楽しかったです。通訳をしてくれた輝与志くん、日本人より難しい日本語を使った通訳は圧巻の一言です。

庶務の岡本さん、派遣前から多くの調整をしていただき、行実団長と私は大変楽をさせていただきました。本当に感謝しています。

行実団長、決めるところはしっかり決める頼りになる団長でした。

最後に、この日独スポーツ少年団同時交流に関わってくださった全ての皆様に感謝を申し上げます。Vielen Dank！！



2週間素敵な時間をありがとうございました



毎日特等席(助手席)で楽しいドライブでした

全体プログラム(前半)

7月30日(水)

- 東京国際空港(羽田)出発(NH217便) ※29日(火)夜
- ミュンヘン国際空港到着、スポーツシュレ・オーバーハングへ移動
- 歓迎式、dsjレクチャー
- スポーツシュレ施設見学、スポーツレクリエーション



▲ミュンヘン国際空港に到着



▲スポーツシュレで集合写真



▲体育館でスポーツレクリエーション



▲広大なスポーツ施設で自由にスポーツが楽しめる

7月31日(木)

- Allianz Arena(アリアンツ・アリーナ)見学
- ミュンヘン市内オリエンテーリング
- SDGs×Sport に関するワークショップ



▲アリアンツ・アリーナ見学



▲ミュンヘン市内オリエンテーリング

8月1日(金)

- 地方プログラムへ移動



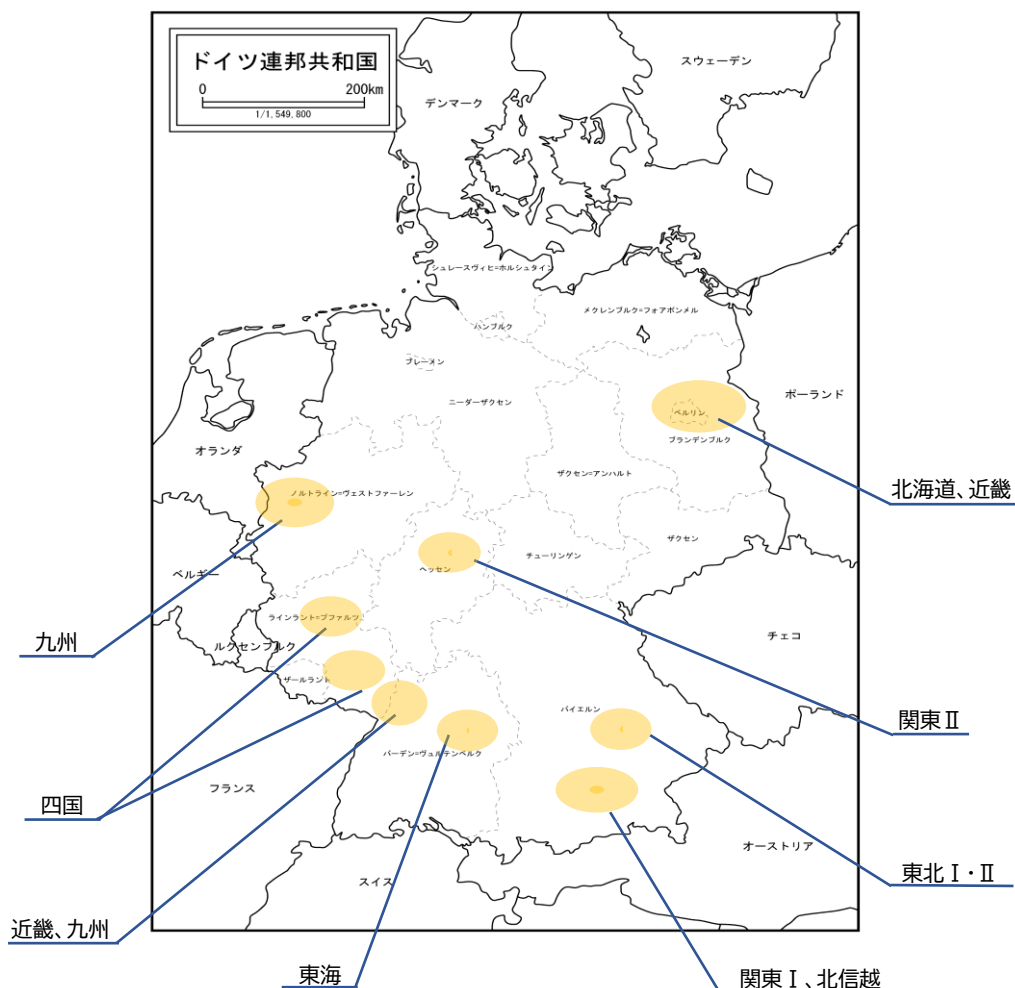
▲地方プログラムへ出発！



▲地方プログラム受入担当者と対面

地方プログラム

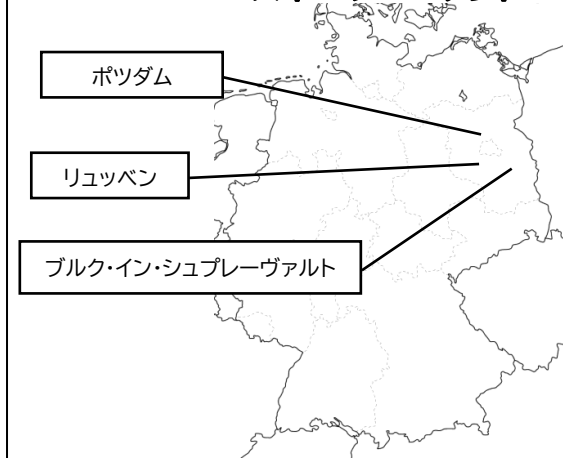
日本団グループ	ドイツパートナー	主な訪問地
北海道	ブランデンブルク	ポツダム、ブルク・イン・シュプレーヴァルト、リュッペン
東北 I・II	バイエルン	ランツフート
関東 I	柔道	レンググリース
関東 II	ハッセン	ランゲンダーンバッハ
北信越	スキー	ホルツキルヒェン
東海	ヴェルテンベルク	キルヒハイム、エスリンゲン
近畿	重量挙げ	ベルリン、ハイデルベルク
中国	ザクセン、ザクセン＝アンハルト	ミルカウ、ゲルヴィツシュ
四国	ラインラント＝プファルツ	オーターバッハ、カイザースラウテルン、ブライ
九州	チェス	バーデンバーデン、ハイデン
団長団	－	ランゲンダーンバッハ(関東 II)、キルヒハイム(東海)、ハイデン(九州)、ケルン



北海道グループ

ブランデンブルク・

スポーツユージュント



グループスローガン

H(hope)A(activity)P(peace)P(playsports)Y(yokefellow)!



▲リュッペン郡長 表敬訪問

▼ベルリンを散策



日程

8月1日(金)

ポツダムへ移動

8月2日(土)

オリエンテーション／ブランデンブルク門周辺散策／
サンサーシー宮殿散策

8月3日(日)

言語交流活動／SDGs ワークショップ／カヌー体験

8月4日(月)

言語交流活動／中間評価・振り返り／街歩きガイドツアー

8月5日(火)

リュッペン郡長表敬訪問／
スポーツ活動(スピードバドミントン・テニス)

8月6日(水)

登山／ドレスデン散策

8月7日(木)

ベルリンの壁見学／宝探しゲーム／
チェックポイントチャーリー見学

8月8日(金)

シュニッツェル作り／けん玉／折り紙／よさこい披露／
音楽フェス

8月9日(土)・10日(日)

ファミリーデー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲よさこいを披露



▲ハイキング



▲音楽フェスに参加



▲シュニッツェル作り



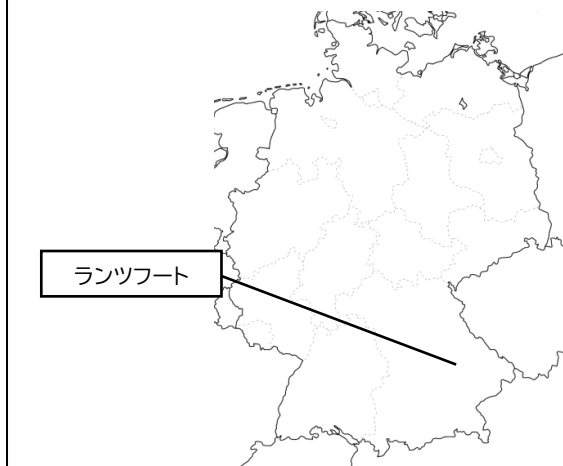
▲みんなで折り紙



▲カヌー体験

東北 I・IIグループ

バイエルン・スポーツユエгент



グループスローガン

国境を超えてスポーツを通じた関わりを大事にしていこう



▲ボートツアーへ出発!

▼水難救助隊の見学



日 程

8月1日(金)

ランツフトへ移動/ホストファミリーと対面

8月2日(土)

水難救助隊の見学/パルクール体験

8月3日(日)

湖でボートツアー/ハイキング

8月4日(月)

スポーツ施設見学/州議会を訪問/スポーツ体験

8月5日(火)

学校を視察/テーマディスカッション/市長表敬訪問/
ミニゴルフ体験

8月6日(水)

トラウスニッツ城の見学/区長を訪問/サッカーゴルフ

8月7日(木)

バイエルンパークでホストファミリーと交流

8月8日(金)

ファミリーデー

8月9日(土)

高所アスレチックパーク/ゴイホーデン祭り

8月10日(日)

ファミリーデー/さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



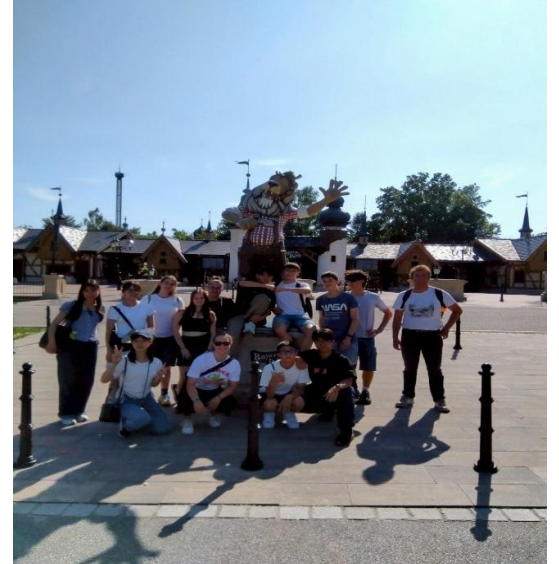
▲シュトゥックシーゼンのスポーツ体験



▲ハイキングへ



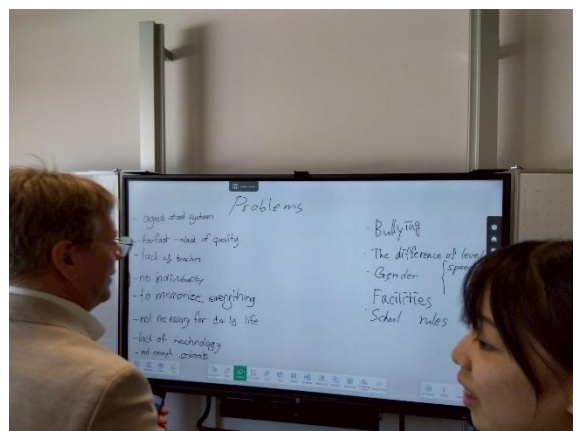
▲日本から持参した福笑い



▲バイエルンパーク



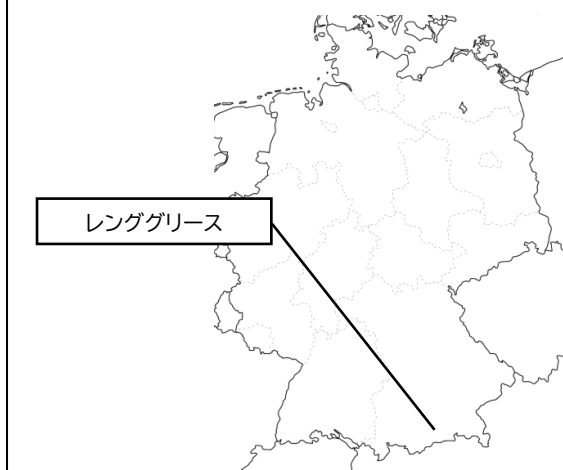
▲お別れの時



▲テーマディスカッション

関東 I グループ

ドイツ乗道ユージェント



グループスローガン

私たちが架ける日独の新しい橋



▲伝統的な衣装でお祭りに参加

▼大きな火！キャンプファイヤー



日 程

8月1日(金)

レンググリースへ移動／ホストファミリーと対面／
キャンプファイヤー

8月2日(土)

登山／プール／キャンプファイヤー

8月3日(日)

ファミリーデー

8月4日(月)

ポートツアー／馬車体験／シュロス・ヘレン・キームゼー城見学

8月5日(火)

ケーブルカーで山登り／街を散策

8月6日(水)

高校を訪問／馬車体験／BBQ

8月7日(木)

ドイツミュージアム見学／ミュンヘン市内散策

8月8日(金)

スポーツ活動(ビーチバレー)／BBQ／ファミリータイム／
祝祭パレードに参加

8月9日(土)

ラフティング／テーマディスカッション／ピザパーティー

8月10日(日)

お祭りに参加／ファミリータイム

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲空き時間にみんなでサップ



▲ビーチバレー



▲13キロの川下り



▲ポップに乗って山を駆け下りた



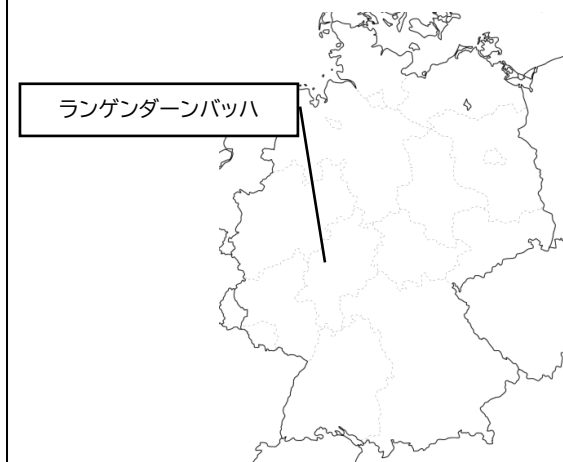
▲書道パフォーマンス大成功



▲博物館へ

関東IIグループ

スポーツユージェント・ヘッセン



グループスローガン

日本とドイツの違いを知る！



▲リンブルクにて表敬訪問

▼リンブルク大聖堂を見学



日 程

8月1日(金)

ランゲンダーンバッハへ移動／歓迎式

8月2日(土)

多様武術を体験／レクリエーション活動／城の見学／
スポーツ活動(サッカー)

8月3日(日)

ファミリーデー

8月4日(月)

表敬訪問(リンブルク第一郡副長官)／リンブルク市内観光／
ショッピングモールで買い物

8月5日(火)

ヴァイブルグ城見学／ハイキング／BBQ

8月6日(水)

エーレンブライトシュタイン要塞を見学／市内散策

8月7日(木)

トーン・シュミット社(粘土採掘場・研究所)訪問／
ハーモニック・ドライブ社工場見学／テーマディスカッション

8月8日(金)

幼稚園見学／スポーツ交流(テニス)

8月9日(土)

ファミリーデー
森のアスレチック体験／ワイルドパークで動物と触れ合い

8月10日(日)

スポーツ活動(少林寺拳法)／折り紙／さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲テーマディスカッション



▲テニスクラブでテニス体験



▲コブレンツ市内散策



▲道着の帯にサイン



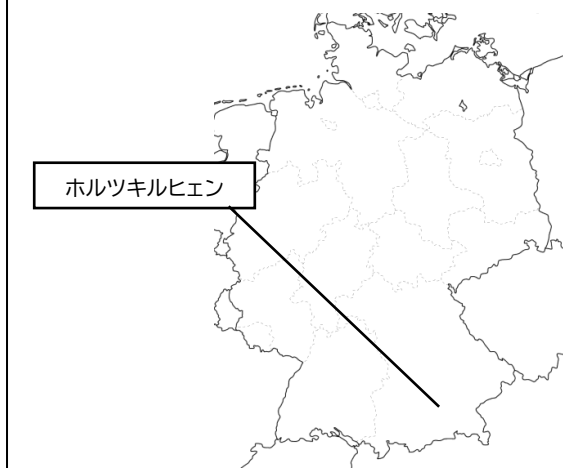
▲粘土採掘場 見学



▲さよならパーティー

北信越グループ

ドイツキーユージェント



グループスローガン

沢山の経験をして日本に持ち帰る



▲ディアンドルを着てお祭りに参加

▼青空の下でテーマディスカッション



日 程

8月1日(金)

ホルツキルヒエンへ移動/ウェルカムパーティー

8月2日(土)

スポーツ活動(体カトレーニング、バレーボール)/
村のお祭りに参加/ケーキ作り

8月3日(日)

ファミリーデー

8月4日(月)

ノイシュヴァンシュタイン城を見学/
ショッピングモールで買い物

8月5日(火)

マークス・ヴァスマイヤー野外博物館を見学/
バターづくり体験/テーマディスカッション

8月6日(水)

幼稚園の見学/ホルツキルヒエン市内で宝探し

8月7日(木)

ザルトブルク散策/レッドブル・ハンガー7 見学

8月8日(金)

養魚場見学/チーズ工房見学/
スポーツ活動(水泳、バレーボール)/森林祭りに参加

8月9日(土)

スポーツ活動(クライミング)/ハイキング

8月10日(日)

ファミリーデー/きよならパーティー/

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲宝探しゲーム



▲お土産で扇子をプレゼント



▲クライミングガーデン



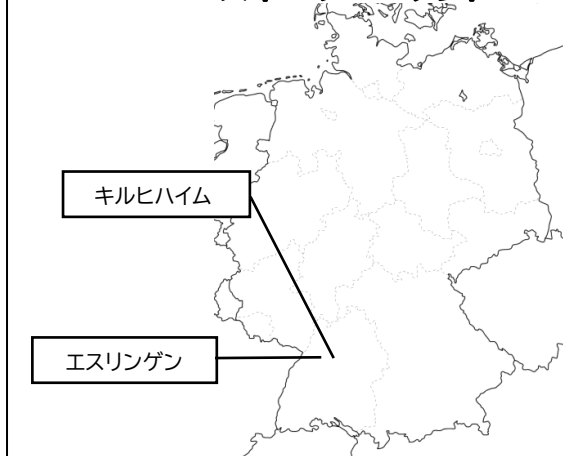
▲暗くなるまでボールを使って交流しました



▲ランチタイム

東海グループ

ヴェルテンベルク・ スポーツユエグント



グループスローガン

やらず後悔より、やって後悔 何事にもチャレンジ！



▲フェンシング体験

▼エアライフル体験



日 程

8月1日(金)

キルヒハイムへ移動／ホストファミリーと対面

8月2日(土)

リヒテンシュタイン城見学／地層や化石の学習／
チョコレート工場見学

8月3日(日)

ファミリーデー

8月4日(月)

表敬訪問(キルヒハイム市長)／体力測定

8月5日(火)

ヴェルテンベルク・スポーツユエグント訪問／
メルセデスベンツ博物館見学

8月6日(水)

空気射撃体験／スポーツパーク見学／テーマディスカッション

8月7日(木)

表敬訪問(エスリングゲン市役所)／インデックス社工場見学／
フェンシング体験

8月8日(金)

シュタイフ博物館見学／シャーロットテンハーレ鍾乳洞見学／
ハウフ化石博物館／化石狩り

8月9日(土)

ファミリーデー

8月10日(日)

カヌー体験／さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲SPEIT 体操器具会社見学



▲ホストファミリーと対面



▲カヌークラブ



▲Ritter Sport(チョコレート工場)を見学



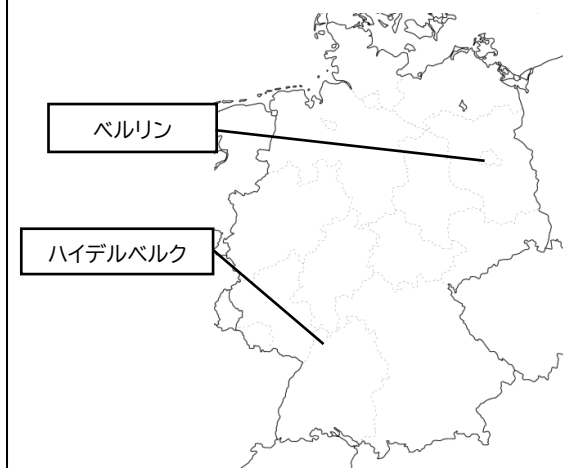
▲スポーツパーク



▲さよならパーティー

近畿グループ

重量挙げユージェント



グループスローガン

明るい未来へかけようスポーツの架け橋を

～いつでもどこでも誰とでも～



▲ベルリンの政治的建築物ラリーでの集合写真

▼ハイデルベルクでの集合



日程

8月1日(金)

ベルリンへ移動／ベルリン市内散策

8月2日(土)

アイスブレイク／テーマディスカッション／ベルリン市内ラリー

8月3日(日)

ベルリン動物園見学／ベルリンの壁記念館／

動物福祉に関するディスカッション

8月4日(月)

連邦議会議事堂を見学／政治施設ラリー／

ドイツ連邦軍慰霊碑見学／オリンピックスタジアム見学

8月5日(火)

アレクサンダー広場を散策／オリンピック強化センター見学

8月6日(水)

ハイデルベルクへ移動／街を散策

8月7日(木)

ボディープジティブティについての意見交換／

テーマディスカッション／旧市街を散策

8月8日(金)

ケーニヒスシュトゥールへ移動／ハイデルベルク城を見学

8月9日(土)

スポーツ活動(バレーボール)／大学施設ラリー

8月10日(日)

野外プール／ウェイトリフティング体験／さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲ウエイトリフティング体験でのデモンストレーション



▲ベルリンオリンピックスタジアム



▲ハイデルベルク宿泊でのチェス



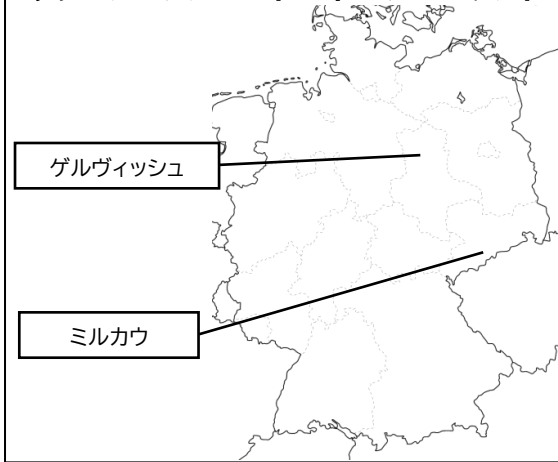
▲ベルリンからハイデルベルクへの移動



▲ベルリンでの話し合い

中国グループ

ザクセンスポーツユーгент
ザクセン=アンハルトスポーツユーгент



グループスローガン

ソーセージよりも厚くなるう お値段以上のドイツ研修



▲お揃いのTシャツで

▼ドレスデン市内散策



日 程

8月1日(金)

ミルカウへ移動／歓迎式／ホストファミリーと対面

8月2日(土)

ドレスデンへ出発／市内観光／聖母教会を見学／
スポーツ観戦(アーチェリー)

8月3日(日)

スポーツ活動(ドッジボール、ビーチバレー)／
アウグストゥスブルク城を見学／教会見学

8月4日(月)

ケーゲル体験／ボートツアー／テーマディスカッション
ミッテルザクセン郡スポーツ連盟との対面式

8月5日(火)

エリートスポーツ学校を見学／さよならパーティー

8月6日(水)

ライプツィヒへ移動／ダム見学／ホストファミリーと対面／
歓迎会／BBQ／スポーツ活動

8月7日(木)

消防指令センターを見学／市内散策／テーマディスカッション

8月8日(金)

GETEC ハンドボールアリーナ見学／千年紀タワーを見学／
スポーツ活動

8月9日(土)

ベルリンへ移動／アレクサンダー広場を散策／テレビ塔見学

8月10日(日)

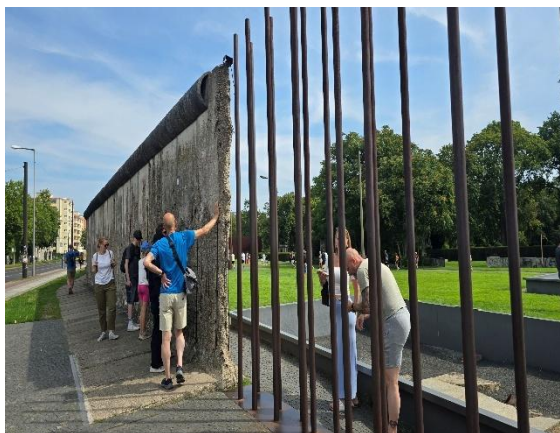
ファミリーデー／さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲テーマディスカッション



▲ベルリン市内散策



▲マグデブルクでハンドボール



▲ミルカウ運動場 ビーチバレー



▲ゲアヴィッシュにてスポーツ活動



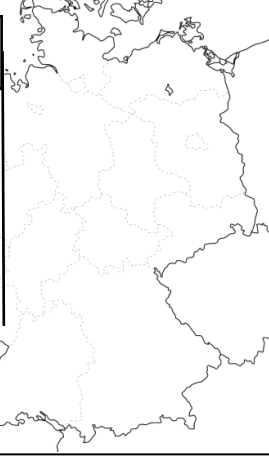
▲さよならパーティー

四国グループ

スポーツユージェント・ ラインラント＝プファルツ

オッターバッハ
カイザースラウテルン

ブライ



日 程

8月1日(金)

オッターバッハへ移動／歓迎パーティー／
ホストファミリーと対面

8月2日(土)

ファミリーデー／スポーツ活動(ボウリング)

8月3日(日)

ハイデルベルク城見学／動物園見学

8月4日(月)

屋内プール／スポーツ活動(トランポリン)／BBQ／

8月5日(火)

裸足ウォーキングアスレチック／カヌーツアー／
さよならパーティー

8月6日(水)

柔術の稽古／テーマディスカッション／モーゼル川クルーズ

8月7日(木)

ハイキング／エルツ城見学／公式レセプション

8月8日(金)

旧市街ツアー／テーマディスカッション

8月9日(土)

ワインセラー見学／森林アスレチック

8月10日(日)

ファミリーデー／さよならパーティー

8月11日(月)

国際ワイナリー見学／フランクフルトへ移動

グループスローガン

メリハリをもって、ドイツについて知識を深めよう



▲緊張で話ができなかった歓迎パーティー

▼口でチョコレートをキャッチするゲーム





▲裸足でウォーキング。初めての感覚！



▲地下ワインツアー



▲初の柔術体験



▲歩いてお城まで。自然に触れられた



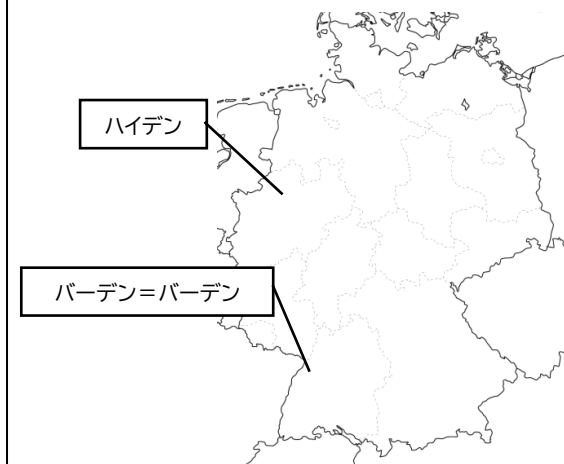
▲トリーア旧市街ツアー



▲さよならパーティー

九州グループ

ドイツチェスユージェント



グループスローガン

同心協力～スポーツが持つ力～



▲悪魔の石の前で昼食

▼テーマディスカッション



日程

8月1日(金)

バーデンバーデンへ移動／ホストファミリーと対面

8月2日(土)

バート・ヴィルトバートの吊り橋／ファミリータイム

8月3日(日)

スーパースライダー／市内散策

8月4日(月)

テーマディスカッション／チェス体験

8月5日(火)

ラシュタット城を見学／さよならパーティー

8月6日(水)

ケルン市内散策／ホストファミリーと対面

8月7日(木)

ツォルフェアイン炭鉱を見学／大型ショッピングモール

8月8日(金)

ファミリーデー

8月9日(土)

市長表敬訪問／テーマディスカッション／屋外プール

8月10日(日)

オランダ訪問／カヌー体験／料理作り／さよならパーティー

8月11日(月)

フランクフルトへ移動



▲ケルン大聖堂の前で



▲オランダでカヌー



▲バーデンバーデンでの集合写真



▲みんなで剣道

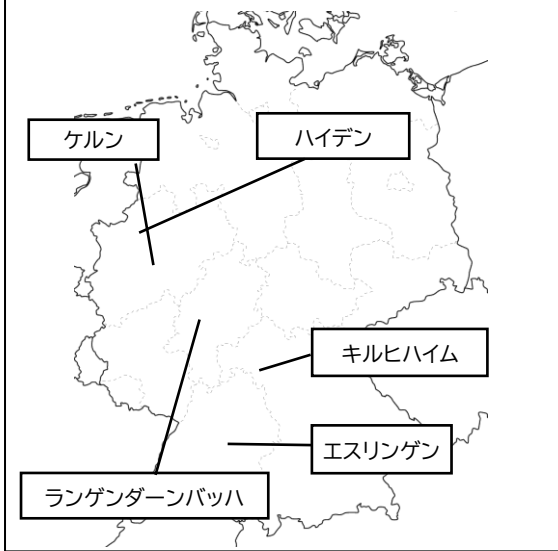


▲スパゲッティアイスが美味しかった



▲九州ポーズでパシャリ！

団長団



▲歓迎式後に関係者の皆さんと

▼東海グループと郷土料理のランチ



日 程

8月1日(金)

各グループ地方分散の見送り/
東海グループとキルヒハイムへ移動/市内散策/
スポーツクラブ施設を見学

8月2日(土)

東海グループと合流/リヒテンシュタイン城見学/
Ritter Sport のチョコレート工場見学/エスリンゲン散策

8月3日(日)

エスリンゲンのスポーツパークを見学/リンブルクへ移動

8月4日(月)

関東Ⅱグループと合流/郡役所にて表敬訪問/
リンブルク大聖堂見学/市内散策

8月5日(火)

シニア・リーダーズスクールとの中継テスト/
関東Ⅱグループと合流/スポーツクラブ(多様道場)を見学

8月6日(水)

ケルンへ移動/ケルンスポーツ大学を見学/
ケルン市スポーツ連盟を訪問/ケルン大聖堂見学

8月7日(木)

九州グループと合流/ツォルフェアアイン炭鉱業遺産群を見学

8月8日(金)

ノルトラインヴェストファーレン州スポーツユースを訪問/
シニア・リーダーズスクールとの中継/ベンロー(オランダ)散策

8月9日(土)

九州グループと合流/表敬訪問(ハイデン市長)/
チェスのクラブハウスでテーマディスカッションを見学

8月10日(日)

フランクフルトへ移動／答礼夕食会

8月11日(月)

フランクフルト市内散策／各グループ出迎え



▲キルヒハイムのスポーツクラブを見学(左:団長、右:総務)



▲忘れられないリンブルクの街並み



▲シニア・リーダーズスクールとの中継



▲ノルトラインヴェストファーレン州スポーツユースグントにて



▲たくさんのサポートをありがとうございました！
(マティアス氏、コニー氏、輝与志氏と)

全体プログラム(後半)

8月11日(月)

- フランクフルトへ集結
- 指導者ミーティング



▲各グループがフランクフルトへ集結

8月12日(火)

- グループ自由研修(フランクフルト市内)
- 団長団評価会
- 全体評価会
- さよならパーティー



▲グループごとにフランクフルト市内を散策



▲さよならパーティー

8月13日(水)

- フランクフルト国際空港出発(NH204 便)



▲フランクフルト国際空港で集合写真



▲羽田空港に到着し、解散式

引率指導者レポート

【北海道グループ】 森野 俊昭

「日独スポーツ少年団同時交流を終えて」

日独スポーツ少年団同時交流の指導者公募に手を挙げたのは、地域の関係者や家族に背中を押されたことがきっかけだった。それは、指導者としての新たな挑戦であると同時に、初めての国際交流、そして言語の壁という大きな不安との闘いでもあった。事前研修が始まった当初、緊張で硬くなったメンバーたちの様子は、まるで自身の内面の鏡のようだった。誰もが不安を抱え、なかなか意見も出ない。この重い空気を打ち破ってくれたのは、オンラインで参加してくれた過去の交流事業の参加者たちだった。彼らの生き生きとした経験談と写真の数々は、私たちにドイツの旅への具体的なイメージを与え、いつしか不安は期待へと変わっていった。結団式を経てチームとしての結束を深め、いよいよドイツへと旅立つ日が来た。

長時間のフライトを経てミュンヘン空港に降り立った私たちを待っていたのは、想像を超える温かい歓迎と、目の前に広がる壮大な景色だった。一瞬にして疲れが吹き飛び、私たちはただただ感激に浸っていた。全体プログラムを終え、いよいよ地方プログラムが始まる。私たちの北海道グループは、電車で揺られること4時間半、まずはポツダムへ向かった。そこで初めてドイツ側のメンバーたちと顔を合わせる。

ドイツの方々を用意してくれたレクリエーションは、日本ではあまり見かけない、遊び心に満ちたものばかりで非常に新鮮だった。翌日に行われた「スポーツ×SDGs」をテーマにしたディスカッションでは、ドイツの若者たちは皆、自分の意見を明確に持っており、臆することなくそれを伝えていた。一方、日本の子どもたちは、意見を持っていても「正解なのか」「周りや合っているか」を気にしてか、発言は控えめになりがちだった。しかし、ドイツ側のリーダー的存在だったフェンダーさんの、ユーモアを交えた積極的な働きかけが、徐々にお互いの距離を縮めてくれた。

そして、何よりも私たちの絆を深めたのは、レストランでの待ち時間だった。静寂を破るかのように、お互いの言葉を教え合う時間が突如として始まり、そこから一気に打ち解けていった。

その日を境にメンバーたちの表情は一変し、自ら積極的にコ

ミュニケーションをはかるようになった。この瞬間に、言語や文化の壁を乗り越える可能性を子どもたちの中に見た気がした。

地方プログラムの後半では、ベルリンやドレスデンといった歴史ある街を巡った。どの街も美しい街並みを保ちながら、それぞれの歴史を大切にしていることが伝わってきた。そして、ドイツのメンバーたちが、自分の出身地の歴史や文化を、誇らしげに、そして淀みなく説明する姿に深く感銘を受けた。それは、自分のルーツを深く理解し、愛する姿勢であり、私たち日本人も見習うべき点だと強く感じた。

地方プログラム期間中、私たちのために工夫を凝らした様々なプログラムが用意されており、ドイツ側のメンバーと深く交流を重ねることができた。共に笑い、学び、そして成長する中で、別れの時には、言葉にできないほどの悲しみを感じた。しかし、来年、彼らが日本を訪れるという約束は、私たちにとって再会への希望となった。

フランクフルトで再び全体プログラムを終え、帰国の途についた。言語や文化の壁を乗り越えて子どもたちが成長していく姿を間近で見られたことは、何よりの喜びだった。特に印象的だったのは、子どもたちの驚くほどの適応能力だ。プログラム後半では言葉の壁をほとんど感じないほどに積極的に交流する姿を見せてくれた。約2週間という短い期間で、人はこれだけ大きく変われるのだと感銘を受けた。今回の交流は、彼らの内なる可能性を呼び覚まし、人生に大きな一歩を刻んだと確信している。参加したメンバーが海外という非日常の中で自らの価値観を見つめ直し、この経験を糧にこれからの人生を豊かにしていくことを心から願っている。

この交流事業を通じて、私自身も指導者として、そして一人の人間として、かけがえのない経験をさせていただいた。今回の経験を通じ、私には「この交流の価値を伝えていく責任」があると感じている。この素晴らしい交流の価値を、これからドイツへ行きたいと願う子どもたちや若者にしっかりと伝え、この事業が未来へ継続するように尽力していきたい。

最後に、今回の交流の開催にご尽力された dsj、JSPO、北海道および福井県スポーツ協会、温かく受け入れてくださった

ホストファミリーの皆様、そしてこの交流に携わっていただいたすべての方々に、心から感謝の意を表したい。

【東北Ⅰ・Ⅱグループ】 山本 勝規

「かえがたい価値あるつながり」

私たちを迎えてくれたのは冷たい雨だった。

豪雨の中スーツケースを引きずり、やっとの思いでスポーツクラブにたどり着いた。これから先の困難を予感させられる地方プログラムの始まりである。

ホストファミリーを待つにつれグループメンバーは何となく黙り込んでしまい、不安の空気が充満した。ホストファミリーが部屋に入るや否や、まるで数年ぶりに会った友人のごとく、互いの名前を呼び合い和やかなムードに一転した。事前のオンライン研修時にホストファミリー全員が参加し互いに顔見知りとなり、メールでやり取りをしていたためであろう。不安と暗雲は一瞬のうちに消え去った。ホストファミリーとグループメンバーはこやかに自宅へ向かい10泊11日のホームステイが始まった。

この2週間、ハッと気づいたり、んーんと納得させられた日の連続であった。

レストランでの食事の際にメニューを見てもわからないので、受入担当者におすすり料理を聞くと早速注文してくれた。届いた皿を見て啞然、シュニツェル(薄い豚肉のかつ)は扇子のような大きさ、付け合わせのポテトフライはアルプスの山。「少ないものとお願ひしたのに」と言うと、してやったりとニンマリしていた。とにかくドイツの人たちは、こんなに食べられるのかと思う量もペロりとたいらげてしまう。上にも横にも大きくなるのが理解できる。

ドイツの朝は早い。早朝、6時半ごろに街を散歩していると、足ばやに通勤している人や工事現場で作業をしている人々がいる。聞くと午後3時頃で仕事を終え、後は自分の時間として使うという。ドイツ人の堅実性と合理主義にうなずける。

ドイツの列車は遅れるのが当たり前という。遅れてきた地下鉄に順番に乗り込もうとしていたらバザーとともにドアが閉まりかけた。慌てて駆け込もうとすると係員に止められてしまった。遅れてきても乗客が全て乗り込むまで待っていて、停車時間は変えないのか。厳格さにビックリ。

午後7時ごろ、ホームステイの庭先でまったりしていると、青空に城の旗が風になびき、時を打つ教会の鐘が響く、低い音・高音の音・澄んだ音と様々な音色が混じり合う。中世にいるかのようにゆったりと穏やかに流れる時間。ここでは昔から脈々と続く歴史の中に今日も生活している。人々の余裕と社会のスケールの大きさに頷ける。ヴァイスビールと会話が進み、夜が更けていく。

「今日は、昨日のところへ一人で自転車で行け。私たちは用事がある。」と、朝食時に突然宣告された。曖昧な記憶に従い、何とか集合場所へ辿り着いた。『やれることは自分で、必要な時は面倒を見る』というドイツの個人主義、自立主義、自己責任主義を目の当たりにした。日本のように至れり尽くせりではない。

ドイツのスポーツ実態についても知見を深めることができた。TGL(Landshutのスポーツクラブ)では、『Baby Kiss』という名の乳幼児スポーツ活動プログラムを見学できた。乳幼児が母父ともに体育館でボールや様々な遊具を使って運動をしていた。子どもだけでなく親も一緒になって動いていた。子どもの運動だけでなく、親同士のコミュニケーションが進み、互いに繋がりができる。

また、子どもたちのために複数の種目のスポーツを経験できるプログラムも実施している。ある期間はA種目、次の期間はB種目と体験を重ね、それぞれの面白さと自分の好みや適性に合ったスポーツを見つけることができるという。日本のように始めからずっと同じスポーツに必死にしがみつくと姿勢とは大違い、羨ましい限りである。前半の全体プログラムで、『同時交流の母』高橋範子さんが、「この交流で学んだことを生かし、みなさんは日本のスポーツを変えなさい！」と私たちに檄を飛ばしたことが、深く心に残る。

『人々の心の温かさとドイツの大きさ』を改めて実感させられた日々でもあった。第二次世界大戦ではともに痛い思いをしたドイツと日本ではあるが、『豊かき、余裕、大きさ』がドイツにはある。民族・歴史・思考・社会基盤等々の違いがそうさせるのであろうか。

交流活動で出会った人々は皆暖かく親切だ。ホストファミリーは一見ドライではあるが、肝心なところは親身になって面倒

を見てくれた。親密さにつながりが日々増していった。言語・思想・習慣・国を越えて心のきずなが強くなっていく。このつながりを途絶えさせず大きく膨らませる使命を私たちは持っている。同時交流で終わることなく、今後の活動への有効活用や自分の地域への還元と拡充に努力する義務がある。

そして、交流に参加した両国の若者たちには『ドイツと日本だけでなく世界を繋げる架け橋』になることを期待する。

列車で向い合せた席に座っていたおばあちゃんが、グループメンバーが話している姿をちらりちらりと見ていた。降りる際に「ヤパーナー？」と尋ねられたので「ヤー」と答えると、席を立って両手で握手をし「ヤーパン グート、ヤパーナー グート！」とニコニコしていた姿が忘れられない。

【関東 I グループ】道 上 舞

「忘れられない情景と人々のあたたかさ」

今回の交流で見た情景、そして関わってくださった人々の心のあたたかさは、一生忘れられない記憶として、私の心の中に残り続けるだろう。

私自身は、第 46 回に団員として派遣事業に参加し、第 50 回と 51 回は受入事業に参加した。引率指導者としての参加は、今回が初めてであった。

東京での渡航前集合時には、対面でコミュニケーションを取ることの大切さを痛感した。これは、第 46 回交流と比較したときに感じるものである。第 46 回交流は、日本団全体での事前研修とグループ別の研修をどちらも対面で行った。しかし、今回の関東 I グループは、どちらもオンラインで行っており、グループメンバーのことをよく知らない不安感を抱えたまま、東京に集合することとなった。オンラインでの研修は、移動や宿泊手続等の必要がない点で楽ではあるが、事前に対面で顔を合わせる機会を設ける必要性を感じた。

全体プログラム前半のミュンヘン市内観光では、歴史ある街並みと空気を楽しんだ。団員たちに市内散策を楽しんでもらいたいと思う一方で、その気持ちを害さない程度で、貴重品管理や身の回りに対する注意喚起のタイミングを図ることは難しかった。自身が引率指導者であるという自覚がより強まった。

地方プログラムでは、バイエルン州の Lenggries を訪れた

南ドイツに位置するこの町は、隣国のオーストリアには車で 30 分で行くことのできる、人口 10,000 人程度の自然豊かな場所である。朝起きると、部屋の窓からは荘厳なる山々が見え、時間ができた時には湖に泳ぎにいくという、自然とともに生きる環境下で 10 日間を過ごした。これらの素晴らしい自然と同様に、ここに住む人々の心は温かく、豊かなものであった。例えば、団員が慣れない生活に不安を抱えているとき、ホストファミリーの方々は、団員の目を見て、その不安を解決することに真正面から向き合ってくださいました。また、事前のオンライン交流の時点では、ドイツ側も、日本側も、互いの国や文化について、よく知らない状況にあった。しかし、同じ時間と経験を共有するうちに、双方が互いの言語や文化に興味を持ち、さらに交流を深めたいという、前向きな姿勢を見せるようになった。ホストファミリーの方々は、バイエルン州出身者、そして Lenggries に暮らす者として、自分がそこに住んでいるということ、そして町の魅力である豊かな自然に対して、心から誇りに思っているということを、10 日間を通じて感じさせられた。

全体プログラム後半のフランクフルトでの滞在は、バイエルン州とは大きく異なるものであった。市内は現代的な建物であふれ、人々の服装や宗教、国籍もさまざまであった。同じドイツでも、州や町が変われば、全く違う暮らしぶりとなることを実感した。

個人的には、第 46 回交流の時にお世話になったホストファミリーと再会することができた。また、第 50 回交流での友人も遊びに来てくれ、みなで当時の思い出話を花を咲かせた。かつての仲間と再会すると、住んでいるところは遠くとも、心ではつながり続けていることを思い出させてくれる。そして、今回の交流でも、通訳者の Laura をはじめとして、素敵な出会いがたくさんあった。

私自身は、来年以降もこの交流に携わり続けていきたい。また、このような貴重な機会を知り、体験する人を増やすために、今回の報告会を各所で行い、団員の参加を促すサポートをしていきたい。

さらに、他のグループの指導者の先生方と比較したときに、私自身は、指導における知識としても、経験や態度としても、未熟であることを痛感した。今後は、座学と実践の双方において、

自身の指導力の向上に努めていきたい。

本事業の開催にあたり、お世話になった dsj のみなさま、日本スポーツ少年団のみなさま、団長団のみなさま、Lenggries のみなさま、通訳の Laura、そして、高浜テニスや千葉県、千葉市のご担当者様に深く感謝しています。ありがとうございます。

【関東Ⅱグループ】森 久雄

「ドイツのスポーツに取り組む奥深さと多様性を体験しました」

<全体の振り返り>

関東Ⅱグループは、高校生女子2名、大学生男子2名、大学生女子1名の5名で構成されています。全員海外渡航初体験という事でしたので、引率指導者として若干の不安もありましたが元気にドイツ到着となりました。これも、渡航前の2日間にわたる集合研修のお陰と感謝している次第です。

また、全体プログラム前半の中で団員同士のコミュニケーションを図ることが出来、その後予定している地方プログラムでのホームステイや交流活動に対し、何の障害もなくドイツの若者たちとすぐに打ち解け合いお互いの切磋琢磨に寄与していました。さすがにスポーツで鍛えた若者たちです。

滞在した地域はミュンヘンから電車でフランクフルトへ向かい2時間くらいの街(現地では村)ランゲンダーンバッハにある、tayou・dojo(日本語で多様道場)が地方プログラムの活動拠点となります。

このtayou・dojoクラブのメンバーはヴァプラー・ウヴェ氏(通称ウエさん)が代表者をつとめる、日本武道をこよなく愛する団体です。会員300名強を有する地元屈指の大きなクラブ組織として活動しています。

今回の地方プログラムに於いては、すべての活動を取り仕切っていただきました。地元の名士であることから市長や群副長官への表敬訪問もスムーズに行うことが出来ました。

また、各ホストファミリー宅のクラブ会員たちが我々の日々活動にすべて同伴していただいたことも密接な信頼関係を築けた一因と思っています。

後に、ドイツの会員たちとの交流について感想を聞きますと、

すでにSNSでのやり取りを行っており、常に連絡を取り合っています。との事でした。さすが若者たちです。

<現地で学んだこと>

拠点のtayou・dojo(多様道場)クラブは、日本の武道をこよなく敬愛しているメンバーが主流で、幼稚園児童から高齢者まで300名強の会員で構成されており、主な活動は柔道、空手、合気道、居合道のすべてを網羅した護身練胆、精神修養、健康増進の三徳を兼備した日本では類を見ない総合的なクラブ活動でした。

特に会員が必ず守る礼儀として、道場に入る時、出る時は必ず一礼を行うことが徹底されており、日本の団員たちも最初戸惑いがあったもののすぐにその作法に準じて完璧な対応をしていました。ドイツにきて、日本の武道を通した礼儀作法を学ばせて頂きました。

また、通常のクラブ活動に参加をさせていただきその雰囲気体験させていただきました。

最初に準備運動を兼ねたポール遊びやゲームを取り入れた運動を30分くらい行い、その後専門的な修練に入ります。40分くらいのインターバルで休み時間を取りますが、その時間帯も平均台や跳び箱を使った遊び等、変化のある遊びトレーニングを多く取り入れていました。

これはクラブ会員の大人でも楽しみながら活動できる理想的な活動システムと思いきや学ばせていただきました。中でも、専門の教育を受けたインストラクター数名が当番制で幼稚園等へ出張し、子どもたちへの運動遊びの指導をしているそうです。幼児期からの運動に対する取り組み方が行政を含めて徹底していることに感心した次第です。

このクラブの遊びを取り入れたトレーニング方法は、日本のACPを完璧に活用した理想的な事例として受け止めました。体力や技量に合わせてリーダーがうまくメンバーを取りまとめ、飽きさせることなくアレンジした運動を展開させていました。

このリーダーの指導スキルは、一朝一夕には体得できないものであり、ドイツのスポーツに対する奥深い積み重ねの実績また、歴史の中から培われたものである改めて敬意を表した次第です。

また、日本での武道修練の現状は経験からして、専門武道に

特化した修練法のみで、他武道を取り入れることはまずありません。武道を単なるスポーツと捉え、それぞれの動きや礼儀といった精神修養も兼ねた良いとこ取りをする発想に感服しました。

<今後の活動に活かすこと>

このクラブでの活動は、月曜日から金曜日まで16時から21時まで行われており、指導者が交代で年齢や技量で分類され各コースのカリキュラムを受け持っているとの事です。

日本では、指導者の都合の良い時間に合わせた活動が主に行われていますので、このような時間帯での活動には限界があります。しかし、指導者の数が増えればそれぞれの持ち時間のレパートリーも増えていくと思えました。まずは、指導者を増やすことが今後の課題と考え、前述したような、トレーニングが楽しいと思わせるスキルを身に付けた指導者の育成に尽力したいと思います。

<最後に>

「楽しくなければスポーツでない」このことを身をもって体験させていただきました。活動中も楽しい笑い声が聞け、本当に楽しさを享受している実感が伝わりました。

また、クラブメンバーの人達に何歳くらいからクラブに入っているの？と質問したところ皆幼稚園低学年から入部しているとの事。それは親が入部しているからその子供も入部という繋がり構築されていました。家族そろってのスポーツ活動に改めてスポーツ文化の享受という原点を見ることが出来、私たちのこれからの活動のあるべき姿としての目標として、今後更なる活動を展開したいと思います。

【北信越グループ】田尻 翠

「スポーツは言葉の壁を超えるコミュニケーションツール」

今回の日独同時交流は私にとって2回目の参加となりました。前回は20年前に団員として参加し今回は指導者として。20年前と比べるとこの交流も時代の流れに乗って多くのことが変わってきたことをグループ事前研修で実感しました。コロナ禍の中で発展したオンライン会議システムを使った事前オンライン交流では、ドイツに行く前にメンバー同士顔合わせができたことは参加者の団員たちからすると、ドイツへ行く不安を減らす材

料の一つだったのではないのでしょうか。一つ残念だったことは、オンライン交流当日北信越グループのメンバーの方からドイツメンバーに対して質問や意見が出ず沈黙の時間が出来てしまったこと。しかし、オンラインで1度顔合わせしているので地方プログラムにスムーズに入れた団員を見て安心したことをいまでも覚えています。

地方プログラム1日目から最終日まで私たちのプログラムにはボールがいつもセットでした。

プログラムとプログラムの合間や準備待ちの時間など、ボール一つでドイツメンバーと北信越メンバーの楽しい交流が始まってみんなが笑顔だったことが私の中で今回の交流の一番印象に残っていることかもしれません。地方プログラム1日目の日はまだメンバー同士意思疎通が上手く行かないことが多かったのですが、ボール一つで言葉が通じなくても意思疎通がまだ不慣れでもメンバーみんなが笑顔でスポーツと言う共通のルールだけを軸にして楽しい時間を共有することが出来ました。

それを見て私は「スポーツは言葉の壁を超えるすごいコミュニケーションツールなんだ！」と再認識しました。

数日メンバー同士一緒に活動する中で自分の言葉でコミュニケーションを取りたいと思い、お互いの母国語を教えあったり覚えたドイツ語を使って話しかけたりと団員たちの成長を見守れたこと、とても嬉しかったです。そして、指導者の私を指導者として扱うのではなくドイツのメンバーは団員と同じく暖かく迎え入れて下さり一緒に楽しいプログラム活動を行うことが出来ました。もちろん私もボールセッションメンバーにも入れてくれました。Holzkirchenのメンバーの皆さんに心から感謝したいと思います。

今回の交流中にディスカッションを行うタイミングが2回ありました。日本より普段の生活の中でもディスカッションが活発なドイツ。ドイツメンバーからの提案もあり「質の高い教育をみんなに」と「すべての人に健康と福祉を」の2つのテーマについて話し合うことが出来ました。両国の現在について話し比較したり、とても興味深い内容もありました。ここでも団員たちが意見を出し合ったり、質問したりととても有意義な時間だったのでは無いのでしょうか。ドイツメンバーの発表の中で、スポーツ中にどんな食事を接種するのがカラダにとっていいのか？どんな食事

を摂取するとスポーツパフォーマンスが上がるのか？ダイエツト中はどんな食事が良いのか？両国どんなダイエツト方法が流行っているのか？など私たち人間が生活する上で大切な食事について話してくれました。普段つつい忙しく疎かになっている食事についてもう一度考え直す機会になったと自分の中で思いました。成長期の子どもたちがスポーツする中でパフォーマンスを上げる為の食事について子どもたち自身も考えているドイツメンバーは意識が高いとも思いました。日本の子どもたちの中でも意識している子はいると思いますがまだまだ少ないのが現実では無いでしょうか。

私たちはドイツへ入国した数日はミュンヘンのスポーツシュエレに滞在しました。その施設を見学し滞在中でまず思ったのがスポーツする人に向けた充実した施設の設備に驚きました。

スポーツに国として力を入れているドイツ。日本にもあのような設備を持った施設が欲しい、そしてスポーツ少年団のイベントや合宿など安心して行えるようにしてもらいたいと思ました。

現在日本は青少年の家やスポーツ施設が減ってきていて、県のスポーツ少年団のイベントや単位団の合宿など企画運営するのが毎年難しくなっており悩まされる課題であります。日本もドイツのようにスポーツに対して力を入れて未来を見据えて「日本のスポーツ」に投資していただきたいと思ます。

両国のこの交流は今後も未長く続く交流であることを願っています。

この交流に参加したら終わりだと思っている団員やリーダーが多いようですが、この交流に参加したことは始まりなのです。世界には多くの課題がありその課題にスポーツを通して世界の仲間と向き合う必要があります。この日独同時交流はそのスタートラインだと思っています。この交流で得た仲間と共にスポーツを通して多くの課題解決に向けて頑張っていって欲しいと願っています。

「スポーツは私たちを繋ぐ！スポーツは言葉の壁を越える！未来に向けて Auf Geht`s!!」

【東海グループ】石川 雅秀

「グローバル化に対応した団員・指導者の育成とスポーツ少年団のPR」

第52回目日独同時交流の派遣決定から参加メンバーとのメールでの交流が始まった。今回、私は東海グループの引率指導者として静岡、愛知、三重、岐阜の6名のメンバーとともにドイツでのテーマに対する計画、さよならパーティーでの企画運営について検討した。

過去2回の日独同時交流に参加していたので、メンバーに訪問先での交流の仕方、話し合い活動の進め方を事前に話し、リーダーを中心に企画検討をしていった。指導者が常にリードするのではなく、いかにリーダーを中心に主体的に企画運営を進めるかを考えすすめた。

今回、事前に通訳と受け入れ担当者とのメールでの確認が取れたのでスムーズに地方プログラムでの内容を理解でき、メンバーに連絡できたことは有意義でした。さらに zoom でのホームステイ先の方々との顔合わせはとても身近に感じ、安心して当日を迎えることができた。

今回はスポーツ交流ではフェンシング、エアライフル、カヌー、エアロピクス、ドッジボールなどのスポーツ交流が多くおこなわれた。日本では日頃できないフェンシング、エアライフル、カヌーなど基礎的な動きを学んだあと体験できたことはとても有意義でした。

今回の交流を通してスポーツは言葉を超え体験できる。現在日本では人とのスポーツを楽しむというより競技として行っている。各年代においてもスポーツを楽しむためのスポーツクラブの展開がドイツではみられた。ミュンヘン、フランクフルトのスポーツシュエレを見て、宿泊施設、カフェテリアを常設し体育館、グラウンド、トレーニング施設など充実している。これが総合型スポーツクラブである。今回訪問したフェンシングクラブ、カヌークラブ、エアライフルクラブにおいてもカフェテリアが常設されスポーツ終了後のコミュニケーションの場となっている。

つまりスポーツクラブが地域コミュニティーの中心となっている。このようなクラブ運営ができると地域の活性化につながるであろう。

今回の交流ではドイツの若者との討議がおこなわれた。「ス

ポーツと福祉」というテーマで日本の現状を説明しドイツ側からの質問を受けた。英語という言葉を通し自分たちの考えを説明する。まさに英語を使用し相手を理解しようという試みがなされた。グローバル化に対応した取り組みの一つが行われた。

【今後の取り組み】

・今回の交流活動を県スポーツ少年団、市での指導者研修で報告を実施する。

・ジュニアリーダー研修会・リーダー研修会での報告をする。

・自ら指導する団員、指導者への報告をする。

・ホームページやフェイスブックなどのメディアを通し広く周知する。

・指導者を派遣できるよう計画的に人材を育てる。

・市での受け入れ態勢の確立と受け入れ家庭の募集の取り組みをおこなう。

・ドイツ団が来訪した場合の企業訪問先、スポーツクラブの開拓を行う。

日独同時交流では日本スポーツ少年団、ドイツスポーツユースの多くの皆様にお世話になりました。ありがとうございました。

【近畿グループ】松本 弘彰

「第52回日独スポーツ少年団 同時交流(派遣)の参加報告」

派遣期間が15日間と長期に亘るため、団員の健康管理や安全・安心に留意するとともに、新たな体験で緊張する団員の健康管理や安全・安心に十分配慮するとともに、団員への目配りや気配りを最優先して行い、取り組めるように事前学習した。

また、団員間のコミュニケーションについて、事前に集合して意思疎通や打ち合わせができなくて大変心配したが、全員がスポーツ少年団の近畿や国の研修などですでに顔見知りであり、此方が心配するようなことはなく、ドイツでのプログラムを順調に消化し、和気あいあいとした雰囲気の中、楽しく活動していた。

かえて、最年長の指導者としての私の方に対して、団員がかえて気を使ってくれ、コミュニケーションがよりスムーズになり、「先生」や「まっちゃん」と気軽に声掛けしてくれるようになった。

飛行機の搭乗手続きで、携帯電話を使つてのオンラインチェックインができないときには、操作方法を団員が教えてくれるなど、携帯を通じてのコミュニケーションも、お互いの距離間もより身近に感じるようになった。

おかげで、若者の感覚や会話の内容が理解できるようになり、大いに参考になった。

参加団員は、ドイツ語や英語での会話もスムーズにこなし、外国語が不得手な私をサポートしてくれるなど、これらの経験をとおして、団員の成長を感じることができた。

私自身も、少しずつ外国語を話すことになれば、携帯の翻訳機能を使って自分から、ドイツの指導者や団員と少しずつ話せるようになり、自分の性格・態度の変化を感じることができた。

<引率指導者として特に意識したこと>

団員が、ドイツ団員と楽しく交流し、自由にのびのびと行動できるように、遠くから見守るように意識して行動した。

指導者としてではなく、同じ近畿グループの仲間の一人として意識してもらえるように、行動していくように努力した。

治安面では、特にフランクフルトやベルリンの街中や電車の駅構内での犯罪に合わないよう、全員が一緒になって、距離を空けず迅速に行動することに意識を集中した。

<今回の国際交流で団員に期待したこと>

ドイツの文化・伝統・スポーツ活動や生活環境などに直接触れ、ドイツ団員との2週間に及ぶユースホテルでの日常生活と一緒に宿泊して楽しく交流体験できたことが、大切な成長の機会となった。

このドイツでの素晴らしい世界(文化・生活環境・スポーツ活動の取り組みや人生観など)を団員が、一人の人間として自分の目で見て、ドイツの人と接し、話を聞き、一緒に行動することで成長し、帰国後のスポーツ少年団活動に活かしてくれることを確信しました。

<交流における経験・体験や新たに気付いたこと>

ドイツ訪問は、今回で3回目となりました。

1回目は、尼崎市職員としてとして姉妹都市のアウグスブルク市への市民団の親善訪問の随行です。

2回目は、家内と娘との家族旅行です。

今回の3回目のドイツとの同時交流の訪問は、特に次のよう

な新たな発見がありました。

一点目は、ドイツでは人前や場所など気にせず、恥ずかしがらずに「ハグ」することが当たり前で、日本の世界から全く異次元の世界に飛び込んだ私にとって、大きな戸惑いを感じました。2週間滞在して、最後の方ではお世話になった指導者と自然に感謝の気持ちで「ハグ」をすることができるようになり、自分の世界観もいろいろな世界を目の当たりにして、少し自分の考え方に変化を感じるようになりました。日本の「お辞儀の世界」とドイツで体験した「ハグの世界」の違いが一番印象に残りました。

二点目は、タトゥーを体に入っている人もおり、日本のタトゥーに対する感覚と違和感が印象に残りました。

三点目は、治安についての認識の違いです。

電車の駅構内での行動のとり方や注意の仕方など、日本で列車に乗る時の犯罪に対する身の守り方や行動の違いが、一番印象に残りました。

これらのドイツでの文化・伝統・風習・環境や人間としての生き方に対する考え方の違いなどをとおして、自分自身が歩んできたこれまでの世界観や生き方、生活環境などを見直す必要性を感じたとともに、いろいろな世界の人々と接することで、自分の考えが正しいと思っていたことについて、改めて考えなおすきっかけになりました。

<引率指導者としての今後の役割・取り組みについて>

指導者としては、団員の行動に導かれ日独両国のスポーツ少年団の相互交流に参加し友好と親善を深め、国際能力を少しでも高められたとの自身をもって、今後のスポーツ少年団活動に活かしていきたいと強く思いました。

現地での温かく迎えてくれたドイツスポーツユースの役員関係者の皆様のお気持ちを忘れず、ドイツスポーツユースの団員との楽しい交流やドイツの現地で学習させていただいたことを、帰国後に尼崎市や兵庫県でのスポーツ少年団活動や事業運営に活かしていきたいように、頑張りたいと思っています。

本当に貴重な体験の機会を与えていただき、心から感謝しております。

これからも、年齢にしばられることなく、前向きに様々なスポーツ少年団活動に、積極的に取り組んでいきたいと、強く感じ

ました。

【中国グループ】大石 信洋

「異文化下の交流で見た団員の成長」

事前研修などの様子から、感じた団員たちの様子は以下のとおりである。短期間の同時交流ではあるが、異文化の下、彼らの変化や成長をまとめていきたい。

中国ブロック団員の構成は高校2年生が5名、大学4年生が1名の合計6名である。彼らのニックネームは、高校生が、藤岡凜(りん)、難波雅貴(まさき)、大王丸真斗(まこと)、金山来人(らいと)、江口隆成(りゅうせい)、大学生が、田中さくら(さくら)である。グループのリーダーは大学生のさくらで、事前研修やディスカッションの段取りをするなど、全体的を見通した行動ができています。彼女を中心に話し合いが進んでいっている。ニックネームで呼び合おうと提案したのも彼女であり、他のメンバーも快く受け入れた。

建設的な意見をよく出す団員はりん(女性)である。その他の団員(男性)は、それぞれの役割を分担して取り組んでいる。女子団員が中心となって骨子を作り、男子団員がそれらについて思いを出していくといったことが事前研修で見られた。

このような構成メンバーが、ドイツという異文化下で生活交流をしていく中で成長し、体験で得たことを帰国後リーダー会などを通じて還元してくれることを期待しての同時交流であった。

ドイツにおける具体的な成長は以下の通りである。交流プログラムの中で最も顕著だったのは、各自がそれぞれの良さを発揮していたところである。

リーダーのさくらは、年齢的にも知見や経験が他の団員より豊富で、冷静な判断と柔軟な対応力を発揮し、異文化理解を深めながら各メンバーの意見を尊重しつつ議論を前に進める役割を果たした。強く指示や注意をして威圧的に動かそうとするのではなく、柔らかな表情で語って団員をまとめていた。また、私のそばにすることが多く、引率者と団員の意思疎通をスムーズに行うような気配りを感じた。初めて見たり体験したりすることには関心を持ち積極的に関わろうとしていた。その姿は、他の団員の良い手本となり信頼につながり、グループとしての結束

を高める要因となった。

りんは、建設的かつ率直な意見を積極的に出すことで議論の質を引き上げた。まっすぐな性格で思い通りにいかなかった場合には涙することもあったが、柔軟に対応することの大切さをリーダーの言動や現地の文化や価値観の違いから学んだように思う。今回の交流がきっかけで国内では変わりにくかった価値観が、異文化の生活の下でより広い視野をもったものになったと期待している。

まさきは、発表資料の作成を通じて情報の整理力や伝達力を磨き、ディスカッションでは自分の分担したところを詳しく説明することができていた。また、食欲旺盛で現地の食事をドイツ人以上に楽しんでた。同時にホームステイ先では他の家の子供たちとも積極的にかかわりを持ち、プログラム終了後も水泳やバレーなどの活動を行っていた。未知の環境に柔軟に対応する姿から彼のたくましさや成長を感じた。

まことも、同様に異文化に対する好奇心を行動力に変えて現地の人たちと積極的に交流した。数家庭と共に帰宅後もスポーツをしたり、話をしたりする様子が見られた。今行っているテニスのスポーツ活動はできなかったが、ホームステイ先のプールで現地の団員たちと水泳をする楽しんだようだ。これまで経験のないスポーツも積極的に行き、スポーツを通じて交流関係を広げていくなど、まさに地方プログラムのねらいに迫る姿が印象的であった。

らいともまた、異文化に対する柔軟な適応力を発揮し、周囲との調和を図りながら新しい環境に順応した姿が印象的だった。特にステイ先の方たちや小さな子供たちの心をつかむことに関してはとてもうまく対応し、信頼を得ていたようであった。別れの場面では共に涙する場面が見られた。リーダーに頼るような言動も多かったが、自らの判断で行動をしていくことも今回の交流で学んだようである。

りゅうせいは、比較的活動の多かったバレーボールを中心とするスポーツでも持ち前の技能を発揮し、スポーツ活動全般を盛り上げていた。グループの中で一番スポーツ活動を行う時間が長く、その活動を通じてドイツの方たちや日本の他県のメンバーとしっかり交流を行っていた。また、団員の行き過ぎた言動には迎合せず一定の距離を置きながら寄与した。ドイツでの生

活や議論を通じて得た経験は、単なる知識の習得にとどまらず、自分自身を振り返り、互いの価値を認め合う力を育んだようだ。団員たちは、言語や文化の壁を越えて多様な考え方に触れ、自身の意見を表現することの重要性を再認識した。このことは、各自の価値観形成や変革にも深く関わっており、帰国後のリーダー会などでその経験を共有することで、次なる世代の育成や異文化理解の促進につながることを期待される。今回の交流を通じて、彼らは単なる参加者から「学びを還元する担い手」へと成長を遂げたことと思う。今後の彼らの活躍が楽しみである。

【四国グループ】後藤 啓

「第52回日独スポーツ少年団同時交流(派遣)について」

今回、引率指導者として決定後、全体会議・ブロック別事前研修・受け入れ側オンライン会議等を経て、「いざドイツへ」と意気込み出発。様々な不安を胸に指導者・団員5名がドイツの地を踏むこととなる。

<前半地方プログラム:オッターバッハ>

地方プログラムの最初の訪問地「オッターバッハ」では、Harald Westrich市長・ホストファミリーも参加による温かい受け入れ式による歓迎を受けると共に交流を深めるために多くの会話をを行うことができた。

ホストファミリーとはオンラインで対面していたが、明るい雰囲気ですぐに料理を準備していただき不安は払しょくされた。

以後、多くの地方プログラムを準備していただいた『ZEN—BOGYO-DO E.V』関係者の方々に感謝するとともに、感動の日々を過ごさせていただいたことに深くお礼を申し上げます。

このクラブは、「柔術」を専門に活動し各種大会において上位入賞経験もあり地域活動の拠点となっていることが伺われた。

しかし、柔術のみを行うスポーツクラブとして運営されていることに驚きを感じるともに、会員数・運営経費等についてもっと踏み込んだ話を聞けなかったことが悔やまれた。

スポーツクラブにおいては、日本の武将・忍者等に関する書籍も所蔵されており、日本に対して友好的な団体であると感じた。

スポーツ交流では、部員の模範演技を披露していただくと共に柔術の体験を行ったが、柔道の延長の練習にとどまりもう少し時間が欲しかった。

また、初体験の裸足でのウォーキング、一本橋・川渡などによる景観なコースを体験し足の裏の痛みを忘れるくらいの体験を楽しんだ。

オッターバッハには、アメリカ軍基地があり約5万人のアメリカ人が駐留しており、街の財政力を高めていると市長からの言葉があった。

教会を中心として街が形成されており教会見学、また中世期の城も多く存在し場内を見学することで、中世の歴史に触れることができ地域の歴史的建造物を大切に思う思いに感動した。

ドイツはワイン・ビール造りが有名ではあるが、広大な畑においては、ビール麦・ブドウ畑しか見ることができなかった。

四国グループが滞在していた地域は、高級住宅街であり経済的に裕福な家庭が多いとのことであり、ホストファミリー宅に於いてもかなりの経済力を有していると感じた。

余談ではあるが、ホストファミリーと日時計のある丘を訪れ素晴らしい景色を見ていると、牧草が燃える火事現場を発見、通報して消火活動を見ていた。こんな偶然があるのだなど互いの顔を見合わせていた。

<後半地方プログラム：ブライ>

8月7日ユースホステルを出発しモーゼス川ケルンのエルツ城見学へ。ここで見学ガイドについて担当のエリソンさんからホストファミリーの『ヨルク』さんだと紹介され驚き挨拶させていただいた。

他の見学者が大勢並んでいる中、「日本から来たスポーツ少年団です。」とアナウンスがあり優先的に見学させていただきましたが、他の観光客からは大きな歓声が上がりクレームもなく見学させていただき、感動させられました。

訪問先である「TSV ブライアルフスポーツクラブ」において、マティアス・ミュラーブライ市長並びにホストファミリーの歓迎を受け、クラブの施設内を見学し「オッターバッハ」と施設規模の違いにも驚かされた。

団員のファミリーから、「地元のバレーボールクラブの練習があるので参加しないか」との誘いを受け参加したが、温かく迎えていただき2時間ほどゲームで交流することができ楽しむことができた。

ブライは、大きなモーゼス川をはさみ街並みが形成され、山と川に挟まれた素晴らしい景観の街並みと共に、急傾斜の山肌にはぶどう畑のみが存在しワイン造りも盛んに行われていた。

急傾斜地であるが、ブドウ畑以外の作物はなく「こんな斜面でブドウが作れるものか？」また、「日本では土砂災害等により考えられない。」との疑問があり問うと、「土の山でなく、岩盤であることから土砂災害はほぼない」との事であった。しかし、数年に何度か崖崩れは起こっているそうだとした。

ワイン造りが盛んに行われている地域のため、ワイナリーの歴史も古く数か所見学することができた。

また、モーゼス川の岸边には「クルミ」の木が植えられており、街が管理・収穫し収入源としているが、無許可で持ち去る人が多くいるとのことであった。ドイツではこの時期「白夜」のために、暗くなる時間が22時頃と遅く21時ごろまで近くの公園で子どもたちの声が聞こえていた。毎朝、モーゼス川の畔を散歩し、川面の霧、水鳥の鳴き声、教会の鐘音などをベンチに座り見たり聞いたりしながら、「ドイツに来たのだな！」と一人で感動していた。

また、大好きな「ケルティック・ウーマン」の「You Raise me up」の曲を聴きながら景色を眺め改めて「ドイツ訪問」に一人で感動していた。

最後に、日本ではドイツのスポーツクラブを参考にしていると聞いているが、クラブの運営方法については格差があると思われる。単一種目・複合種目での運営等地域事情の違いはあると思われるが、【ブライ】のみを見たとき、指導者の体制がどうなのか、もう少し踏み込んで聞いてみたかった。

それぞれの地域において、「地方プログラム」を用意して戴いたが、施設見学だけではなく運営方法・指導者体制・育成方法等について学ぶことができるプログラムも必要でないかと感じた。

これまで多くの団員をドイツへ派遣してきたが、これまで以上

に団員の育成に努め、将来指導者として地域貢献ができるリーダー育成に努めていきたいと改めて思った。

リーダー活動が衰退する中、地域活動を支える指導者に対し理解を得られジュニアリーダースクールへの参加者が増加するよう働きかけていきたいと思った。

今回、派遣に関してご協力いただいた関係各位にお礼申し上げますと共に、日本団の団長団をはじめ指導者・団員の方にお礼申し上げます。

【九州グループ】大浜 雅史

「国際スポーツ交流が築く国境を越えた友情と成長」

このたび、私は九州グループの引率指導者として、本交流事業に参加する機会をいただきました。特に今回は沖縄県からの団員も加わり、私自身が沖縄県石垣島出身であることから、日本団の中でもひとときわ特色あるグループであったと感じています。その一方で、陸続きではない九州・沖縄の位置関係から、事前の打合せやグループ出し物の練習は大きな課題となりました。オンラインでの準備は限界があり、初めて顔を合わせたのは東京での事前研修でした。そのため、他のグループよりも打ち解けるのに時間を要しましたが、大学生3名が自然にリーダーシップを発揮し、高校生を支えていく形ができあがり、プログラムが始まってからは不安が一気に解消されました。大学生が高校生を導くことでチーム全体のまとまりが生まれ、団員たちの教育的にも大きな意義があったと実感しています。

ドイツ到着後は、ミュンヘンにて日本団全体のプログラムが行われました。当初予定されていた公式の表敬訪問はドイツ側の都合で実現しませんでした。その代わりにFCバイエルン・ミュンヘンの本拠地「アリアンツ・アリーナ」を訪問する機会を得ました。まるで宇宙船のような大スタジアムをガイド付きで巡る体験は、まだまだ、緊張気味だった団員たちの心を和らげ、写真を撮り合いながら友情を深める場面が見られとてもよい時間となりました。しかし、長年続いてきた交流事業において、両国代表が直接挨拶を交わす場が失われたことについては、今後の継続性を考えるうえで懸念が残る点だと感じました。

8月1日からは地方プログラムが始まり、九州ブロックはフランス国境に近いバーデン＝バーデンと、オランダ国境に近い

ハイデンの2地域と交流を行いました。長距離移動の疲労はあったものの、複数地域での受け入れにはより多くの仲間と出会えるという大きな利点がありました。さらに、交流期間を分散することでホストファミリーへの負担が軽減されるという面からも、この仕組みの意義を感じました。

バーデン＝バーデンのプログラムでは、ホストファミリーとの時間がしっかりと確保され、ドイツの生活や食文化を感じることができ、日常に溶け込むようにドイツ文化を体験することができました。交流相手であるチェスチームに対しては当初「内向的なのでは」という先入観を持っていましたが、実際には活発で、空き時間には球技と一緒に楽しむなど、スポーツの持つ言葉を越えた力を実感することができました。

後半のハイデンでの交流では、地域全体を巻き込んだプログラムが充実しており、名所見学やルール工業地帯の訪問を通して、ドイツの歴史や社会の理解が深まりました。市長表敬訪問では交流の意義について語り合い、さらに年に一度の「射撃祭」を体験し、ヨーロッパのお祭り文化を肌で感じることができました。これらの体験は子どもたちにとっても忘れられない思い出となったと思います。

両地域でのプログラムは大変充実していましたが、個人的には、交流相手のチェスという競技そのものに触れる機会がもっとあってもよかったと感じました。スポーツ交流事業である以上、受入団体側のお気遣いだと予想できましたが、せっかくの機会なので、普段の活動やスキルを知り、互いの得意分野を紹介し合うことは、さらに学びを深めるきっかけになったのではないかと思います。

全ての地方プログラムを終え、フランクフルトに日本団全体が再集合した際、子どもたちが自信に満ちた表情で再会する姿に、この交流を通じた成長を強く実感しました。本事業が大成功であったことを確信できた瞬間でした。そして、その成長の背景には、大学生が果たした役割が大きかったと改めて感じます。高校生にとって身近でありながら一歩先を行く存在として、大学生が自然にリーダーシップを取り、若い団員たちを導いたことは、世代を超えた学び合いの好例であり、今後の交流事業においても継続すべき仕組みだと思います。

本交流事業を通じて改めて感じたことは、スポーツを通じた

国際交流は子どもたちに大きな成長をもたらすということです。異文化を知り、仲間と協力し合い、自ら考えて行動する経験は、子どもたちにとってかけがえのない学びとなりました。そして、その一つひとつの積み重ねこそが、将来の世界平和への礎になるのだと強く確信いたしました。

私は今後、指導者として子どもたちの教育や育成にあたり、この経験を活かしていきたいと思います。また、競技の指導にとどまらず、国際交流を通じて多様性を理解し、広い視野を持って未来を切り拓ける人材を育てることが私の使命であり、平和な社会づくりに貢献する道であると考えています。

最後になりますが、本プログラムを企画運営して下さった日本スポーツ協会、ドイツスポーツユースの皆様をはじめ、受け入れて下さったドイツチーム、ホストファミリー、通訳の皆様、そして関わって下さった全ての方々に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

上げて(たぶん)、無事に帰国できたことに安堵しており、また、今回、このような貴重な経験をさせていただいた関係者の皆さんにお礼を申し上げ、私の報告としたい。

団員レポート

「初めて見る景色」 【北海道グループ】 岩崎 ゆう

初めて日本の外に出て学んだことや気づいたことが2つあります。一つ目は、積極的に話をすることです。

日本人は、英語の発達が特に遅れていると言われていますが、話し始めてみると、意外と通じあえることがあります。また、コミュニケーションが苦手な私でも、相手と話すように努力することで、話が盛り上がったり、今までの自分の考えを変えるような新たな視点に出会うことができました。また、今回の経験をを通して、言語の壁を乗り越え、自信が付き、またさらに頑張ろうという自分のモチベーションのアップにもつながりました。この交流のおかげで、自分が何をしたいのかははっきりとした道を定めることができました。2つ目に、相手に対する敬意を忘れないことと、自分の意見をはっきり言うことは大切なことだと、ドイツの方々から学びました。どの方とお話しても、相手の目を見て、相手に対する配慮を忘れない姿勢に尊敬しました。また、自分の意見を言うのは勇気がいるし、表現にも悩まされますが、伝わらないかもしれないけれども、伝える努力をするのは大切だと気付かされました。それは、部活やクラスでの話し合いでも通ずるものがあると思うので、相手の意見も尊重しつつ、自分の意見も積極的に言えるようになりたいです。

「ドイツでの成長」 【北海道グループ】 阿部 幹太

僕がドイツで学んだのは、言語や文化が違って同じ人間であるということです。ドイツへ行く前はしっかりコミュニケーションを取ることができるか不安だったり、生活をしていけるか不安でしたが、いざドイツに行ってみると、ドイツ人は温かい人が多く、フレンドリーに接してくれました。また、ドイツ語やドイツのジョークを教えてもらい、それを使うことでお互いに笑顔になることもできました。言語を使ったコミュニケーション以外にも、ジェスチャーや笑顔などの表情でコミュニケーションが取れたことも良いことだったと思います。

ドイツに行き、自分自身の成長したところは行動力だと思います。僕は普段おとなしい性格で自分から積極的に何かに参加するということが苦手でした。ですが、ドイツに行き、未知の世

界に飛び込むことで興味深い事ばかりで積極的に知りたいと思うようになり、現地の人々に自分から話しかけることができました。

この交流に参加したことで得た経験や知識、行動力をこれからの日常生活などの様々な場面で活用して集団の先頭に立っていく存在になれたらと思います。

「ドイツに行って」 【北海道グループ】 鈴木 慧矢

今回のドイツ渡航は初めての海外経験であり、当初は英語で意思を伝えられるか不安を抱いていた。しかし現地での市街地見学や英語での注文体験を通じて自信を得、地方プログラムでは現地学生とSDGsやジェンダー平等について意見交換を行い、多様性を尊重する文化を学ぶことができた。特に制服のない学校文化や女子サッカー放送をめぐる抗議事例は印象的であった。

フランクフルトでは大聖堂を訪れ、歴史的背景を知ることで理解を深めた。これらの経験から、日本も多様性を尊重しつつ自国に合った制度を発展させる必要を感じた。また、自分の地域は楽しい活動が少ないことで人数不足が起き、悪循環が発生しているという問題がある。そこで積極的に交流活動に参加し、ドイツで学んだレクリエーションなど楽しい活動を増やすことで、誰もが参加しやすい環境を整え人数を増やし、良循環を生み出すことで地域社会に貢献していきたい。

「ドイツでの2週間」 【北海道グループ】 中島 心菜

私は、7月30日から8月14日の二週間ドイツに滞在しました。初めてのヨーロッパであり、言葉や習慣の違いに最初は戸惑ったこともあったけど、積極的に現地の人と関わることで、多くの学びを得ることができました。

ドイツの人々とスポーツを通じて交流したことも、言葉以上に気持ちを伝える手段となったと感じました。

また、ベルリンの壁や有名な観光地を訪れる中で、その土地の歴史や文化にも触れ、日本との違いを実感しました。違いを受け入れ、尊重する姿勢が、異文化理解には欠かせないと気づ

きました。今後も国や文化を越えた交流に前向きに取り組んでいきたいです。

そして、次はドイツ語をはなせるようになっていきたいです。

「初めての海外、国境を越えて学んだこと」

【東北Ⅰ・Ⅱグループ】堀籠 はづき

私が日独スポーツ少年団同時交流を通して学んだ事は二つあります。

一つ目は学校外の地域スポーツクラブが充実している事です。ドイツは日本のように学校の部活動はなく、学校外の地域のスポーツクラブでスポーツしています。実際に施設を見学した時、整備がとても充実していました。自分の得意なスポーツに所属することができ地域の中で活動するため交流の幅が広いです。また、年齢や競技レベルに関係なく誰でもいつでも参加できるため、生涯にわたってスポーツを愉しむことができます。

この交流で初めはとても不安でしたが、徐々に「楽しい」が勝りました。失敗を恐れずに自分から話しかけることができました。また、沢山の素敵な方々と出会い仲を深めることができました。沢山話して色々な考え方に触れ、視野が広がりました。日々の中で自分のいい所や悪い所、新しい一面を知れました。そして、何より自分の素を出せたことが何よりも良かったです。今後の活動として、この経験を団に持ち帰り団員に繋げて、この活動を町や県に広めていきたいです。また、これからの活動に活かしていきたいです。

「日独同時交流を終えて」【東北Ⅰ・Ⅱグループ】佐藤 璃恩

先日、第52回日独スポーツ少年団同時交流の一員としてドイツへと派遣され、貴重な体験をさせていただきました。何もかも初めての私にはすべてが非日常で、町を歩けば、すれ違う人みんなが目を合わせてくれて、微笑みながら挨拶してくれる。その何気ないものが私自身にとってとても印象的であり、うれしかったです。

それだけではなく、スポーツは非言語で心を通じ合える素晴らしい言語のようなものだと感じました。食事や、トイレ、人との距離感、硬貨の見分けの難しさなど日本とは違うたくさんの文

化をこの身体、五感でしっかりと実感できました。時にはそれらの違いに戸惑うこともありましたが、文化や価値観自体が自分の視野を広げ、柔軟な考え方を育ててくれたと感じます。

また、プログラムではホームステイ先の子供たちと日本とドイツの教育の違いについてディスカッションを行いました。日本とは異なる教育やそれに対する意見を交わし合うことで自分自身の考えをより多角的に見直すきっかけとなりました。

今回の日独交流は「スポーツ」が主な目的だと思っていましたが、自分から積極的に言語やスポーツの壁を超え、「伝えようとする気持ち」が人と人を心でつなげる力を教えてくれました。お世話になったホストファミリー、ドイツの方々、そしてこの機会を与えてくださり、支えてくださった全ての方々に心から感謝します。

「日独同時交流での学び これからの目標」

【東北Ⅰ・Ⅱグループ】小畑 舵

私は日独同時交流に参加してたくさんのことを学び得たり新しい出会いをたくさんすることができました。

日独交流では団員同士でのスポーツ交流やホストファミリーたちとのスポーツ交流をしました。団員同士での交流では、ドイツ団のレクリエーションをやりチーム対抗戦をしました。ジャガイモを落とさずに移動しリレーする遊びやドイツに関わる問題などをやりました。みんなで楽しく騒ぎ、考え体を動かすことが出来ました。これを通してドイツ団と日本団の仲間たちと交流し仲を深めることができました。

ホストファミリーとのスポーツ交流ではサッカーゴルフやパターゴルフ、パークールなどをしました。言葉が通じない中での交流はとても難しいと感じましたが一緒に体を動かすことで自然に笑顔や会話が生まれたことが印象に残っています。

また、スポーツを通じて家族の一員のように迎え入れてもらったことから、「共に活動すること」が信頼や友情を築く大きなきっかけになると感じました。日本にいるときはスポーツを練習や競技として捉えることが多いのですが、交流やコミュニケーションの手段としての側面に改めて気づかされました。

次にドイツで感じた日本とは違う文化や生活などについてです。日常生活の中で日本との食文化の違いを強く感じました。

まず驚いたのは、パンの種類の豊富さです。朝食や軽食ではライ麦パンやプレッツェルなどが定番で、日本で一般的な白米や柔らかいパンとは違う独特の風味や食感を楽しむことができました。また、ソーセージやシュニッツェルなどの肉料理が多く、付け合わせには必ずと言ってよいほどジャガイモが登場する点も印象的でした。さらに、飲み物の習慣にも違いを感じました。食事中に炭酸水を飲むことが一般的であり、日本で日常的に飲まれるお茶はほとんど見かけませんでした。また、ビールが生活に根付いており、大人たちが気軽に楽しんでいる様子から、飲み物に対する文化的な価値観の違いを知ることができました。

これらの体験を通して、食文化は単なる「食事の仕方」ではなく、その国の歴史や気候、生活習慣が反映された文化の一部であることを実感しました。日本に戻ってからも、自国の食文化を改めて見直すとともに、異文化を尊重する姿勢を持ち続けたいと思います。

「ドイツでの経験」 【東北Ⅰ・Ⅱグループ】 佐藤 璃空

僕は夏休みに二週間、ドイツを訪れました。

そのうちの一週間は現地の家庭でホームステイを行い、ドイツの日常生活を体験することができました。ホストファミリーとは英語と簡単なドイツ語を使って会話し、食事や買い物、公園での散歩などを共にしました。特に朝食に出されるパンやチーズの種類が豊富で、日本との食文化の違いを実感しました。

もう一週間はホテルに滞在し、有名な城や博物館などを見学した。歴史的な建物や展示物から、ドイツの文化や考え方について学ぶことができました。

言葉の壁はあったけど、身ぶりや表情でも十分に意思を伝えることができました。今回の体験を通して、異文化理解の大切さとコミュニケーションの工夫を学ぶことができてよかったです。

「ドイツでの学び」 【東北Ⅰ・Ⅱグループ】 遠藤 凜

僕はドイツでさまざまなことを学びました。数ある学びの中で、1番僕に影響を与えたのは、人との関係です。この研修を通して、僕は多くの人と出会いました。それは、ドイツの人だったり、他の地方の人だったり。例えば大阪から来ていた団員

たちは、話し方が上手で、喋っていてとても面白い人たちでした。大阪は昔から商業が盛んで、人との会話で商売は成り立つことから、コミュニケーションの機会が多いことが関係していると考えられました。そのために商人が独自に編み出したのが、大阪弁だそうです。これはドイツでも、歴史から人を知ることができるという発想に繋がりました。

僕の訪れたランツフートは、昔から畑作や漁業が盛んでした。そこに町ができたため、大阪同様に商業地域になったそうです。ランツフートの人たちはみんな気さくで、英語がおぼつかない僕に、とても優しく接してくれました。また、ドイツの人たちは、日本人と違って自己主張が強いのも印象的でした。ドイツの人たちは、インスタグラムのアイコンが自撮りの人が大半で、とても驚きました。日本とは「普通」のラインが違うと感じることができました。これは帰国してからも大いに役立ち、今ある人間関係を見直して、友達をもっと知ろうとする機会となりました。この日独交流で、ドイツ側だけでなく、日本の様々な地域に住む人と仲良くなれたことも、大きな経験だと思いました。

これは僕がドイツで学んだことの一例に過ぎません。この一例同様に、ドイツでの学びを日本での生活に活かして、リーダーとして成長し、人生をより良くしていきたいと考えています。僕の人生において、大きすぎるほどの経験でした。

「～Danke für die Begegnung～」

【関東Ⅰグループ】 水野 美希

第52回日独スポーツ少年団同時交流では、たくさんの人達と交流し色々な学びを得ることが出来ました。

今回の日独交流ではスポーツをやるプログラムがたくさんあり、ビーチバレーやラフティングなどたくさんスポーツを言葉なしでもドイツ人の人達と楽しく交流することが出来ました。その他にホストファミリーデーでは自分が持っていった折り紙で鶴やお花を折ったり、向こうの文化の伝統衣装などを着せてもらい、お互いの文化を共有し合い楽しさを知りました。

この交流中、自分自身がドイツ語で話すことができず、ほとんど翻訳機や通訳者に頼ってしまい、この交流の目標や自分の弱みとして人に頼らないで自ら話しかける行動をするとあげているのに頼ってしまったので、ドイツ語を勉強しましたドイツへ

行きたいなと思いました。この経験で学んだ事を今後の学校生活や地域活動に活かせるように今後も頑張ります。

「日独同時交流で得たこと」 【関東Ⅰグループ】 梅田 光唯

ドイツに行き、日本との文化の違いに驚くことが多くありました。

まず会話の仕方です。ドイツでは自分の意見をはっきり伝えるのが当たり前で、私も返事に悩まず自然に話すことができました。

次に建築物です。石造りの家は涼しく快適で、放牧をしている家が多く、牛や馬のいる光景は新鮮でした。教会や城は想像以上に豪華で、西洋建築が好きな私には特別な時間となりました。文化面では、弁当にそのままの野菜を入れたり、リンゴを丸ごと持ち歩いたりする大胆さに驚きました。日没が遅く、長い時間を一緒に過ごせるのも魅力的でした。

現地の少年団の方々が毎日温かく接してくれたおかげで、とても楽しく充実した時間を過ごすことができ、心から感謝しています。この交流で得た経験は、普段の生活では得られない貴重なものであり、通訳の方やホームステイ先の方々をはじめ、多くの人に支えられて得た学びを、これからの日本での生活に活かしていきたいです。

「Danke」 【関東Ⅰグループ】 佐久間 望

レンググリースに到着後、柔道クラブの方々が笑顔で私たちを受け入れてくれた。不安な気持ちがあったが、様々なアクティビティに参加するうちに柔道クラブの方々の顔と名前を覚え、積極的にコミュニケーションを取りに行くことができた。知っている単語をなるべく文法通りに並べ、カタコトでも一生懸命に話したドイツ語や英語が相手に伝わったときは本当にうれしかった。柔道クラブの方々は「Danke」を日本語でありがとうと言うことを知っていた。そのために、私たちが「Danke」というたびに、「ありがとう」と言ってくれた。感謝を伝える言葉はどの国の言語でも簡単で、スッと出てくることにとても感動した。一緒にビーチバレーを行った際には、言語はほぼ必要なく、ハイタッチやジェスチャーでコミュニケーションが成立し、楽しむことができた。スポーツは私たちをつなぐとはまさにこのことだと実感

した。

来年は柔道クラブの方々が日本に来ることなので、ドイツ語や英語のコミュニケーションを強化して、交流をスムーズに進め、今回の交流の感謝をお返ししたいと思う。

【関東Ⅰグループ】 関根 涼

私はこのドイツとの交流を通じて、多くのドイツ人とコミュニケーションをとる中で自分の英語力に気づきを得ることができた。私は海外で仕事をしたいという思いで、英語に力を入れて勉強しており、日ごろから英語のアニメやドラマ、映画などの作品に触れたり、日本人以外の友達を作ったり、英語を使ってコミュニケーションをとることをしていた。しかし、実際にドイツに行くと、英語しか使えない環境で多くの人と英語を使ってコミュニケーションをとる中でうまく英語が使えていないことに気が付いた。それは日本にいるときとは違い、見知らぬ環境で緊張や疲労があり、頭の中で英語を使って考えて言葉を発することが難しくなっていた。このことから、自分の今の英語のレベルを痛感して、意識して使うレベルから、意識なくても使えるレベルに向上しなければいけないと感じた。そのため、今よりももっと英語に触れる環境と時間を増やしていき、どんな環境でも英語を使えるようにして、国際的に仕事ができる人間になりたいと思う。

「日独スポーツ少年団同時交流を終えて」

【関東Ⅱグループ】 佐藤 晴紀

私は、今回第52回日独スポーツ少年団同時交流に参加して多くの経験、多くの友情を深めることができました。初めての海外というもあり、緊張や不安があった2週間でしたが、最後は笑顔で終えることが出来たことに感謝します。

最も印象に残っていることは、現地で体験したスポーツ活動です。関東Ⅱグループでは武術をやっているランゲーンダーンバツハ日本武道文化協会に受入をしてもらい、そこでは、日本独自の柔道や空手以外に、ドイツ側のあらゆる種類の武術の体験やトレーニングをすることが出来たことです。技の練習では、フォームや足の置き方、手の払い方など、体を使ってわかりやすく教えていただき、年齢、性別、言語などを超えて多くの人

と繋がるという体験ができました。

次に、今回のテーマである「SDGs×スポーツ」に関する議論では、日本とドイツでのSDGsの捉え方や取り組みについてたくさん話すことが出来ました。教育やスポーツの在り方に違いが見られる一方で、「楽しさを共有する」、「自分たちの将来に関わることを学ぶ」という共通した姿勢が存在していることがわかりました。また、団長団とリンブルク地区行政事務所を表敬訪問した際には、ドイツと日本におけるスポーツ制度の違いや運営にかかるコストについて意見を交わしました。両国ともにスポーツができる環境を整えることの重要性が確認され、さらにそれに伴い指導者の育成や教育現場でのスポーツ強化の必要性についても共有することができました。

今回の交流で学んだ国際的な視点やSDGsの意識を、今後のスポーツ活動や地域での取り組みに活かし、仲間と共により良い未来づくりに貢献していきたいです。Danke Schön！

「日独スポーツ少年団同時交流を終えて」

【関東Ⅱグループ】森 一貴

今回の日独スポーツ少年団同時交流で様々な経験をして、ドイツが思うスポーツと日本が思うスポーツの違いについて自分自身で体験ができ、色々なことを学びました。

私が日独スポーツ少年団同時交流で直面した課題では、言語の壁とドイツ食と日本食の違い、硬貨の色についてです。

まず、言語の壁です。ドイツではドイツ語が使われており、その他にも英語を話せる人もいました。私は、ドイツ語を簡単な単語しか話すことができなくホームステイ先や観光しているときに翻訳アプリを使って会話をしたりしました。ですが、自分が知っている英語の言葉を頑張って使い翻訳アプリ無しでできるようにチャレンジしたことです。

次に、ドイツ食と日本食の違いについてです。ドイツでは、主にパンやパスタなど小麦でできている食べ物を主食にしています。他にも地域の郷土料理など様々な料理がありその中にはあまり自分の口に合わない食べ物もあり、その時はホストファミリーに正直に伝えました。ですが、あまり口に合わない食べ物は少なくともドイツの有名な食べ物を沢山食べることができました。直面した課題の最後は、硬貨の色についてです。ドイツの紙幣は

一枚一枚わかりやすい色をしているのですが、硬貨の色が1セントと2セント、5セントが銅の色をしており、その他の違いは硬貨の大きさだけでした。また、10セント、20セント、50セントも似たような色をしており違いは大きさがなく、買い物をして会計するときになかなかスムーズに支払いできませんでした。他にも硬貨で1ユーロと2ユーロがありこちらの硬貨は外側と内側の色がそれぞれ違う色をしているので、比較的に見つけやすかったです。硬貨をスムーズに支払い出すには事前にレジに行く前に買った分の硬貨を財布から出しておくのが一番いい方法だと思いました。

日独スポーツ少年団同時交流でチャレンジしたことは色々ありますが、特に積極的にチャレンジしたことが2つあります。

1つ目はドイツの人たちに積極的に話しかけたことです。私は初対面で会う人がいると緊張してしまいあまり話すことができなくなってしまいます。ですが、少しずつ話をするようになってから日に日に話しやすくなり仲良くなることができました。

2つ目は、ドイツの人たちとスキンシップをするようにしたことです。ドイツの人たちは会うときに様々なスキンシップをしていました。日本ではあまり考えられないと思いましたがドイツの人たちに会うときはなるべくそういったスキンシップをするようにチャレンジしました。

日独スポーツ少年団同時交流期間中に気づいたことは、ドイツではトイレなど公共施設内にある場所はすべて有料で、レストランのトイレは無料でできるということが日本とは違うと思いました。

また、ドイツの高速道路は無料など日本とは違い、高速道路はどこからが高速道路なのかわかりづらいなと思いました。

他にはドイツ建物は網戸などがなく窓が開いている状態なので家の中など虫が多かったのでホームステイ先で生活していた時は虫が多い夜などは窓を開けないように工夫しました。

今回の日独スポーツ少年団同時交流で成長できたことはコミュニケーション力が上がったことです。この、同時交流が始まる前は人と話すことに苦手意識がありました。ですが、今回の同時交流でたくさんの人と関わり、ドイツではお世話になる人たちと日本の言葉や歴史やドイツの話など様々なことを話したりし

て、コミュニケーション力が上がったと思いました。

「私がこの交流で得たこと」 【関東Ⅱグループ】 齊藤 美羽

私はこの活動で学んだことはたくさんある。しかし、400字程度という制限があるので特に学んだこと1つを取り上げて説明する。

それは、スポーツと音楽は性別、年齢、国籍を越えて繋がる力があるということだ。

まず、スポーツは地方プログラム2日目にドイツ人とサッカーをする時間があった。そのサッカーでは、性別、年齢、国籍全てが異なる人達で行った。それでも、すごく盛り上がっていたと感じた。さらに、表敬訪問をした際にスポーツ庁のような人がドイツは移民が多く社会に統合するためにスポーツが必要であるということ聞いた。スポーツで私たちは繋がれるということだろう。以上のことからスポーツは国を超えて繋がる力があるということ学んだ。

次に、音楽である。それを感じたのはさよならパーティーでのディスコである。ディスコも性別、年齢、国籍全てが異なる人達で行った。しかし、みんな楽しく笑いながら踊っていた。

よって、私はこの活動でスポーツと音楽は年齢、性別、国籍を越えて繋がる力があるということ学んだ。また、私はこれ以外のことでも人は繋がれると考えているので、今後生活していく上で探していく。そして、スポーツ、音楽と共に団活動や将来、教師になったときに活かしていきたい。

最後はこの言葉で、「もう一度行きたい」と思える交流でした。この交流に関するすべての人に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「性別や言葉の壁を超える力」

【関東Ⅱグループ】 後藤 絢音

私がこの派遣交流を通して学んだことは、「性別にとらわれずに楽しむ姿勢」と「言葉に頼らないコミュニケーション」の重要性です。

まず、地方プログラムでの武術体験で、ドイツ団のメンバーが性別を気にせず自然にペアを組んでいたことに驚きました。日本では、思春期以降になると男女でペアになることに抵抗を感

じる人も少なくありません。武道においても、オリンピックのような大きな大会では男女の階級が厳密に分かれています。しかし、性別にとらわれず武術を楽しむ彼らの姿を見て、スポーツは単に勝敗を競うだけでなく、誰とでも心から楽しむための手段なのだ改めて感じました。団体が掲げる「男女関係なく一緒にやる」という指針通り、生き生きと活動する彼らから、私はスポーツの本質的な楽しさを学びました。

次に、言葉の壁を乗り越えるためのコミュニケーション方法についても深く考えさせられました。昨年、日本での受け入れ側として日独交流に参加した際、私は言葉の壁にぶつかり、うまくコミュニケーションが取れなかったことを強く後悔しました。その反省を活かし、今回は「言葉がわからないから話さない」のではなく、積極的に交流することを心がけました。英語や翻訳機を使うのはもちろん、ジェスチャーや表情といった非言語的なコミュニケーションを最大限に活用しました。特に印象的だったのは、言葉がなくても共有できた「笑い」です。私がドイツのメンバーの面白い動きを真似すると、彼らは笑顔でさらに面白い動きを返してくれました。言葉が通じなくても心が通じ合う瞬間があり、自然とグループの輪が広がっていくのを感じました。この経験を通して、コミュニケーションとは言葉を交わすだけでなく、相手の感情や意図を読み取り、自分の気持ちを全身で伝えることだと実感しました。

今回の交流で得た学びを、自身が所属するスポーツ少年団での活動に活かしていきたいと考えています。具体的には、新しい仲間が加わった際に、性別や経験に関係なく積極的に声をかけ、誰もが居心地よく楽しめる雰囲気づくりを率先して行いたいです。また、誰かに何かを教えたり伝えたりする際には、言葉だけでなく、自ら身体を動かしながら見本を見せることで、より分かりやすく、深く伝えられるよう工夫します。さらに、日々の生活の中でも、学校や地域で様々な人と関わる際に、性別や国籍の違いを意識せず、柔軟な姿勢で向き合うことを心がけます。今回の交流で生まれたドイツの仲間との友情を胸に、これからも多様な人々との繋がりを広げ、より豊かな人間関係を築いていきたいと思っています。

「文化の違いを体感した交流期間」

【関東Ⅱグループ】 濱 朋花

この日独同時交流において私は、英語が下手でもいいからとりあえず自分から話しかけたり、行動してみようと思っていました。ホームステイ先では相手に伝わりやすいように簡単な単語で話し、翻訳アプリに頼ることもありましたが、比較的うまくコミュニケーションが取れたと思います。会話をするときにはジェスチャーを使ったりと、相手に伝えようとする気持ちが大事なのだと感じました。ドイツの人とそれぞれの国の話をしていて、学校生活や食文化の違いなど、日常生活からだいぶ違うことを知ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。例えば、ドイツの学校の大半は制服が存在しないので、服装の面ではジェンダー問題はほとんどないとのことでした。確かに、男女で服が指定されていなければ、そこに性別の差は生まれられないのだと新たな発見をすることができました。ただ、制服というのは大切な日本の文化なので、男女差別になるから廃止しようという意見を正しいとは言えないと思いました。

10日間ホストファミリーと過ごすことで、たくさんの当たり前が覆されました。日本よりも宗教が身近な存在だったり、普段の生活が違うからこそ、視野だったり着眼点も違ってくるのだと感じました。

特にスポーツ面で驚いたのは、地方行政事務所に表敬訪問に行った際に聞いた、ドイツの幼稚園ではスポーツチームの指導者がスポーツ指導をしているということです。ドイツでは特に幼稚園生や小学生へのスポーツ交流に力を入れているらしく、日本にはない制度で驚きました。現在日本では子供の運動能力の低下が問題視されているので、このようにスポーツを身近に感じられるような運動が発足すれば、スポーツ少年団の知名度も広まり、スポーツを楽しむ子供が増えることに繋がればよいと思います。

「日独同時交流を通じた文化的比較と環境意識の考察」

【北信越グループ】 川崎 響希

私はこの日独同時交流に参加し、コミュニケーション能力の重要性と異国の文化を尊重し、固定観念に囚われずに生活を送ることの重要性を学んだ。ドイツと日本は経済的には比較的

裕福であり、生活が苦しい人はあまり見受けられなかった。しかし、そんな似た国の中でも大きな違いがあると感じた。それは、環境への意識の違いと一人一人が自身の意見をもち、周りに伝えることが出来ると言うところである。日本はゴミ箱が設置されたり、ペットボトルなどの回収も専用のゴミ箱などがあるが、特に都会などでは路上のポイ捨てなどが目立つ状態だと感じた。

一方、ドイツでのデポジットの政策は多少値段が高くてもペットボトルを返却すると少し帰ってくるという文化により、ペットボトルなどのゴミはあまり落ちていないように感じた。しかし、ドイツの政策も完璧ではなく、プラスチックゴミのデポジットがなかったり、ゴミ箱が比較的少ない印象だった。これらの経験からも日本ではゴミ箱などはそのまま数を設置し、デポジットの制度などを広めて行けたらより環境に配慮できると感じた。

今回の日独同時交流事業に参加し、知見を深めることが出来た。これらの経験を活かし少しでも環境に配慮できたらと感じた。

「足りないもの」

【北信越グループ】 横山 響栄

私は、実際にドイツへ行って新しくたくさんのことを学びました。

ドイツの義務教育は9年間と日本と同じでした。しかし、ドイツ語がうまくない人や苦手分野がある人は、苦手を底上げするための無料の塾のようなものがあり、質の高い教育を受けている人とそうでない人との格差をなるべく小さくする工夫をしていました。

ドイツの部活動です。ドイツの学校には部活はありますが、より鍛えたいときはスポーツ少年団にはいるそうです。日本では、スポーツ少年団に所属する人よりも部活でスポーツを極める人の方が多く、ドイツとは真反対です。また、ドイツには大会を目指して活動する団とスポーツを楽しむ団のようにスポーツの楽しみ方も様々でした。

日本には中高生、大人に対して大会を目指す団はあってもスポーツを楽しむ団は少ないように感じます。日本にも、スポーツを楽しむための部活、団があっても良いと思いました。

「交流を通して学んだこと」 【北信越グループ】 高本 大輝

今回、スポーツ少年団の交流事業でドイツを訪れ、現地の子どもたちと一緒にいろんなスポーツを行い、多くのことを学びました。まず感じたのは、スポーツに対する姿勢の違いです。ドイツの子供たちは勝負以上に楽しむことを大切にしており、その中で自然にフェアプレーや仲間への思いやりが育まれていました。また、言葉が十分に通じなくても、スポーツを通じて気持ちを伝え合えることを実感しました。プレー中の声掛けやジェスチャーで心がつながり、国境を越えて協力し合える喜びを味わいました。

日本に戻ってからは、この経験を自分の活動にも生かしたいと思います。日々の練習では自主的に取り組み、仲間と支え合う姿勢を大切にしたいです。そして、スポーツを「楽しむ心」と「人と人をつなぐ力」を意識しながら活動を続け、今回の学びを将来につなげていきたいです。

「ドイツで見つけた新しい自分」

【北信越グループ】 北村 美澤

私は、今回の日独同時交流で新しい力を身につけられたと思います。それは、自己主張する力です。日本人の特徴として「控えめ・謙虚」がよく挙げられます。私も自分の意見を持っていても、周りの顔を伺ったり、誰かに指名されないと自分の意見を言えませんでした。でも、実際にドイツに行き現地の人たちとディスカッションをして気になったことは周りを気にせず、手を挙げて発言したりしているのを見て自己主張することは悪いことじゃないと思えて、自分も積極的に意見や質問ができるようになり、有意義なディスカッションになったと思います。

また、ホームステイ先で自分はこれがいいと話すととても喜んで準備して下さったりして自分の思っていることや考えていることをはっきり言うことに対して抵抗が減り、自信がついたように思います。この経験を活かして、これからのリーダー会活動でも積極的に自分の意見を述べたり、年上の先輩にばかり頼るんじゃなくて自分から動けるそんなリーダーになっていきたいです。

「ドイツに行って改めて感じさせられたこと」

【北信越グループ】 小田 蒼華

私は今回初めて海外に行って不安も多々ありましたが、そんな不安を打ち消すぐらいのワクワクした気持ちもありました。シニアで去年会ったメンバーと久しぶりに会える嬉しさや、ドイツでいろいろなことを体験していく楽しさなどの気持ちを抱いていました。

ドイツに行ってからホストファミリーや、この交流に携わっているたくさんの人にはとてもお世話になりました。また、初めて体験するものはもちろん、日本で学んだことが改めて理解できるようになったり、自分にとっても良い勉強にもなり、楽しいものにもなりました。たとえば、集団行動の大切さや、思いやりの気持ちです。今回の交流ではそれが大きく感じられました。それは、地方グループ内だったり、ドイツの受け入れ団体との交流だったりよく分かりました。このことは、日本に帰ってきても大切なことであり、自県で行われるジュニアリーダーズスクール合宿でも用いるなどして、人としても大切なことだと改めて感じました。これからもこの気持ちを持ち続けて活動に取り組みたいです。

「ドイツレポート」

【東海グループ】 稲毛 涼真

ドイツ交流を振り返って最も心に残ったのは初めてのホームステイだ。初日は英語でしか通じなかったり、日本と全く違う文化だったり緊張してしまいなかなかコミュニケーションを上手に取ることができなかった。しかし、一緒に出かけたりご飯をみんなで食べたりしていくうちに段々と距離を縮め、コミュニケーションを取ることができるようになった。英語が不得意であっても、自分の気持ちをしっかり伝えようとする姿勢がとても大切だと言うことを改めて実感した。また、話しているうちに日本とは違った文化や習慣などを知ることができた。

特に日本と違う文化だと思ったのは、食事だ。日本ではいただきます、ごちそうさまでしたと言うのが当たり前だが、ドイツでは何も言わないからだ。他にもドイツの工場や歴史的な建造物をたくさん見て学ぶことが出来た。交流テーマであるスポーツとSDGsについての話し合いでは、お互いの国の良い面や改善すべき面について話し合うことができた。これらの学びを通して

これからも持続可能な社会にするための貢献はもちろん、ドイツで学んだ自分の意思を積極的に伝える力や他者との違いを理解し受け入れるなどを発揮できるようにする。また、ドイツでのことを後輩に伝えていくことでこれからもより良くなると思う。

「日独同時交流を終えて」 【東海グループ】 鈴木 琥太郎

私はこの第52回日独同時交流を通じて多くの事を学びました。今回その学んだことを大きく2つに分けて紹介します。

1つ目はコミュニケーション能力です。僕はこの交換交流が人生で初めての海外だったため最初は上手くコミュニケーションが取れるかや海外と日本の文化の違いに対応できるかどうか不安でした。しかしホストファミリーや現地・施設の人々と交流していく内に環境の違いに適応することができ異国でもしっかりとコミュニケーションをとることができました。

これは今後リーダー会以外の場面でも役立つ能力だと思うのでこの経験を活かしていきたいです。

二つ目は国際理解です。先述した通り今回が初めての海外で最初は勝手が分からなかったけれど交流を重ねるにつれ文化の違いを知ることができました。

そして事前課題で書いた「国際理解を持てる人材になる」という一つの目標を達成できたように感じました。

私はこの交流会を通じて以上の二つを学びました。今回学んだことを活かすのに加えて後輩への指導もしっかり行いたいと感じました。

「スポーツで人と人は繋がる」 【東海グループ】 田中 千智

私はこの日独同時交流に参加したことで、言語の壁があってもスポーツで心は通じ合えると実感した。ドイツでは私たちが勉強している英語ではなくドイツ語が公用語であり、渡航前までは現地の人とどうコミュニケーションをとればよいか不安だった。しかし、ホストファミリーや訪れたドイツのクラブでレクリエーションやスポーツを通して沢山の笑顔を交わすことができ、「スポーツは人と人を繋ぐ」そう感じた。

また、ドイツでは沢山の文化を肌で感じる事ができた。ホストファミリーと互いの国のスポーツや生活を紹介し合ったり、一

緒にカードゲームをしたり、ドイツ料理を教えてもらったりしたことで仲良くなると共に、多文化理解を深められてとても嬉しく思った。

これらのかけがえのない経験をする事ができ、人生で一番の思い出が作れたことは沢山の支えてくれた方々がいたからだ。この感謝の気持ちを忘れず、この交流のすばらしさを後輩たちに伝えていきたい。そして、これからは交流で得た学びを生かしてリーダー会や学校、地域、自分の将来に活かしていきたい。

「ドイツで学んだ事」 【東海グループ】 江崎 里紗

ドイツでの交流を振り返ると、私は初めてのホームステイで、ドイツの方と交流をする上での言語の違いに悩んだ事が印象に残っています。

元々英語に苦手意識を持っていたうえに、そもそもドイツではドイツ語が主流である事から、最初はコミュニケーションを難しく思い少し気が沈みました。ですが、その気持ちのままではきっと後悔してしまふと思い、その場で出来る事を考え、まずは翻訳機を使い何とか自分の思っている事を伝えて言語的な壁は乗り越える事が出来ました。しかし、もっと自分の感情や想いを伝えたいと思い、表情や声のトーン、身振り手振りなどのジェスチャーを使つての意思の疎通を試みました。すると、向こうの反応は前よりも良くなって、より深いコミュニケーションが出来ていると感じるようになりました。

私はこの体験から人に想いを伝える時、言語が通じるか通じないかよりも、非言語的なコミュニケーションの要素を意識する事が重要だと言う事を学ぶ事が出来ました。

「第52回日独スポーツ少年団同時交流を振り返り」

【東海グループ】 安田 球道

私は今回この第52回日独スポーツ少年団同時交流で学んだことは、スポーツは言葉を必要とせず、国籍や性別を超えてコミュニケーションを取ることができるということです。

スポーツはルールという共通言語によって、お互いに意思疎通をすることができ、そこから生まれるチームワークで自然にコミュニケーションを取ることができるということを学びました。

私は最初、緊張して言葉がうまく出てこず会話が弾みませんでした。しかしスポーツ活動が始まると、自然に言葉が出てきて不思議と緊張がなくなり、そこから多くの人たちと積極的にコミュニケーションを取ることができるようになりました。スポーツは言葉では表すことのできない信頼関係を築く事ができる素晴らしいものだと感じました。

私はこの交流を通して多くの大切なことを学びました。これからはこの経験を活かし、リーダー会や単位団で多くの子どもたちにスポーツの楽しさ、そしてこの交流の素晴らしさを伝えていきたいです。

「日独同時交流を終えて」 【東海グループ】 北村 優衣

私は日独スポーツ少年団同時交流に参加するにあたり「何事にも進んで挑戦」という目標を掲げていました。今回の交流を通して一番感じたことは、文化や言語は違っても相手のことを思って行動することで通じ合うことができるということでした。特にホームステイではホストファミリーと一緒にいる時間が多く、自分のことを伝えたい場面や分からないことを質問したい場面が多くありました。私は何事もまずは挑戦と思い、最初は簡単な英語や表情を活用し、少しずつコミュニケーションをとっていきました。

また、何をしたら楽しく交流できるかを考え、お互いの言語であいさつをしたり、一緒にゲームや料理をしたりしました。相手のことを考え、進んで挑戦したことで仲を深めることができ、たくさんの学びを得ることができました。

今回の交流で得た経験を活かし、これからも相手のことを考え積極的に挑戦していきたいと思います。そして、今回学んだことを後輩にも伝えていき、地域や日本国内だけでなくもっと世界にも目を向けて活動していきたいです。このような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

「気づけた良さ」 【近畿グループ】 鯉江 拓

私は今回の交流で様々な「良さ」について気づくことができました。最初はドイツの気候や文化、システムについて日本との違いに驚き、この国ならではの良さに多く気づくことができました。ですが離れたドイツの国の文化に触れることによって自分

の住んでいる日本の良さを再確認できたこともよかったと思います。例えばお風呂はシャワー文化で座ることがなかったり、トイレも日本では様々な機能がついていたり日本の良さに気づくことができました。そのほかにはドイツ人という人たちの考え方や彼らにとっての常識は国の文化で説明づけるだけでなく見習うべきだと感じるが多かったです。特に容姿やその人の個性をそのままに尊重する姿勢というのは日本ではあまり当たり前ではないと感じます。これらの良さを自分の肌で感じ直接見聞きして私自身も考え方や感じ方が広がったような気がします。

こうして培うことのできた価値観をこれからの生活に活かしていきたいです。

「日独同時交流を通じて体験した学び」

【近畿グループ】 今井 宝希

日独同時交流に参加し異国の地で集団生活を体験した。日本とは全く違った文化圏での生活は衝撃の連続であり、日本との違いに苦悩することもあれば感動も多々あった。全てを総括したうえでよい経験になったと振り返る。

対人関係においても言語や価値観、時間の感覚といった違いを強く感じたが異国と言えども同じ人であるという部分に気づかされることも多かった。日本との相違点に注目しがちだが共通点も多くあり、例えば言語が違い言葉で伝えづらくても身振り手振りや共有した思い出からしっかり通じ、特にスポーツは実践しやすい架け橋になるのだと痛感した。ドイツへ出発する前は楽しさを持ちつつも日本との違いからくる不安が大きかったが実際にドイツで過ごすうちに共通点に自信を持ち不安はとうに吹き飛んでいた。

今回の同時交流にてまずは行動してみることの大切さを再確認した。経験して初めてわかることも多くあり、また気持ちがあれば対人関係もうまくいくという自信もついた。単位団に帰った後もこの経験よりスポーツにて生まれる交流と行動してみる大切さを伝えたいと強く感じた。

「ドイツで見つけた私の宝物」 【近畿グループ】 楠本 実玖

私がこの日独同時交流で学んだ一番大きなことはボディー

ポジティブティについてです。今回の交流を通して、「どの人も美しい」「みんなちがってみんないい」という考え方の本質に出会うことができました。私はこれまで、自分の体にある傷を人とは違う恥ずかしいものだと考え、隠すことこそ正しく美しいことだと思っていました。しかしドイツでその考え方が大きく変わりました。ドイツの団員たちと交流し合う中で、「傷は私がさまざまなことと戦ってきた証であり、強さを示す大切なプレゼントだ」と教えてくれたのです。これは私にとって大きな発見であり、自信へとつながります。また、交流したドイツの団員たちは皆、自分らしさを堂々と表現し、自信に満ち溢れていました。その姿はともかくよく、私もいつか自分を誇れる人になりたいと思いました。日本にいたら絶対に出会えなかったであろう素晴らしい考え方、生き方に会うことができました。この考え方を教えてくれた友達、そしてこのような貴重な機会に心から感謝しています。

私の発見(世界のつながり) 【近畿グループ】植山 弘葉音

私はこの日独同時交流で、様々な発見や価値観を得ることが出来ました。全てはなしをすると長くなりますので、私は大きく分けて3つの発見がありました。まず1つ目は、日本の文化との違いです。文化というと大きくなりになりますが、言語はもちろんのこと、時間が違ったり、主食はパンや芋であったり、その他にも様々な違いがありました。私は英語もあまり喋れないため、言語の壁があると感じる時は多くありましたが、ドイツの方はそんな私とちゃんと向き合ってくれました。次に2つ目は、LGBTQ+や身体についての考え方です。日本よりも性について理解が深く、一人ひとりありのままの自分を受け入れてくれるいい国だなと思いました。また、プール前にドイツ団の指導者であるリリーが身体について話をしてくれました。自分の身体についてあまりよく思っていなかったのですが、考えを改めようと思いました。最後の3つ目は、住んでいる国は違えど、スポーツや思いによってつながっていると感じました。ウエイトリフティングを体験し、教えて教わり合いお互い高め合っている様子は国の壁を越えたキズナだと思えました。この交流は今後の私の関わり方や考え方が大きく変わり、世界についてもっと知りたくなりました。

「スポーツを通して、世界を知る」

【近畿グループ】一橋 花心愛

私は、日独スポーツ少年団同時交流を通して、多くのことを学ぶことが出来ました。今回は、交流を通して得たことと、スポーツを通して得たことの二つに分けて、述べようと思います。

最初に、交流を通して得たことを述べます。特に印象にあるのが、コミュニケーションを取っていく中で、お互いの文化や価値観を知ることが出来たことです。実際に現地で、コミュニケーションを取ることで、ドイツの文化や価値観などを知ることが出来ました。例えば、地方プログラムでの歴史的建造物を見学した時、ドイツ団から多くの説明を受けました。私が、習ってきた歴史以外にも、多くの出来事や情報を知っており、非常に驚かされました。普段の会話の中でも、ドイツのことを教えてもらったり、日本の文化を教えたりしました。この経験から、お互いを知るためには、コミュニケーションの重要性を改めて感じました。

最後に、スポーツをとって得たことについて述べます。今回の交流を通して、スポーツ活動は、言語の壁を越えて行うことができ、自然とコミュニケーションのきっかけになると学びました。地方プログラムでは、ウエイトリフティングを体験しました。初めての経験でしたが、お互い英語や見本を見せてもらい行うことができました。その他にも、SDGsとスポーツテーマ課題の話合いでは、お互いのスポーツ活動を知るだけでなく、体育の授業など学校生活を知ることが出来、スポーツ活動と教育は繋がると考えました。これらの経験を通して、スポーツは、言語の壁を越えて交流することが出来、さらには、世界について学ぶきっかけになると考えました。

私は、これらの経験が出来たことに感謝し、スポーツ少年団の活動の中で、コミュニケーションの大切さや、スポーツ活動の重要性を伝えていきたいと思います。また、スポーツ少年団の活動以外の私生活にも活かすことが出来ればと思います。

「日独同時交流で気づいた自分の変化」

【近畿グループ】加古 杏葉

私は日独同時交流を通じて、自分の考え方が大きく変わっただと感じています。これまでは自分のコンプレックスに悩むことが

多かったのですが、交流を通して、団員や指導者がそれを否定せず受け止めてくれる姿に触れ、自分を否定するよりも大切にしようという考えを持てるようになりました。言語が通じない場面が多く不安もありましたが、スポーツや非言語的なコミュニケーションを通して相手とつながることで、言葉に頼らず関係を築く方法を学びました。自分から積極的に話しかける大切さや、集団行動を通して時間を守ることや協調性を持つことの重要さにも気づきました。

文化交流では、日本の料理やドイツ料理を通して自然に会話が生まれ、異なる文化を受け入れることの楽しさや意味を実感しました。歴史学習を通して、ドイツの団員が学校教育で自国の歴史を深く学んでいることに驚き、日頃から自国の文化や歴史を理解する姿勢の大切さを考えました。さらに、ウェイトリフティングの団員や指導者から直接指導を受ける中で、挑戦の難しさとともに学びの多さを実感し、努力の大切さや真剣に取り組む姿勢の重要さを学びました。初めての海外という不安もありましたが、多様な価値観を尊重し合う大切さや、人とのつながりを大切にしたいという思いが強まりました。今後は、この経験を生かして、自分とは異なる考え方を受け入れながら積極的に挑戦し、成長していきたいと考えています。

「スポーツを通じて見えた日本とドイツの違い」

【近畿グループ】 神保 拓海

今回の日独スポーツ少年団同時交流を通じて、私は多くの学びと気づきを得ることができた。特に印象に残ったのは、ドイツの学生が日本以上に自国の政治やスポーツ環境について関心を持ち、主体的に意見を述べていたことである。自国の社会を考える姿勢の強さに刺激を受け、自分自身の姿勢を振り返る機会となった。

また、スポーツには言語の壁を超える力があることを実感した。十分に言葉が通じなくても、プレーや表情を通じて相手と理解し合うことができ、スポーツの持つ普遍的な価値を体験的に理解できた。さらに、日本が計画を立ててその通りに進めることを重視するのに対し、ドイツはプロセスや臨機応変さを大切にするという文化の違いも強く印象に残った。

この交流を通じて、私は英語を使い積極的にコミュニケーション

ンを取ることができ、自分の強みを発揮できたと感じている。今後はこの経験を活かし、異文化理解をさらに深めるとともに、日本のスポーツ教育の環境構築に貢献していきたい。

「スポーツを通じた異文化理解」

【中国グループ】 難波 雅貴

僕がこの日独スポーツ少年団同時交流で学んだことはコミュニケーションに必要なのは言語のみではないということだ。ドイツの大人の人や小さい子供たちの中には英語を喋れない人もいたが、そのような人たちともスポーツを通じた活動によって感情を共有し、お互いを尊重しあうことができた。

また、ジェスチャーを使うことや周りの雰囲気くみ取ること、コミュニケーションを成立させることができた。しかし、やはり言語の重要性も痛感することとなった。相手が英語で言っていることの大半は理解することができたが細かい話を聞き落したり間違えたりしたことで情報の伝達ミスが何回か起こった。また自分の感情をどう表現すればいいのかわからずもどかしさを感じることも多々あった。

そうした反省もふまえ、これからは他人との言語的、非言語的両方のコミュニケーションについて学んでいきたいと感じた。また、ホームステイをしたことも文化交流のかけ橋になっていたと思う。

普段の食事や生活スタイルなどいろいろなことを見て学び、全てのものに挑戦してみたのでより一層文化を感じ、理解することができた。これらの経験からただ現地に行くだけでなく実際にそこにあるコミュニティに属してみることが大切だと分かった。したがってこれからは外側だけを見て判断するのではなく、自分から中に入っていって同じ空間を共有することを価値観理解の第一歩にしていこうと思う。

「日独同時交流を終えて」 【中国グループ】 大王丸 真斗

私は今回のドイツ交流で、日本とは異なる文化や価値観を常に肌で感じていました。特に印象的だったのは、ドイツ人の「積極性」です。日本人は昔から「間」を大事にしてきました。他人との距離を間違えないように周囲の意見に合わせ、「ありのままの自分」をあまり見せない、そのような考え方が根付いていま

す。しかし、ドイツで多くの人と関わるうちに、それは次第に変化していったような気がします。「遠慮はいらない。自分の思っていることを言わないと始まらない。」そう言ってもらえて、自分から積極的に行動する自信を得られました。

また、スポーツについても日本とは違う仕組みに驚かされました。ドイツでは、小学生のスポーツ交流に力を入れていると聞きました。小さい頃から体育の授業の他にもスポーツを身近に感じられる環境が日本でもさらに定着すれば、スポーツをより楽しむ子供も増え、スポーツ少年団という存在もさらに大きなものになるのではないかと思います。

今回の交流は、ディスカッションを通してグローバル問題について考えるだけでなく、日本とは異なる文化や価値観について視野を広げる良いきっかけとなり、世界に目を向けることの大切さを知ることができました。新たに得たことを活かして地域のスポーツ活動や岡山県リーダー会の活性化に貢献していこうと思います。

「日本の部活動問題とドイツのスポーツ少年団に学ぶ」

【中国グループ】 田中 さくら

日本はドイツと同じような課題を抱えつつあり、そのため自国の文化を大切にしながらも、他国の政策や取り組みに理解を示し学んでいく必要があると感じた。

現在、日本では部活動の問題が深刻化している。スポーツ活動の推進が掲げられている一方で、顧問を教員が兼任しているため、実際の職務以上の負担を強いられている現状がある。

これに対し、ドイツには日本のような部活動は存在せず、地域のスポーツ少年団がその役割を担っている。この仕組みを知り、私は大きな感銘を受けた。なぜなら、中学・高校卒業後にスポーツに触れる機会が激減してしまうという日本特有の問題を一度に解決できる可能性を秘めていると感じたからである。

現段階で、日本ではスポーツ少年団は「子どもの習い事」という認識が強い。しかし、実際には大人でも参加可能な団体も少なくない。ドイツのスポーツ少年団を参考に、日本らしい形でスポーツ環境を整えていくことは、今後の社会にとって重要な手がかりとなるだろう。今回の交流は、その可能性を見出す貴重な経験であった。

「文化や言語違いを体感した交流期間」

【中国グループ】 江口 隆成

私は今回の日独同時交流に参加し、文化や言語の違いを強く実感しました。ドイツの参加者と会話をするとき、英語を通じて意思疎通を図りましたが、相手の表現の仕方や言葉のニュアンスに戸惑うことも多くありました。しかし、その違いを理解し自分から積極的にコミュニケーションを取る姿勢こそが交流の大切さだと感じました。

特に印象に残ったのは、スポーツ活動を通じた交流です。言葉で説明が難しい場面でも、パスを出したり応援したりすることで自然と心がつながりました。ルールは同じでも、プレーの仕方や盛り上がり方には国ごとの特徴があり、それが文化の違いとして表れているのが興味深かったです。

今回の経験から、言語や文化の壁があってもスポーツは人々を結びつける力を持っていることを学びました。今後もこの経験を生かし、異文化を尊重しながら日常生活・リーダー会活動で活かして行きたいです。この貴重な交流会からスポーツの重要性など深く理解をして行きたいです。

「ドイツ交流を終えて学んだこと」

【中国グループ】 金山 来人

今回の日独同時交流に参加して、日本との違いを強く感じたことの一つは、別れの場面でのふるまいです。

ドイツの人たちは、ほんの少しの別れ際でも自然にハグや握手をしていました。その光景を見て、最初は少し驚きました。日本では友達や家族であっても、気軽にハグや握手をすることはほとんどないからです。

しかし、何度もその様子を見るうちに、相手への親しみや感謝の気持ちを表す大切な習慣なのだと感じました。実際に自分もハグや握手をしてみると、言葉以上に「ありがとう」や「また会おう」という思いが伝わる気がしてとても温かい気持ちになりました。時には涙を流すこともありました。環境や文化が違う中でほんとに大切な思いという温かさを知ってほんとに良かったです。また、日常生活の中でも、日本との違いに気付くことが多くありました。まず時間の感覚です。ドイツでは約束の時間にとっても正確で、待ち合わせに遅れる人はほとんどいませんでした。

た。別れ際の丁寧なふるまいと同じように、時間を守ることも相手を大切にすることと学びました。

さらに食事の習慣も日本とは違いました。米がなくパンやパスタが主食のようであり、ハムやチーズとかフルーツも多くありました。環境への意識の高さにもすごいと思いました。ゴミの分別が細かく、エコバッグを当たり前のように使う姿から、日常生活の中で自然に環境を大切にしている文化があるのだと思いました。このように、ドイツでの交流を通して、私は相手への思いやりや感謝の気持ちを行動で表すこと、時間を大切にすること、文化の違いを楽しむこと、そして環境への意識を持つことの大切さを学びました。今回の経験は、これからの生活でも意識して活かしていきたいと思います。そしてほんとに貴重で充実した期間を送ることができ、出会った人や関わってくれた人に感謝し、これからも忘れずに生活します。

「多様な価値観に触れて気づいたこと」

【中国グループ】 藤岡 凜

今回、日独スポーツ少年団同時交流に参加して約2週間を過ごし、多くの学びを得ることができました。滞在中は様々なスポーツやディスカッション、歴史的な建物の見学などを行い、特にホームステイ先での生活習慣が印象的でした。水や光熱費を大切に使い、庭に羊や鶏がいる生活は日本ではなかなか経験できないもので、エコや自然と共にある暮らしを強く感じました。

今回の交流では事前に立てた目標「様々な視点から考え行動する」を意識して取り組みました。現地の人との意見交換では、日本とドイツのスポーツ環境の違いをよく知り理解を深められました。また、スポーツを通じた交流では言葉が十分に通じなくても気持ちを共有できることを実感しました。積極的に関わる姿勢を持つことで、アニメや音楽の話題から仲が深まりこのように自分から行動することが本当に大切なんだと感じました。このようにコミュニケーションをとる中で日本とドイツでの違いが大きいことに気づきました。日本では子供中心のスポーツ活動が多いのに対しドイツでは大人も含め世代を超えて楽しむことが当たり前であることに驚きました。年齢に関係なく交流することでコミュニケーションの幅が広がり楽しめるので今後の

空手団でも大人と子供と一緒に活動できる場を作りたいと考えるようになりました。

この経験を活かして、リーダー活動では交流の魅力を伝え、より多くの人に挑戦してもらいたいと思います。

今回建てた目標である「様々な視点から考え行動する力」は確かに伸びたと感じました。今後は相手の立場をより深く理解しながら行動に移せるよう成長していきたいです。

「日本とは違う日常の中で感じたこと」

【四国グループ】 長町 泰河

日独同時交流において僕は現地の人との積極的なコミュニケーション、リーダーとしての責任感を身につけることを目標にしていました。現地では2つの家族の家にそれぞれ5日間ホームステイさせてもらいました。どちらの家でも聞かれたことは僕の家族についてのことです。それは話を繋げるためだったのかどうかはわかりませんが、日本の文化について興味があることはすぐ伝わってきました。あと、とても親切にしてくれました。現地の方は外国ということもあるのか見た目もよく、性格もいい方が多かったのでズっ友になりたいくらいでした。距離が相当離れてるだけなのでなろうと思えばなれると思いますけどね。

あと、どちらの家でも住んでる町の紹介は欠かさずしてくれました。僕は自分から積極的に現地の人と話しに行くことを心掛けていたので、団体行動の意に背いて一人でドイツスポーツユースの人と話すことがたくさんあり、グループにはその分迷惑をかけたと思います。

僕は今回の交流の目的は人それぞれ違うように思いました。僕は観光だったり現地の人との交流など普段できない貴重な体験をメインにしたいと思い参加しました。日本団の仲間聞いてみると僕と同じ目的の人もありました。少なからず僕はこの貴重な体験を今後に活かしていきたいと思います。何事も挑戦してみることが大事だと再び思いました。

「交流中の言葉の壁について」

【四国グループ】 田中 誠人

第52回日独スポーツ少年団同時交流会に参加し、多くの貴重な経験と学びを得ることができました。本交流会は、日本とドイツの少年たちがスポーツを通じて交流し、相互理解を深めることを目的としています。今回の活動を振り返ると、まず異文化交流の重要性を改めて実感しました。言葉の壁もありましたが、笑顔やジェスチャーを交えながらコミュニケーションをとることで、次第に打ち解けることができました。スポーツの場でも、言葉を越えた協力や励まし合いの大切さを学びました。スポーツ交流は、言語や文化の違いを超えた深い絆を築きながら友情も育まれる素晴らしい手段だと実感しました。

特に印象的だったのは、協力し合うことの大切さを学んだ点です。言葉が通じなくても、ジェスチャーや表情、声のトーンなど非言語コミュニケーションの工夫によって意思疎通ができることに気づきました。また、相手の文化や考え方に対する理解を深めることもでき、異文化に対する柔軟な姿勢の重要性を再認識しました。

さらに、交流を重ねる中で、自分自身のコミュニケーション能力やリーダーシップの向上も実感しました。異なる背景を持つ相手と協力しながら活動を進めることで、柔軟な対応力や問題解決能力が養われました。これらの経験は、今後の学校生活やリーダー会活動、将来の国際的な活動においても大いに役立つと考えています。

今後は、これらの経験を活かし、リーダー会活動でのコミュニケーションの取り方やスポーツ交流の仕方などに活かしていきたいと思います。具体的には、ドイツで得た知識や人脈を基盤に、活動をできたらと考えています。また、言語や文化の壁を越えた協力関係を築き、より多くの国々と連携していくことを目標としています。

この交流を通じて、私は異なる背景を持つ人々と協力し合うことの重要性や、多文化理解の大切さを実感しました。今後もこの経験を生かし、国際交流やスポーツを通じて多くの人とつながり、互いに成長していきながらスポーツ活動を頑張っていくと思っています。

「交通を通じて広がった視野」 【四国グループ】 安部 颯汰

今回の日独同時交流に参加して、私は普段の生活では気づかない「環境」や「生活習慣」の違いを強く感じました。特に印象に残ったのは、ドイツの人々の環境への意識の高さです。家庭でのごみの分別はとて細かく、ペットボトルやビン専用の回収機に持って行くとお金が返ってくる仕組みがあることを知りました。日本でもリサイクルは進められていますが、ドイツのように一人ひとりが習慣として取り組んでいる様子を目の当たりにし、「環境を守ることは特別なことではなく日常の一部なのだ」と実感しました。

また、ホームステイを通じて、ドイツの家庭では家族と過ごす時間をとても大切にしていることを学びました。夕食は家族全員でテーブルを囲み、ゆっくりと会話を楽しみながら食べる習慣がありました。日本では部活動や塾などで夕食を家族全員で取ることは少なくなりがちですが、こうした習慣の違いから「家族の時間を意識して持つことの大切さ」に気づかされました。この10日間で学んだことは、ただの異文化体験にとどまらず、自分の生活や考え方を見つめ直すきっかけにもなりました。環境への取り組みや家族との時間の持ち方など、日本に持ち帰って実践できることも多くあります。今回の経験を通じて得た学びを今後の生活や地域活動に活かし、視野を広げながら成長していきたいと思います。

交流の中では、SDGsについて話す機会もありました。ドイツの学生は自分の意見を積極的に述べる事が多く、環境問題やジェンダーの話題にも自然に参加していました。自分の考えを持ち、それを言葉にして相手に伝える姿勢は、日本の学校生活ではあまり経験できないもので、とても刺激を受けました。私は英語の表現に苦労しましたが、「うまく言えなくても伝えようとする努力」が大事だと感じました。また、スポーツ交流では、言葉が十分に通じなくても一緒に体を動かすことで自然と仲良くなれることを体験しました。試合中にハイタッチを交わしたり、ミスしても励まし合ったりと、言葉を越えたつながりがあることに気づきました。スポーツには国境を越えて人と人をつなぐ力があるのだと改めて実感しました。

この10日間で学んだことは、ただの異文化体験にとどまらず、自分の生活や考え方を見つめ直すきっかけにもなりました。

た。環境への取り組みや家族との時間の持ち方など、日本に持ち帰って実践できることも多くあります。今回の経験を通じて得た学びを今後の生活や地域活動に活かし、視野を広げながら成長していきたいと思えます。

「ドイツ留学を通して」 【四国グループ】 岩原 奏真

自分がドイツに行って感じた事は、まずは食事の違いです。一番初めに感じた事は食事の量が多い事です。1つ1つが大きく一回に食べる量がとても多いそして、何かした後によくの間食を挟むので常にお腹がはった状態です。後、ドイツは宗教の関係上肉を食べられない人が多く住んでおり実際に自分が2件目でホームステイした家族は2人ともベジタリアンでした。町に行くとその人たちの事を考えた、肉を使っていない料理が多くあり、大体どの飲食店にもあった。パンの食べ方も変わっており、パンを横に切りサンドイッチのように使い自分の好きな具材などを入れたものを朝ごはんや昼ご飯に食べていた。主食主にはジャガイモかパンです。文化の違いについてはまずいたるところに教会があり、家の靴を脱ぐ境界線がなくどこで脱いだらいいかわからなかった。最後にドイツの人たちはみんな社会的でいろんな人たちが話しかけてくれた、自分が英語を全然話せなくてもずっと理解しようとしてくれてありがたかった。海外に一回もいった事がなく不安でいっぱいだったけど、この留学を通して海外で生きていくうえでの必要な知識を得られたと思う。

「これからの交流で活かしたい事」

【四国グループ】 奈路 天汰

僕はドイツに行って言語の違いによる壁や日本とは異なる文化や習慣の理解、親のいない環境で自立心の大切さを学びました。ドイツ語は早口を聞いているぐらい早く聞き取ることが難しかったです。言いたいことがうまく伝わらず自分の語学力の低さに悔しい思いもしました。でも携帯の翻訳だけでなく、ジェスチャーや英語を話すことによって伝えることができました。また、ドイツの文化や習慣にも驚きました。日本では食事の際にナイフを使うことが少ないけれどドイツではナイフを使って食べるのが基本だから使い方や食事のルールを教えてくださいました。

きました。他にも自分の時間が多く家族団らの時間もあつたけれど自分の時間をしっかり確保することができました。日本とは違う価値観や文化に触れることによって自分の考え方を見直すきっかけになりました。

言語の通じない中で自分のやり方で相手に伝えようとするのをこれからの交流で生かしたい。家族と離れて自分で考えて行動することや団体行動などが求められたため精神的にも成長を感じられ、このドイツ交流はこれからの私の人生にとっていい経験になりました。

「ドイツを好きになった交流」 【九州グループ】 藤谷 佳那

今回のドイツ滞在中に感じた、ドイツの見習いたい部分、感銘を受けた部分について3つ述べたい。

1つ目は、人との関わりを重視する風潮だ。ドイツの人は、話している間しっかり目を見てくれて、人とのつながりや縁を大切にしていた。また、道端でバレーボールをしていたときも、通りがかった人も参加するという場面が何度かありフランクな付き合い方が愉快だった。

2つ目は、エコに対する意識だ。生活する中で、ペットボトルの蓋がはずれないようにして、キャップのポイ捨てを防止したり、ボトルにデポジットをかけた後、商業的場面でも使い捨て製品を使わないようにしたりなど、エコという観点で多くの気づきがあった。

3つ目は、work-life balance の充実度だ。ドイツ団とのディスカッションの中で、残業に対して企業に罰金が科せられたり、保障が充実していたりなど、ドイツは労働者の権利が守られている印象を受けた。また、ホストファミリーの両親も夜遅くに帰ってくることはなく、平日であるにも関わらず私たちの活動に協力してくれた。これらのように、ドイツの素晴らしいことに気づき、日本も参考にすべき点が見つかった交流であった。この先、スポーツに関わるものとして、日本の健康に貢献できるよう日々模索していかなければならないと感じた。

「今回の交流で学んだこと」 【九州グループ】 後藤 誠真

今回のドイツ団との交流で特に印象に残ったのは、SDGsをテーマにした話し合いであった。その中で、スポーツに対するド

イツの人々の姿勢を知ることができ、日本との違いを強く感じました。

日本では勝利を目指して厳しい練習を重ねるという考え方が主流だが、ドイツでは勝敗よりも楽しむことを目的としてスポーツに向き合っているという点が印象的であった。勝つことが第一ではなく、誰もが楽しみながら取り組む姿勢は、スポーツ本来の意義を改めて考えさせられるきっかけとなった。この気づきは、今後の自分の活動においても大きな学びとなる。競技や活動を行う際、結果だけにとらわれるのではなく、仲間と楽しみながら取り組むことの大切さを意識していきたい。そして、この交流で得た視点を他者との関わりや地域での活動にも活かし、広い意味での持続可能な社会づくりに貢献できるよう努めたい。

「今回の交流で学んだこと」 【九州グループ】 後藤 綾真

私はこの研修を通して、他国の異文化や異なる価値観を学びました。

特に印象的だったのは、ドイツ人の時間に対する意識の高さです。会議や集合の場面では、参加者全員が定刻前に集まり、準備を整えている姿に強い責任感を感じました。そして、今回私たちはSDGsについて話し合い、スポーツを通してドイツと日本の大きな違いについて、話し合うことが出来ました。

日本では、勝ち負けにこだわり、日頃から厳しい練習を怠らないというのが主な考え方だが、ドイツでは勝ち負けにこだわらず、スポーツを楽しむことに重視していると感じました。この違いは私たち、スポーツ少年団にとって大きな資源となると思いました。

他にドイツのことで気づいた点といえば、公共交通機関の利便性やサイクルの徹底など、持続可能な社会を築くための仕組みが根付いていることに感銘を受けました。このことを、自分たちの団体に報告し、少しでも活かして行けたらいいと思います。

「交流で学んだことについて」 【九州グループ】 小西 雄太

私は今回の日独交流を通して、日本とドイツの異なる文化や国境を越えた価値観を学ぶことが出来ました。

特に印象に残ったことはスポーツに対する考え方です。日本ではスポーツをするなら勝ち負けにこだわり、勝つことが全てだと考える指導者やチームが多いですが、ドイツではほとんどが楽しむためにしていて、勝敗はそれほど重要では無いことです。このことは日本のスポーツの指導者や、スポーツ少年団で活用するためのとても大きなことでした。また、ドイツのスポーツ施設は日本と違ってとても設備が良く、清潔感があり、しっかりと安全対策も徹底していました。ドイツではスポーツに対する考え方が日本よりも楽しむために安全にそして充実して行うことができるようにされているということがわかりました。ドイツでは風力発電で電力を補うなどのことがSDGsでの話し合いで知ることが出来ました。このような経験は簡単にはできないのでこれからも自分の団体に持ち帰って活かしていきたいと考えています。

「異文化体験を通じた成長」 【九州グループ】 林田 英士

ドイツに到着した時のことは今でもよく覚えている。空港から一歩外に出た瞬間、それまで慣れ親しんできた景色とは全く違う街の雰囲気、圧迫された。期待で胸が高鳴る一方で、言葉の壁やこれから始まる生活への不安も同時に押し寄せてきた。

現地での生活では、やはり言葉の壁に苦労した。特に食べ物注文する時など、自分の意思がなかなか伝わらずもどかしい思いをしたこともあった。しかし、そんな時に助けてくれたのは温かいホストファミリーだった。彼らは私が困っていると、笑顔で優しく接してくれ、身振り手振りで私の気持ちを理解しようとしてくれた。そのおかげで、少しずつコミュニケーションすることに慣れ、気持ちを伝えられる喜びを知ることができた。

ドイツでの生活は毎日が新しい発見の連続だった。スーパーに並ぶ食材や人々の服装、習慣など、日本では見られないものばかりで、最初は戸惑ったが、次第に違いを面白く感じられるようになり、考え方の幅が広がったのを実感した。現地の若者たちとのディスカッションや一緒にしたスポーツも大きな学びの場となり、そこで様々な価値観に触れ、自分の考え方を見つめ直すきっかけになった。

ドイツでの経験で得た学びは、私を人間として大きく成長させてくれた。この経験を活かして、これからは身の回りの方々

を大切に、社会に貢献できる人間になりたい。

「日独スポーツ少年団同時交流を終えて」

【九州グループ】 足立 さくら

この交流ではスポーツの偉大さを感じることができました。グループ内に完璧に英語を話すことのできるメンバーがいなくても、身振りや手振り、知っている英単語を用いて自分の意見を表したり、名前を呼びあいながらバレーボールやキャッチボールすることで楽しさを共有し、仲を深めることによって言葉や文化の違いがあっても、国境を超えたつながりを感じることができました。

SDGs のディスカッションでは、日独に共通するスポーツ活動の現状や、福祉や労働環境の違いを対話によって理解を深められました。日常会話は英語やドイツ語、話し合いではお互いに翻訳アプリを用いて母国語で話すことがまた、現状の認識を明確なものにさせたと思います。そして、日本人とドイツ人の体格差を実感することができ、海外で活躍している日本の選手に尊敬の念を抱きました。言葉の通じない環境で不安が大きかったけど、犯罪や事故などに巻き込まれることなく、交流を楽しめた最高の期間でした。今後は次の世代にこの交流の経験を伝えて、国を超えたスポーツの発展に寄与していきたいと思えます。

「異文化体験を通じた成長」 【九州グループ】 御手洗 夕葉

私は、日独同時交流を通して言語の壁を越え、沢山のひとと楽しくコミュニケーションをとれる人になれたと実感している。過去に参加したことのある母や兄から、日独同時交流のことは沢山聞いていたし、写真も見ていた。しかし、実際に自分の目で見るドイツは、想像していたよりも驚くほどきれいな景色・綺麗な国だった。

最初は、とても不安で、緊張もしていたけど実際にプログラムが始まると初めてのことばかりで、全てに興味を持ち、不安はあっという間になくなった。ミュンヘンの宿舎で、ドイツ団がしてくれたレクは、今までしたことなかったものばかりで、とても面白かった。いつもしている遊びでも、少し工夫をすることで、とても楽しくなることを学んだ。地方プログラムではドイツの方に自

分の英語が全然伝わらず、翻訳アプリやジェスチャーを使いなからコミュニケーションをとれるよう工夫をした。伝えなかったことは全部伝えることはできなかったけど、ちょっとした時間にしたバレーボールやチェスなどの運動を通して、沢山笑い合うことができた。言語が通じなかった場合でも十分仲良くなれることにも気づいた。

私の夢は、グランドスタッフである。現在、通っている高校では英語を学んでいるが、この日独同時交流に参加して、ドイツ語にも大変興味を持った。また、グランドスタッフ以外にも通訳の仕事にも大変興味を持った。私は、今進路を決定する時期である。ドイツ語も勉強できる大学を目指してみたいと思っている。私は自分の未来がとても楽しみだ。ドイツにかかわる仕事に就けるよう、これからも努力していきたい。

「今回の交流で学んだこと」 【九州グループ】 大城 レベッカ

日独同時交流で私は様々な価値観があることと人の温かさを感じた。

実際にドイツに行くとき街中や暮らしの中、お店、さらには仕事やスポーツに対する考え方などが全く知らないものだらけで私はこんなにも世の中のことを知らないのかと衝撃を受けた。ホームステイが二箇所あったのだが、それぞれ顔や性格が違ったり、周辺の国から移住してきたファミリーが居たりと島国である日本では感じる事の出来ない民族や周辺の国を意識した人々を多く知ることができた。ヨーロッパは様々な国と距離が近いからドイツに居ながら様々な国を感じることができ、それから受容する文化ができたのではないかと考えた。

次に人の温かさについて、ホストファミリーや交流したクラブのみんなが非常に優しく接してくれたのを感じた。どんな時に幸せを感じるかと質問をするどのクラブも家族と過ごしている時と話しており、これは日常的に家族仲を深めることで自分に余裕を持つことができ、人と常に仲良く出来るのではないかと考えた。

今後の活動では、どんな背景を持った人でも平等に接し、その人にとって苦にならない環境を作れる人になりたいと考えた。

※団員レポートについては一部表記の統一等を除き原文ママで掲載

テーマレポート

共通テーマ:「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～

第53回日独スポーツ少年団同時交流(派遣)では、共通テーマのキーワードとしてSDGsを掲げ、各グループはSDGs目標のうち、目標3、4、5から話し合っ^てひとつを選択。派遣先のドイツでは、グループごとに選択したSDGs目標について、事前に調べて準備をしたうえでディスカッションに取り組んだ。ここでは、各グループが作成した共通テーマに関するレポートを掲載する。

<SDGs 目標>

- ・目標 3「すべての人に健康と福祉を」
- ・目標 4「質の高い教育をみんなに」
- ・目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」

【北海道グループ】

私たち北海道グループはドイツ人の皆さんとジェンダー平等について話し合いました。中心的な話題となったのは、スポーツの分野におけるジェンダーの問題です。スポーツは性別に関係なく多くの人々に親しまれている活動だけど、その中には依然として男女の格差や固定観念が残っています。ドイツと日本、双方の視点を比較することで、ジェンダー平等の実現に向けた課題と可能性を考えることができました。

まず、話し合いの中で印象的だったのは、ドイツでは女子サッカーや女子バスケットボールなど、女性アスリートへの関心が年々高まっているという点です。メディアでの取り上げ方も改善されつつあり、男子競技と同じように応援される場面が増えているそうです。一方で、日本ではまだまだ女子スポーツの注目が少なく、スポンサーや観客の数においても大きな差があります。このような違いは、単に経済的な背景だけでなく、文化的な価値観の違いにも起因していると感じました。

また、スポーツ教育の場でもジェンダーの影響が見られる。ドイツでは、子どもたちが性別に関係なく好きなスポーツを選びやすい環境が整っていて、「男の子だからサッカー」「女の子だからダンス」といった固定観念が少ないという意見がありまし

た。これに対して、日本の学校では依然として男女別の種目が多く、無意識のうちに子どもたちが「自分にふさわしいスポーツ」を制限されてしまっている現状があるとおもいます。

話し合いを通じて、スポーツの世界においてもジェンダー平等を推進することは、単に女性の権利を拡大するだけでなく、すべての人が自分らしく活動できる社会を築くために不可欠だと改めて実感しました。競技の場だけでなく、教育、メディア、観戦文化など、あらゆる面で平等が意識されることが重要であると考えました。これからドイツの取り組みを参考にしながら、日本でも多様性を尊重するスポーツ文化を作っていく必要があると感じました。

【東北Ⅰ・Ⅱグループ】

私たちのグループは、SDGs No.4「質の高い教育をみんなに」をテーマとした。教育の環境により、学べる機会・学ぶ内容・身に付く事柄等が違ってくるが、『スポーツは世界共通なので、スポーツをすれば種々の共通した内容を学べる』と考えた。

このことをキーワードとして各自が自分の意見をまとめてディスカッションに臨んだ。

当日になり、「ディスカッションテーマは『ドイツと日本の教育システムの違い』である。指導者・通訳も同席せず行う。」と知らされた。始めは戸惑ったが、英語を中心に身振り手振りで何とかお互いに話し合うことができた。

ドイツの教育について確認できたことをいくつか紹介する。

- ・小学校の後、3種類の学校

(Hauptschule, Realschule, Gymnasium)へ進む。それぞれ年数・教育内容が異なり、終わった後の進路が異なる

- ・ドイツの学校では校則が厳しくない
- ・いじめは多くない
- ・日本では高校・大学の偏差値が明確だが、ドイツではない
- ・珍しい教科(Subject)を選択できる
- ・子どもたちの健康・スポーツ環境を大事にしている

ドイツと日本の教育システムにはかなりの相違があるが、共通した問題点もあることが分かった。みんなが一緒という日本と違い、一人ひとりに合った学びを大切にしている。個人の能力や特性に合わせた環境で教育を受け、自分の将来へ向けて努力できると感じた。

国や地域、言語、社会状況によって、やはり学べることはかなり差が出てくることが再確認された。しかし、スポーツを通して共通した事柄を多く学べるはず、民族・社会状況・年齢を越えて価値あることを得ることができるはずである。同時交流での様々な活動(スポーツ)から、環境の異なるドイツの人々と互いに理解し合った。心がつながり、強い絆が生まれた。このつながりを途絶えさせず、スポーツだけでなく様々なことに発展させていくことにより、『スポーツ×SDGs～スポーツが拓く社会の持続可能性～』が達成できると考える。

【関東Ⅰグループ】

このレポートでは、スポーツを持つ力とスポーツをする意義に関して述べる。

昨今の世界の情勢として、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルとパレスティナの紛争など多くの戦争や紛争が起きている。その中で世界では互いに憎しみあって、分断が生まれている。しかし、スポーツは人と人をつなぐ力を秘めている。世界には、それぞれが異なった地域に数えきれないほどの民族が存在して、言語を多彩である。そのため、世界中の人々と言葉をお互いにかかわることは不可能に近いが、スポーツに言語の障壁は存在しない。私たちは、スポーツを通じて、共に体を動かして汗をかく中で、心をかよわせ、笑顔を共有して、互いの思いを深く理解して、絆を深めることができることを理解した。

スポーツをする意義としては、スポーツを通じてコミュニティに所属して、その地域で友達や仲間を作ったり、仕事のストレスを発散したりすることができる。そうした環境が人々の身体と精神の健康につながっていると考える。

ドイツでは、日本とは違い、子供や大人が参加できるスポーツクラブが多く存在して、みんながそれぞれの目的で参加することができる。例えば、スポーツクラブの中にも、柔道、体操、バレーボールなど多種多様なスポーツがあり、年齢別に練習時間

を分けており、それぞれの目的にあった練習を行っている。日本にもこうしたスポーツクラブを増やすことで、子供や大人が身体と精神を健康に保つ機会ができて、社会を活性化することができると感じた。

このように、スポーツを通じて、様々な交流や運動機会を得ることができて、多くの人々が身体と精神の健康につながっている。そして、それがスポーツが持つ力とスポーツする意義であることが理解できた。

【関東Ⅱグループ】

関東Ⅱグループでは、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」をテーマにドイツ側と話し合いをしました。

ドイツではSDGsについて授業の一環で学ぶ機会はあるものの、日常生活で話題に上ることは少ない。一方、日本ではテレビ広告などで呼びかけが行われ、家庭によっては会話に出ることもある。運動習慣については、ドイツでは週2～3回ほどランニングやジム通いをしている人が多い。体育の授業では、日本では男子同士・女子同士でしかチームスポーツを行わないが、ドイツでは昔から男女合同で活動してきた。ただし成績の評価は男女別で判断される。球技に関しては、楽しむことを目的とするならば合同で、成績を重視するならば分けるべきだという考えも見られる。スポーツにおいては「楽しむこと」が重視され、協力してみんなが楽しめることが大切だとされている。

バスケットボールについては、ドイツにもチームは存在するが、メディアで大きく取り上げられることは少なく、認知度も高くない。また人口が少ないため、子どもと大人が別々に活動しているケースも多い。服装に関しては日本のような制服がなく、男女差もほとんど見られない。さらにドイツでは政治経済の授業が重視されており、自分たちの人生を左右するものとして必ず学ぶべき科目とされている。

性に関する教育についても特徴的であり、生物の授業の中で男女ともに学習し、話し合い、試験にも出題される。恥ずかしいものではなく、お互いの身を守るための知識として扱われている。また、スポーツ指導においては、女性にとって指導者の性別は大きな問題ではなく、指導力そのものが重視される。女子チームに男子が出場できない問題については、他チームにとつ

ては不平等となり、自チームにとっては出場できないこと自体が不平等になるため、一概に正解はないとされる。

このように、ドイツと日本を比較すると、教育やスポーツの在り方に違いが見られる一方で、「楽しさを共有する」「自分たちの将来に関わることを学ぶ」という共通した姿勢が存在している。

【北信越グループ】

私たちは、質の高い教育と健康と福祉をテーマにディスカッションしました。

質の高い教育がなぜ必要なのかについて、貧困を減らすことで人生の選択肢が増えるからだという意見が出ました。また、基本的人権の尊重のためという意見もありました。解決しなければならぬ問題については、児童労働、戦争、先生がいない、お金がないという理由で学校へ行けない人がいるという点です。ドイツには移民が多くドイツ語が苦手な人が多いです。そして、一つの教科が足をひっぱって良い学校に行けなくなる人もいます。そのような人向けに、苦手を克服するための塾のようなものがあるそうで、教育の差を小さくする工夫がなされていました。学校の休日の話が出たときに、宗教について話す機会がありました。日本もドイツも若い世代の宗教への信仰が薄いとわかりました。

全ての人に健康と福祉が必要な理由は、お金のない人も平等に支援、治療ができるようにするためだという意見が出ました。達成に向けた問題点は、5歳未満で死亡してしまったり、安全な出産ができなかったりしているという点です。また、発展途上国と新興国の支援の格差も問題です。私たちはNPOについて知り、学ぶことができます。

ドイツの方からは、スポーツと栄養について話を聞きました。ドイツのダイエットは炭水化物を減らし体内の脂肪分や水分を減らすことで行うそうです。ヴィーガンのメリットは、二酸化炭素の削減につながり、動物にもやさしいことだそうです。また、ドイツには bio 認証や、ニュートリスコアといった表示もあります。Bio はオーガニック製品であることを示します。ニュートリスコアは、栄養素の質を A から D の 5 段階で表示されます。日本

にはない制度です。一目見てすぐにわかるので日本のもこの制度があるといいと思います。

【東海グループ】

私たちのグループは SDGs 目標 3 の「すべての人に健康と福祉を」というテーマのもとでディスカッションを行いました。まず、日本の各世代(小学生、中学生、高校生、大人、高齢者)の現状についてスライドと紙資料を使い発表して、その後用意してきたアンケートに答えてもらい、最後に お互い質疑応答という流れで行いました。日本側からは各世代の良い点と課題になっている点について、今後目指したい姿を英語で発表しました。

また、アンケートではスポーツを始めたきっかけやクラブ運営の仕方、ドイツで盛んなスポーツ、練習場所の確保や宣伝の仕方について答えてもらいました。お互いの国の課題について伝え合い、それぞれの国ではどのように解決しているかを知ることとで解決策を探していくことができました。ディスカッションをしていく中でドイツでは親や友達に言われて基本全員がスポーツクラブに入るため、宣伝しなくても人数は減らないことを知りました。しかし、ドイツでも少子化は進んでいて全体の人口が減っているため、スポーツクラブの人数も減っていて日本と同じく人数減少は問題になっていることがわかりました。

また、ディスカッションに参加して下さったドイツの方々にはほとんどの人がスポーツ体験の機会を通してクラブに入っていることを知りました。そのことから私たちは、スポーツをやったことのない子供たちがスポーツ体験をすることができる機会を増やしていくことが良いと感じました。さらに宣伝方法について考えた中でドイツの方々からビデオを作成して伝えたり、子供たちと会話する場を作って子供たちが一番興味あることについて教えてあげたりできる機会があると良いという意見も頂くことができました。短い時間ではありましたが、たくさん学びを得ることができた良いディスカッションとなりました。今回のディスカッションを通して日本の現状を改めて認識することができました。今回学んだことを自分たちのできることから少しずつおこなっていく、多くの人がスポーツを通して健康で楽しい生活を送れる社会を作っていきたいと思います。

【近畿グループ】

私たちのグループは、日独スポーツ少年団同時交流において「スポーツとSDGs」というテーマに基づき、SDGsの教育の観点からディスカッションを行った。特に、社会性・普遍性・自主性という三つの観点に注目し、スポーツが教育に果たす役割について考えを深めた。

まず、社会性の観点では、スポーツは誰もが参加できる場であることに注目した。例えば、簡単な遊びから導入を行うことで、スポーツが苦手な子どもでも自然に活動に加わることができる。こうした工夫は、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という理念に直結しており、すべての人に開かれた教育の実現につながると考えられる。また、チームでの活動は協力や思いやりを育み、異なる文化を持つ人との交流でも有効である。スポーツは、国境や言語を越えて人と人をつなぐ共通の手段となりうる。

次に、普遍性の観点では、スポーツが持つ価値が世界共通である点に着目した。ルールを守ることやフェアプレーの精神、努力や挑戦の大切さは、国や文化を超えて理解される普遍的な教育資源である。これらはSDGsの理念とも親和性が高く、持続可能な社会を築くうえで重要な価値観であるといえる。スポーツの楽しさや仲間との達成感は、どの地域においても人々を学びに向かわせる力を持っている。

最後に、自主性の観点では、スポーツを単に「教わる」ものとしてだけでなく、「指導する」立場を経験することで学びが深まることが強調された。仲間や年下の子どもにスポーツを教える過程では、自ら考え、工夫し、責任を持って行動する力が養われる。また、国際交流の場では言葉や文化の壁を自ら乗り越える姿勢が求められ、その積極性が成長のきっかけとなる。スポーツを通じたこうした主体的な学びは、持続可能な教育の基盤となる。

以上の議論を通じて、私たちはスポーツが教育の場を大きく広げる可能性を持つことを再確認した。社会性・普遍性・自主性という三つの観点から考えることで、スポーツが単なる運動ではなく、人間としての成長を支える重要な教育資源であることが明らかになった。今後もスポーツを活かし、誰もが学び成

長できる環境を築いていくことが、SDGsの達成に向けて私たちに求められているといえる。

【中国グループ】

私たち中国グループはSDGsの3番目の目標である「すべての人に健康と福祉を」についてディスカッションをしました。私たちは健康と福祉のそれぞれについて、「日本が現在取り組んでいること」、「その取り組みのメリットやデメリット」、「自分たちでもできること」の3つに分けて考えていき、意見を出し合う中で、日本のスポーツと健康に関する課題が見えてきました。現在、日本は毎週の体育の授業や部活動、他にもマラソンやラジオ体操といった地域スポーツイベントなど、健康のためのスポーツ活動に多く取り組んでいます。これらの取り組みは、運動時間を確保したり、様々な種目を体験したりすることができるなど、多くのメリットがあります。しかし一方で、学校を卒業したあとから(特に大学生になってから)運動の機会が減ってしまうといった課題もあると考えました。それについて、ドイツでは体育の授業以外にも、学校外でのスポーツクラブがあり、運動ができる環境が非常に整っています。もちろん、日本にもクラブチームなどは存在していますが、全員がそれに入っているというわけではありません。日本もスポーツの位置付けを変えるためにもスポーツができる環境をさらに整えたり、情報発信などして運動への意識を今まで以上に持たせる必要があるのではないかと思います。

私たちはドイツで、バレーボールや卓球などのスポーツ交流を行いました。もちろんですが、私たちは英語を完璧に話せるわけではありません。ドイツ語は尚更です。しかし、コミュニケーションを取るのが難しい人どうしであっても、共にスポーツを通して楽しむことができました。改めてスポーツは文化や言語など関係なく、人をつなぐ力を持っていることを実感しました。スポーツは誰でもできるものです。誰もができるものだからこそ、私たちスポーツ少年団が主体となってスポーツを体験できる機会を増やし、地域の活性化につなげていくべきだと感じました。

【四国グループ】

四国グループは、SDGs(持続可能な開発目標)の目標3「すべての人に健康と福祉を」達成に向けて、私たちはスポーツの役割について深く考察しました。スポーツは、身体的健康の促進だけでなく、精神的な福祉や社会的なつながりを強化する重要な手段であり、誰もが気軽に参加できる活動として、健康と福祉の向上に大きく寄与します。

まず、日本の現状を振り返ると、少子高齢化や地域格差の拡大に伴い、健康格差や孤立の問題が深刻化しています。特に高齢者や障害を持つ方々にとって、運動やスポーツは身体機能の維持や認知症予防、孤立防止に効果的です。地域密着型のスポーツクラブやコミュニティ運動は、地域のつながりを強め、福祉サービスと連携して高齢者の生活の質を向上させる役割を果たしています。

一方、ドイツでは、スポーツが社会福祉の一環として位置づけられ、多文化共生や移民・難民支援のためのプログラムも積極的に展開されています。ドイツのスポーツ団体は、多言語対応や異文化交流を促進し、移民や難民の子どもたちが社会に適応し、精神的な健康を保つための支援を行っています。こうした取り組みは、スポーツを通じて多様な背景を持つ人々が交流し、共に健康を追求できる環境を作り出しています。

私たちの議論では、スポーツがもたらす多面的な効果について、特に社会的包摂や精神的健康の促進に焦点を当てることが重要です。スポーツは、身体的な健康促進だけでなく、コミュニケーション能力の向上や、異なる文化や背景を持つ人々の交流を促進する役割も果たします。これにより、社会の多様性を尊重し、共生の意識を高めることが可能となります。

また、スポーツを通じた教育や支援プログラムは、移民や難民の子どもたちが自信を持ち、自立心を育む手助けとなります。これらの取り組みは、社会的な孤立を防ぎ、地域社会の一体感を強化する効果も期待されます。さらに、スポーツの持つ規律や協力の精神は、個人の成長や社会参加の促進に寄与し、長期的な社会的安定に寄与することも重要なポイントです。このように、スポーツは単なる娯楽や運動の枠を超え、社会的な価値創造や多文化共生の推進においても非常に重要な役割を果たしています。

両国ともに、少子高齢化や格差拡大といった共通の課題に直面していますが、その対応策や社会構造の違いにより、アプローチの仕方に差異が見られます。今後は、これらの国々の良い点を取り入れつつ、「すべての人に健康と福祉を」をしっかりとこれからも考えていかなければならないと思いました。

【九州グループ】

今回、私たち九州グループはGoal3「すべての人に健康と福祉を」について、Baden-BadenとHeidenの2つのグループと話し合いをしました。2グループの内容をまとめて記します。まず、日本団からテーマの内容、日本の現状(主に少子高齢化)、自分たちで考えた解決策について発表しました。その中で、健康とスポーツは深い関りがあり、みんなが生涯スポーツを楽しむようになれば、健康寿命を延長することに貢献できるのではという意見を提示しました。事前に、ドイツの人々は日本よりもスポーツを楽しむ風潮があることを知っていたので、プレゼンテーションの後に、ドイツのスポーツやSDGsに対する意識を学ぶために、いくつかの質問をしました。スポーツを始めるきっかけ、教育現場でのスポーツ、SDGsに対する意識などです。

まず、スポーツを始めるきっかけは家族や友人の影響が大きく、中には強制的に始めさせられた人もいますが、みんな興味をもって自主的に始めたようです。日本と大差はないなと思いました。

次に、教育現場でのスポーツに関しては大きな差がありました。日本の中高生は学校単位の部活動が主流であるのに対し、ドイツの青少年は地域のクラブ活動が主流で、放課後もクラブの方に参加するそうです。地域のクラブなので、小さい子からご年配の方まで、幅広い世代が参加し関りを持っている点でも良いなと思いました。また、各競技でプロの道はありますが、多くの人はやはり勝つために練習するというより、スポーツそのものを楽しむ風潮があるようです。日本でもその風潮をもっと広めて気軽にスポーツを始める人を増やすことが鍵になると思いました。

最後にSDGsについての意識は、日常的に意識している人もいればそうでない人もいて、日本と達成度に差があることに驚

いている人もいました。国民性や国規模の取り組みの度合いも関わってくる難しい問題だと感じました。環境保全に絞ってみると、ドイツのボトルは蓋が外れないようになっていたり、ボトルにデポジットがかけられていたり、商業的場面でも使い捨て製品をなるべく使わない風潮があったりなど、日本より意識が高いと思うポイントはたくさんありました。

話し合いは、学校の様子や仕事に対する意識にまで及び、端的にまとめるとドイツの人たちは世代を問わずWork-Life Balanceが実現できていて、それが国民幸福度にも繋がっているのではないかという結論に至りました。

お世話になった方々

【北海道グループ】

受入団体: Brandenburgische Sportjugend(ブランデンブルク・スポーツユース)

受入担当者: Maximilian Fender(マキシミリアン・フェンダー)、Michael Werner(ミシャエル・ヴェアナー)

通訳: 田 恵子

【東北Ⅰ・Ⅱグループ】

受入団体: Bayrische Sportjugend(バイエルン・スポーツユース)

受入担当者: Stefan Werner(シュテファン・ヴェアナー)

通訳: Emily Sanders(エミリー・サンダース)

【関東Ⅰグループ】

受入団体: Deutsche Judojugend(ドイツ柔道ユース)

受入担当者: Andrea Schimmeyer(アンドレア・シーマイヤー)、Caroline Grünwalder(カロリン・グリュンヴァルダー)

通訳: Laura Klug(ラウラ・クルーク)

【関東Ⅱグループ】

受入団体: Sportjugend Hessen(スポーツユース・ヘッセン)

受入担当者: Uwe Wappler(ウヴェ・ワップラー)、Anna Blum(アンナ・ブリュム)

通訳: 山口 久美子

【北信越グループ】

受入団体: Deutsche Skijugend(ドイツスキーユース)

受入担当者: Amelie Utz(アメリ・ウッツ)

通訳: ラガッセ・佑香

【東海グループ】

受入団体: Württembergische Sportjugend(ヴュルテンベルク・スポーツユース)

受入担当者: Oliver Schweizer(オリバー・シュヴァイツァー)

通訳: Oliver Hockenberger(オリバー・ホッケンベルガー)

【近畿グループ】

受入団体: Gewichtheber Jugend(重量挙げユース)、

受入担当者: Lili Oesten(リリー・オーステン)

通訳: 内田 美樹

【中国グループ】

受入団体: Sportjugend Sachsen(ザクセン=スポーツユース)

Sportjugend Sachsen-Anhalt(ザクセン=アンハルトスポーツユース)

受入担当者: Mirko Bach(ミルコ・バッハ)、Andreas Wagner(アンドレアス・ワーグナー)

通訳: Maximilian Penkalla(マキシミリアン・ペンカラ)

お世話になった方々

【四国グループ】

受入団体: Sportjugend Rheinland-Pfalz(スポーツユース・ラインラント＝プファルツ)、

受入担当者: Fabian Scherer(ファビアン・シェラー)、Jana Rödler(ヤーナ・リュードラー)

Alison Sausen(エリソン・サウゼン)

通訳: Mareike Hümmerich(マライケ・ヒュンマーリッヒ)

【九州グループ】

受入団体: Sportjugend Schachjugend(ドイツチェスユース)

受入担当者: Adrian Knop(アドリアン・クノップ)、Rolf Schlindwein(ロルフ・シュリンドワイン)

Kevin Hatzenbühler(ケヴィン・ハッツェンビューラー)

通訳: 草刈 麻理

【団長団】

エスコート: Christian Konrad(クリスティアン・コンラード)

通訳: 鹿沼 輝与志

第Ⅱ章 ドイツの友を迎えて

●ドイツ団受入の記録



全体プログラム(前半・東京)

宿泊・会場：相鉄グランドフレッサ東京バイ有明／日本大学文理学部キャンパス／獨協大学

7月31日(木)

ドイツ団 成田国際空港到着 (OS51)

暑熱対策に関するレクチャー

JJSA-団長団ミーティング

代表者ミーティング (JJSA / 団長団 / グループリーダー / グループ代表団員)

8月1日(金)

歓迎式・JJSAレクチャー

レクリエーション交流 (会場：日本大学文理学部キャンパス、運営：日本大学文理学部学生)

JJSA-団長団ミーティング

獨協ドイツフェス散策

スポーツ交流 (会場：獨協大学体育館、運営：埼玉県・千葉県スポーツ少年団リーダー会)

8月3日(日)

都内自由研修

通訳ミーティング

第1受入県-通訳ミーティング

歓迎夕食会

グループ別ミーティング (ドイツ団 / 第1受入県担当者 / 通訳)

JJSA-団長団ミーティング

8月4日(月)

各グループ地方分散



歓迎式 (パナント交換)



日本大学学生による送迎



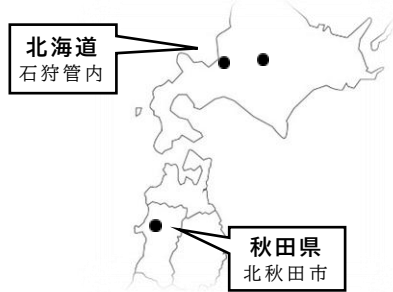
レクリエーション交流 (日本大学学生による運営)

8月2日(土)



スポーツ交流 (10人11脚)

団 長 団



日 程

8月 4日(月) 北海道(石狩管内:ホテルグレイスリー 札幌)

北海道石狩管内へ移動/歓迎パーティー

※副団長は、団員1名の帰国対応のあと合流

8月 5日(火) 同上

エスコンフィールド見学・アドベンチャー体験/プロ野球観戦(北海道日本ハムファイターズ vs 埼玉西武ライオンズ)

8月 6日(水) 同上

ロイズ工場見学&体験/いとうジンギスカンで昼食/ふとみ銘泉万葉の湯で温泉体験/大麻卓球JSCとスポーツ交流/夕食会

8月 7日(木) 同上

千歳神社参拝/支笏湖で昼食/カヌークルージング/さよならパーティー

8月 8日(金) 秋田県(北秋田市:縄文の湯)

秋田県北秋田市へ移動/歓迎セレモニー

8月 9日(土) 同上

秋田北鷹高等学校にて文化交流/ぶっさん館で昼食/スポーツ交流

8月10日(日) 同上

フリータイム(山本酒造見学/イオンモールでショッピング)

8月11日(月・祝) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

阿仁異人館・伝承館見学/相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



エスコンフィールド見学



カヌークルージング



秋田北鷹高等学校で文化交流(餅つき)

日程

8月4日(月) 北海道(江別市:ホテルリポーン)
江別市役所で表敬訪問／歓迎パーティー

8月5日(火) 北海道(江別市:ホテルリポーン／ホームステイ)

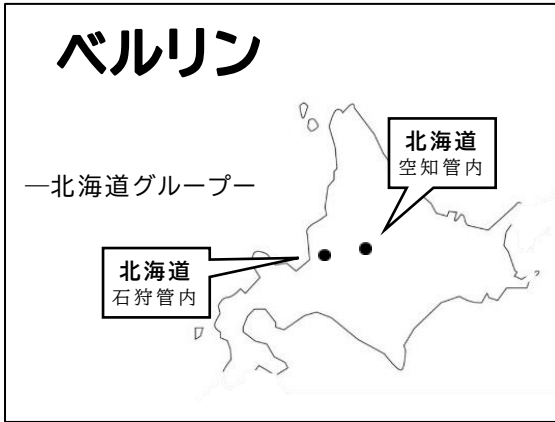
エスコンフィールドで野球観戦／ホストファミリーと合流

8月6日(水) 同上

ロイズ工場見学・体験／温泉／大麻卓球 JSC と交流

8月7日(木) 北海道(江別市:ホテルリポーン)

千歳神社参拝／支笏湖でカヌークルージング／きよならパーティー／新体操



歓迎パーティー



江別市表敬訪問



カヌークルージング



卓球少年団との交流



千歳神社

8月8日(金) 北海道(新十津川町:ピンネ荘)
少林寺拳法体験/新十津川町へ移動/新十津川町
表敬訪問/歓迎パーティー

8月9日(土) 北海道(同上)
剣道体験/流しそうめん/染物体験

8月10日(日) 北海道(深川市:ネイパル深川)
バスケットボール少年団と交流/バギー体験/花火体験

8月11日(月・祝) 北海道(同上)
野外炊飯/滝川西高校吹奏楽部とディスカッション/
さよならパーティー/箸づくり

8月12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッ
サ東京ベイ有明)
新千歳空港で見送り/相鉄グランドフレッサ東京ベイ有
明へ移動



新体操



バスケ交流



ホストファミリーと



テーマディスカッション



バギー体験



箸づくり

8月 4日(月) ドイツ団指導者1名、団員5名いずれも女性初来道、来道後の初めての食事は、新千歳空港ラーメン道場で旭川ラーメンに舌鼓。スープの味は好みに応じて注文した結果、味噌ラーメンが大人気であった。その後、江別市に移動、オリエンテーション、副市長表敬、歓迎パーティーに参加し、終了後はお疲れの様子であったが、歓迎パーティー会場が宿泊ホテルだったので、移動がなくゆっくり休憩することができたものと推察する。飛行機の時間が予定より30分ほど遅れて到着したが、帯同していた道スポ協職員との連携により歓迎の横幕を張り、円滑に出迎えることができた。その後、江別市に移動し、オリエンテーション、市長表敬、歓迎パーティーの予定されていたプログラムをほぼ時間通りに終えることができた。その陰には、現役大学4年生の通訳の方のドイツ団に対する的確な伝達力を高く評価する。

(北海道江別市：中陳)

8月 5日(火) 当日の朝ホテルに迎えに行ったときは、前日約束した通りの時間に全員ロビーに集合していたが、少しお疲れの表情がうかがえた。アドベンチャー体験では、あいにくの一時強い雨に打たれたが、さすが指導者も含めて専門種目が体操ということもあり、「つなわたり」、「空中ブランコ」も臆することなく、笑顔で体験している姿を拝見することができた。また、野球観戦では、真剣にプレーを追っていた。アドベンチャー体験では、小雨から一時強い雨脚となったが誰一人傘を差さず体験しており、2種目目の「空中ブランコ」も全員が楽しんで体験しており、やはりからだを動かすことが得意なことを認識することができた。野球観戦は、ホームステイ先のファミリーと一緒に観戦し交流を図ることができた。その後、予定では16時30分から“とんかつ”を食べる予定となっていたが、どう考えても昼食からあまり時間がたっていないことから、お持ち帰り弁当に切り替えた。(同上)

8月 6日(水) ロイズの工場見学の後、チョコレートのトッピング体験はそれぞれ創意工夫を図り、大いに楽しんでいる姿を拝見することができた。昼食は、北海道の名物であるジンギスカンを3人に1台のガスコンロでそれぞれがお好みで焼きながら食べるスタイルで、はじめは少し戸惑っていたが、全員が完食していた。その後、江別のスポーツ少年団員との卓球交流や夕食会を楽しんでいた。外気温は、北海道らしくない暑さであったが、ロイズの工場内は程よく冷房が効いており快適の中工場見学、トッピング体験をすることができた。昼食のジンギ

スカンも割り箸を器用に使い全員完食していたので、口にあったと推察する。江別市に移動しての江別少年団との卓球交流については、ミニバス・柔道少年団員のほとんどがサーブもろくにできない状況でありそれに対してドイツ団はストレスを感じた用に見受けられたので、卓球交流については大麻卓球少年団だけとの交流の方が良かったと思われる。(同上)

8月 7日(木) 千歳神社での神主からの作法等の説明に際しても、誰もが真剣に耳を傾けていた。その後、支笏湖畔に移動して昼食は自由行動としそれぞれがラーメンや、食後にソフトクリームなどを注文していた。カヌー体験のあと支笏湖湖畔を後にして恵庭市総合体育館に向かった。16時20分からのさよならパーティーは、少ない予算の中で創意工夫したことで、楽しんでもらったものと思う。その後、第二体育室に移動して行った、恵庭市の新体操の演技の披露、ドイツ団の演技の披露で一番の盛り上がりがあった。ドイツ団の話の聞くと石狩管内で一番の体験は、支笏湖でのカヌー体験だったようである。「さよならパーティー」では、新体操の小中学生も同席しての交流や、1日目から直前までの撮影したデータをピックアップしスライドショーで放映後、ドイツ団員から写真のデータをもらえないかとの依頼があり後日、対応することとした。さよならパーティーのメインとして用意した本市の女子新体操の演技披露は直前に1名足首を捻挫するアクシデントもあったが、急遽補欠の選手の代替えで対応することができた。今回のアトラクションで当日まで隠していたのは、急遽ドイツ団員による体操の演技披露であった。これは、通訳を通して打診した結果2日前に決まったことであり私としても大変感動することができた。(同上)

8月 8日(金) 少林寺拳法の基本の型を学んでいたが、最初は戸惑いながらの体験であったが、徐々に動きを理解するにつれて、積極的に指導を受けていた。休憩もほとんど取らず、ほぼ2時間身体を動かして、楽しんでいた。自分自身も、一緒に体験してみて、少林寺は奥が深いと感じた。少年団としても、ドイツ団と一緒に活動出来て、すごく良い体験が出来たと思う。

(北海道石狩市：草島)

石狩管内から受入れたが、慣れない土地での生活や時差などの影響もあったからか、少し疲れている様子であった。表敬訪問時については、終始表情も柔らかく対応していただいた。歓迎パーティー時も笑顔もあり、受け

入れ側も対応しやすかった。表敬訪問では、ドイツ団からのプレゼントをいただき感謝申し上げる。宿泊先では、歓迎パーティーを行ったが、自己紹介・ペナント交換などを行い良い雰囲気でも過ごせて緊張もほぐれた。こちらもドイツ語での自己紹介を行ったが、うまく伝わっていたかが不安であった。歓迎パーティーでは日本食を中心に味わっていただいた。箸の使い方も慣れており、少し驚いた部分もある。 (北海道新十津川町：浅野)

8月 9日(土) 受入れから日が浅かったこともあるが、若干緊張はあった。剣道少年団で行っている、町内大会を見学したが、ドイツ団の皆さんを興味深々であり、携帯等で動画や写真を撮っていた。少年団のはからいにより、剣道の防具などを着用し、試合形式で体験をした。都度、写真や動画を取りながら楽しんでいた。午後からは染物体験を実施し、ハンカチが上手く染まり、個性的なものになっていた。ハンカチ以外にも靴紐を染めていた方もいた。新十津川町のスポーツを代表する剣道を体験できたことで文化にも触れていただいたことが非常に良かった。ドイツにも剣道の文化が根づいていることを聞いて共通できた部分をあったかと思う。普段からスポーツをやっていることもあり、呑み込みも早く運動能力の高さを実感した。染物については、新十津川町に来ていただいたからには、何か残していただきたいと思い企画した。実際の体験もそこまで難しいものではなかったので、ドイツに戻ってからも使っていただけると幸いです。 (同上)

8月10日(日) バスケ少年団との交流も真剣に取り組んでおり、少年団側からも良い印象であった。言葉の壁があったが、スポーツを通じてわかりあえていた様子であった。バギー体験時も落ち着いた雰囲気でも参加していた。バスケ少年団との交流については、少年団も工夫をしており、初めからゲーム形式ではなく、レクみたいな形で組んでいただきドイツ団も良い雰囲気でも交流できた。バギー体験&焚火カフェについても、天候が不安となったが、無事に終える事ができた。普段では体験できないようなことが行えたので良かった。ネイパル深川での活動についても滞在していた高校生たちとも花火体験を行い良い思い出となった。 (同上)

8月11日(月・祝) ネイパル深川での生活だが、他の団体の方も宿泊しており不安ではあったが、挨拶なども率先して行っていた。スポーツを通して礼儀も学んで

いるからか、こちらも学ぶ機会となった。野外炊飯時は、各役割ごとに分かれそれぞれ作業を行った。皆さん料理が得意なのか、手際よく進めていた。火おこしなど慣れない作業も率先してやっており、頼もしかった。カレーライスを作ったが、米の炊飯も上手くできおかわりをするぐらい食べていた。ディスカッションについては、滞在していた滝川西高等学校の吹奏楽部のメンバー5名と行いドイツ団を中心にゲーム形式で進めており、終始楽しそうに行っていた。ディスカッション終了後、ドイツ団からのプレゼントがあり、高校生も喜んでいて。箸づくりでは、個性あふれる作品ができておりドイツに持ち帰った時もぜひ使ってほしい。さよならパーティーだが、1日目からの写真をスライドショーの形にし、振り返りを行った。所々面白い写真もあり、笑顔で振り返っていた。 (同上)

8月12日(火) 最終日ということもあり、少し疲れている様子ではあったが早め準備も行っていた。ベトナムメイクなど慣れないこともあったかと思うが積極的に取り組んでいた。最終日で移動のみの対応となったが、タイトなスケジュールであったため、ドイツ団も大変だったと感じる。退所時のベトナムメイクなども素早くこなしており、遠征などの慣れなどもあるのか対応してくれたため事務局としては助かった。全体を通して、ドイツ団の皆さんから礼儀など普段の生活を見て、見習うべき点があった。今回、剣道少年団とバスケ少年団が対応させていただいたが、各少年団の指導者の方からもドイツ団との交流がとても有意義なものだったとの声もあった。少年団の団員もなかなか体験できることではないため、この経験をもとに日々の練習にも取り組んでいくと思っている。また、ドイツ団の皆さんも楽しんでいただけたのであれば幸いです。このような体験をさせていただき本当にありがとうございました。 (同上)

日程

8月 4日(月) 岩手県(遠野市:あえりあ遠野)
新花巻駅でドイツ団と合流／遠野市役所へ表敬訪問・
歓迎レセプション／遠野市立博物館見学／カラオケ

8月 5日(火) 岩手県(遠野市:ホームステイ)
遠野ふるさと村で文化体験／遠野馬の里で引馬体験
／大慈寺で座禅体験／ホストファミリーと合流

8月 6日(水) 同上
ホストファミリーデー

8月 7日(木) 岩手県(遠野市:あえりあ遠野)
テーマディスカッション／スポーツ交流(運動会)／さよ
ならパーティー

8月 8日(金) 秋田県(北秋田市:伊勢堂岱温泉縄
文の湯)
秋田県北秋田市まで市借上げバスで移動／縄文の湯
(米代の間)で歓迎セレモニー

シュレスヴィツヒ =ホルシュタイン

—東北 I グループ—

秋田県
北秋田市

岩手県
遠野市



表敬訪問



引馬体験



テーマディスカッション



ホストファミリーデー①



ホストファミリーデー②

8月 9日(土) 秋田県(北秋田市:ホームステイ)

秋田北鷹高校で文化交流(餅つき)とテーマディスカッション/大太鼓の館の見学/鷹巣中学校でスポーツ交流(剣道)/ホストファミリーと合流

8月10日(日) 同上

ホストファミリーデー

8月11日(月・祝) 秋田県(北秋田市:伊勢堂岱温泉
縄文の湯)

阿仁伝承館・異人館の見学/森吉山登山/さよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

伊勢堂岱縄文館の見学/イオンタウン能代でショッピング/大館能代空港でお見送り/相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明



森吉山登山(山頂)



さよならパーティー(記念品贈呈)



歓迎セレモニー(北秋田市スポーツ少年団本部長挨拶)



伊勢堂岱縄文館(見学)



秋田北鷹高校(文化交流・ディスカッション・集合写真)



大館能代空港(お別れ式)



鷹巣中学校(スポーツ交流・集合写真)

8月 4日(月) 東京駅から新幹線で移動してきたドイツ団と新花巻駅で合流した。新幹線に乗るまでに通勤ラッシュに巻き込まれてしまったようで、かなり疲れた様子であった。新幹線の駅から市の借上げバスで移動した。貸し切りバスなのでドイツ団員が非常にリラックスできていた。市内のホテルに到着し、チェックイン後は各自部屋でシャワーを浴びて着替えをしてから表敬訪問に向かった。チェックインから表敬訪問まで余裕を持った日程としていたことから、シャワーの時間も確保できて良かった。表敬訪問では、市長からカップのぬいぐるみと写ルンですをプレゼントした。写ルンですは、最終日に回収し、こちらで現像する流れをとった。手軽にフィルムカメラの趣ある写真を撮ることができるだけでなく、現像したデータをスマートフォンに転送でき、ドイツ団へも容易に写真を共有できたので、非常に良い記念になったと思う。表敬訪問と博物館の見学を行った後で、ホテルで夕食を取ってもらった。ベジタリアンが多かったので、事前にホテルに情報を伝え、ベジタリアン用のメニューを用意していただいた。しかしながら、ドイツ団が全体的に小食でかなりの量の残食が出てしまった。また、チャレンジはしてみるものの口に合わない様子の食べ物も多くあり、事前にどのくらいの量を食べるのか、どのような味のを好むのかなど、アレルギー以外にも食事についての情報を出してもらえると受入側としても準備がしやすいと感じた。夕食後は、ドイツ団から遠野市に来訪する数日前にリクエストがあったことから、もともとの予定にはなかったが、カラオケに連れて行った。次の日に支障をきたさないように1時間という短時間でのカラオケにはなったが、ドイツ団は非常に楽しんでいて、22年前に遠野市で受入れを行った際も急遽カラオケに連れて行ったという話を聞いており、通常のスケジュールに組み込んでおいても良かったと思った。カラオケに連れて行った後で、コンビニによってほしいという要望があった。コンビニでは、お菓子やカップ麺、アイスやスムージーを買っていた。夕食であまり食べられなかった団員もいたことから、必要に応じてコンビニによる時間をつくるようにスケジュールを調整した。

(岩手県遠野市:朝倉海)

8月 5日(火) 遠野ふるさと村にて文化体験としてわら馬づくりとそば打ち体験を行った。わら馬づくりについては、慣れない作業であったこと、作り方を教えてくれる講師2名に対して1名の通訳であったことから、説明が上手く伝わらずに予定よりもかなり時間がかかってしまったが、団員は真剣かつ楽しそうに体験していてよかつ

た。そば打ちも講師は2名であったがドイツ団を4名・4名の2グループにわけてそれぞれに1名講師がつくようなかたちであったことから、通訳が行ったり来たりするようなかたちで予定通りの時間で体験ができた。そばをその場で茹でてもらい、自分たちが作ったそばを食べてもらったが、めんつゆが口に合わなかった様子で、つゆにつけずにそのまま食べている団員もみられ、あまり手が進んでいないようだった。わさびやそば湯もチャレンジしていたが、こちらもあまり口に合わないようだった。そばと一緒にしてもらった野菜の天ぷらとおにぎりは比較的食べていた。昼食後は、引馬体験を行った。前の文化体験が非常に押してしまったこともあり、30分遅れでのスタートとなった。体験を行ってくれている団体と連絡と取り合えるように調整していたことから、遅れたことによる影響は少なかった。引馬体験には、グループディスカッションに参加する高校生や遠野馬の里スポーツ少年団の団員にも参加いただいた。高校生がコミュニケーションを取れるか不安もあったが、スマートフォンの翻訳アプリを活用しながら、すぐにSNSを交換しあうなど、積極的な交流となり良かった。引馬も全員が楽しそうな表情で体験しており、非常に良かった。引馬が終了した後は、厩舎の見学もさせていただき、ドイツ団は馬とのふれあいを楽しんでいた。引馬が終わった後で、市内のお寺を訪問し、見学及び座禅体験を行った。「どうすれば住職になれるのか」、「住職は世襲制なのか」、「座禅は何のために行うものなのか」などの質問もあり、ドイツ団員の積極性を感じることができ良かった。お寺の見学もドイツ団からのリクエストで急遽追加したプログラムだった。遠野市では全体的に自由時間を多く設定しており、リクエストがあった場合は、自由時間を短くすることで対応できたので、時間を調整できるプログラムを準備しておくことも重要だと感じた。お寺見学を終えた後は、少し自由時間を挟んだ後で、ホストファミリーと合流し、それぞれの家庭へ移動となった。笑顔が見られ、各家庭での交流を楽しみにしている様子であった。ホームステイは、ドイツ団員7名(指導者を除く)を2名・2名・2名・1名の4家庭に送り出した。ホストファミリーフリープログラムの中で、1名となった団員が不安を感じることを少しでも減らせるように、翌日のフリープログラムを2家庭(団員3名)が合同で過ごす時間をつくってもらえるようにホストファミリーに依頼した。

(同上)

8月 6日(水) 私自身の家でも、ホストファミリーとして指導者の受入を行った。指導者と担当者が近くにい

たことで、ホームステイしている団員の情報を共有しやすく、お互いに安心してホームステイのプログラムを過ごすことができた。各家庭で様々な体験プログラムを実施していただき、事前説明でホストファミリーへもプログラムの内容を共有していたことから、重複なくプログラムを楽しんでいたようである。フリープログラムの中で多くの家庭が行って良かったと話をしていたのは、プリクラであった。引き渡しを行う際に小食であることを共有していたが、ホストファミリーからは想像以上に小食だったという話が出ていた。(同上)

8月 7日(木) 各家庭に送迎してもらい、グループディスカッションの会場に集合してもらった。グループディスカッションは、参加する高校生に対して事前学習を行い、テーマについての基礎知識や意見を持ってもらうようにしていたが、恥ずかしさもあったようで最初はなかなか意見を話せない様子で、少しずつ意見が出るような感じであった。考えや意見があっても言い出せない様子が見られたことから、意見が出しやすいような場づくりが求められると感じた。グループディスカッション終了後は、参加者同士で写真を撮り合ったり、SNSを交換するなどして盛り上がっていた。グループディスカッション終了後は、1時間半程度市内を自由に散策しながらの昼食とした。元々市内の飲食店でベジタリアンの対応できる店が少なく、対応可能な店も休みが多く不安だったが、ドイツ団からはスーパーで食べられるものを買って食べるという方法もあるから大丈夫という言葉をもらい、安心した。散策の後は、運動会として、玉入れ・輪投げ・パン食い競争・足八丁リレー(両足でピンを立てる競技)・スカットボールを体験してもらった。はじめて体験する種目がほとんどであったが、楽しんでいる様子がみられた。競技と競技の間時間で遠野一輪車クラブの一輪車とドイツ団の体操披露の時間を設けた。両団体の日頃の活動を感じることができ良い時間であった。スポーツ交流終了後は、さよならパーティーだったが、スポーツ交流の後はシャワーの時間をスケジュールとして確保しておいた。打ち合わせやシャワーなどはあらかじめスケジュールに組み込んでおくことで余裕を持ってプログラムを消化できたと思う。さよならパーティーは、表敬訪問・歓迎レセプションを短時間で行った分、大々的に行った。岩手県知事や遠野市長、遠野市スポーツ協会長などの来賓だけではなく、ホストファミリーや交流に参加した高校生等にも参加していただき、盛大に行うことができた。ピュッフェ形式での食事だったこともあり、これまでの食事の中で

一番量を食べていたように感じた。(同上)

8月 8日(金) 遠野市から第二受入地である、秋田県北秋田市へ遠野市の借上げバスで移動した。バスは終始リラックスして移動をしていた。途中のサービスエリアで食事を食べたが、フードコートで食券を買って食べるスタイルに慣れておらず、少し困惑していた様子だった。ベジタリアン対応のメニューが特段なかったことから、ライスのみを頼んで醤油をかけて食べたり、パンや冷凍のフルーツを買って食べたりしていた。地域としてベジタリアン・ヴィーガン・ハラールなどに対応している場所が少なく、受入の中での課題であった。繰り返しとなるが、団員それぞれの食に関する情報は、より詳細なものをいただければ、準備や対応がしやすくなると感じた。北秋田市に到着してから、北秋田市の職員の方に時間を頂くいただき、ドイツ団の詳細情報や受け入れを行ってみたいの所感を共有した。受入実施前からメールや電話でやり取りを行い情報を共有しあっていたこともあり、スムーズな引き渡しができたと感じている。(同上)

岩手県遠野市からバスで伊勢堂岱温泉縄文の湯まで送り届けてもらい、ドイツ団8名と合流した。皆さん長い移動で若干お疲れのようであったが、チェックイン後に自由時間であることを伝えたとこ、全員でホテル周辺を散策すると言って散歩に出かけていった。歓迎セレモニーでは、市長、県スポ少本部長、ホストファミリーをお招きし、初日から参加者同士で有意義な交流がはかられた。心配していたベジタリアン向けの料理についても、事前にホテル側に伝えていたことから、しっかりと配慮がされており、とても好評であった。

(秋田県北秋田市：西村大智)

8月 9日(土) 朝食後、市のバスで秋田北鷹高校に移動し、文化交流(餅つき)とテーマディスカッションを実施。実際に杵で餅つき体験をした後に、あんこに絡めいちごを乗せた餅を食べてもらった。好き嫌いはあるようだが、おかわりする団員もいた。テーマディスカッションでは、大人は席を外し、特定のテーマについて、日独の青少年同士で国境を超えた忌憚のない意見交換ができたようで満足していた。大太鼓の館では、地域住民のガイドのもと、文化と歴史を学び、実際に世界一の大太鼓を叩く体験もできた。鷹巣中学校でのスポーツ交流では、剣道を通して武道を体験。スポーツとはいえ、竹刀で人を叩くという行為に抵抗がある団員もいたが、武道への理解を深め、大きな声を出して真剣に剣道に取り組んで

いた。夕方にホストファミリーと合流し、それぞれの家庭へ移動した。
(同上)

8月10日(日) 終日ホストファミリーデーのため、緊急時等の対応に備え、市内で待機。ケガや事故等もなく、楽しいホストファミリーデーが実施されたことに、とても安心した。
(同上)

8月11日(月・祝) 朝にホストファミリーに送り届けていただき、バスで阿仁伝承館・異人館に移動し、施設見学。地域住民のガイドのもと、当市の文化や歴史を学び、当市の発展にドイツの方々が関わってくれたことを伝えることができた。その後は森吉山に移動し、少し早めの昼食。途中の駅舎までゴンドラに乗り、そこから2時間ちょっと歩き無事に参加者全員で山頂(標高1,454m)に到着することができた。登山中は要所で休憩を挟んだが、中には疲れた表情を見せる団員もいたが、山頂につくと表情が一気に明るくなり、皆で記念撮影をした。天候も曇り時々雨で、心配をしていたが、結果的に平年に比べてかなり涼しく、虫も少なかったことから、よかったと思う。予定よりも1時間ほど遅い下山となり、さよならパーティーまでの時間がギリギリになってしまったことから、もう少し時間配分を考えた方がよかった。さよならパーティーでは、ドイツ団、ホストファミリー、それぞれ代表者のスピーチもあり、双方に感謝を伝えあい、とても感動するパーティーとなった。パーティー終了後に皆で記念撮影をした。
(同上)

8月12日(火) 朝食後、市のバスで伊勢堂岱縄文館に移動し、施設見学。数日前に遺跡近辺で熊の目撃情報があり、ストーンサークルが閉鎖となってしまうことから、予定の時間を半分ほど繰り上げた。事前にドイツ団リーダーと通訳との打合せで、ショッピングをしたいと要望があったことから、施設見学終了後に市のバスで能代市のイオンに行き、1時間ほどショッピングの時間を設けた。100円ショップがとても大人気で、皆さん楽しそうにショッピングしていた。ショッピング終了後に、バスで大館能代空港に向かい、会議室を借りてお別れ式を行った。駆けつけてくれるホストファミリーもいた。全員無事に保安検査を通過したことを見届け、解散となった。
(同上)

バイエルン

—東北Ⅱグループ—

福島県
白河市

宮城県
栗原市

日 程

8月 4日(月) 宮城県(栗原市:ホテルエポカ)
くりこま高原駅でドイツ団と合流/ホテルエポカで歓迎パーティー

8月 5日(火) 同上
細倉メインパーク見学/ハイルザームでプール/栗駒山麓ビジターセンター見学

8月 6日(水) 同上
書道体験/築館高校とテーマディスカッション/浴衣試着体験/しわひめ SC スポーツ少年団と卓球交流

8月 7日(木) 同上
南三陸東日本大震災語り部ツアー/気仙沼東日本大震災伝承館見学/お別れパーティー



歓迎パーティー



卓球交流



テーマディスカッション



浴衣試着体験



書道体験



お別れパーティー

8月 8日(金) 福島県(棚倉町:ルネサンス棚倉)

伊豆沼ハス祭り見学/福島県へ移動/白河市役所へ市長表敬訪問/ルネサンス棚倉でウェルカムパーティー

8月 9日(土) 福島県(棚倉町/県南地区ホームステイ※白河市・矢吹町・西郷村・埴町)

サイクリングでルネサンス棚倉から棚倉町健康福祉センターへ/松門会棚倉空手道スポ少とスポーツ交流(空手)/流しそうめん・スイカ割り/ホストファミリーと合流/ホームステイ

8月10日(日) 福島県(県南地区/西郷村:那須甲子青少年自然の家)

ホストファミリー交流 day/白ニビクトリースポ少とスポーツ交流(ドッジボール)と夕食会

8月11日(月・祝) 福島県(西郷村:東京第一ホテル新白河)

白水沢衣文滝沢歩き(男子)・青少年自然の家付近トレッキング(女子)/白河市在住、出身高校生・大学生とのディスカッション/フェアウェルパーティー~

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



空手体験



ドッジボール交流



ウェルカムパーティー集合写真



テーマディスカッション



市長表敬訪問



フェアウェルパーティー

8月 4日(月) 東京駅から新幹線で移動してきたドイツ団を、くりこま高原駅で迎え入れた。スポーツ少年団の小学生とともに横断幕を掲げて歓迎した。その後、徒歩で宿泊先のホテルに移動し宿泊の手続きをした。ドイツ団から洗濯がしたいとの要望があり、近くの商業施設のコインランドリーで洗濯をした。午後6時から、来賓を迎えて歓迎パーティーを開催した。食事は着席ビュッフェスタイルとし品数を多めに準備をした。ドイツ団は、箸を使うのが上手で、箸を使って食事をとることがあると言っていた。日本の刺身は新鮮で美味しいと言っていた。アトラクションでは伝統芸能である「鶏舞」を見て、文化や服装に興味を示していた。(無記名)

8月 5日(火) ホテルでの朝食後、マイクロバスで市内の細倉メインパークを見学した。砂金取りや屋外スライダーを体験し、夢中になっていた。その後、温泉宿泊施設のハイルザームに向かい、昼食後には全員プールに入り楽しんでいた。その後、栗駒山麓ジオパークセンターを見学しホテルに戻った。夕食は回転寿司店に行き、好きな物をタブレットで注文し、皆おなか一杯食べて大興奮であった。(同上)

8月 6日(水) 午前：書道体験では、先生のほか同年代の高校生2名が、筆で字を書く練習をドイツ団について指導した。最後に好きな文字を白紙のうちわに筆で書きお土産にしてもらっていた。テーマディスカッションは、最初は、ドイツの暮らしについてゲーム形式で行い、その後少人数のグループに分かれ、日本とドイツの文化の違いや日常生活の様子などスマホ翻訳アプリを使い交流した。昼食はお弁当を高校生達と一緒に食べた。午後：浴衣試着体験では、女子は、髪を結ってもらい頭に髪飾りをつけ喜んでた。男子も、初めて浴衣を着せてもらい喜んでた。着物を着た際の歩き方や座り方を体験しながら教わり、楽しそうだった。その後は、しわひめSCスポーツ少年団との卓球交流。ドイツ団もまづまづラリーが続くようだった。最初は、小学生と組んでのダブルス、その後、中学生と、高校生とダブルスを組んで試合をし、ともに楽しんでいた。夕食はホテルのレストランでの注文。ドイツ団から和牛ステーキが食べたいとのリクエストがあり、別途仕入れて厨房にお願ひし提供した。とてもおいしかったとご満悦だった。(同上)

8月 7日(木) ホテルで朝食後、約束のフロント集合時間より10分早く集合していた。毎朝慌てることなく、

余裕を持って約束の時間前に集合する行動には、とても感心した。マイクロバスで南三陸町、気仙沼市の東日本大震災の爪痕の見学に行った。東日本大震災は、知っていたが津波の高さにびっくりした様子だった。気仙沼の震災遺構の3階に流れ着いた車を見てびっくりしていた。最後に見たビデオでは、皆涙を流していた。帰りのバスの中ではおやつを食べたり終始リラックスしていた。お別れパーティーは、バトントワリングのダンスからスタート。バトンのスポ少と卓球のスポ少の小学生も一緒。食事をしながらおしゃべりしたり途中でドイツ団員が、地域の芸能のポプスレーダンスを披露し、日本の団員も一緒にダンスを踊り盛り上がっていた。(同上)

8月 8日(金) 伊豆沼のハス祭りで遊覧船に乗り、間近でハスをみることができ、ドイツ団は、しきりに写真を撮っていた。ホテルへ戻る帰り道に民家の軒先でフルーツ狩りをしていたので、桃とブルーベリー狩りを楽しんだ。ホテルに戻ると福島への受け入れ先がバスで到着していた。無事に福島県に引き渡しができた。(同上)

宮城県で5日間交流を行い終えたドイツ団と栗原市のホテルエポカにて合流した。団員は、疲れた様子もなくバスに乗車して途中の国見SAではラーメン・カレーライスなどを平らげ、一路白河に向かった。また、移動中にサイクリングやプールでの身体活動の要望があり、当初の予定にはなかったが、ルネサンス棚倉に協力を頂きレンタル自転車の手配翌日の移動時間を活用したサイクリングの実施の段取りを行った。鈴木和夫白河市長の表敬訪問では、市長から本市の企業とドイツとのご縁や福島県南地区の歴史や魅力について通訳を介して歓談や、記念品贈呈を行われた。その後、棚倉町のルネサンス棚倉へ移動しウェルカムパーティーを開催した。式では宮川棚倉町長が歓迎の挨拶、高橋福島県スポーツ少年団本部長が主催者挨拶、シュテフェン・ハーゼ団長の挨拶を行い、関係者やホストファミリーなど約40名の参加を得て賑やかに行われた。特に、ドイツ団の団員を受け入れるホストファミリーの皆さんには、顔合わせとともに早くも打ち解けるために同一の座席を設け、スマートフォンの翻訳アプリを用いたり英語でコミュニケーションをとったりと翌日の民泊につながる雰囲気ができ有意義な時間となった。また、食事の面では、ドイツ団員の命あるものを避けるというベジタリアンの団員については、キノコのピザとシーザーサラダを受入れ家庭に用意して頂いた。(福島県白河市：松崎真由美)

8月9日(土) サイクリングではレンタル自転車8台と引率用自転車2台・ヘルメットを準備し、8時30分に宿舎を出発し棚倉町の城跡を経由して空手体験会場の保健福祉センターへ向かった。途中の城跡内の砂利敷で落車し、右手を打撲しまうアクシデントがあった。(病院で診察し骨折はなく大事には至らなかった)原因はドイツと日本の自転車のプレーキレバーの前後輪の逆でプレーキ機能が異なっていたようだ。教訓としてはコースの下見や自転車の機能説明や確認、道路走行での注意点などを入念に行う事など安全面での大切さを痛感した。空手体験では、地元空手道場の佐藤耕師範をはじめ子供達(21名)と交流により空手の形や動きなど習得するなど貴重な経験を行った。次に、山本不動尊キャンプ場では、流しそうめんやスイカ割りで日本の夏の風物詩を楽しんだ。また本殿を参拝した際には、偶然にも棚倉町で取材中の地方テレビ局にインタビューを受け、その様子が8月14日に放映され、県内の方々にもPRが出来良かった。昼食後に宿舎に戻り、出迎いの7つのホストファミリーの方々へ合流しそれぞれの家庭に民泊し楽しく思い出に残る一夜を過ごしたと思います。ホストファミリーの方々には事前説明会では、なるべく日本の普段の生活を味わわせてくださいと伝えており、一緒に買い物に行ったり、食事の準備をしたりするなど日常の家庭生活が経験できたようだ。また、前日のウェルカムパーティーで事前交流により気心のしれた雰囲気がつくれスムーズに交流 day につなげられた良かった。(同上)

8月10日(日) 那須甲子青少年自然の家にて16時00分の集合時には、各家庭ホストファミリー交流 day の報告を頂き、あいにくの雨で思ったような活動ができなかった話もあったが、白河ラーメンを食べたり、ダルマづくりを楽しんだり、大内宿や会津の方へ観光に出かけたりと福島県の魅力や風土に触れて頂いたようだった。そして、皆さんの口から『あつという間に時間がすぎってしまった。もう一日あると良かった』という嬉しい感想も頂いた。当初の実行委員会の会議では民泊の受け入れファミリーを集めるのは今のご時世的に難しいものがあると思われたが予想に反して、国際的な交流や同世代の団員の受入れに理解、関心のある12組の公募(地域の中学校・高校を通して募集)があり7組を選ばせていただくことになった。改めてご協力を頂いたさホストファミリーには、家族的な深く思い出に残る交流が出来大変良かった。次回の受入れ民泊では2泊3日でも大丈夫だと

思った。次に17時00分からは、自然の家体育館で白二ピクトリースポ少とのドッジボール交流を行った。小学生とラジオ体操を行い、リレー競技とドッジボールでのガチ勝負!!最初は小学生相手に手を抜いていたドイツ団も、実力のある小学生相手にいつしか本気になっていた。思っきり身体を動かして一緒に汗を流したり、記念品の交換、夕食会するなど短い時間でしたが子供達にも貴重な経験となり充実した時間となった。(同上)

8月11日(月・祝) 前日から雨と当日雨予報を考慮し危険をとまなうために源流沢歩きの雄滝・雌滝コース断念を断念した。団長に依頼し再度ミーティングをお願いし雨の中でも沢歩きをしたいとの強い要望を受け甲子の白水沢の衣紋滝(えもんのたき)コースを変えて行った。実施に当たっては前日にガイド予定の高田さんが下見を行い、滑りそうなどころにはロープを設置するなど安全を確認していた。コース変更により歩く距離は短くなったが、雨の影響で足元がどろどろで悪戦苦闘しながら目的に到達する事が出来、阿武隈川源流の大自然や滝を堪能することができたと思う。団員の女子の3名は、右手の怪我の影響もあり、沢歩きには参加せず自然の家周辺で一緒にトレッキングを行いました。仲間を思う気持ちと、支え合う行動に強い絆を垣間見ることが出来ました。男女ともに、活動後に近くの露天風呂のある温泉(五峰荘)につかり疲れを取っていたようで、特に男性団員は長湯で風情ある温泉の習慣を楽しんでいたようだ。その後、那須甲子青少年自然の家で昼食のお弁当を食べてディスカッションまで少しのんびりとした時間を過ごすことができた。飲み物に関しては、全体的にスポーツドリンクかミネラルウォーターを好み、麦茶は口に合わないらしく人気がなかった。14時00分からのディスカッションでは、白河市内の高校生、白河出身の大学生9名が参加した。当初は沢歩きからディスカッションの予定では、地元高校の運動部に予定しておりましたが、夏休み突発的な行事や活動で都合がつかないなど、メンバーを揃えることに労力を要した。ディスカッションでは、ドイツ団同行の通訳の他にもう1名通訳をお願いしたが、参加者はスマホの翻訳アプリを巧みに使い、通訳なしでコミュニケーションによりお互いの理解や意見交換を拝聴し次世代の素晴らしいリーダー育成につながる貴重な時間であったと思う。また、ディスカッションのテーマ以外に好きな音楽や日常生活などの話題で大変盛り上がり、充実した時間となった。フェアウェルパーティーは、新白河駅前の東京第一ホテルに会場を移し18

時00分から開催された。主催者の福島県スポーツ本部長、井上白河副市長からの挨拶、菅原日独スポーツ少年団実行委員会会長の記念品贈呈、シュテフェン・ハーゼ団長からのお礼の言葉があり、ホストファミリー、関係者など約40名で開催した。催物では奥州白河太鼓の総勢25名が力強い演奏を披露し、ドイツ団員にも太鼓のたたき方をレクチャーしてもらいながら一緒に和太鼓を堪能した。また、ドイツの団員からも民族衣装をまとい、ポップスレーをイメージダンスの披露があり、会場が一体となった踊りや催しで大いに盛り上がった。また、参加者のホストファミリーの中学生・高校生の同士の交流を深まり、とても良い雰囲気でお別れパーティーとなった。(同上)

8月12日(火) 最終日は、東京第一ホテルを8時30分に出発し、白河市の南湖公園へ向かった。あいにくの雨であったが、南湖神社を参拝し、公園内にある翠楽園の松楽亭での呈茶体験をした。抹茶と和菓子は団員のお口に合ったようで美味しいとの感想を含め日本古来の伝統文化を体験できました。次に、団員希望のベイシアモールでのショッピングの時間を設け、土産の買い物とともにステーキ店で早めの昼食をとりました。新幹線乗車予定では13時50分のため、ネットで事前にメニューを調べてスムーズ入店し肉料理を美味しく召し上がって食事を済ませることができた。食事後はバスで第一ホテルに移動し、荷物を受け取り隣接の新白河駅へ向かう。大きな荷物があるためにスタッフがホームまで運び、他の乗客にも配慮し2つに分かれた新幹線に乗車した。また、ホストファミリーの皆さんもホームまで見送りに来て頂き、最後の別れを惜しんだ。5日間を通して、天候や団員の要望を取り入れることで急な予定変更があったが、県南地域のスポーツ少年団や高校生、ホストファミリーの皆さんとの交流活動、身体活動が十分に行なうことができ、団員の皆さんが楽しく過ごせたことが何よりでした。また、ドイツ団のリーダーと通訳、団員とのコミュニケーションが図られていて、時間に遅れることなく集合しスムーズにプログラムに入ることができた点が素晴らしかった。

(同上)



テーマディスカッション



鹿沼の清流大芦川で川遊び



日本花火体験

日程

8月4日(月) 栃木県(鹿沼市:古峯神社宿坊)

季節料理せせらぎで BBQ・ディスカッション

8月5日(火) 同上

鹿沼組子体験・彫刻屋台見学／日光東照宮・輪王寺見学

8月6日(水) 栃木県(小山市:小山パレスホテル)

大谷地区散策／大谷資料館見学／小山市へ移動／小山パレスホテルでドイツ団と合流／教育長表敬訪問／小山第一小学校で空手道交流

8月7日(木) 同上

小山城南中で剣道体験／小山城南中で書道体験／小山城南中で昼食会／栃木県立県南体育館で柔道の合同稽古／ホテルで夕食／ドン・キホーテで買い物



剣道体験で市内の中学生と稽古を实践



柔道での試合終了後の記念撮影



中学生の指導のもと漢字で自分の名前を書く練習中

8月8日(金) 山梨県(南アルプス市:随縁カントリークラブ)

南アルプス市へバスで移動／歓迎レセプション／スポーツ少年団との交流会

8月9日(土) 同上

身延柔道スポーツ少年団・身延中学校柔道部と交流／入浴と昼食／身延山観光

8月10日(日) 同上

青洲高校部活動体験(なぎなた、合唱)／青洲高校生とテーマディスカッション

8月11日(月・祝) 同上

塩の華／つくたべかん／かじかの湯／フォレストモール／道の駅ふじかわ

8月12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

お別れ会／レストランにて昼食／甲府駅お見送り／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



スポ少交流(柔道)



青洲高校交流(なぎなた部)



歓迎レセプション



ディスカッション



スポ少交流(少林寺拳法)



お別れ会

8月 4日(月) 東武新鹿沼駅でドイツ団と合流した。日本の団員を受け入れた経験のあるドイツ団員が来日していたため、再会を喜び合う様子が伺えた。季節料理せせらぎへ移動し、セレモニー、BBQ、ディスカッションを行った。団員同士は自動翻訳機能を活用し、コミュニケーションをよくとれていた。ドイツと比べ、日本の高い気温・湿度のなかでも体調を崩すことなく元気に過ごしていた。(栃木県鹿沼市:事務局 池田天海)

8月 5日(火) 屋台のまち中央公園に移動し、鹿沼組子体験を行った。日本団とドイツ団混合のグループを作り、協力して組み上げていた。彫刻屋台も興味深そうに見学していた。昼食は日本のハンバーガー(モスバーガー)を食べていた。もう少し食事は多いほうが良いかもしれない。日光に移動し、東照宮・輪王寺を見学した。日光の世界遺産を目の当たりにし、楽しそうに過ごしていた。(同上)

8月 6日(水) 鹿沼との交流最終日、大谷地区を見学。大きな平和観音に驚いていた。大谷資料館も見学したが、事前の説明が不十分だったため、ここはどういった場所なのかよくわからないまま見学することになってしまった。外気との気温差が大きかったが、体調を崩すことなく過ごすことができた。(同上)

ホテル到着後は、通訳の方に協力していただき、チェックイン作業や今後の流れを行うことができた。教育長への表敬訪問は事前にあいさつ文をお渡しさせていただいた為、スムーズに進行した。空手道の体験は、小学生を中心に参加者が集まり、演武を見たり実際に形を行ったり、子供たちとミニゲームなどを行って汗を流した。前日まであまり体を動かしてこなかったドイツ団は笑顔で子供たちと交流していた。活動中の通訳に関して、武道特有の専門用語が多数あるため大変な思いをかけてしまった。歓迎パーティーでは、空手道交流会に参加した小学生とドイツ団で夕食を共にしたが、言葉の壁は小学生には大きく、あまり交流できていないように感じた。

(栃木県小山市:事務局 新村文崇)

8月 7日(木) 朝食後、バスで小山城南中学校に移動し剣道体験・書道体験を剣道部と一緒にに行った。剣道体験では、普段見ることが出来ない日本剣道形の演武を部員と一緒に見学した。その後、実際に日本剣道形で使用した模造刀に触れ、写真撮影をしていた。空手道や剣道の形は日本独特のもので、ドイツ団員は緊

張って見学し日本武道の神髄を見て大変感動していたようだ。そして中学生の部活動で行っている練習を中学生が指導者となりドイツ団と交流を深めた。続く書道体験でも中学生が指導者となりドイツ団の名前を漢字にしたものを練習し本番の短冊用紙に書くまで試行錯誤しながらドイツ団に教えていた。途中、教員や保護者の助けはあったが、不慣れな英語で果敢に交流をしていた。昼食前には、日本の祭りの出店で見かける駄菓子の掴み取りを全員で行い盛り上がりを見せた。つかんだ駄菓子はドイツ団も食べていた。昼食では、すしを提供したが、ドイツ団は喜んで食べていた。心残りなのは、高温予報だったため、握りずしではなく、昔ながらの助六となってしまう。午後は、日本柔道の稽古を体験してもらおうべく、小学生から全国で活躍する高校生まで総勢 100 名と合同稽古を行った。合同稽古の最後には高校生との団体戦も急遽実施し大盛り上がりを見せた。合同稽古終了後には、小山市と下野市出身のオリンピックメダリストのサイン色紙をドイツ団へサプライズプレゼントとして送った。夕食後の買い物では、各々が店内を回り買物を楽しんでいた。(同上)

8月 8日(金) この日は、第2受入地の山梨県へドイツ団を送り届けるだけのプログラムだったが、時間的に高速道路が渋滞及び故障車、事故車による大渋滞に巻き込まれてしまい予定時間を1時間以上超えての到着になってしまった。立ち寄るサービスエリアでもドイツ団には疲労が見えていた。(同上)

15:00より歓迎レセプションということで、打合せのうえ準備、集合しておりましたが、直前になり、到着が15:30になると報告を受けましたが、結果到着が16:30過ぎとなり、スケジュールが大幅に変更となりました。ドイツの皆様には水着を持参していただき、水泳スポーツ少年団との交流会を予定しておりましたがプールに入ることができず申し訳なく思いました。しかし、歓迎レセプションの際には、太鼓のお囃子で盛り上げていただき、集まった少年団の子供たちとじゃんけん大会を行ない楽しい時間が過ごせたのではないかと思います。引き続き少林寺拳法スポーツ少年団との交流会を行いました。当初通訳の方がお見えにならず、ほとんど通訳のないままの交流会となってしまいましたが、無事終了することができました。その後ドイツの方々と当協会管理施設内の和室にて、夕食を済ませ宿泊先の南部町へと無事に送り出すことができました。到着時間の連絡も含め、頂いた情報も乏しく、歓迎レセプションの際にドイツ団よりプレ

ゼント交換があるなどドイツ側の意向をいただいております、当日お昼ごろベジタリアンの方がいらっしやるとお伺いし、急遽夕食の変更をするなど対応に苦慮いたしました。また、我々の作成したスケジュールや次第も把握していただいていたか不安な部分も多々ありましたので、今回の受け入れの際については、事前にもう少し細かな相互の情報共有、提供をいただければよいかと思いました。また、通訳の方につきましては、関係者の方とはお話をよくされておりましたが、我々とドイツ団の方々との通訳をしていただけると助かる場面が多々ありましたのでご報告いたします。 (山梨県南アルプス市：鶴田)

8月9日(土) 9時から身延柔道スポーツ少年団・身延中学校柔道部と柔道交流を行う予定だったが宿泊施設からの出発が遅れ、9時30分頃からスタートした。スポーツ少年団とドイツ団との体格差がかなりあるため、中学生や指導者との合同稽古がメインとなった。また、ドイツ団は今回の柔道交流を通じて技術の向上を目的としていたが栃木県で行った高校生との交流で手を抜かれてしまい、自身に足りない技術や弱みを見つけることができなかったが乱取りや試合で指導していただいていたと言っていた。最後にスポーツ少年団とドイツ団でプレゼント交換を行い、記念写真を撮影した。柔道交流終了後、「ヘルシースパサンロードしもべの湯」にて入浴と昼食。低温の温泉があり、いつもより長く入ってしまったと言っていた。昼食では土日メニューのすべてに肉が入っていたため、ベジタリアンの対応が難しく、調理段階である程度の肉は取り除いてもらうことができたが食べられる量が少なくなってしまった。観光地までの移動中にコンビニで購入してもらう対応となった。身延山の観光は午前中の疲れや入浴後、昼食後だったということもあり眠そうな様子。身延山久遠寺内の案内を久遠寺の担当者をお願いしたが宗教の用語などの通訳が難しいと感じた。事前に通訳の方と打ち合わせする機会を設けてほしかった。案内終了後は見慣れない建物や景色だったため、各々写真を撮影して楽しんでた。記念写真を撮影し、身延町の銘菓「みのぶまんじゅう」をお土産として渡した。次回以降の課題点：5日間全体の日程がわかる担当者が随行していないため、通訳の方が日程を聞かれてもわからず、ドイツ団を不安にさせてしまったこと。今回はグループでの受け入れとなっており、県スポーツ協会が全体の統括で市町村がそのサポートをする形になると伺っていたため、県スポーツ協会担当者が5日間随行することが望ましい。体格差があり、本

来の趣旨であるスポーツ少年団との柔道交流が難しいこと。通訳の方と事前打ち合わせを行いたかった。

(山梨県身延町：佐野元哉)

8月10日(日) 午前9時30分：ドイツ団が到着した。通訳とあいさつを交わし、早速、なぎなた部の活動体験を行う武道場へ移動する。当日、急遽高校の校長先生の挨拶があったが、通訳は何も通訳せず、ドイツ団は何を言っているかわからず……。通訳は流れが大事だからとあまり通訳しない。なぎなたの体験は実技中心に行い、ドイツ団も楽しそうに思えた。10時40分：続いて合唱部の体験。青洲高校生が30分くらい合唱を披露してくれた。ドイツ団も頑張っているように思えたが少し退屈なように思えた。やはり、部活動体験ではドイツ団になるべくやってもらう時間を増やすことが大事だと感じた。その中で通訳も一緒に座っていたがドイツ団がまじめに聞こうとしているのに、携帯をいじったり、あくびをしたり、失礼な態度であった。11時45分：その後は昼食。近くのスーパーに買い物にいき、スーパーのイートインスペースで食事。ドイツ団の感想はわからないが、特に問題はなかった。13時：午後はテーマディスカッション。通訳は受入団体からもプレゼンがあると思っていたが、県スポ協より特に用意しなくても大丈夫ということだったので用意しておらず、そこで行き違いがあった。テーマディスカッション自体は2時間を用意したが、ドイツ団のみの発表だったので30～40分程度で終わり、その後は自由に会話をしてもらった。時間に思ったより余裕があり、ドイツ団は最後の方は疲れていた。ただ、当日の進行がドイツ団主体と聞いていたのでこちらもどこまで介入してよいか分からず、その辺が事前に決まっていればやりやすかった。またテーマディスカッションのみなら1時間もあれば事足りたと思う。しかしながらテーマディスカッション後の雑談が青洲高校生にはとても有益な時間のように思えた。15時：バスが到着し帰宅。総じてドイツ団は想像以上にしっかりしており、礼儀正しく、フレンドリーで受け入れる側としても良かった。ただ通訳があまり機能しておらず、意思疎通がそこまで円滑に取れなかった。単純に通訳自体の能力も低く、通訳をなるべくしないようにしていたように思えた。ただ、通訳も指示を受けてあえて通訳していないようにしていたとしたら、もっと積極的に通訳必要な指示を出してほしい。県スポーツ協会から2名、町から2名の対応であった。先方と事前になんの連絡も取っていない町のみでの対応であれば問題も起きていたように思い、県スポーツ協会から2名対応に参加いただき

本当に良かった。また、飲み物も多めに用意していただきそこも本当に良かった。

(山梨県市川三郷町：渡邊大都)

8月11日(月・祝) ドイツ団が予定時間から30分ほど遅れてきた。塩の華で初めて顔を合わせたのが、4日目ということもあり疲れた表情をしていた。塩の華では舟運の歴史について団長が積極的に学ぼうとしていた。子供たちには難しかったかなと感じた。つくたべかんに移動しみみ作り体験をした。個人差はあるが楽しんでいたように感じた。うどんが好きということもあり、みみも完食していた。その後かじかの湯に移動し、温泉に入ってもらった。みみを食べている際に、ドラックストアに行きたいと要望があり連れて行った。最後に道の駅に寄って富士川町のプログラムは終了した。ドイツ団や通訳と話をしているなかで、「富士山・富士急ハイランドにいきたかった」や「プールにはいりたかった」など多くの要望や、前日にベジタリアンの方がいるといった連絡など、あらかじめもっとドイツ団側との打ち合わせが必要だと感じた。その点を次回の課題となるといえる。(山梨県富士川町：志村)

8月12日(火) 予定では9時45分からお別れ会を開始する予定だったが、宿泊施設から富士山が見える施設へ移動してから、会場である道の駅とよみに向かったため到着が遅れ、11時前から開始となる。中央市生涯教育課長が挨拶に対して耳を傾け、通訳が翻訳すると反応を見せていた。ドイツ人団長からも挨拶があり、団員からも挨拶があった。グループ A のスタッフから記念品のプレゼントを渡すと、ドイツ団からも様々な記念品をこちらへ渡してくれた。お別れの会が終了すると隣の食堂で昼食を取った。事前にメニューを渡して置き注文した、とんかつや野菜のかき揚げ丼の注文があった。食事の際には皆コーラを注文して飲んでいて、甲府駅周辺を少し見たいという話があったため、道の駅とよみでの買い物の時間は縮小しバスへ移動した。バスの中では団員たちで談笑している様子であった。甲府駅についた後は時間があまりなかったため買い物は行わず、駅の中で待機し時間が近づくとホームへ入場して行った。お別れの会には県の担当者、各市町の担当者や来賓の方などが参加してくださり良い会であったと思います。一人一人がしっかりと話を聴いており、ドイツ団からのプレゼントもありドイツ団の皆さんの誠意を感じました。これからもスポ少の活動を頑張ってください。

(山梨県中央市：深沢)

メクレンブルク ＝フォアポンメルン

ー関東Ⅱグループ



日 程

8月 4日(月) 埼玉県(埼玉県本部:ホームステイ)
上尾駅よりスポーツ総合センターにてドイツ団と合流／日本団スタッフによる歓迎レセプション／埼玉県スポーツ協会代表理事副会長表敬訪問／ホストファミリーとの対面式／スポーツ総合センター食堂にてwelcomeパーティー／ホストファミリー宅へ

8月 5日(火) 同上
所沢北高等学校にて(弓道部の生徒さんとの)スポーツ体験／川越で着付け体験を行いホストファミリーと川越散策／ホストファミリー宅へ

8月 6日(水) 同上
ホストファミリーとのファミリーDAY

8月 7日(木) 同上
岩槻市森田にて木目込み人形の文化体験／開智高校・岩槻高校の生徒さんとスポーツ活動(ポッチャ)／引き続き開智高校・岩槻高校の生徒さんとディスカッション／さいたま市(Café lounge 大宮)にてきよならパーティー／ホストファミリー宅へ



歓迎レセプション



弓道体験



川越散策



ファミリーDAY



ディスカッション

8月 8日(金) 茨城県(茨城県:ホテルレイクビュー
水戸)

スポーツ総合センター集合／ホテルレイクビュー水戸へ
移動／茨城県スポーツ協会専務理事表敬訪問／茨城
県近代美術館鑑賞／茨城県近代美術館内レストランに
てWelcomeパーティー

8月 9日(土) 茨城県(茨城県:ホームステイ)

常磐大学にてスポーツ交流(卓球・剣道)／常磐大学
生とイオンモール散策／ホストファミリーと合流

8月10日(日) 同上

ホストファミリーデー

8月11日(月・祝) 同上

水戸桜ノ牧高校にてテーマディスカッション／文化体験
(書道・茶道)／蔭山利兵衛商店にて水府提灯体験／
さよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッ
サ東京ベイ有明)

水戸駅散策／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



スポーツ交流(卓球)



テーマディスカッション



Welcomeパーティー



提灯作り



スポーツ交流(剣道)



文化体験

8月 4日(月) 東京から埼玉県への移動は電車であったが予定よりとても早く上尾駅に到着し、急遽ドイツ団は自由行動とし、その中で昼食を取っていただいた。暑さもあり、施設へ到着時は疲れた様子が少し見受けられたが余裕を持ったスケジュールであった為、予定どおり歓迎レセプションを行った。ドイツ団、日本団のスタッフともにこの事業に対してとても楽しみにしているということが挨拶で通訳を返してですが、伝わったのではないのでしょうか。また、その後表敬訪問を行い写真撮影や相撲場などの日本ならではの施設の見学を行った。屋内施設で全て回ることができたので天気にも左右されず良かったのではないかと感じた。ホストファミリーとの対面式ではドイツ団もとても楽しみにしていた様でホストファミリーが見えると飛び跳ねている様子もみられた。Welcomeパーティーでは、ホストファミリーがドイツ団の名前が描かれている旗を振って待っていた。各家庭に分かれてそれぞれ交流を深めた。また、食事はその後各ご家庭でも食べることができるよう軽食程度で準備を行った。当日ドイツ団に誕生日の方がいらっしまったのでみなさんでお祝いを行った。次の日の確認を全体でし、各ホストファミリー宅へ帰宅した。(埼玉県:米谷紗り翔)

8月 5日(火) 各自ホストファミリー宅からの送迎でスポーツ総合センターへ集合し、スタッフの運転で所沢北高等学校の弓道部による弓道体験を行った。ドイツ団も生徒さんと英語を使ってそれぞれが対話をしていて、弓道について質問をしたり、日常的な会話も聞かえてきました。とても暑かったこともあり、500mlのペットボトルのミネラルウォーターと緑茶を冷やし1人2本ずつぐらいを用意していた。その後、蕎麦屋にて昼食をとった。アレルギー対応やそばが苦手な方もいるかもしれないとことで、天井も合わせて用意を行った。午後は、川越へ車にて移動し、浴衣の着付け体験を行い川越市内をホストファミリーと一緒に自由行動を行った。とても暑かったので早めに脱ぎたい方にも対応した。ドイツ団の方はとてもうれしそうであったので体験して良かったのではと思います。その後は、そのままホストファミリー宅へ帰宅した。(同上)

8月 6日(水) 各ご家庭でホストファミリーと1日過ごした。※平日であったので事前にホストファミリーと一緒に過ごせない場合のプログラムも考えておいた。

(同上)

8月 7日(木) 各自ホストファミリー宅からの送迎でスポーツ総合センターへ集合し、スタッフの運転でさいたま市岩槻区にて文化体験として木目込み体験を行った。天候が悪く、少し予定時刻より早く着いてしまったこともあり先に人形博物館へ行き見学を行った。その後、体験会場へ行き木目込み体験を行った。細かい作業ではあったが、お店の方と通訳の方を通じて全員が自分自身の作品を完成することができた。昼食をアレルギー対応もしてくださる中華屋さんで取り、スポーツ総合センターへ戻り、開智高等学校・岩槻高等学校の生徒さんたちとポッチャのスポーツ体験、ディスカッションを行った。そこからスタッフの運転で大宮のカフェを貸し切りできよならパーティーを行った。参加者は本部長を始め埼玉県の正副本部長・ホストファミリーにご参加いただきドイツ団の発表やスライドショーなどでその場を皆さんで楽しんだ。食事は、バイキング形式で行った。その後、それぞれホストファミリーと帰宅した。(同上)

8月 8日(金) 他の日より少しゆっくりの集合で、スポーツ総合センターにホストファミリーと一緒にきていただきホストファミリーとの集合写真やお別れの挨拶などをし、ドイツ団は次の茨城県へ行く為こちらで用意をしたマイクロバスに乗り、茨城県水戸市の会場まで向かった。途中のサービスエリアにて昼食・休憩をとりながら水戸市までお送りした。(同上)

埼玉県からバスを利用し移動してきたドイツ団9名とホテルレイクビュー水戸にて合流する。時差ボケはないが、地方プログラム後半ということもあり、若干疲れている様子が窺えた。疲労も考慮し、表敬訪問の時間を遅くし、1時間ほどホテルの各部屋で休憩の時間を取れるようスケジュールを組んでいた為、問題なく進めることが出来た。15時よりホテルにて表敬訪問を行った。表敬訪問の際には事業概要説明及び茨城県とドイツ団双方の挨拶、写真撮影を行った。通訳を通さずに自己紹介している団員もいたことで、これからの事業を楽しみにしている様子が伝わってきた。表敬訪問後は茨城県近代美術館へ移動し、美術館見学を行った。時間に余裕があったため、徒歩で移動を検討していたが、大雨の影響もあり、タクシーで移動を行った。美術館では自分のペースで作品を見ている団員が多かったが、早めに見終わってしまい休憩スペースで談笑している時間も多かった。美術館見学後は美術館に併設されているレストランにてWelcomeパーティーを行った。明日からお世話になるホストファミリーのご家庭をゲストとして招いた。事前に

ベジタリアンが 2 人いることが分かっていたため、レストランと打ち合わせを行い、ベジタリアン用のメニューを準備した。通訳が一人しかおらず、心配していたが、英語が話せる家庭も多かったため楽しんでおり安心した。しかし、団員の1人がホストファミリーを変更してほしいと泣き出してしまふ事があった。こちらが想定していた事前情報と違う情報共有が成されていたことや、事前のホストファミリーの情報と齟齬があった等様々な要因から起こってしまったが、別のホストファミリーの方が2人受入可能とのことであり、その場で受入先の変更を行うことが出来た。アクシデントが発生しても柔軟に対応することが出来たが、このような事態になることのないようホストファミリーを選定する必要性を改めて感じた。Welcomeパーティー終了後、ホテルへ戻り解散。

(茨城県：藤沼優人)

8月 9日(土) ホテルにて朝食後、スーツケース等大きな荷物を置くためにスポーツ協会事務局へ移動。移動はバンを使用。荷物を置いた後、スポーツ交流を行うために常磐大学へ移動。スポーツ交流は2時間制で行い、最初の1時間で卓球、その後剣道を行った。水分は水1本、スポーツドリンク1本を準備。若干疲れた表情をしていたものの同世代とスポーツ交流を行ったことで、終始和やかな雰囲気でプログラムを終えることが出来た。シャワーに関しては、個数が少ないため全員浴びると時間がかかってしまう事から、制汗シートを1人1個配布し、使ってもらった。昼食はスポーツ交流を行った学生と一緒に事務局が用意した弁当を食べた。好き嫌いが多いのか食材を残している団員が多かった。午後は常磐大学生とグループを組みイオンモール散策を行った。移動はバンを2台使用。移動と各種プログラムを行ったことから疲労等を考慮し、長めに自由時間取り、各団員自由な時間を取ってもらった。各団員ペアになった常磐大生と積極的にコミュニケーションを取り、楽しそうに時間を過ごしていた印象を受けた。イオンモール散策終了後、事務局へ移動。ホストファミリーと合流し、それぞれの家庭へ移動した。翌日がホストファミリーデーということもあり、若干緊張している団員も見受けられた。(同上)

8月10日(日) ホストファミリーデー。特段トラブルはなかった。先に埼玉県にてホストファミリーデーを行っていたため、内容が同じになってしまうことのないよう、埼玉県で行った先を確認し、ホストファミリーに共有した。当日は県内で開催した花火大会に行った世帯が多かっ

た。(同上)

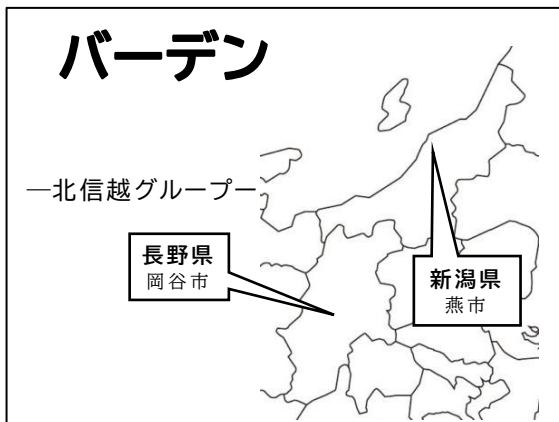
8月11日(月・祝) 各自ホストファミリー宅からの送迎により、水戸桜ノ牧高校へ集合。高校生とテーマディスカッション及び文化体験を実施した。テーマディスカッションに関しては、4人1組に分かれてディスカッションを行った。ドイツ団がプレゼンテーションを行い、その内容について話し合うという流れだったが、高校側にはプレゼン等の準備してもらっていなかったため、事務局側がドイツ団との情報共有をもっと綿密に行うと共に、どのような内容でディスカッションを行うかテーマを絞ってなければ、テーマの範囲が大きいこともあり、あらかじめ準備している団員と同等の熱量でディスカッションを行うことは難しいのではないかと感じた。ディスカッション終了後、文化体験(茶道・書道)を行った。時間の都合上、どちらか片方の体験のみ行うことになっていたが、埼玉県のホストファミリーデーにて茶道を行った団員がいたことでスムーズにグループ分けを行えた。書道体験については、書道部の部員に協力していただき、自分で書いた文字を使用して扇子を作成した。茶道体験に関しては、茶道部の部員に協力していただき、一連の流れを実演した後、実施に自分でお茶を点てる体験を行った。どちらの体験も、日本ならではの体験であり、同世代の学生と交流しながら行えたことで楽しそうに体験をしていた。文化体験終了後、一緒に活動してもらった水戸桜ノ牧高校の生徒と一緒に昼食。2日目と同じく弁当であったが、こちらに関しても多少残している印象を受けた。昼食の際にアイスやお菓子を差し入れしたところ、とても喜んでいた。昼食後、レンタカーを使用し、蔭山利兵衛商店にて水府提灯作り体験を行った。水府提灯の歴史や提灯に書かれた「魁」の意味について興味を持っていた。提灯を作成する中で、色の塗り方や配色で自分オリジナルの提灯が作れたことにとっても喜んでいて。提灯作り体験終了後、レンタカーにてさよならパーティー会場へ移動。ホストファミリーや今回の事業の中で参加いただいた、高校生、大学生を招待し、BBQを行った。ドイツ団がパフォーマンスを用意しており、とても盛り上がった。さよならパーティー終了後、各ホストファミリーと一緒に帰宅。全日程の中で一番プログラムが多い日程であったが、トラブルなく終了することが出来た。(同上)

8月12日(火) 最終日はホストファミリーの送迎により、レイクビュー水戸へ集合。個々でお別れのホストファミリーも多く、寂しそうな表情の団員も見受けられた。荷

物をホテルへ置いた後、駅周辺を自由行動とした。団員だけでの自由行動の時間は初めてであり、見回りの際に見かけたときにはとても楽しそうに行動をしていた。団行動の際に昼食を取ってもらうよう事前に説明していたため、昼食後ホテルへ集合し、電車にて東京都へ向かった。最後の見送りの際には、見送りを希望したホストファミリーにも参加していただいた。別れを惜んでいる団員や連絡先を交換したと話している団員が多く、短い時間ではあったが、有意義な交流の時間になったことを改めて感じた。東京に到着後、団員の1人がパスポートを紛失したとの連絡があった。最後にお世話になった方に渡したプレゼントの中に誤って入れてしまったとのこと。幸いすぐ見つかり、対応することが出来た。出発前日に慌てて準備をしてしまったことが原因と考えられるが、万が一のことを考えてこちらでもアナウンスや注意喚起を行う必要がある。5日間を通し、様々なトラブルも起きたが誰もケガすることなく、最終的に楽しかったと行って帰ってもらえたことが安心した。また、受入をする際に協力いただいたホストファミリーの方々からも感謝の言葉と共に子どもが少年団に興味を持ったと言っていただけで、貴重な体験を提供できたのではないかと思う。今回初めて県事務局で受入を行ったが、市町村で行う際の様々な課題を把握でき、事務局としても有意義な事業となった。

(同上)

バーデン



日程

8月 4日(月) 長野県(岡谷市:ホームステイ)

JR岡谷駅で合流／岡谷市役所で受入式／ドイツ団長、通訳、スタッフ食事会

8月 5日(火) 長野県(同上)

霧ヶ峰散策／諏訪大社下社秋宮参拝／温泉入浴／岡谷高校生とディスカッション

8月 6日(水) 長野県(岡谷市:ホテルクラウンヒルズ)

松本城見学／松本市内自由観光／剣道・弓道体験／歓迎夕食会

8月 7日(木) 長野県(同上)

岡谷蚕糸博物館見学・クラフト製作／セイコーエプソン見学／オルゴール博物館見学・オルゴール製作／ショッピングモールで自由行動



対面式



霧ヶ峰ハイキング



ディスカッション



松本城見学



弓道体験

8月 8日(金) 新潟県(燕市:トライアングル)

見送り会／新潟県へバスで移動／宮町まちトープで歓迎レセプション／ウェルカムイベント(小さな夏祭り)／ウェルカムパーティー

8月 9日(土) 新潟県(燕市:ホームステイ)

藤次郎ナイフファクトリー見学／フルーツナイフ製作／釜めし松月で昼食／燕市体育センターで日本のスポーツ(少林寺拳法)体験／燕市中央公民館で中等教育在校生徒とディスカッション／ホームステイ

8月10日(日) 同上

ビジョンよしだでサップ体験／バーチャルエアロ&ヨガ体験／ホームステイ

8月11日(月・祝) 新潟県(燕市:トライアングル)

MGNETでスプーン製作体験／酒麴亭潤(ご当地ラーメン)で昼食／燕市産業資料館でタンブラー製作／県央イオンでショッピング／トライアングルでさよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

福厳寺で座禅体験／燕市中央公民館で金箔貼り&キーホルダー製作／燕三条駅でお見送り／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



少林寺拳法体験



バーチャルヨガ体験



さよならパーティー



歓迎レセプション



ウェルカムイベント



燕三条駅見送り

8月 4日(月) 午後東京から移動してきたドイツ団を岡谷駅で出迎えた。相当量の荷物があるとのことで、荷物運搬用車両を用意したので、ドイツメンバーに窮屈な思いをさせずに受入式会場である岡谷市役所まで移動できた点は良かった。市役所では、正面玄関で市職員の出迎えが約100人あり、ドイツメンバーは若干緊張気味で市庁舎に入り、9階ロビーの食事会場に移動して食事と休憩を1時間程度とったのち、岡谷市教育長、岡谷市スポーツ協会長出席で受入式に臨み、終了後は市職員と市庁舎内の見学を行った。彼らの目には日本の役所の雰囲気を感じたのか知りたいところであったが聞けずじまいで残念である。夕方にホストファミリーとの対面式を開催した。こちらの雰囲気に慣れたのかホストファミリーとはにこやかに対面でき各家庭へと向かった。今回の交流は、団長と通訳は初日からホテルでの滞在をお願いして、スポーツ少年団役員、岡谷市スポーツ振興課職員(今回の各イベント帯同者)との食事会を開催した。4日間の日程等の打合せを交えながら親睦を深めることができ、これが後々の行動に効果として表れ、スムーズな運営と良好なコミュニケーションに繋がったのではないかと思う。(長野県岡谷市:宇治 浩)

8月 5日(火) ホストファミリーに送られて指定場所に集合し、バスに乗って霧ヶ峰高原に移動。ドイツの子同士、日本の子同士でかたまることなく、ホストファミリーの子供たちと一緒に霧ヶ峰高原をハイキングしていたことから、前夜のステイ先で仲良く過ごせたことがうかがえた。ハイキング等で汗をかいたので、ディスカッションの前に温泉に入って汗を流してもらった。ステイ先で日本の入浴スタイルを聞いていたのか、湯船に入る前に体を洗っていたので、付添者としては他のお客様の手前、一安心であった。諏訪大社参拝は日本の神社を初めて見てどう感じたのかは不明である。のちの歓迎会で感想を言ってもらったときには諏訪大社の感想がなかったので、あまり印象には残っていなかったかもしれないが、日本の文化歴史には触れて貰えたと思う。ディスカッションでは、大人は自己紹介と双方のプレゼンテーションまで、意見交換時は退室していたため内容はわからないが、後で通訳の岩間さんや岡谷の子供に様子を聞いたところ、活発な意見交換ができたとのこと。その意見交換はかなり盛り上がり過ぎていたようで予定時間をオーバーしそうで、運営側としてはハラハラドキドキであったが、最終的にはほぼ予定していた時間にはステイ先に送り出せたので良かった。(同上)

8月 6日(水) 午前は、松本城見学と松本市内散策の為、バスで松本まで移動。松本城では英語ボランティアガイドをお願いして説明をしてもらったので、興味深く説明を聞いていた。天守閣の見学は人気のスポットということもあり、他のお客様が大勢いたため、集団が分散してしまい、それぞれの様子がわからないが、歴史に興味がある子供たちは展示物をじっくり見ていたので天守閣見学を入れてよかった。松本市内散策は、ツアーの様に全員で歩くもの彼らは望んでいないと思い、自由行動にした。結果的には、仲良くなった日本の子供たちと一緒に行動ができて、無事に集合場所に戻ってきてくれた。午後は、日本の武道である剣道と弓道体験をさせてもらい、各競技で胴着、袴を着ての体験で、ドイツ団員たちは初めての袴着用で興味津々の様子だった。剣道は竹刀を振る動作、大きな声を出すことに多少戸惑っていた感じがあったが、紙風船をたたき割るゲームでは、思い切り竹刀を振っていたので楽しんでもらえたと思う。弓道は、実際に的に向かって矢を放させてもらい、楽しかったようで何本も放って、的に当たればみんなで盛り上がり過ぎていた。地元高校の弓道部員にもお手伝いしてもらい、短時間ながら多くの子供たちと交流できたことも良かったし、地元高校生にも良い刺激になったと思う。夜の歓迎会で感想を述べてもらったときには、数人が弓道が楽しかったと言っていた。夕方は、岡谷市長が出席した岡谷市スポーツ協会主催の歓迎会を開催した。最初は挨拶や自己紹介の場面ではお互いに緊張していたが、折り紙で兜作りを行い、市長も折り方をドイツメンバーに教えるなどして親交を深めることができた。(同上)

8月 7日(木) ものづくりが盛んな諏訪地域を知ってもらうためのツアーとして、最初に岡谷市蚕糸博物館を見学して、繭玉を使ったクラフト作りを体験した。次に、グローバル企業のセイコーエプソンの創業から今に至る「歴史館」、歴代の製品が展示してある「ものづくりミュージアム」の見学をした。この両施設の見学では、ものづくりに興味がある子は積極的に質問をしていたが、あまり興味がなさそうな子供にとっては、若干退屈そうであった。それを含めても諏訪地域の産業に触れてもらったことは良かったと思う。最後はニデックオルゴール博物館でオルゴールを作って貰い、それをドイツ団員のお土産とした。前日の歓迎会の時に、岡谷市長が映画『ゴジラ-1.0』の撮影現場が岡谷にあること、8月15日に「岡谷太鼓まつり」があることを紹介したところ、彼らに興味を持ったので、急遽、市長の計らいで、撮影現場

(岡谷市旧市役所庁舎)を見学させてもらうことになり、特別に館内に入らせて貰った。ふつうは我々岡谷市民も入れない所なので、大変貴重な機会となった。また、市役所ロビーに設置してある直径 2mの平胴大太鼓で、市長が太鼓まつりで演奏する曲を披露した。その後は、近くにあるショッピングモールで自由行動にしたが、それぞれが買い物と食事を楽しんだようで、最後の夜という名残惜しさからか子供たちから要望があり、1時間ほど交流時間を延長した。(同上)

8月 8日(金) 朝8時から見送り式を短時間で済ませて燕市へ出発する予定だったが、ホームステイファミリーの方が大勢見送り会に来てくれ、最後の最後まで別れを惜しんでいた。バスの中では、やはり4日間の疲れがでたようで、しっかり休んでいる子が大半だったが、無事に次の受入先の燕市スポーツ少年団に引き継ぐことができた。(同上)

13時30分到着予定で、歓迎レセプション会場で準備を整え待機していたところ前半受入れの岡谷市の担当者からバスの故障で到着が少々遅くなると連絡が入り一気に慌ただしくなったが無事復旧したと連絡が入り、ほっとした。予定では先にチェックインし、少し休憩をとるところ、一気に歓迎レセプション～ウェルカムイベント～ウェルカムパーティーと怒涛のように流れていった。時間に余裕がなく、詰め込み過ぎた初日だったが、書道体験、手作りトートバック製作、スイカ割り、全て楽しく参加していた印象だった。ウェルカムパーティーでは、ステイ家族ごとに座ってもらい、ゲームからの食事の流れで、打ち解けるのに時間がかかると思いきや皆さん英語でコミュニケーションをとりながら楽しそうに会話をしていた。当日誕生日を迎えたドイツ団団員に、サプライズでバースデーケーキを用意し、会場のみinnでバースデーソングを歌ってお祝いをした。とても驚き涙ぐんで喜んでもらったので、準備して本当によかった。

(新潟県燕市:星野美砂)

8月 9日(土) 9時に集合し、藤次郎ナイフギャラリーへ。お盆期間中ではあったが、ドイツに支社があったり、社長の娘さんがドイツに嫁がれたりドイツにとっても縁があることから工場とナイフ製作体験を引き受けて頂いた。ナイフ製作ではコツがいりそうなところも皆さん器用にこなしていて「日本人より上手！」と褒められていた。ギャラリーでは何名か家族にナイフのお土産を買っていて、名入れのサービスも受けていた。その後釜めしで有

名な老舗のお店へ。釜で出てくる釜めしを美味しくいただき(ソースをかけて味変していた団員もちらほら)、燕市体育センターへ。日本のスポーツ体験という事で燕少林寺拳法スポーツ少年団の指導者と団員の演武を見せてもらった後、交流しながら指導を受けた。姿勢から、蹴り、突きなどの基本動作を教えてもらい、それぞれ言葉は通じなくても動きや表情でペアを組み楽しく動いていた。サッカーをやっている団員はとても動きが良く、終了後地元新聞の取材を受けていた。ひとしきり汗をかいた後、燕市中央公民館へ移動し、燕中等教育校の生徒たちとディスカッションをした。燕中等教育校は国際交流や英語学習に力を入れている学校ではあるが、今回のテーマが非常に難しかったようで、資料作成に思った以上に時間がかかったと聞いた。ディスカッションの場では、日本チームは日本人同士で固まりがちの日本人特有の習性が目についたが、ドイツチームは最初から積極的で、堂々とした姿勢に違いがみられた。ディスカッション終了後はホストファミリーに迎えに来ていただき、それぞれの家庭で一泊目を過ごした。(同上)

8月10日(日) ホストファミリーからビジョンよしだにそれぞれ送っていただき、プールでサップ体験をした。ドイツではパドルスポーツが盛んという事で、サップ体験者が半数もいた事に驚いた。指導者の新潟県カヌー協会理事長から、ドイツに遠征経験があると挨拶がありそこから一気に和気あいあいとサップ体験、女子チーム男子チームに分かれたリレー勝負などで大いに盛り上がった。小さな勝負事にも絶対負けたくない！という気迫が伝わってきて遊びでも手を抜かない姿勢に感心した。その後バーチャルエアロ、バーチャルヨガを体験し、この日もスポーツでいい汗を流した。フリータイムでは男子はプールで遊び、女子はおしゃべりを楽しんでいた。昼食後ホストファミリーに迎えにきてもらいそれぞれ交流日を楽しんだ。感想文や写真からもどの家庭も素敵な交流が行われたことがうかがえた。(同上)

8月11日(月・祝) 各家庭でゆっくり目の朝を過ごしてもらい、9時50分にMGNETに集合。一旦そこでステイファミリーとはお別れになるのでそれぞれ「駅まで見送りにいくね！」とハグしたり握手をしたり、お別れの挨拶を交わしていた。MGNETでは一見平面にしか見えないステンレスのブロックから文字が浮き出てくる「マジックメタル」を実際に触ってもらったら一同驚きのリアクション。燕三条の金属加工の技術のレベルの高さを伝

えられて良かった。その後オリジナルスプーンの製作に入った。用途や誰が使うのか？ラフ画を描いてもらい、初日のトートバッグデザインの時にも思ったがモノづくりに関してこだわりがすごくじっくり考えて納得いくまでこだわりぬく団員が何名かいる事に感心した。スプーンも然りで、日本人には思いつかない実用的というよりも観賞用？のような个性的なスプーンが出来上がっていた。MGNET のスタッフもすごく面白い！と褒めていた。その後、ドイツのフランクフルトにも出店している「酒麵亭潤（ラーメン潤）」で昼食をとった。全国的にも有名な新潟県燕三条の「背油ラーメン」を食べてもらった。浮いている油や大量のいわのり、玉ねぎを見て「これは何！？」と実に興味深そう（不審そう？）だったがほぼ完食していた。その後は燕市産業資料館で銅製のタンブラー製作をした。金槌で叩き模様を入れていくのだが、飼っている犬の肉球を模したもの、カタカナで自分の名前を打ったもの、シンプルに規則的な模様をいれたもの、ここでまた個性が爆発しそれぞれのオリジナルタンブラーが出来上がっていた。その後館内で燕市の産業の歴史を見学し、イオンへ移動。イオンでは 1 時間半しかなかったが、それぞれお土産やコスメを買ったり、ソフトクリームを食べたりフリータイムを楽しんだ。その後宿泊先のトライアングルに戻り、地元老舗料亭のケータリング和食をみんなで食しながらさよならパーティーをした。和食のラインナップも、地元食材をふんだんに使い、さらには見た目も美しく SNS で映えるだろうというところまでこだわっていただき、カラフルな手毬寿司や金箔の乗った抹茶のデザートにみんな大喜びでスマホを向けていた。団員の 1 人は将来料理人になりたい、という夢がありオーナーシェフと連絡先を交換していて、修行にきます！と二人で盛り上がりながら、ここでも交流の場が生まれとても良かった。終盤で当団スタッフの思い付きで 1~4 日目の写真や動画を編集し会場のスクリーンに投影したところ、盛り上がりはマックスに達し、その後のプレゼント交換タイムではドイツ団よりとてもありがたい感謝の言葉をもらい感動で涙ぐむスタッフもいた。 (同上)

8月12日(火) いよいよ最終日。朝 9 時に宿泊先を迎えにあがると、ほとんどが準備が整っていて、最後に宿泊先のオーナーに色紙とプレゼントを手渡し記念撮影をした。オーナーは世界一周経験のある方で今回の受入れ事業に大いに協力をいただき、ドイツ団に業務以上に気にかけてくれ、とても仲良くなったので最後はお互いに別れがたかったようだった。朝から土砂降りの中、曹

洞宗のお寺「福巖寺」に移動し、お寺を見学し、座禅体験をした。住職さんからお寺の歴史、座禅についてお話をいただき荘厳な空気の中恐らく皆さん初めてであろう座禅にチャレンジした。質疑のコーナーでも皆さん疑問を沢山投げかけてくれて、住職さんの回答に納得した表情で頷いていた。時間が若干押していて少し焦りを感じつつ、その後燕市中央公民館に移動し、金箔貼りキーホルダー製作をした。1mm の 1 万分の 1 の厚さしかない金箔をピンセットで貼る作業がなかなか難しく、講師に貼りなおしてもらっている団員もいた。この辺で新幹線の出発時刻に間に合うのかハラハラしてきた。最後に同時にお弁当を食べる予定が終わった人から食べ始めるに変えて、なんとか時間通りに終わることが出来た。最終日はもう少し余裕があった方が良かった。相変わらず雨の降る中、燕三条駅へ移動。そこで今回ホームステイを受入れてくれた全ての家庭が見送りに来てくれていた。ホームに入る前に最後のお別れをする家族、ホームまで同行する家族、それぞれで最後は新幹線に乗る前にギリギリでその場にいる全員で記念撮影が出来た。ホームステイ受入れ家族との最後のお別れをする時間も考慮してスケジュールを組めばよかったと反省している。その後無事に東京に着いたと連絡をもらったときは安堵の気持ちと終わってしまって寂しい気持ちとが交錯して何とも言えない感情になった。今回は受入れ事務局と、ホームステイ受入れを同時に行ったので、学びがたくさんあり、とても貴重な経験が出来たと思う。振り返るとスケジュールに余裕がなかったり、準備にバタバタしたり、もっと丁寧が出来たのではないかな等、反省点は多数あるが、リアルタイムで SNS を更新し、日々の活動を配信した事も多方面に届き反響をもらえそれは良かった点であった。全て燕市内で完結できたこともとても大きな地域貢献につながったと思う。 (同上)

ヴェルテンベルク

—東海グループ—

岐阜県
美濃地区(関市・
美濃市・郡上市)

愛知県
犬山市



日程

8月4日(月) 愛知県(犬山市:ホームステイ)

犬山駅でドイツ団と合流／犬山市長へ表敬訪問／犬山市城下町散策／犬山市役所で歓迎会(ホストファミリーと顔合わせ・合流)

8月5日(火) 愛知県(犬山市:同上)

犬山焼体験／昼食(犬山田楽を提供)／ラフティング(木曽川)

8月6日(水) 愛知県(犬山市:同上)

犬山市体育館にて空手体験(犬山市スポーツ少年団空手教室)／犬山高校生とスポーツ交流(バレー・卓球・バドミントン)／昼食／ドイツ団と犬山高校生のディスカッション

8月7日(木) 愛知県(犬山市:同上)

ホストファミリーデー／さよならパーティー



ラフティング



犬山焼体験



ディスカッション(アイスブレイク)



スポーツ交流(犬山高校)



お見送り

8月 8日(金) 岐阜県(関市:ルートイン関)

犬山市するすみ公園で岐阜県関市よりのお迎えバスにてお見送り／歓迎式・対面式／フェザーミュージアム見学／三秀刃物ミュージアムで鍛冶体験

8月 9日(土) 岐阜県(関市:ホームステイ)

美濃市和紙の里で和紙すき体験／美濃市うだつの町並み散策／中部学院大学生とテーマディスカッション

8月10日(日) 同上

体育館見学／スクリーン印刷体験／郡上八幡散策／郡上踊り講習／遊童館見学／郡上八幡博覧館見学

8月11日(月・祝) 同上

武道(なぎなた)体験／ホストファミリーデー／きよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄ランドフレッサ東京ベイ有明)

お別れ式／関市アテナ工業アリーナで見送り／相鉄ランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



テーマディスカッション



郡上踊り



対面式



なぎなた



関刃物ミュージアム



お別れ式

8月 4日(月) 東京駅より新幹線で移動し、犬山駅にてドイツ団と合流。朝早くから昼にかけての移動と日本の暑さもあり、やや疲れた様子が見受けられた。昼食にはデリバリーのから揚げ定食を提供し、「今まで食べた日本食で一番おいしかったとって完食」との声もあり、完食する団員が多かった。一人ベジタリアンということで、たまごと野菜のサンドイッチを提供した。犬山市長への表敬訪問では、通訳を介して今回の交流で楽しみにしていることや、交流を深めていきたいことなどを語った。市長から犬山キャラクターのわん丸君をプレゼントされて、団員は嬉しそうな様子だった。その後、城下町を散策し、犬山城やからくり館などを見学。犬山の伝統文化に触れる機会を持った。歓迎会ではホストファミリーとの対面式を実施。団員が趣味や特技を自己紹介をした後、各ホストファミリーへ合流。言語面での不安もあったが、予想以上に打ち解け、穏やかな雰囲気となり安心した。(愛知県犬山市:平林茂子)

8月 5日(火) 犬山駅東口にて集合し、福祉バスにて「後藤陶逸陶苑」へ移動し、犬山焼を体験。湯呑に各自考えてきた絵を、赤・緑・黒・黄色の4色で絵付けを行い、個性豊かな作品が完成。ホストファミリー16人も参加し、交流が深まった。続いてろくろ体験では土から見事な茶碗や湯呑になっていく技を体験した。昼食は犬山名物の田楽を提供。食べられない団員もいたが、おおむね満足の様子だった。その後、団員及び通訳、ホストファミリー13人とラフティングを体験。ゴムボートに乗って、激流を水しぶきを浴びながら岩の間をすり抜ける爽快感を体験し、夏の犬山市を満喫した。(同上)

8月 6日(水) 午前は犬山市体育館にて犬山空手教室スポーツ少年団・犬空会の会員と空手体験。ドイツで柔道・空手を習っている団員もいて、彼らは道着を持参し、その他の団員も道着を借用して参加。正座をして挨拶をすところから始まり、「突き」・「蹴り」などを体験。空手教室の小学生の子たちとの交流はほほえましく、スポーツに国境も年齢もないと改めて実感した。その後、テーマディスカッションを行う犬山高校生とバレーボール・バドミントン・卓球などで交流した。バレーボールはチームを2つに分けて犬山高校生とドイツ団員の混合チームを作成、対戦し、声を掛け合う、お互いのプレーをカバーするなど、スポーツならではの交流ができた。ドイツ団員の一人が体調を崩し、身体に発疹がでたため、犬山中央病院へホストファミリーの方が帯同し連れて行っ

てもらった。点滴治療後、午後の行事に参加できるまで回復。ホストファミリーの献身的な対応に深く感謝している。昼食は犬山高校生と一緒にとり、その後「スポーツとSDGs」をテーマにテーマディスカッションを実施。日本の高校生にはかなり難易度の高いテーマを英語で討論することが求められた。高校生たちも事前準備を活かし自分たちの意見を英語で発表することができた。ドイツ団員の理論的な発言や英語力に感心した。ドイツ団員が用意した場を和ませるためのゲームもあり、交流がより一層深まった。楽しくディスカッションを終えることができ、安心した。(同上)

8月 7日(木) ホストファミリーデー。各家庭で自由に過ごす時間を設けた。後日、ホストファミリーの方々に話を聞くと、皆様それぞれ工夫を凝らして交流を深めてくださった様子が伝わり、ありがたく感じた。団員の間では「お土産を買う機会がなかった」という共通の声があり、ホストファミリーがイオンなどのショッピングセンターへ案内してくださった。また、8月1日～8月10日の期間中、犬山市では木曾川河川敷にて「ロングラン花火」が打ち上げられており、夏の風物詩として有名であるため、ホストファミリーに、どこかの日に花火見学に連れて行ってほしいと依頼しておいた。各家庭で浴衣や甚平を着用し、犬山の夜を楽しんでもらえたようで、嬉しく思う。夕方にはさよならパーティーを開催。市長、市役所スポーツ交流課、愛知県スポーツ少年団、前年度受入県である三重県からの来賓など、約60名が参加した。パーティーでは、ホストファミリーの皆様からそれぞれ感想を述べていただいた。ドイツ団員との交流を通じて得た思い出を語る場面では、涙するシーンもあり、感動的だった。事務局としても、交流の成果を実感し、感慨深い時間となった。その後、ドイツ団員によるダンス発表があり、参加者全員で円になってフォークダンスを踊ったり、歌を歌ったりと会場は大いに盛り上った。最後に犬山市スポーツ少年団より、犬山焼の風鈴と犬山キャラクターのわん丸君のポーチをドイツ団員へ贈呈。ドイツで良い音を奏でていてくれるのではと思っている。(日本のこと、犬山のこと、思い出してくれるかなって都合の良いことを考えております)(同上)

8月 8日(金) 午前9時30分、犬山市するすみ公園に集合。関市からのバスに乗車し岐阜県へ移動した。最後のお別れの場面では、名残惜しむ様子が多くみられ、特にホストファミリーの子どもたちが離れようとしな

い姿が印象的だった。良い思い出をたくさん残してくれて、ステキな体験を心に刻んでさよならをした。名残は尽きなかったが、次の関市での予定も控えていたため、バスに乗り込み、お別れを惜しみながら出発した。後日、ホストファミリーの皆様からいただいた感想文を読ませていただいても、今回の交流が本当に良い体験となったこと、また多くのご苦勞やお心遣いが伝わってきた。事務局としても、ホストファミリーの皆様にも心より感謝している。このような交流の機会をいただきましたことは、私たちにとって大変貴重な良い経験となった。改めて、感謝申し上げたい。(同上)

犬山市の訪問を終えたドイツ団9名と関市アテナ工業アリーナで合流した。合流後移動用に借りた29人乗りのマイクロバスにドイツ団の荷物を移動したが、一人分の荷物がこちらの想定よりずいぶん多く、乗るスペースが少なくなってしまった。その後、昼食と休憩を和室でとってもらったが、これまでの疲れはなく元気の様子。1名いたベジタリアンの団員に合わせて、全員ベジタリアン対応のお弁当にしたが、完食した。関市、美濃市、郡上市から市長、副市長を来賓に招いて歓迎式を行った。挨拶の中で、指導者が、これから行われる5日間のプログラムをとて楽しみにしていることや歓迎に対する感謝を伝えた。思いがけなく、ドイツ団から3市それぞれに贈り物をいただいたが、事前の情報になかったため、こちらからのお返しを用意できていなかった。急遽、各市でお返しを用意し、後日渡す手はずとした。歓迎式の後、次の日から泊まるホストファミリーと顔合わせを行い、簡単な交流を行った。歓迎式・対面式の後、関市にある2か所のミュージアムの見学、体験をした。1か所目の見学の後、500ml ペットボトルのミネラルウォーターを1本とハンディファンを渡した。大変暑い日だったため、喜んで受け取った。次の見学先では、伝統的な刀鍛冶の体験に興味深くやっていた。終了予定時刻より30分程早く終えて、初日の宿泊先のホテルに移動した。チェックインの時間が早まり、自由時間ができたことをとても喜び、早速カラオケに繰り出していった。少し開放感が味わえたことがよほど嬉しかったと思えた。

(岐阜県関市：野村元次)

8月9日(土) ホテルを出発し、美濃市に移動した。昨日のカラオケの疲れか眠そうな様子。美濃市では、美濃和紙の体験やうだつの上がる古い町並みの見学を行った。各施設の詳しい説明を英語でしていただいたおかげで、難しいと思われる内容もよく理解できたようだった。

和紙で作られた様々な商品を熱心に見て、たくさんの買い物をしていった。昼食では、鮎一匹まるまる使った料理が出されたが、女子の多くは苦手であった。午後から、関市の中部学院大学生とのディスカッションを行った。初めは互いに緊張している様子であったが、簡単なゲームをしたり、ディスカッションの形式を変えたり、するなどして、段々と打ち解けていった。最後は、笑顔で互いの情報を交換していた。大学側とは事前に何度も打ち合わせを行った。大学側もドイツ団とのディスカッションについて前向きにとらえていただき、ある程度英語が理解できる、やる気のある学生たちに多く参加してもらえたことで、心配していたディスカッションもよい雰囲気で行うことができた。(同上)

8月10日(日) ホストファミリー泊初日を終え、各ホストファミリーに集合場所まで送ってもらったが、どの団員も歓迎を受け、なじんだ様子で、明るい表情で集まった。昨日までの晴天とは打って変わり、あいにく朝から本降りの雨の日となった。レンタルしたマクロバスにて郡上市に移動したが、見学や体験する施設へは徒歩での移動を計画していたので、急遽計画を変更し、徒歩での散策を一部取りやめ、木造構造の特殊なつくりで建築された体育館の見学を入れた。それ以外は、何とか雨の中でも計画通り実施できた。スクリーン印刷体験、郡上踊り体験、紙細工体験と様々な体験を行ったが、いずれも興味をもって熱心に取り組んでいたが、帰りのバスの中では皆疲れて熟睡している様子だった。計画段階では、ある程度の雨は想定していたものの、ここまでの大雨がこの時期に降るとは想定外だった。1日ずれば移動もできないことになってしまっていたので、緊急時の連絡方法や対応については、可能な限り想定しておく必要を感じた。(同上)

8月11日(月・祝) 4日目は、関市の体育館に集合し、武道(なぎなた)体験を行った。前日は疲れた様子があったので、心配をしたが、皆元気を取り戻しており安心した。日本人にもなじみの少ないなぎなたの体験であったため、初めはどう動くのかきこちなさが目立ったが、何度も練習するにつれ段々と基本の動きができるようになってきた。指導を依頼したなぎなた協会に指導内容をお任せしたが、いろいろと活動を工夫していただけた。それでも、こちらが準備しておけばよかったと思う点がいくつかあったので、事前の打ち合わせで、お任せする部分とこちらが準備する部分をもう少しはっきりさせておくと

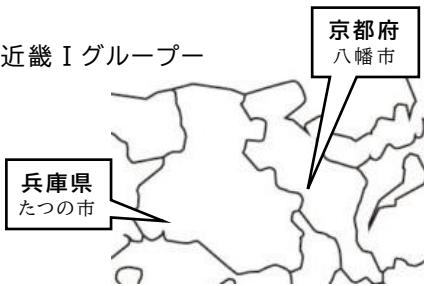
よかった。最後にドイツ団の方から、前日に覚えた郡上踊りをみんなで一緒に踊りたいというリクエストがあり、急遽全員参加して踊りを踊るといった楽しい交流があった。午後からは、ホストファミリーとの自由交流の時間を設けた。夜、再度集合し、さよならパーティーを催した。ビンゴやクイズで盛り上がり、ドイツ団はドイツのフォークダンスをホストファミリーと一緒に踊るなど、打ち解けた雰囲気での会となった。ドイツ団から事務局の一人ひとりに対して贈り物をいただくなど、気配りをしてもらえた。

(同上)

8月12日(火) 最終日は、午前に簡単なお別れ式と昼食を食べるだけで、ゆっくりとホストファミリー宅で帰りの準備をしてもらった。前日にさよならパーティーは行なったが、最終日ということでホストファミリーも一緒になってこれまでの写真をスライドにして映しながら、昼食を食べた。用意したものは、ハンバーガーショップで購入したハンバーガー類と飲料であったが、ドイツ団はおいしそうにたくさん食べてくれた。何ならこの食事がこれまでの食事の中で一番おいしそうに食べていたかもしれない。若い人たちにとっては、こちらが良かれと思って日本ならではの食材を使った料理よりも、こっちの方が口に合うのかもしれない。訪問初日もそうだったが、最終日も一人の荷物の量がとても多いので、その荷物をできるだけ持って歩かないで済むように考えなければいけないと思った。到着時のバスから降ろした荷物をどこに移動させるか、最終日に次の移動のためのバスが来るまでどこに荷物を置いておくかまで考えておく必要を感じた。また、初日の歓迎会でもそうだったが、ドイツ団は各プログラムでの交流において、日本側にちょっとした贈り物を準備してくれていた。贈り物があることを知らなかったため、お返しを準備していなくて、もらいっぱなしとなってしまい、ドイツ団にも、交流先にも申し訳なかった。(同上)

潜水 I

一近畿 I グループ



日 程

8月4日(月) 兵庫県(たつの市:東横イン)

姫路駅にてドイツ団と合流／たつの市役所にて市長表敬訪問／龍野体育館にて歓迎会

8月5日(火) 兵庫県(たつの市:ホームステイ)

セイバンミュージアム見学／たつの市スポーツ少年団及び龍野高等学校生徒とスポーツ交流(スポーツチャンバラ)／健康・教育・ジェンダーについてディスカッション

8月6日(水) 同上

皮革工場見学／革細工体験／そうめんの里にてそうめんづくり体験

8月7日(木) 兵庫県(たつの市:シーサイドみゆき)

龍野城にて甲冑・弓体験／発酵Lab Coolにて味噌玉づくり体験／昼食は龍野の特産品そうめん他／たつの市内(龍野町内)散策



歓迎式



スポーツチャンバラ



弓体験



テーマディスカッション



味噌玉づくり

8月8日(金) 京都府(八幡市: 宿舎)

姫路城を見学／新幹線にて京都駅へ移動／市民交流センターで昼食／市長へ表敬訪問(市役所)／歓迎セレモニー(文化センター)～歓迎パーティー(和楽心)

8月9日(土) 京都府(八幡市: ホームステイ)

スポーツ交流イベント(大太鼓、剣道、空手道、大なわとび(美濃山小学校体育館)／ディスカッション(市民交流センター)／ホストファミリーと対面

8月10日(日) 京都府(八幡市: 宿舎)

ホストファミリーと交流／BBQ、餅つき、たこ焼き、焼きそば等

8月11日(月・祝) 同上

座禅(単伝庵)／お茶体験／書道体験／石清水八幡宮参拝／買い物／さよならパーティー(四季彩館)

8月12日(火) 東京都(江東区: 相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

送別セレモニー(市役所)／買い物・自由行動(京都駅周辺)／京都駅で見送り



歓迎セレモニー



スポーツ交流①



スポーツ交流②



スポーツ交流③



ホームステイ



日本文化交流

8月 4日(月) 姫路駅にてドイツ団と合流し、龍野体育館まで移動。移動中は疲れていたのか、団員同士で話している様子は少ないと感じた。市長表敬訪問に際し、着替えを行い、たつの市役所にて市長表敬訪問を実施。最初は緊張した面持ちであったが、市長からのあいさつの後、たつの市スポーツ少年団本部長の「Guten Tag」とドイツ語でのあいさつにより笑顔がこぼれた。ドイツ団の抱負を聞いた際に、ホームステイを楽しみにされている方が多かった。また、市側の出席者とドイツ団の歓談の中で、ドイツの気候と日本の気候は気温も湿度も全く違い、日本の方が暑いようで、気候に慣れるまでには時間がかかりそうだと感じた。表敬訪問終了後、龍野体育館へ戻り、たつの市スポーツ少年団の歓迎会を行った。歓迎会前に少し時間があつたため、簡易なアンケートに協力してもらった(好きな食べ物・苦手な食べ物・食べてみたい食べ物・挑戦したいこと・自由記述)。歓迎会の歓談の際に、ドイツ団員の活動内容の動画を準備しておられたため、拝見した。活動内容を語っている際の団員の目はキラキラしていた。また、お菓子・飲み物等を準備しており、そのお菓子の中にどら焼きがあり、アニメ好きな団員はよく知っているアニメだと喜んでいた。歓迎会終了後、宿泊先へ移動し、宿泊先近くで夕食を共にした。好きなものを選ぶのにメニューとスマートフォン(翻訳アプリ)で必死になっていた。何が食べられるか分からないが、定食を準備した方がすぐに食べられたのではないかと感じた。そんな中でもポテトや抹茶には皆すぐに食いついた。分かりやすい食べ物やはり人気であった。注文していたものを待つのにそわそわしたり、思っていたものと少し違っていたりや少し困難な部分もあり、遠慮しがちだと感じたが、皆、お腹いっぱいになったと聞いて安心した。(兵庫県たつの市:山本)

8月 5日(火) 午前中にたつの市内にあるセイバンミュージアムへ見学に行き、実際にランドセルを作っている工場の見学をした。また、ランドセルの肩ベルトの長さを調整してもらい、その場にある、ランドセルを背負い、日本の小学生が背負っているランドセルの重さを体験した。昼食はお好み焼き。前日にとつたアンケートにて食べてみたい食べ物として、「お好み焼き」と書いていた団員がおり、大変喜んでいて、ドイツ団にも注文は聞いたが、時間がかかりそうであったこともあり、担当のおすすめ等(お好み焼きだけでなく、焼きそば、焼き飯等)を注文することで、待ち時間なく、スムーズに食べられた。昼食後、龍野体育館に集合し、スポーツチャンバラ体験。県リー

ダー育成委員会の指導者の迫力ある声に最初は少し驚いた表情をしていたが、チャンバラを持ち、体験していくうちに真剣に打ち込み、笑顔も沢山見えた。スポーツチャンバラはルールが簡単な上に短い言葉で説明でき、受ける側もその言葉を理解でき、すぐに実践、試合形式も楽しめ同じチーム内で一体感が感じられた。県リーダー会や団員(小学生)、龍野高校の生徒と一緒に体験する事が出来、スポーツを通しての交流が出来た。最後は皆、楽しかった!と、充実した表情が見えた。たつの市長や県スポーツ少年団本部長、たつの市本部長も参加して頂き大人と子供の国を超えての交流が出来た。その後、休憩後にディスカッションを行った。たつの市側の発表は3つ準備していたこともあり、先に進めた、「健康」の題から始まり、発表後は質疑応答をする形で実施した。ドイツ団の発表は「教育」であり、その後の質疑応答をせず、たつの市の発表として応え、その上で質問があつたことは応えた。質問の中で、次発表のグループの内容にさしかかつたため、発表をし、その後、質疑応答の時間を設けた。国を超えて、たくさんの意見がでて、国による違いを発見できたと感じた。3つの題を1回に盛り込むのは、お勧めしない。しかし、今回は懸念していた、内容が少しうすくなるのではないかとという部分は良い流れで各グループがバトンパスできたと感じた。終了後、すぐにホストファミリーが迎えに来てくれて、顔合わせの後、各家庭へ移動した。

(兵庫県スポーツ協会:白井/兵庫県たつの市:山本)

8月 6日(水) 朝、ホストファミリーの送迎により集合場所へ。1晩、ホストファミリーと過ごした出来事をドイツ団員同士で話しており、楽しかったのだと見てとれた。活動場所へ移動する際にも、車内で話をしている様子から、あまり疲れは出ておらず、暑さにもなれてきたように感じた。皮革工場見学では工場内を案内して下さった方に「製品になる前の本物の皮」を出していただき、その皮に触れてみる団員と少し戸惑う団員の両方いた。説明終了後、皮製品のお店にも寄り、店内をぐるりと見させていただいた後、プレゼントもいただき、とても嬉しそうに「thank you!ありがとうございます!」とお礼を言っていた。その後、予定には組んでいなかったが、ダイソーに寄りお土産を購入した。日本のお箸が気に入ったのか、家族分も購入している団員もいた。昼食後、革細工体験として、一人一つずつキーホルダーを作成した。ハート・葉っぱ・四角等様々な形の皮に好きな文字、好きな形を入れる作業で、大変夢中になり、「もっとしてもいい?」と自身

の分だけでなく、家族・友達の方も！と楽しそうに笑顔で取り組んでいた。キーホルダーだけでなく、一つの皮から動物の形を作っていくものも作成し、団員も喜んでいました。その後、そうめんの里に移動し、そうめんづくりを体験した。しかし、時期が遅いため、体験できる人数が限られてしまった。するしないに関わらず、全員が体験できる環境があった方が良く感じた。体験後、そうめんの作り方の説明を受け、実際にそうめんを試食した。美味しい！と好評であった。全体のプログラムが少し早く終わりそうであり、他に見たいもの、したいことがあれば、とリーダーに聞いたところ、ホストファミリーを待たしてしまう可能性があるため、待ち合わせ場所（龍野体育館）で待機すること。また、時間が空いた際に明日のお別れ会の確認をしたいと、リーダーと指導者から依頼があり、確認を入念に行った。（兵庫県たつの市：山本）

8月 7日(木) 龍野城にて、甲冑体験及び弓体験。とその前に、どなたかのお家へ上がる際に大事なこと、「背中を向けて玄関を上がらない」、「玄関の中央から上がらない」等、日本の礼儀作法を教わった。ドイツ団員は教わったことを真剣に聞き、すぐに取り組みながら日本の礼儀作法学んだ。甲冑体験は暑くてむれるため、希望者のみとした。触わることはできたため、それだけで十分とのこと。弓体験も予定していたが、時間が短いため、矢を射ることはできなかった。次に移動し、味噌玉づくりを体験した。前日に、そうめんづくり体験が全員出来なかったこともあり、全員出来るのか心配されていたが、全員出来ると聞き安心した様子だった。味噌玉を作る際に、丸めたり飾りつけたりし、楽しそうな様子で安心した。また、作り終えた団員は「見て！可愛くできたよ！」と皆で盛り上がっていた。身振り手振り・表情だけでも何を伝えたいのかなんとなく分かってくるのだと感じた。味噌玉づくり体験が終了し、同じ会場で講師の方が作ってくださった昼食をいただいた。昼食内容は龍野の特産品である、「そうめん」と「厚揚げと袖みそ添え」等であり、「美味しい！美味しい！」と、とても満足した様子であった。その後、龍野町内（城下町）を、観光ガイドさんの案内のもと散策した。暑い飲み物を一人2本ずつ準備していたが、バッグを持たない団員がいたため、1本で事足りたかと感じた。またバッグを持っている団員も重くならないか、心配であったが、早めに渡していたこともあり、散策前にある程度飲み終えている団員もいた。両国の気温差を考え、ガイドさんには休憩をはさみながらしていただくよう事前に伝えていたこともあり、歩くスビ

ードや施設内の見学も考えてくださっていた。また、午前中に弓体験ができなかった旨をガイドさんに伝え、午前中に行った場所へ戻り、体験させてもらった。やりたいと希望した団員のみとした。体験した団員は「目標物に向けて、矢を射るのは難しい」と話していた。希望しなかった団員は、アーチェリーには興味があるけど、弓には興味がない。とはっきり話した。団員は皆、したい！したくない！をはっきり伝えてくれるので、やりやすかった。最終プログラムはお別れ会とバーベキュー。お別れ会の際に楽しかったことを伺うと、全員が「ホストファミリーとの時間がとても充実していた」と答えた。今回は日程の都合により、ホストファミリーデーを設けることができなかったが、1日ホストファミリーデーを設けることで、楽しみが一つ増えるのかなと感じた。バーベキューの際には、同年代の団体が同様にバーベキューをしており、その子たちと仲良くなっていた団員もいた。施設にはベジタリアンが1名いる旨、事前に伝えており、その子用に準備して下さっていたが、その他のものにも挑戦する！と、お肉にもチャレンジしていた。最後に、手持ち花火を楽しみ、写真を撮って終了した。（同上）

8月 8日(金) 宿泊施設から姫路駅へ出発前に、全日程に随行した本部長と最後に話したり・写真を撮ったりされていたが、時間の都合上、名残惜しくも出発した。姫路駅到着後、ウッドデッキから見える姫路城をバックに写真撮影を行い、その後は出発時間まで自由時間とした。姫路駅を出発し、京都駅へ到着すると、京都府八幡市の少年団員による同年代ぐらいの方のお出迎えにより、すぐに打ち解けている様子で安心した。京都駅にて事務担当同士で引継ぎを行い、業務終了とした。（同上）

京都駅でドイツ団6名と合流。同行されてきた兵庫県たつの市の担当者から団員の情報を教えていただいた。全員笑顔で元気そうだった。最初の行事である市長への表敬訪問の前に市民交流センターで昼食を摂ってもらった。昼食は簡単にうどん弁当とした。前泊地ではそうめんだったそうで安心した。その後、表敬訪問のために市役所に移動し、バスを降りたらエントランスに10人以上の市役所職員の皆さんがドイツと日の丸の旗を振って出迎えてくださった。あとで聞いた話によると前泊地ではこのような盛大な出迎えではなかったので驚くとともにとても感激したとのこと。表敬訪問では市長をはじめ教育長、副市長が迎えてくださった。最初にドイツ団の自己紹介があり、団員が高校生であることを考えるととて

もしっかりとされていることに感嘆した。そして全員に記念品の贈呈が行われた。表敬訪問にはリーダーが5人参加し団員同士の交流が始まった。集合写真撮影の後、早速、笑顔でコミュニケーションをとっている様子が印象的だった。表敬訪問が終わると向かいの建物にある文化センターで日本文化で出迎える歓迎セレモニーに参加してもらった。ここではパントワリングの演技に続いて「南京玉すだれ」の披露と体験もさせていただいた。いきなりにもかかわらず「うち和太鼓」やフライパンをうまく演奏していた。最後は、デュオによる日本の歌で歓迎してくださいました。初めて見るものも有ったので大変盛り上がっていた。その後、一旦宿舎へ行き、荷物を置いて日本の家の使い方を教えてもらったり、少し休憩した後、歓迎パーティー会場へ移動した。歓迎パーティーは来賓を招かず、市スポーツ少年団本部委員やホストファミリー、リーダーだけのラフな雰囲気だった。途中でドイツ団の皆さんにプレゼントが渡された。そして、そのうちのけん玉とヨーヨーで大いに盛り上がり2時間の時間制限いっぱい楽しんでもらった。最後の方では団員の疲れが少し感じられた。特に女子団員Fはだんだんと興味を失っていくように見えた。宿舎に戻ってから選択や入浴でバタバタして眠りについていた。相当疲れていたようだ。

(京都府八幡市:松本 益千嘉)

8月9日(土) 宿舎で朝食を作って食べた。みんなで話し合ってB君が担当し、卵、ベーコン、ハム、ウィンナー、サラダを用意していた。宿舎は一軒家をお借りしたので食材はスタッフが準備し、スタッフが作ることもあったが、基本的に団員たちが作っていた。一般の宿泊施設にはない体験ができたのではないかと思う。朝食後は車でスポーツ交流会会場に向かった。会場では多くのスポーツ少年団員・リーダーと八幡高校ボランティア部のメンバーがそろって日本文化体験(大太鼓)、日本の伝統スポーツ(剣道)の体験および大なわとびで盛大な交流がはかられた。その後、場所を移動してリーダー及び高校生とディスカッションに臨んだ、むつかしいテーマであったが終始和気あいあいとしていた。この時点ではもう心が通ったような交流ができていたのが印象的だった。その後、ホストファミリーと面会しホームステイ家庭に向かった。(同上)

8月10日(日) ドイツ団員はホストファミリーのおもてなしを受け交流がはかられたようだ。その間、グループリーダーと通訳を京都観光に誘って指導者同士の交流

を図ることができた。夜には団員達も戻ってきてBBQ大会と称して手作り料理やお菓子が盛り上がっていた。しかし、ドイツ団員たちは疲れがピークに達していたようで元気がなかった。(同上)

8月11日(月・祝) ドイツ団員は日本文化体験で座禅を経過した。体の硬い団員は胡坐をかくのに苦労していた。午後は松花堂庭園にある茶室でお茶の体験をした。お茶の席では正座ができず苦労していたがお茶の味にはとても満足していたようだ。その後は石清水八幡宮の参拝と散策を計画していた。しかし、ドイツ団員のつかれている様子を見てプログラムの一部を変更することにした。石清水八幡宮の参拝は神社の特別な計らいにより本殿の中で祝詞を上げてもらい本殿内を案内してもらった。ドイツ団員は本殿の豪華なつくりに驚いていた。その後の男山散策を変更してショッピングセンターでの買い物タイムを設定した。夕方から送別会が行われ八幡市長は教育長からお別れの挨拶に対して、ドイツ団員一人一人かお礼の言葉が述べられた。涙とともにいつまでも別れを惜しむ会話が続いていた。(同上)

8月12日(火) 八幡市役所前で送別セレモニーが行われ、多くの職員や少年団関係者に見送られてバスに乗車し八幡市を後にした。京都駅でお土産などの買い物をリーダーと一緒に楽しんだ。新幹線ホームで最後の別れの場となった。まるで長年の友達同士であるかのような別れのシーンとなった。(同上)

潜水II

一近畿IIグループ



和歌山県
海草地方
(海南市・紀美野町)

大阪府
堺市

日程

8月 4日(月) 大阪府(堺市:ホームステイ)

東京都から大阪府へ移動/堺市役所21階展望ロビー
/歓迎式・ホームステイ家庭と対面式

8月 5日(火) 同上

世界遺産・仁徳天皇陵古墳拝所見学/堺市博物館見
学/堺市茶室・伸庵 茶の湯体験/日本庭園見学/
スポーツ交流・剣道

8月 6日(水) 同上

自由時間withホストファミリー/スポーツ交流・バレー
ボール

8月 7日(木) 大阪府(堺市:J-GREEN堺 ドリーム
キャンプ)

スポーツ交流・サッカー/開口神社参拝/テーマディス
カッション/さよならパーティー



歓迎式ドイツ団より記念品贈呈



剣道交流



さよならパーティダンス



日本庭園ドイツ団記念撮影



テーマディスカッション

**8月 8日(金) 和歌山県(海南市:ホテルルートイン
Grand海南駅前)**

大阪府から和歌山県へ移動／和歌山駅で担当者へ引継ぎ／海南駅でドイツ団と合流／海南市役所へ表敬訪問／紀州漆器の絵付け体験／黒江の町並みを散策

8月 9日(土) 同上

藤白神社に正式参拝／藤白神社・鈴木屋敷を散策／海南高校とテーマディスカッション／棕櫚たわしづくり体験

8月 10日(日) 同上

紀美野町スポーツ少年団とスポーツ交流(モルック・カローリング体験)／プラネタリウム鑑賞／和太鼓体験

8月11日(月・祝) 同上

紀美野町スポーツ少年団とスポーツ交流(空手体験)／高野山ガイド付きツアー／さよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

海南駅でお見送り／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



テーマディスカッション



和太鼓体験



表敬訪問



空手体験(スポ少交流)



モルック・カローリング体験(スポ少交流)



さよならパーティー

8月4日(月) 東京より移動してきたドイツ団を堺東駅で出迎えました。それぞれ大きなスーツケースを複数持って移動してきたドイツ団でしたが、疲れた様子もなく、日本語で元気に挨拶してくれました。地方プログラム初日で移動日でもあったため、ドイツ団の体調面に配慮し、歓迎式とホストファミリーとの対面式を中心とした、余裕のある時間配分を設定しました。以下の要望が受入直前の共有となったため、準備の再調整が必要となりました。(①歓迎式には団員出身地の民族衣装に着替えて出席したい(更衣室の準備が必要)②ホストファミリー受入期間中に料理を振舞いたい(材料・器具等の準備の連絡・調整)等)。更衣場所を確保し、歓迎式前の着替えの時間を15分ほど設けましたが、式の開始が遅れ、ホストファミリーの皆様をお待たせする結果になったことは少し残念に思いました。ドイツ団のお心遣いには、ホストファミリーも大変喜んでおられ、事務局としても感謝しておりますが、要望はできるだけ早めに共有いただけると、より円滑な準備・進行が可能だったと思います。また、歓迎式の会場では、卓上にドイツ国旗、日本国旗を配置し、前方にも両国旗を掲げるなど、心を込めたおもてなしができたと感じています。ホストファミリーには3泊のご協力をいただきましたが、事務局とは電話やメールで事前にやり取りはしていたものの、この日が初対面となったため、不安や不明点も多かったことと思いますので、事前に研修を兼ねた機会を設けることも今後の課題として検討すべきだと感じました。

(大阪府堺市:高橋かおり)

8月5日(火) 堺市プログラム2日目はホストファミリーも参加可能とし、3家族8名に同行いただきました。平日にも係らず多くの参加があり、ホストファミリー同士の情報交換の場としても有意義な時間となったようです。歴史・文化交流においては、市を代表する公園の一つであり、世界遺産・仁徳天皇陵古墳に隣接する大仙公園を中心に、仁徳天皇陵古墳拝所見学、堺市博物館見学、勾玉ストラップ作り、昼食、茶室でのお茶体験、茶室見学、日本庭園見学と、体験を充実させました。ドイツ団は好奇心旺盛で、各プログラムのたびに質問が出て、解説にも熱心に耳を傾け、堺の歴史や文化に興味を持っていただけたと思います。途中で土産を買いたいとのリクエストがあり、急遽その時間を設けました。ホストファミリーからは、ドイツ団と歴史・文化交流や昼食を共にすることで、受入期間中の早い段階で、より親密になれたとのご意見もいただきました。15時からスポーツ交

流として、だいしん大浜武道館に移動し、スポーツ少年団(剣道)のこどもたちと交流しました。こどもたちが素振りから防具を付けての基本実技を披露し、とても迫力がありました。剣道の指導者からの説明時に、ドイツ団みなさん正座をしていて、足をくずしていいよとの声掛けにも応じず、しばらく正座を続けていたのは、剣道への敬意を感じるとともに、印象に残りました。ドイツ団のみなさんは足の運びや素振りを教わり、防具を付けたこどもたちに向かって面!胴!籠手!と発声をして体験できたことは、いい経験になったと思います。文化交流は室内でのプログラムがあったものの、暑い中での散策もあり、最後のスポーツ交流でさぞかし疲れたことでしょう。(同上)

8月6日(水) 堺市プログラム3日目は、14時30分までそれぞれホストファミリーと過ごしていただきました。自然豊かな河川へお弁当を持って釣りに出かけた団員、通天閣から見下ろす大阪の景色やレトロな街並みで射的やスマートボールを満喫し、串カツを堪能した団員、奈良の東大寺を訪れ、鹿にエサをあげたり、大仏や国立博物館を見学した団員、大阪城を訪れた団員など。それぞれに充実した時間を過ごしていただけたと思います。ホストファミリーには感謝の気持ちでいっぱいです。ただ、もう少し時間があれば・・・、一日あれば・・・というご意見もいただき、ホストファミリーとの交流の深さを伺うことができました。この辺りは次回のプログラム作成に活かしたいと思います。それぞれの時間を満喫した後、バレーボールの団員とスポーツ交流をしました。今回来堺したドイツ団の種目はダイビングとフェンシングでしたが、バレーボールにも積極的に取り組み、小学生のバレーボールの団員との交流を楽しんでくれました。バレーボールの団員にとっても、海外の方と身近に接する機会を楽しみにしてくれていたようで、交流終了後、ドイツ団はヒーローやヒロインのようにこどもたちに取り囲まれ、あちこちで写真撮影が続きました。それぞれにとって、有意義な時間を過ごせたと感じました。(同上)

8月7日(木) 堺市プログラム4日目は、堺市のみならず大阪府、日本のサッカー拠点の一つである、J-GREEN堺でスポーツ交流を行いました。小学校5年生のサッカーの団員を相手に、フットサルコートでミニゲームを行いました。この日はプログラム期間中、唯一の雨天となりましたが、屋根付きのフットサルコートを確認していたため、予定通り交流を楽しめました。ミニゲーム以外に、ドイツ団からの提案で、ドイツでハンドボールの練

習で行っているメニューをサッカー練習に応用して行うゲームを紹介いただき、サッカーの団員は早い段階でルールを理解し、終了予定時間を忘れるほどに盛り上がりました。ドイツ団、日本のこどもたち共に、いい経験・時間になったと思います。昼食後の開口神社参拝は、受入直前に「歴史文化交流を空き時間に設けることができないか」との要望をいただいたため、移動時間・距離を考慮して追加で入れたプログラムでしたが、参拝作法を官司から教わるなど、ドイツ団にとっては貴重な体験、有意義な時間になったと思います。テーマディスカッションは、大阪府のリーダー会から参加していただきましたが、人数が揃わず、急遽、ホストファミリーの大学生2名にスケジュール調整を依頼し、参加していただきましたが、事前準備としての資料等の提供がなかったため、説明・対応に苦慮しました。参加を快諾してくれた2名も不安だったと思います。テーマディスカッションは、内容や方向性を早い段階で共有いただいたほうが事前準備も含め一層有意義なものにできたのではないかと思います。また、ディスカッションが活発に行われたのは良かったのですが、次のプログラムのさよならパーティーの開始が遅れる影響も出たため、ディスカッションの進行方法については検証の余地があるのではないかと思います。さよならパーティーは、今回、参加人数が50名を超えたため大変賑やかに実施できましたが、舞台や座席のレイアウトに苦慮しました。また、ドイツ団からもパーティー前日にダンスの要望（参加者のみなさんも一緒に踊ってほしい）を聞いたため、進行や配席を再検討する必要が生じ、少林寺拳法の演武との調整に苦慮しました。ドイツ団からの要望やお心遣いについては、すべての情報が直前に提供されたため、事前の情報共有を徹底することが今後の課題だと思います。色々な心配や不安、臨機の対応はありましたが、全てのプログラムをけがや事故等もなく実施できたことに、安堵しております。また、関わってくださったみなさんに感謝でいっぱいです。（同上）

8月8日(金) 堺市プログラム5日目は、ドイツ団が施設での朝食の時間に間に合わず、食事を取れなかったため、コンビニで購入したものを堺市役所内で召し上がっていただきました。その後は和歌山県への移動の為、午前中はほとんどが電車での移動となりました。JR和歌山駅にて和歌山県担当者へ引継ぎを行い、ドイツ団は海南駅（和歌山県海南市）に向かい、大阪府での全ての受け入れプログラムが終了しました。総括として、幹事県担当者として、東京都の迎え入れから和歌山県

への引き継ぎまで携わらせていただきましたが、ドイツ団が積極的にプログラムへ臨む姿勢を強く感じることができました。大阪府スポーツ少年団にとっても、スポーツや文化交流、ホームステイを通じて互いの文化に触れ合い、友好と親善を一層深める貴重な機会となりました。また、私自身にとっても交流を通じて多くを学び、大変意義深い経験となりました。他方で、事務的な面では、事前のドイツ団とのやり取りに苦慮しました。特にベジタリアンの団員対応に関しては、迎え入れてから事前情報と異なる要望がありました。JSPOからは「詳細を聞くとすべてに対応してもらえると期待されるため、詳細情報を求めている」との説明がありましたが、受け入れ側としては「ベジタリアン」との情報だけでも、対応を検討せざるを得ません。ドイツ団側から対応を要望する場合には、アレルギー情報と同様にdsj及びJSPOが仲介し、正確な情報提供がなされることが望ましいと考えます。またテーマディスカッションに関しては、テーマ自体が難解である上にスポーツとの関連が十分に感じられませんでした。参加者の多くが中高生年代であることを踏まえると、事前に十分な下調べを行うことは難しく、結果的に準備を府県側が担うこととなり、相当な負担となる恐れがあります。各テーマについて事前にJSPOから資料提供いただけるとより充実したディスカッションに繋がるのではないかと考えます。（大阪府：青木光）

大阪府の堺市から電車を乗り継いで移動してきたドイツ団と合流。連日の酷暑で体調を心配していたが、元気な様子。昼食は駅前のお店で、天ぷら定食を堪能。量が多かったり、苦手な料理はお互いに交換して、楽しく食事をしていた。みんな箸を上手に扱っていた。団員にベジタリアンがいたが、詳細について事前情報との齟齬があり、急遽の対応を求められた。また、事前情報についても非常に連絡が遅かったため、「正確」な情報を「迅速（遅くとも2～3週間前には）」に伝えていただくよう、改善を図っていただきたい。食事後、海南市役所に行き表敬訪問を行った。市長急用のため、代理で副市長が出席となった。特産品である、みかんジュースを振舞ったところ、ドイツのオレンジとは違い濃厚でおいしく好評であった。歓談ではドイツの飲酒年齢の話などで盛り上がった。表敬訪問を実施する場合、前後に着替えをするため、男女別に2部屋の控室を確保することが望ましい。表敬訪問後は、紀州漆器の絵付け体験を行った。細い筆を扱う作業であるが上手に描けていた。その後は、語り部さんによる黒江の町並みの散策を行った。全般的に、説明を行う際は、事務局が日本語で話し、その後通訳

さんがドイツ語で伝えるという流れであったため、同様に
対応する場合は、通常の倍程度の時間を見ておく必要
がある。夕食は日本料理を振舞った。昼食の天ぷらとは
違い、生魚に抵抗がある様子が見られた。飲料について、
特に運動をしなくても、500mlのペットボトル(水・スポ
ーツドリンク)を半日で1人あたり1本～2本消費したた
め、多めの用意が求められる。荷物について、1人あたり
2個程度のスーツケース+かばんがあったため、ドイツ団
が乗車する移動車以外に荷物車の確保等しておくこと
が望ましい。なお、こうした所感について、私の確認不足
で事前に情報提供があったのかもしれないが、認識でき
ておらず、過去の受入市町に何度か確認して仕入れた
情報や想定をもとに準備を進めたため、我々のように特
に初めての受入では手探り状態で今後も準備への苦労
が予想される。受入市町の負担軽減のため、各所感か
ら特筆すべき点(課題点や良かった点)を抜きだし、国
や県は単にメールで情報提供を行うだけでなく、重要な
内容は直接訪問し確実に伝える、また準備の進捗管理
やおもてなし内容を共に協議するなど、責任をもった対
応を行ってほしい。また、今回4日目に他町の観光
資源を活用したが、小さい市町では受入内容に限界が
ある。例えば、和歌山県といえばということで、当初は和
歌山城の見学なども検討したが、最終的にプログラムか
ら削除した。もし、ドイツ団が楽しみにしていたら可哀
そうな思いをさせたことになる。地方プログラムのうち、1日
～2日程度は都道府県としての受入日を設け、「都道
府県」としてPRしたいスポーツや観光地、イベントなど
をもてなす、またはドイツ団に受入市町以外を含めて興味
のある観光地やアクティビティなどを事前にリサーチし
ておき、対応は都道府県が行うなど、受入市町まかせに
するのではなく、地方全体で交流を盛り上げるよう改善
してはどうかと提案する。時期についても地方にもう少し
配慮をいただきたい。お盆前の3連休に対応が求められ
たが、忙しい時期に様々な人にご協力いただいた。この
時期に受入するなら、全体プログラムで対応を!

(和歌山県海南市・林 大幹)

8月 9日(土) 2日目の朝、ドイツ団とホテルで合
流。団員の1人が合流前に鼻血が出て休んでいたが、無
事にプログラムに合流できた。その他の団員はゆっくり
休めた様子。今回の受入では不要であったが、猛暑の
時期となるため、急遽の体調不良者が出た場合の対応
など、事務局において別動できる体制を考慮しておく
ことが重要となる。藤白神社に正式参拝し、その後は語り

部さんによる藤白神社と鈴木屋敷の散策を行った。日
本庭園のような場所が団員のみなさんはお気に召した
様子であった。神社の建物を借りて書道体験を行った。
恐らく初めて書いたであろう漢字にも、書き順を何度も
反復練習して熱心に書いていた。古民家カフェで昼食
をとる。前日は写真撮影や連絡調整などの事務局対応
のため、ドイツ団が食事をしている際は近くで控えてい
るのみであった(食事を別にしていた)が、プログラムの関
係から昼食の時間が取れず、どこか隙を見て食事しよう
かと思っていたところ、団員のみなさんから「一緒にど
うですか」とお誘いをいただき、初めて一緒にご飯を食
べた。これがきっかけでより親密になれた気がして、前日
も一緒に食事ができていれば良かったと後悔した思いが
ある。今後受入を対応される事務局の皆様方へ、食事を
共にすることは重要であったと伝えたい。午後からは海
南高校生徒とのテーマディスカッションを行う。お互いに
英語でのディスカッションを行い、言葉につまった場合は
英語教師にフォローをいただいた。初めての同年代との
交流であり、直接コミュニケーションをとれたこともあつ
たか、ドイツ団の喜びがひとしおであったように見受けら
れた。こちらの調整不足によるが、当初予定していた進行
とは異なる運びとなった。事務局の思惑とは異なったも
のの、熱心なディスカッションが交わされ、結果的に子
どもたちが主体となれたことはよい結果に繋がったので
はないかと思える(グダグダにならなかったのは、ドイツ団
及び海南高校に感謝の他ない)。きっちりとした進行の
もとディスカッションの管理を行うとするならば、訪問後
には細かな調整時間の確保は難しいため、事前にドイツ
団ともメール等でタイムスケジュールや進行予定など連
絡調整を綿密に行う必要があると思われる。もちろん、
そのためには国や都道府県が間に入り、ノウハウをお持ち
の方に助力をしていただきたい。ディスカッション後は、
棕櫚たわしづくり体験を行う。これまでは、やはり指導者
が中心となるが多かったが、手先が器用な団員が指
導者や他の団員の作成のフォローをする面が見られた。
夕食は回転寿司を訪問した。こちらの財布事情を察して
か、「どのくらい食べられますか」、「まだ食べられますか」
など、気を遣ってくれた。デザートを含めて満足いくまで
食べてもらった。余談になるが、お腹いっぱい食べても
らっても想定内の費用で済んだ。その後、ホテルへ
送迎し、2日目が終了となる。私はドイツ語も英語も話
すことはできないが、せめて挨拶だけでもと、例えば別
際には1日目は「また明日」、2日目は「またね」などと
ドイツ語で交流を図った。するとすぐ嬉しそうに同じ言葉

で返答してくれ、こちらまで嬉しい気持ちとなった。先程のディスカッションでも記載したが、やはり直接の交流が最も喜ばれるように感じたため、事前に少しでも英語(できればドイツ語)を学んでおければ、よりお互いを楽しめたと思う。(同上)

8月10日(日) 朝食後、車2台で紀美野町中央公民館へ移動し、紀美野町スポーツ少年団の子どもたちとモルックとカローリングで交流。ドイツ団と年齢差が少しあるが、年齢関係なくプレーできる競技だったためコミュニケーションをとり楽しんでプレーしていた。当初は屋外でパークゴルフをする予定だったが悪天候の予報もあり、前々日に屋内でできる種目に変更した。Kimino's caféで昼食後は、みさと天文台でプラネタリウム鑑賞をした。寝ころびながら今の時期に見られる星について学んでいた。和太鼓体験は、大きさの異なる3種類の太鼓から演奏したい太鼓を選び、リズムに合わせて1つのパートを完成させることを目標に真剣な表情で叩いていた。最後には指導者も一緒になり、全員で合わせて演奏し、体に響く振動と息の合った一体感を味わうことができた。(和歌山県紀美野町:吉村 晃生)

8月11日(月・祝) 朝食後、車2台で下神野小学校へ移動し、紀美野町スポーツ少年団の剛柔流空手道教室美里の子どもたちと空手体験で交流。初めての道着を着こなすのに苦戦していたが、みんな似合っていた。空手の動作はドイツ団にとって新鮮で難しい動きもあったが、指導者の方に教えてもらい力強い型ができていた。美里の湯かじか荘では大浴場で汗を流し、昼食をとった。昼食後、高野山へ移動しガイドさんと合流し奥之院までの1.6kmをゆっくり2時間かけて歩いた。日本の有名な武将の供養塔にみんな真剣な表情だった。ガイドさんに質問するなど日本文化に興味湧いていた様子だった。高野山散策後、海南市保健福祉センターへ移動しさよならパーティーへ。交流した子ども達、お世話になった大人の方と夕食を食べた。獅子舞保存会の演舞や獅子舞に噛まれながらの記念撮影に楽しそうな表情だった。4日間を振り返るスライドショーを見てたくさんの思い出を振り返っていた。最後にドイツ団からのダンスの披露があり、会場にいる事務局も含めてみんなでダンスをし盛り上がり上がっていた。(同上)

8月12日(火) ホテルをチェックアウトしてすぐ、ドイツ団は東京へ向かった。またの再会を楽しみに、しばしの

別れをする。多くの方々のご協力のもと、無事に受入を終了できた。(和歌山県海南市:林 大幹)

ザクセン/ ザクセン=アンハルト

—中国グループ—

山口県
柳井市・周防大島町
田布施町・平生町

島根県
出雲市

日 程

8月 4日(月) 山口県(柳井市:ホームステイ)

柳井駅でドイツ団と合流／柳井市役所で市長表敬訪問／柳井市役所でホストファミリー対面式

8月 5日(火) 山口県(田布施町／平生町:ホームステイ)

田布施町スポーツ少年団と交流(バレーボール)／ランチ会／テーマディスカッション／日本文化体験(盆栽鑑賞)

8月 6日(水) 山口県(柳井市／周防大島町／田布施町／平生町:ホームステイ)

ホストファミリープログラム

8月 7日(木) 山口県(周防大島町／柳井市:ホームステイ)

マリンスポーツ体験(B&G海洋センター艇庫前でマリンスポーツ体験)／さよならパーティー(周防大島文化センターでホストファミリーも交えてさよならパーティー)



柳井市対面式



テーマディスカッション



マリン 清掃活動



バレーボール交流



お別れ式

8月 8日(金) 島根県(出雲市:ホテルながた)

出雲市駅へ移動/出雲市役所へ表敬訪問/ラピタウエディングパレスで歓迎パーティー

8月 9日(土) 島根県(出雲市:ホームステイ)

大社高校の茶道部と弓道部の部活動見学・体験/日御碕・出雲大社見学/ホストファミリーと合流

8月10日(日) 島根県(同上)

ホストファミリーデー

8月11日(月・祝) 島根県(出雲市:ホテルながた)

高校陸上部とテーマディスカッション/出雲市サッカースポーツ少年団(おろち・代謝・四絡)とのスポーツ交流(サッカー)/島根ワイナリーできよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

出雲空港でお見送り/相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



出雲大社見学(神楽殿前)



ディスカッション発表(大社高校)



出雲市長表敬訪問(出雲市役所)



スポ少交流サッカー(出雲ドーム)



弓道体験(大社高校)



なぎなた体験(出雲北稜高校)

8月 4日(月) 柳井駅でドイツ団と合流しました。東京から移動して来たこともあり、少し疲れた様子でした。移動時間やプログラムの時間に余裕を持たせ、休憩時間を設けたため、スムーズに進行することができました。市長表敬訪問を行い、柳井市長、教育長と面会しました。ドイツ団から市長へプレゼントがありました。ドイツ団は、初めてのこともあり、緊張している様子でした。表敬訪問終了後、ホストファミリーとの対面式を行いました。各家庭毎に、通訳を交えて、アレルギーや懸案事項などをお互いに伝えました。待ち時間には、ホームステイ先の家族と一緒に折り鶴を作成するようにしました。コミュニケーションは、スマホ翻訳アプリや英語、身振り手振りを交えて行っており、会話に困っている様子は感じられませんでした。(山口県柳井市:好川将生)

8月 5日(火) 午前中、TAIKOスポーツセンター田布施でスポーツ少年団団員(小学生)と田布施中学校女子バレーボール部と交流を行いました。はじめに2人組でパスを行い、次にサーブの練習を行いました。その後、チームに分かれて試合を行い、最後にはドイツ団対日本団で対決をしました。とても盛り上がりました。暑さが心配でしたが、休憩を何度も取り、最後まで楽しく終えることができました。終了後、シャワーを浴びて、平生町に移動しました。

(山口県田布施町:津田 雛華)

正午すぎ、田布施町の交流事業から移動してきたドイツ団9名と合流しました。まず、平生町スポーツ少年団団員(中学2年生~大学2年生)4名と平生町内の高校に通っている学生(9名)、ドイツ団でランチ会を行い交流を深めました。特に、シニアリーダーが主導したアイスブレイクでは、5つのグループを作り、その中で紙風船を床に落とさず、どのくらいパスを続けることができるかを競い、各グループが声を掛け合い楽しそうに活動していました。続いて、「ジェンダー平等について」という内容でディスカッションを行いました。初めにドイツ団からの発表を全員で聞きました。その後、ランチ会のグループごとにディスカッションを行いました。話し合いはスマホの翻訳アプリを利用していました。ディスカッションでは、それぞれ意見を出し合うグループと、委縮して意見があまり出していないグループで分かれているように感じました。また、日本の参加者は話し合いをするということに慣れていないように見受けられました。そうした中、言葉が通じない中でも自分の意見を積極的に出せる人、また伝え

ようと努力する人が中心となり進めていたので、ディスカッションではこうした人が必要な存在だと改めて思いました。また、受入にあたっては事前学習会をしっかりと行い、色々なテーマでディスカッションできるよう準備することが大切だと思いました。その後、日本文化体験を行いました。盆栽の歴史や剪定の仕方などについて講師から説明を受けたのち、日本のストリートパフォーマンスである大道芸を鑑賞しました。大道芸の中には、ドイツ団も一緒に参加する場面もあり、とても楽しそうにしていました。全体を通じて、凄く気温が高い中で運動や会場移動をすることとなったので、水分は余分に用意しておいた方がいいと思いました。(山口県平生町:安村翔太)

8月 6日(水) 錦帯橋や宮島での観光など、各ホームステイ家庭でのプログラムを行いました。※当日中に、ホームステイ家庭から5枚程度選んだ写真をGoogle Drive(アップロード先・方法については、事前に説明済み)にアップロードするように伝えました。(さよならパーティーでのスライドショー上映のため。)ある程度構成を用意していたので、翌日のさよならパーティーまでに準備が完了しましたが、かなりタイトなスケジュールとなってしまいました。(山口県柳井市:好川将生)

8月 7日(木) ドイツ団員の方々はザクセン州に住んでおり海に面していないため、海での活動をするのが好きのではと考え、マリンスポーツ体験を実施しました。4日目の活動だったので疲れているのかと思いましたが、マリンスポーツ体験をすごく楽しみにしていたらしく元気でした。初めに海に入る前に座学を行い、次にカヌーで無人島へ出発しました。無人島到着後、昼食として冷やしうどんとおにぎりをふるまいました。無人島を出発し発着点に戻り、バナナボートの体験をしました。どの体験もとても楽しんでおり、いい思い出になったと思います。良かった点として、ザクセン州にはあまり馴染みのない海での活動を実施出来たことです。反省点としては、昼食の冷やしうどんを食べる前にうどんの説明などとしてあげるとよかったことです。(あげ玉が嫌いそうな人がいたので残していました。)(山口県周防大島町:近藤慶一)

さよならパーティーはオードブルやお寿司などを用意し、食事を楽しみながら、交流を深めました。また、ドイツ団に、寿司握りの体験をしてもらいました。握り方の説明が難しく、当初は握る力加減などに苦慮している様子でしたが、徐々に慣れてきたようで、最終的には全員上手に握ることができました。ドイツ団からのプレゼントや出し物、

スライドショーの上映などで盛り上がりました。最後に記念撮影を行いました。(山口県柳井市:好川将生)

8月8日(金) 柳井市のレトロスクエアで、お別れ式を行いました。柳井市教育長及びドイツ団代表者からのあいさつ、記念撮影を行いました。お別れ式終了後、柳井駅までホストファミリーと共にのお見送りに行きました。(同上)

山口県柳井市から電車で広島駅まで移動し、広島駅から高速バスで移動してきたドイツ団10名と出雲市駅で合流した。来日後数日経っていることもあり、皆さん時差ボケは無く、元気な様子。昼食は広島駅で購入した弁当をバスの中で食べて、出雲市駅から徒歩で10分のところにある宿泊ホテルへ移動した。天気が良く、暑い中、日も照っていたため日傘をそれぞれ渡して移動した。チェックインの後、徒歩で出雲市役所へ移動した。出雲市役所6階で市長に表敬訪問を行い、通訳を通じて、趣旨説明や市長から歓迎のあいさつ、ドイツ団員との歓談を行った。表敬訪問後はドイツ団員への取材で時間が少し遅れたが、ラビタウエディングパレスへ徒歩で移動し、歓迎パーティーを行った。歓迎パーティーには、次の日からホームステイでお世話になるホストファミリー等を招いた。通訳が1名であるため、パーティーの各テーブルでのコミュニケーションに不安があったが、顔合わせ後、お互いが積極的に話しをしておられ、打ち解けた様子で盛り上がりおり安心した。(島根県出雲市:河井健二)

8月9日(土) 朝食後、バスで大社高校へ移動し、大社高校別館の和室で茶道部員による茶道体験を行った。茶道部員は英語で作法などを説明していた。日本の抹茶とお菓子でおもてなしをしてドイツ団は和室の静かなメロディーと雰囲気を楽しんだ。その後、校舎裏手にある弓道場へ移動し、大社高校弓道部員の指導による弓道の体験をした。弓道部員は身振り手振りで一生懸命かたことの英語で、弓矢の使い方の説明をしていた。直接、矢を射ることは危険のため、できなく残念そうではあったが、ゴムを引いたりなど、弓道の動きや基礎を学んでいた。後からはドイツ団員の一人が腕にかぶれた症状があり、悪化してきたため、社用車で通訳と一緒に皮膚科の病院に連れていくことになった。診断はアレルギー症状により悪化したものであり薬が出された。特に問題無いため出雲大社吉兆館で合流した。その後も特に異常は無かった。その他のメンバーは日御碕へ行き、昼食にお食事処で日本海の幸等を食べた。曇り空の中であっ

たが、日御碕燈台へ登ったりして景観を楽しんだ。その後、出雲大社の吉兆館へ移動し、休憩でアイスを食べたあと、にぎやかな神門通りを歩いて、参道から出雲大社の境内を見て回った。境内の中を自由に歩いて拝殿・本殿・神楽殿等の参拝をしていた。「いなばの白兔」の彫刻等があり興味を持っておられた。午後からの見学でドイツ団員は少し疲れた様子であった。見学した後はバスでホテルに戻り、ホストファミリーの皆さんが迎えに来て、それぞれのご家庭をお願いした。(同上)

8月10日(日) 本日はホストファミリーと過ごす日としていたが、大雨で警報が発表されていた。それぞれのご家庭からは特に連絡はなかった。(同上)

8月11日(月・祝) 朝にドイツ団員はホストファミリーに集合場所のホテルまで送ってもらった。前日(ホストファミリーとの過ごす日)は、大雨警報が出ていたので心配していたが、ドイツの皆さんは楽しそうに戻ってきて、お別れを残念そうにしていた。大雨の中でもホストファミリーのご家族等と話をし、充実した時間を過ごされたのではないかと思った。午前中は大社高校へバスで移動し、別館の2F研修室で大社高校陸上部員とのテーマディスカッションを行った。最初にドイツ団、次に大社高校生がパワーポイントを使ってそれぞれ説明をした。その後意見交換を行われたが、なかなか大人数だと発言が無く、うまくいかなかった。休憩時間を挟み、ドイツ団から提案され少数に分かれて話し合うことにした。少数に分かれた後は携帯の翻訳アプリを使用し意思疎通をされていたようで、何とかディスカッションを行うことが出来たと思う。途中でアプリの使用を提案したため、事前に翻訳アプリを使って話をするよう連絡は必要だったと感じている。午後からは、バスで出雲ドームに行き、昼食に事前に注文していたモスバーガーを食べた後、出雲市のサッカースポーツ少年団(おろち・大社・四絡)との顔合わせ会を行った。その後、出雲ドームへ移動しサッカー交流を行った。子供たちは触れ合う機会が少ない海外の方がめずらしく、興味を持ってサッカーのゲームやPK戦等の交流をした。ドイツ団と年齢差はあるもののゲームが終わった後はハイタッチ等して、お互いを讃え合っていた。出雲ドーム内で走り回ったため、汗をかいたので近接のロッカーハウスでシャワーを使った。その後、バスで出雲北陵高校に行き、なぎなた体験を行った。島根県なぎなた連盟のみなさまの指導のもと、道着や袴を着用し、実際に打ってみたり、数人防具を付けて試合を試してみた

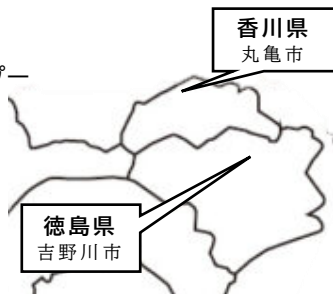
りと初めて目にする武道を学んだ。初めてのなぎなたを
振り楽しんでた。その後は、翌日には東京に戻られる
ので、バスで島根ワイナリーに移動し「さよならパーティ
ー」開催した。さよならパーティーにはホストファミリーも
参加いただき、焼き肉やカレーライスなど食べながら、会
話していた。またドイツ団のダンスの余興等があり、最後
のお別れを楽しんだ。
(同上)

8月12日(火) 最終日は雨が強い時間と重なり、
出雲市駅まで社用車で移動した。駅前のホテルでバイキ
ング朝食を食べ、出雲空港に連絡バスで移動し、帰りの
飛行機に全員無事に乗ることができた。出雲市での4日
間は天候不良であったが、日傘として用意していた傘が
雨天でも使え、役に立った。ドイツ団が来る前日まで、熱
中症の警戒がずっと発表されていたため、暑さを心配し
ていたが、天候不良のため、それほどでもなく、みなさん
元気に過ごされていたと思います。終わりに、担当者とし
て、先回りして次のプログラム準備を進めなければいけ
なかったため、ドイツ団の皆さんとの交流は僅かであり、
その様子を全て伺うことは出来なかったが、出雲市での
受入が決まってから、様々なプログラムを考えましたが、
今出来る最大限の内容は提供できたのではないかと思
います。また、初めてのホストファミリーの募集で、ご家庭
でのご負担(送迎を含めて)を考えると集まるのか不安
であったが、なんとか確保できたこと安堵している。反省
点としては、ホストファミリーのみなさんから、受入日数が
もう一日程度あっても良かったとの意見もあったため、
遠慮せずお願いすることも必要であったように思います。
最後に、多くの方にご協力いただき、無事に事業
を終了することが出来たことに感謝申し上げます。

(同上)

ニーダーザクセン

一四国グループ



弓道体験



流しそうめん



吉野川市スポーツ少年団とのスポーツ交流

日程

8月 4日(月) 徳島県(吉野川市:ホームステイ)
徳島空港へ移動/吉野川市役所で県・市合同受入式
/ホストファミリーと合流

8月 5日(火) 同上
阿波和紙伝統産業会館で和紙づくり体験/書道体験
/精進料理・剣道見学/弓道体験

8月 6日(水) 徳島県(吉野川市:セントラルホテル
鴨島)

美郷地区見学/川遊び・流しそうめん/吉野川市スポ
ーツ少年団と交流(車椅子バスケット・車椅子バレー)
/さよならパーティー

8月 7日(木) 同上
鳴門渦潮高校で茶道体験・レクリエーション交流・テー
マディスカッション/徳島県へ表敬訪問/イオンモール
徳島でショッピング/阿波踊り体験



レクリエーション交流



テーマディスカッション

8月 8日(金) 香川県(丸亀市:ホームステイ)

セントラルホテル鴨島でお見送り／香川県へ移動／歓迎レセプション／テーマディスカッション／丸亀ドイツ兵俘虜足跡見学／ホームステイ受入家庭引継ぎ式

8月 9日(土) 香川県(同上)

市内施設見学(丸亀城)／民泊プログラム

8月10日(日) 香川県(同上)

スポーツ交流(丸亀市民体育館)／民泊プログラム

8月11日(月・祝) 香川県(同上)

民泊プログラム／市内施設見学(ボートレースまるがめ)／さよならパーティー

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

丸亀市民体育館、高松空港でお見送り／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



歓迎レセプション(記念品の交換)



丸亀ドイツ兵俘虜の足跡見学(塩屋別院)



テーマディスカッション



スポーツ交流



市内施設見学(丸亀城)



さよならパーティー(太鼓体験)

8月 4日(月) 徳島空港でドイツ団8名(東京で1名離脱)および通訳の方と合流し、吉野川市役所にバスで移動した。吉野川市役所で開催した徳島県・吉野川市合同受入式では、通訳を通じて両団の自己紹介を行ったほか、徳島県とニーダーザクセン州のペナント交換や吉野川市から歓迎記念Tシャツの贈呈を行った。Tシャツは期間中を通して愛用してくれた。受入式後はホストファミリーと顔合わせを実施した。ドイツ団は英語も通じるため、想像よりも意思疎通が図れていた印象を受けた。こちらが言い淀んだ際、「Let's try!」と声掛けしてくれるなど意思疎通を図ろうとする姿勢を評価してくれた。物怖じせずにコミュニケーションを試みることが打ち解ける近道だと感じた。

(徳島県吉野川市:河内 拓馬)

8月 5日(火) この日は公用車2台で市内を移動した。体格がしっかりしていること、飲料や荷物も運搬する必要があるので余裕のある配車の必要性を実感した。一方で、やみくもに増車するとスタッフの確保や意思疎通が図れない問題が生じる難しさも感じた。全体的にどのプログラムも好評で、特に和紙づくりや書道体験(作品をうちわに貼り付けて、オリジナルのうちわを作成)など体験が形になるプログラムが好感触だった。しかし盛り上がりすぎて時間が押してしまう場面があったため、スケジュールに余裕をもたせ、柔軟に対応できる進行を心がける必要がある。帰りの車内ではぐっすり眠っており、異国での長期滞在や想像以上の暑さで疲れが溜まっている印象を受けた。帰宅後の家庭プログラム次第では、十分に休息できない事態が懸念されるため、日中の様子をホストファミリーに共有しておく必要性を感じた。

(同上)

8月 6日(水) この日も非常に暑く、暑熱対策として、川遊びスポーツ交流などのアクティビティ中は特に細かく水分補給するよう働きかけた。水を愛飲していたため、適宜塩分補給タブレットを併用すると良いかもしれない。スポーツ少年団との交流では、早々に名前で呼び合い、試合前に円陣を組むなど打ち解けるのが早かった。これは日本側にはローマ字表記、ドイツ側にはカタカナ表記の名札を準備していた部分が大きいと感じた。スポーツを楽しむ上で課題となる年齢層や身体能力の差については、障害者スポーツに注力している総合型スポーツクラブに協力を仰ぎ、車椅子を用いることで解消できた。さよならパーティーでは日本側が和太鼓、ドイツ団が

「Head Shoulders Knees & Toes」を披露し、参加者全員で楽しんだ。記念品として贈呈した市マスクットキャラクター「ヨッピーとピッピー」のぬいぐるみを気に入ってくれたようで、早速リュックサックに付けてくれていた。担当者のあだ名は「ヨッピー」になった。(同上)

8月 7日(木) この日のプログラムは県が主導で実施した。ホテルからバスで鳴門渦潮高校に移動し、茶道体験とレクリエーション交流の後、テーマディスカッションを実施した。参加者は、鳴門渦潮高校生、徳島大学生及び徳島県リーダー会のメンバーで、事前に打合せ会を実施し、ディスカッションの内容を参加者全員で確認していたため、スムーズに進行できた。また、ディスカッション前のレクリエーション交流では、徳島県リーダー会のメンバーが進行し、3つのレクリエーションを楽しんだ。さらに昼食の間のコミュニケーションで緊張もほぐれ、徳島県リーダー会の大学生と、徳島大学の学生がファシリテーターとなり、4つのグループに分かれディスカッションした。鳴門渦潮高校生の英語でのプレゼンはディスカッションする上で有意義なものとなった。鳴門渦潮高校では、部活動の見学もさせていただき、終始楽しい雰囲気だった。徳島県の表敬訪問は、徳島県とニーダーザクセン州が友好交流を締結していることもあり、今回初めて実施した。お土産の交換では、気持ちのこもった品物で、双方の気持ちが通じたものとなった。朝から立て続けのスケジュールであったため、イオンモール徳島ではフリータイムとし、それぞれが食事やショッピング等楽しんだ。吉野川市に戻り、当初プログラムにはなかったが、徳島の阿波踊りを紹介したく、阿波踊り体験を実施した。好奇心旺盛なドイツの皆さんは、踊りのあと、三味線等の鳴り物にも挑戦していた。この日も非常に暑く、暑熱対策が必須であるため、飲み物はもちろんのこと、経口補水液や塩分タブレットの準備、エアコン設置会場の手配、公共の交通機関ではなく貸切バスの手配等、充分な細やかな気配りが必要だと感じた。(徳島県:福井 恵子)

8月 8日(金) 前日のプログラムが遅くまであったが、9時半前にホテルのロビーに集合し、県の職員、吉野川市の担当者、またホストファミリーの方等に来ていただき、別れを惜しんだ。バスに乗りこみ、香川県へ移動。バスの中では、仲良く歌を歌ったりして地方プログラムを楽しんでいるように思えた。高松駅に到着し、無事に香川県へ引き継ぎ、徳島県吉野川市でのプログラムは終了した。(同上)

ドイツ団は徳島県よりバスで移動し、来県されました。団員は若干疲れた様子ではあったものの、徳島県の担当者との別れを名残惜しむように、移動の為のバスへ乗車しました。昼食では、香川県でも有名な製麺所に行き、うどんを食べました。団員たちは、上手く箸を使い、美味しく食べているようで、数名はおかわりをするなど、好評だったと思います。その後は、バスで移動し、休憩を30分程度取った後、歓迎レセプションを開催しました。歓迎レセプションについては、事前に余裕を持った時間を想定していたものの、歓迎挨拶の通訳や当日、お祝いのメッセージが届き紹介したこともあり、予定よりも時間が掛かり、次第の一部を省略する事となりました。もう少し余裕を持ったスケジュールの作成が必要だったと感じました。その後は高校生とのテーマディスカッションを開催し、地元の高校生5名と交流を図りました。事前にドイツ団の資料を確認し、高校生と打ち合わせを行い、準備をしていたテーマもありましたが、高校生がプレゼンを10分程度発表した後は、グループごとに、今の日本やドイツでの流行りや音楽の話をするなど、同世代の子どもたちが共通の話題で盛り上がっていました。テーマディスカッション終了後は、少し休憩をした後、丸亀ドイツ兵俘虜の足跡見学として、塩屋別院を訪問し丸亀市とドイツとの関係について研修を受けました。団員も非常に興味を持ち、聞いている様子が、ガイドの方へ質問をするなど学ぶ姿勢や積極性を感じることが出来ました。18時からは今回、ホームステイを受け入れていただいた家庭への引継ぎ式を行いました。それぞれ自己紹介をした後は、ファミリーごとに30分程度、各家庭が心配に思う部分や気になる事などを通訳の方が間に入り、説明を行っていただきました。受入家庭のみなさんが解散後は、通訳の方と期間中のスケジュールの確認、徳島県での団員の様子など1時間程度、打ち合わせを行い、情報共有する時間を設けました。(香川県丸亀市:中野 彰)

8月 9日(土) この日は、市本部プログラム(市内施設見学)として丸亀城を訪問しました。民泊プログラム以外の家庭より2家庭(団員2人)、受入家庭より9名が参加し、ガイドの案内のもと丸亀城の歴史や石垣の作りなど1時間ほど説明を受けました。その後、崩れた石垣の復旧場所や資料館を周り、見学を終えました。参加した団員は、ガイドの方へ石の重さや運搬方法などについて興味深く質問しており、学習意欲の高さが伺えました。高温が予想されたため、集合時には飲料(水)を配布し、熱中症に注意し、プログラムを進めました。幸い天

候は曇り空ではあったが、湿度が高く、途中参加者へ声掛けや、冷房の効いた屋内で何度か休憩するなど、気を配りました。また、プログラム中は、受入家庭の方へ、前日の自宅での団員の様子や、体調などを聞くなどして状況の把握に努めました。市本部プログラムは午前中に終了し、午後からは各家庭の民泊プログラムへ引継ぎとなりました。(同上)

8月10日(日) この日も午前中は、市本部プログラム(スポーツ交流)を実施しました。民泊プログラム以外の家庭より3家庭(ドイツ団員3人)、受入家庭より8名が参加し、市内小学生、高校生ボランティア含め約130名の参加者と一緒に、ドッジビー、しっぽ取りのゲームを行いました。チームはドイツ団員と受入家庭の参加者で組み、小学3・4年生のチームとドッジビーの試合を5試合行いました。初めは上手く投げられなかったドッジビーも徐々に慣れ、参加者と楽しく交流ができたと思います。しっぽ取りでも、団員は積極的に参加し、楽しんでいる様子が見られました。どちらの競技もルールが簡単で初めてでも参加しやすい事で、団員もスムーズに交流ができたと考えます。体育館では、冷房をつけていましたが、熱中症に配慮し、飲料(水)も開始時に配布をしました。プログラムは午前中に終了し、午後からは各家庭の民泊プログラムへ引継ぎとなりました。(同上)

8月11日(月・祝) この日は、夕方より市本部プログラムを組んでいたため、それまでは民泊プログラムで過ごしていました。15時半より市本部プログラム(市内施設見学)としてポートレースまるがめを訪問しました。ポートレース場では、レース見学のほか、幼児向け施設の見学も行いました。また、説明の中でポートレースの売り上げの一部が丸亀市の学校給食や子育て支援等に充てられていることを知ると、「とても良い仕組みだ」と感じしていました。その後、18時より「さよならパーティー」を開催しビュッフェ形式の食事をホームステイ受入家庭の方も招待し開催しました。途中、地元のまるがめ婆娑羅太鼓の演奏のほか、団員が太鼓の体験ができる時間も作り、楽しんでいただけたと思います。途中、ドイツ団からの出し物もあり、参加者全員で楽しむことができました。(同上)

8月12日(火) 最終日は丸亀市民体育館に集合し、貸切バスで高松空港に移動をしました。お見送りに受入家庭のみなさんが来られ、中には高松空港まで

お見送りに来られた家庭も多くいました。空港では、最後の時間を名残惜しむように、受入家庭の皆さんと交流やお土産を渡したりするなどしていました。今後、団員と連絡が取れるよう、SNSなどの連絡先を交換している様子も見られ、今後の継続的な交流が期待できると感じました。今回の受入において丸亀市では、多くの時間を民泊プログラムとしていたのは、以前、日独スポーツ少年団同時交流事業で派遣された方や前回(12年前)ホームステイを受入経験のある家庭などであった為、今回の受入に際しても、プログラム作成時に相談し、団員も地方プログラムの後半で疲れているだろうから、過密なスケジュールを組まず、市本部でのプログラムについては、多く作らなくても良いという話をしていただき、受入家庭の方に、プログラムを検討し対応していただきました。その為、事務局では終日、事業に帯同する事はなく、歓迎レセプションやさよならパーティーなど、共通プログラムについて準備に割ける時間が取れたかと思います。また、ドイツ団の指導者の方については、非常に丁寧で気配りのできる方であり、プログラム中の団員の様子を良く観察し、必要に応じて注意やドイツ団でミーティングを行うなど素晴らしい対応だと感じました。なお、当初ベジタリアンと聞いていた団員がおり、受入家庭の方も心配し、事前に団員に配慮して食材も準備したとの事であったが、実際、日本滞在中は日本の食文化を体験したいとのことで、「何でも食べてみたい」と話をしたそうです。受入家庭の方は安心をしたものの、食事については、アレルギーなどもある為、もう少し正確な情報を事前に知りたかったです。尚、受入家庭には緊急時には通訳及び事務局で対応する旨は伝えていましたが、期間中受入家庭からの連絡はありませんでした。(同上)

ノルトライン = ヴェストファーレン

九州グループ

長崎県
川棚町

福岡県
宇美町



日程

8月 4日(月) 長崎県(川棚町:ホームステイ)

長崎空港へ移動 / 大村市において昼食 / 戦争遺構見学(川棚町) / 歓迎レセプション及びホストファミリー合流

8月5日(火) 同上

長崎市見学(平和公園、原爆落下中心地、原爆資料館) / 長崎市内において昼食 / 長崎市内散策 / ホストファミリー合流

8月6日(水) 長崎県(川棚町:くじゃく荘)

陶芸交流(川棚町) / 川棚町において昼食 / 町内スポーツ少年団との交流(バレーボール)

8月7日(木) 同上

町内体育館においてスポーツ交流 / 川棚町内において昼食 / 川棚高校とのスポーツ交流(ホッケー) / きよならパーティー



歓迎レセプション



原爆資料館



陶芸交流



バレーボール交流



ホッケー交流

8月 8日(金) 福岡県(宇美町:ホームステイ)

県宇美町との引継ぎ式／見送り／福岡県宇美町へ出発／宇美町長表敬訪問／テーマディスカッション／ウェルカムパーティー

8月 9日(土)福岡県(同上)

空手道交流会／九州国立博物館見学／太宰府天満宮散策

8月10日(日) 福岡県(同上)

和太鼓交流／弓道体験交流／宇美八幡宮散策

8月11日(月・祝) 福岡県(同上)

ホストファミリーデー／さよならレセプション

8月 12日(火) 東京都(江東区:相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明)

お別れの会／相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明へ移動



空手交流会



和太鼓交流会



テーマディスカッション



さよならレセプション



Welcomeパーティー



お別れ会

8月 4日(月) ドイツ団は定刻に到着され、前年度交流でドイツに行かれた本県リーダー会の方々も一緒に出迎えた。疲れた様子もなく、昼食も和気あいあいとした雰囲気の中ゆっくり過ごした。その後、戦争遺構見学へ行き、施設見学及び話を聞いた。川棚町中央公民館へ移動し、歓迎レセプション及びホストファミリーと打合せを行い、賑やかな中この日は終了し解散した。県スポーツ少年団担当者及び本県リーダー会の方々の協力もあり、不安なく出迎えることができた。ドイツ団リーダーをはじめとする団員の人柄も良く、歓迎レセプション及びホストファミリーへの引継ぎも問題なく行うことができた。

(長崎県川棚町:石隈 孝典)

8月 5日(火) 朝も時間に遅れることなく集合し長崎市へ出発した。午前中は、ドイツ団の事前情報で興味があった平和公園、原爆資料館を中心に見学を行なった。平和公園においては、8月9日の平和祈念式典前で会場も式典準備が進んでいた。原爆資料館においては、事前に準備されていたメッセージを書いた折り鶴を指定の場所に置き、原爆の悲惨さ、平和への尊さ噛みしめるように館内を見て回った。午後からはグループに分かれて、めがね橋や路面電車に乗るなど長崎市内を散策した。帰りのバスの中では寝ていた団員もいて、無理のないゆっくりとしたプログラムの必要性を感じた。

(同上)

8月 6日(水) ホームステイが終了し、本日から宿泊(くじゃく荘)となる。午前中は陶芸交流を行い、各々が絵皿に手書きで書いた。担当いただいた方が、「川棚町を出発するまでに皿を焼いて記念に持たせる!」と仰っていただき、団員も大喜びであった。午後からは地元少年団とのバレーボール交流を行い、団員の半数がバレーボール経験者でもあり、大変盛り上がった交流であった。翌日が大雨の予報で、この時点で午前中のマリンスポーツを中止し、別のプログラムに変更することを決めた。宿舎到着後、数人の団員が宿舎下の海水浴場で泳ぎたいと要望があり、短時間であったが泳がせた。その後も宿舎のプールで1時間ほど泳いで楽しんでいた。この日からドイツ団一堂に会しての夕食となったが、日本食に抵抗がある人、好んで食べる人など様々だった。米(ごはん)については、皆さん食べていた。

(同上)

8月 7日(木) 急遽、予定変更となった午前中は、近くの小学校体育館において、ドイツのスポーツ「ブレン

バル」とバレーボールを行なった。中々ハードワークであったが十分に楽しめた。午後からは雨も上がり、宿舎下のホッケー場において川棚高校女子ホッケー部とのホッケー交流を行なった。高校生のサポートもあり、最後はミニゲームを行うなど一番盛り上がった交流であった。さよならパーティーでは町社会教育委員及びホストファミリーによる歌とバンド演奏、ドイツ団員の出し物など大いに盛り上がり、最後の交流を深めることができた。(同上)

8月 8日(金) 最終日は川棚町中央公民館において福岡県宇美町、川棚町教育委員会、ホストファミリーが参加し引継ぎ式を行なった。陶芸交流の際の皿も届けられ記念に渡された。名残惜しくもありましたが、最後は皆さん笑顔で見送った。交流が始まってみると、あっという間の5日間でした。期間中、誰一人ケガ等もなく無事終了出来たことが一番の安心でした。全く何もわからない状態からのスタートでしたが、2年前に実施された島原市教育委員会からの情報提供、長崎県スポーツ少年団及び福岡県宇美町担当者との連携、何よりも今回のプログラム実施に際し、快くご協力いただいたホストファミリーをはじめとする関係各位の皆様方に心から感謝申し上げます。引継ぎ式の際にドイツ団リーダーの方からありがたいお言葉をいただきました。今回の交流を通してドイツ団の人柄も含め貴重な経験をさせていただき、改めて実施して良かったと実感しました。ありがとうございました。

(同上)

長崎県川棚町に滞在中のドイツ団10名を川棚町中央公民館へ迎えに行き引継ぎを行った。九州2県目ということで移動中バスのなかでは少し疲れの様子が伺えた。昼食は囲炉裏がある明治43年創業の峰松本家にて、うどんやかつ丼など好きなものを注文してもらった。箸を上手に使用し食事していた。宇美町に到着後、宇美町役場にて宇美町長を表敬訪問。そのまま宇美町役場にて、宇美町の中学生を主とする宇美町リーダー会員約20名とテーマディスカッションを行った。テーマディスカッションでは、ドイツ団が用意したプレゼンテーションを軸に、お互いに意見交換を行い 90分では足りないほどだった。夕食はホストファミリーとの対面式を兼ねて中華料理一品香にてウェルカムパーティーを行った。ホストファミリー毎に担当のドイツ団員と同じテーブルで食事をし、初日なのでお互いに緊張した面持ちだった。英語が話せるホストファミリーの家族が数人いたので、後半は少し打ち解けた雰囲気になっていた。

(福岡県宇美町:鯨島ゆう子)

8月9日(土) 各自ホストファミリーに送迎してもらい朝9時30分に宇美町立武道館に集合、武道体験の空手道交流会を行った。至道会館空手道連盟の協力のもと、至道会館空手道連、宇美町リーダー会員、ドイツ団併せて約80名ほどの参加があった。空手の基本の形を1時間ほど習った後、ドイツ団対至道会館生徒で組手の試合を行った。幼い頃に空手を習っていたというドイツ団員もおり、活動に積極的に参加する姿勢が見られた。昼食は焼肉で、ドイツ団男子2名は定食セットのお肉では足りないと自費で肉を追加注文していた。体の大きなドイツ団には少し物足りなかった様子。午後からは九州国立博物館で日本の縄文時代の生活洋式や他国との交流の歴史などを学んだ後、太宰府天満宮を散策。お土産物が並ぶ街道でフリータイムを設け、ドイツ団は抹茶を飲んだり、梅が枝餅を食べたり自由に楽しんでいた。(同上)

8月10日(日) 宇美町中央公民館に集合後バスにて井野小学校に移動、和太鼓交流会を行った。宇美太鼓の協力のもと、宇美太鼓、宇美町リーダー会員、ドイツ団併せて60名ほどの参加だった。小学校の体育館で冷房設備がないため、暑さ対策として冷風機4台と氷入りのクーラーボックスで冷やしたミネラルウォーターを大量に準備していたが、当日は雨が降りほどよい気温だった。大太鼓や小さい太鼓など、種類に応じてチーム分けをし曲を1時間ほど練習をした後でセッションを行った。「太鼓、カッコイイ」という声を聞けて、沢山たたけて満足そうだった。午後からは宇美町スポーツ協会弓道部の協力のもと、弓道部、宇美町リーダー会員、ドイツ団併せて約40名にて弓道体験を行った。弓道部さんの演技をお手本にして、1人10本程度射的をさせてもらった。ドイツ団はこれまでの宇美町の日程の中では一番弓道に興味を持っていた様で、とても楽しそうに体験をしていた。(同上)

8月11日(月・祝) ホストファミリーデーにて日中は各家庭で過ごしてもらった。日本のお土産、特にアニメに関するグッズがほしいとの要望が多かったようで、買い物に出かける家庭が多かった様子。16時から自治体の公民館を借りてさよならレセプションを行った。たこ焼き、焼きそば、お好み焼き、そうめんなど日本の家庭食をいくつか準備したが、ドイツ団はほぼ全員がたこ焼き(シーフードNG)とそうめんは口にできなかった。スイカ割りはとても盛り上がり、抽選会も楽しそうに過ごしていた。

(同上)

8月12日(火) 最終日は10時に宇美町役場に集合、お別れの会で記念品の交換を行った。双方の代表者に感想を述べてもらい、お菓子やジュースなど簡単な立食をしながら写真撮影をしたり、連絡先を交換したりなど別れまでの時間を惜しんだ。11時過ぎには福岡空港へ移動、マイクロバスにて送り届けた。(同上)

全体プログラム(後半・東京)

宿泊・会場：相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明

8月11日(月・祝)

団長団ホテル着

8月12日(火)

ドイツ団ホテル着

JJSA-通訳ミーティング

※通訳ミーティング後、地方プログラム担当通訳は解散

ドイツ団ミーティング

8月13日(水)

JJSA-ドイツ団長団ミーティング

都内自由研修

さよならパーティー

8月14日(木)

ドイツ団 成田国際空港出発(OS52)



ドイツ団出し物(さよならパーティー)



空港で最後のお見送り



集合写真(さよならパーティー)

ホストファミリー・受入地の声

日独スポーツ少年団同時交流事業ホームステイ受入に参加して 東北Ⅰ(岩手県) 岡田

日独スポーツ少年団同時交流事業のホストファミリー募集の話を知り、子どもが中学2年生と小学6年生という時期にホストファミリーとして外国人の受入を行うことは、子ども達の刺激になり、良い経験になると思い、応募しました。

ただ、やはり受入にあたり不安な事がたくさんありました。英語での会話・コミュニケーションの取り方、食事、部屋の準備、ファミリーデーの過ごし方などです。遠野に来ている間はカトリーネにとって楽しい時間にしてあげたかったので、どんな事をしたら喜んでくれるかとても悩みました。

今回特に大変だったのが食事でした。事前の情報でベジタリアンだと知り、さらに不安になりましたがネットで調べたり、同じホストファミリーの家族と食べられるメニューの情報共有をしました。我が家に来てくれたカトリーネはトライする子だったので色々食べてもらえて嬉しかったです。コンビニが好きということで連れて行き、お菓子を選ぶ様子やイオンでの買い物の様子を見ると、ドイツの子も日本の子も楽しいと感じることは同じなんだなと微笑ましい気持ちになりました。

我が家の子ども達も緊張していましたが、頑張って英語で話をしたり、ゲームをして遊んだり、短い時間でしたが貴重な体験ができたと思います。そして、外国人との交流には、英語が不可欠であると感じました。

子ども達だけではなく私たち親も準備の段階では不安がありましたが、楽しい時間を過ごすことができ、今回この事業に参加させていただきとても嬉しく思います。ありがとうございました。カトリーネにとっても、遠野での時間が楽しい時間になっていれば良いなと思います。

言葉は通じなくても、心は通じる。

北秋田市スポーツ少年団事務局 西村大智

私は、事前準備から当日の運営まで多岐にわたる業務を担当し、大変貴重な経験をさせていただきました。本事業は、日独の青少年が文化・スポーツ交流を通じて友情を育み、相互理解を深めることを目的としており、その意義深さを実感する機会となりました。

準備段階では、日程調整やプログラム内容の検討、現地との連絡調整など、想像以上に多くの業務がありましたが、関係者の皆様のご協力と実行委員会のチーム

ワークによって円滑に進めることができました。特に、言語や文化の違いを越えてコミュニケーションを取る難しさと楽しさを現場レベルで深く感じる事ができたことは、大きな学びとなりました。

当市で4泊5日間のプログラムを実施しました。熊の出没により、一部プログラムに変更が生じましたが、無事故で楽しいプログラムを実施することができたと思います。特に印象に残っていることは、8月11日「山の日」に「花の百名山」として知られる「森吉山(標高:1,454m)」にみんなで登ったことです。登山中の天気は曇り時々霧雨でしたが、平年と比べてかなり涼しく、虫も少なかったことから結果的によかったです。団員の皆さんは道中疲れをみせていましたが、山頂につくと一気に表情が明るくなりました。私も嬉しい気持ちになり、リュックから醤油煎餅を取り出し、とある団員に片言で「タベル?」と聞いたところ、快く「ノーセンキュー」と言われたことは一生忘れることはありません。

この事業に参加された皆様が自然に打ち解け、多くの笑顔が生まれていく様子を間近で見ることができ、この事業に関わることができた喜びを強く感じました。事業を成功に導いてくださった、ホストファミリーの皆様、地域の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今後もこの経験を活かし、青少年の健全な育成と国際交流の推進に貢献していきたいと思っています。

文化や言葉の違いを超えて

東北Ⅱ(福島県) 遠藤 愛敬

先日、我が家にドイツからホームステイ生としてのフェリックスを迎えました。彼と過ごした2日間は、僕にとっても忘れられない経験となりました。文化や言葉の違いを超えて、ともに楽しんだ時間は大きな財産になったと感じています。

まず、僕のサッカーの試合を見てもらいました。フェリックスはサッカーが大好きで、僕のプレーを真剣に見てくれました。試合後には「ナイスパス」や「ナイスゴール!」と笑顔で声をかけてくれました。彼の国ではサッカーすることが多いと聞き、その熱意に触れることで、自分もさらに頑張ろうと思いました。

次に、庭でバーベキューをしました。炭火で焼いた肉や野菜を囲みながら、家族も交えてにぎやかに過ごしました。フェリックスは特に焼肉のタレを気に入り、笑顔で「おいしいです!」と上手な日本語を言っていたのが印

象的でした。食卓を共にすることで、言葉が十分に通じなくても親しさが深まるのを実感しました。

夜には花火をしました。「This is Japanese summer」と彼が感激した言葉が心に残っています。

また、温泉にも出かけました。フェリックスは以前にも経験があるそうで、落ち着いた様子でお湯に浸かっていました。翻訳機を使わず、英語やジェスチャーで会話を試みたのですが、ときに言葉が出ず笑い合う場面もありました。完璧でなくても、理解し合おうとする気持ちがあれば心は通じるのだと感じました。

次の日は、釣りに挑戦し、魚が釣れた時の無邪気な笑顔を一緒に喜んだことも良い思い出です。

このホームステイを通じて、異文化交流とは特別な場ではなく日常の体験から自然に生まれるものだと学びました。サッカー、食事、温泉、花火、釣り、その1つ1つが国境を越えた友情を育ててくれたのです。フェリックスとの時間を振り返ると、互いの違いを尊重し楽しむ心の大切さを改めて実感しました。

最後に、このような貴重な体験させていただいた、白河市体育協会の皆様はじめ、関係者の皆様に感謝申し上げます。

ホストファミリーを迎えた感想

関東Ⅱ(埼玉県) 酒井

昨年に続きドイツから来た 17 歳の女子生徒をホストファミリーとして受け入れました。わが家には子どもが 4 人おりますので日常生活の中で異文化に触れることは大きな刺激となり、好奇心や思いやりを育む良い機会になったと感じています。拙い英語や身振りを交えながら一緒に遊んだり会話をしたりする中で、互いの違いが話題の種となり、子どもたちの視野は確実に広がっていききました。

ファミリーデーには「富士山を見たい」という希望に応え、三つのホストファミリー合同で河口湖へ出かけました。湖面越しに眺める富士山は雄大で、参加した皆が感動していました。

涼しいドイツと比べると日本の夏は非常に暑く、しかも一年で最も暑い時期でしたので少し疲れた様子も見られましたが、それでも川越散策など最後まで積極的に参加してくれた姿が印象的でした。

二度目の受け入れを通じて、家庭という小さな場で異文化が交わることの価値を改めて実感しました。もしかた機会があるのであれば、ぜひホストファミリーとして留学生を受け入れたいと思っています。今回の経験は、私たち家族にとってかけがえのない財産となりました。

チャレンジ

関東Ⅱ(茨城県) 小澤 浩美

すでに嫁いだ一番上の娘から、「私、ホストファミリーになってみようと思っているけど、母もやりなよ。」と勧められたことで今回のホストファミリー募集のことを知った私。まったく英語の話せない私にとって、それはとても勇気のいることでしたが、15 歳の息子は将来留学を希望しており、受け入れる側の立場に立つことも親子共に良い経験になるのではないかと考え、「不安だけれど三人でチャレンジしてみないか」と家族にも話し、夫も息子もそれに賛同してくれました。

ウェルカムパーティーでは、キリアンの社交的な性格に助けられたこともあり、言語が違っても楽しく過ごせるとすぐに気づき、不安も吹き飛びました。

キリアンはとても明るく周りに気配りができるドイツ団の地方プロジェクトのリーダーでした。ケニス口数が少ないですが、誠実で真面目な男の子でした。スポーツマンだから夜 21 時以降にソーダは飲まないとのこと。納豆、梅干し、みそ汁などの日本独自の食べ物にもチャレンジした二人。「good」と親指を立て、毎回私の用意した料理をほめてくれました。夕食後には卓球やトランプ、オセロ。近所迷惑になるのではないかとヒヤヒヤするほど大盛り上がりでした。

ファミリーデーには大洗磯前神社と大洗サンビーチを散策し、回転寿司を食べ、午後からはボウリング大会をしました。その後、今回のホストファミリー仲間にお声をかけていただき、東海村の花火大会を敷席で観望しました。ドイツの花火とのスケールの違いに二人も感動していたようでした。

二人がいた期間中、「こんないい子たちが二人も我が家に来てくれて幸せだね。」という言葉で夫と何度も交わりました。終始笑顔で接してくれたキリアン、いつも感謝したくさん食べてくれたケニス。私たち家族は、ドイツ団ロスです。

最後に、このような機会を提供して下さったスポーツ協会の方々に心より感謝申し上げます

ドイツとの交流のホストファミリーをやってみて

北信越(長野県) 安仲 智恵子

今回ホストファミリーということで、ドイツの高校生女子、とても可愛い「J」さんを受け入れたことは、我が家にとってとてもよい経験となりました。

受入れにあたっては、娘に話す内容を詳しく聞きませず「やりたい、来てほしい」とのこと。夫もすぐにOK、中学生の弟のほうはオマケですが、まんざらでもない様子でした。

私はホストファミリーを探す役目も担っていたこともあり、高校生がいるお宅の何軒かに声を掛けてみたのですが、親が乗り気でも子どもがNG、逆に子どもがOKでも親がダメということで、ホストファミリーとなってもらうにはなかなか難しい面があると実感しました。

実際、受け入れてみると、食事については、日本のものでOKだとJさんが言うし、用意したものを一口食べてみてダメなもののははっきり「NO」というので、こちらもやりやすく、結果大したもののは食べてもらえませんでした、それはそれでよかったかと思いました。

また、暑い時期であったために、寝具も敷布団とタオルケット、薄手の羽毛布団を出しておいたぐらい。我が家では、娘の部屋で一緒に寝るようにさせてもらったのですが、娘が普段使っているベッドにJさんが寝て、娘がその下に布団を敷いて寝ていました。それは2人でやりとりして決めたようでした。2人で寝るまでの時間を同じ部屋で過ごしていたので、そこでも英語やアプリを使って遅くまで会話していたようです。そういった子ども同士の時間が持てたことも、同じ部屋で不便だったかもしれない反面、よかったかと思えます。

娘は、用意されているカリキュラムのうち、参加できるところのみ参加したのですが、Jさん以外のドイツの子たちとも関わりを深めていました。最終的にはもっと英語をしゃべれるようになりたい、ドイツにも行ってみたいと申し出ております。ドイツ語もしゃべれるようになりたいと娘がJさんに話したら「あなたはまず英語から」と言われたとのこと。そういったことも娘の向上心につながったかかを感じています。

私自身もカリキュラムに参加し、ドイツと日本の子がいるんなことを一緒に体験し、日本の子どもたちも日本の文化に改めて触れる機会にもなっている姿を見て、参加している全員にとって、とてもよいものになっていると感じました。ホストファミリーとしての滞在は2晩だけだったので、そんなに負担になることもなく、プラスアルファでカリキュラムに参加できたことがよかったし、日本の子どもたち同士も、この機会に仲良くなっている姿が見られ、子どもたちにとってよいことばかりの1週間になったと思います。

最終の見送り時には、娘がドイツ団員全員にメッセージを書いてカードを渡す用意をしたらしく、ドイツ語を調べながら朝5時までかかり、最後、コンビニで娘とツーショットの写真をそれぞれの人用にカードに貼り付けて、その足でギリギリ8時の見送りに向かったとのこと（私は先に家を出ていたため、現地地で合流した）。たぶん、ツーショット写真もそれ用に全員と撮っていたということだと思

うのですが、そういう気力はすごいなと感心しつつも、ちょっとやりすぎのような感もありながら、本人は一生懸命関わったようです。

私自身は、英語が全くしゃべれず、Jさんと2人きりのときは困りましたが、娘と中学生の弟はなんとなくコミュニケーションを図っており、頼もしく感じました。ついでに、夫がけっこう英語でしゃべっていて、Jさんに質問したり、ドイツのことを聞いたりしてJさんのことを知ることができましたので、夫の英語力が我が家にとっては新たな発見でもありました。Jさんも夫を一番頼っていた感があり（夫いわく）、子どもたちに夫のいいところを見せられた2晩となりました。

会話はそこそこ困らず、食事まあ、気に入ったものだけ食べるのみ（食が細かい子だったこともある）、部屋も我が家にある中で提供し、うちに猫が3匹いるので、猫たちが間を取り持ってくれて（なぜかみんな寄っていった）、ということで特に心配することなく受け入れることができたと思っています。それから、弟にとっても、異国のキレイなお姉さんが我が家に来て多少なりとも関わった経験が、2晩だけでしたけど、これからの彼の人生に大きく影響するのではないかと母は予想しています。

受け入れてみれば、2晩だけでなくもうちょっとうちにいらしてもらってもよかったかなというくらい、プラスの要素しかないとてもよい1週間となりました。

スポーツ少年団のみなさんは、この企画にあたり、ご苦労され準備にあたったかかと思えます。

我が家にとって、このような貴重な体験ができたこと、また、この素晴らしいご縁に本当に感謝です。

ドイツと nutella と ChatGPT

北信越(新潟県) 中條 多恵子

今回、お友達から2人の団員の受入先が見つからないとお話を聞き、うちのような小さな家の大家族では受入は無理…と思っていたので、周りのお友達に受入ができそうか聞いていました。1人はすぐに決まったのですが、もう1人の受入先はなかなか見つからず…。

私自身は国際交流協会で働いた経験から、ホストファミリーをいつかはやってみたい、子供達にも小さいうちから国際交流をさせてあげたい、という密かな夢がありました。

ところが、うちはおじいちゃん、おばあちゃん、私達夫婦と子供が3人という7人家族で、部屋はどこもパンパン。

きっと家族は反対するだろう、と諦め半分皆に相談すると、子供達からは「やりたい！」との声。そして他の家族も最初こそ戸惑っていましたが、最終的にはOK

してくれました。

一度受け入れることを決めると、そこからは部屋の片付けや、どこに連れて行こうか、食事は何を出そうかと、家族で相談したり協力して準備を進めました。

どんな子なのかな、何が好きかな、と想像しながら準備を進めていくうちに、家族も皆段々と期待が高まりワクワクしてきているのがわかりました。

そして迎えたウェルカムパーティーでの初対面。4歳の娘はモジモジして何も話しませんでしたが、家に来てくれることになった15歳のミハエル君は、とても英語が上手で、気後れする事なく、私達家族ともたくさん話してくれてほっとしました。部屋が少ないため13歳の息子と同じ部屋に泊まってもらったのですが、何の文句も言わず、夜もChatGPTを使いながら2人でゲームをするなど交流したようです。あいにくの雨で予定していた場所には連れて行けず残念でしたが、常に笑顔でコミュニケーションをとってくれてとても嬉しく思いました。夕食後、家でもたくさん遊んでくれたおかげで、4歳の娘はすっかり懐いてしまい、帰りのお見送りの時もミハエル君の脚にしがみついて離れないほどでした。

今回は、家庭での宿泊は2泊で短かったのですが、ドイツについて大変たくさんのことを教えてくれました。

ドイツからたくさんのお土産も持ってきてくれて、驚きました。特に子供達がnutellaを気に入ってその後も毎日の様にパンに塗って食べています。

技術の進化によって、子供達も言葉の壁による不便さを感じる事があまりなく、遠いドイツを身近に感じる事ができたようです。これからもドイツと聞く度に、あの時のミハエル君のことを思い出すでしょう。

本当に、良い機会を与えていただき、大変ありがとうございました。

東海（愛知県）柴田 直子

ドイツ人学生のクリス・マチェコさんを迎えた5日間は、とても充実したものでした。

そもそも、6歳と9歳の子供にとって良い経験だろうと思ひ、申し込んだのですが、長男の反応が「僕、そんなの無理」というものでした。心配性な気質がある子なので、顔合わせ当日までとても心配でした

市役所の会議室で、初めて顔を合わせたのですが、アニメの話をししたら、とても、打ち解けた気分になったようで、それから5日間は「クリスさん、クリスさん」という感じで、くっついていました。

ラフティングも、当初は「怖いから、僕はやめておく」と言っていたのに、「どうしてもいきたい」と言って、ほとん

ど泣きそうでしたので、急遽、参加させていただきました。「とても楽しかった」と言って帰ってきたので、本当に良かったです。

クリスさんは、とても礼儀正しく、こちらに気遣いを忘れない人で、感心しました。日を追うごとに、慣れ親しみ、最後は、大きいお兄ちゃんみたいな存在でした。日本語を自分で5年ほど勉強したようで、好きなアニメの影響も後押しして、かなり日本語は理解していたようです。そのため、あまり言語の壁は感じなかったのも、ラッキーでした。

外国の人と触れ合うこと、陶器に絵付けをすること、ラフティングすること、ビーチバレーボールをすることなど、子供たちにとっては、初めてづくしでしたが、元気にやりきってくれて、親としては感無量です。

スタッフの皆様には、いろいろとお世話になりました。子供に「大丈夫。できるよ」と励ましの言葉をかけてくださり、本当にありがとうございました。子供2人にとっては、いつまでも心に残る経験になったと思います。

活動費を支給していただけたおかげで、あまり金銭的負担もありませんでした。感謝いたします。日独スポーツ少年団によるこのプログラムについては、何も知らなかったのですが、歴史ある素晴らしいプログラムと知って驚いています。いつか、2人の子供が、スポーツ少年団でドイツを訪れてくれるといいと夢んでいます。本当にありがとうございました。

田中 奈賀子 and マイファミリー

東海(岐阜県) 田中 奈賀子

この度はホストファミリーとしてこのイベントに参加させて頂きありがとうございました。おかげさまで言葉では表すことができないくらい素晴らしい時間を過ごすことができました。もうすでに家族中がLena ロスです。

初めてホストファミリーを体験しました。応募した動機は、国際交流を楽しみたいという単純なものでしたが、今回実際にLenaを迎え入れ5日間の短い間でしたが一緒に生活を共にし、想像をはるかに超える充実した楽しい時間を過ごすことができました。

一日目、浴衣を着て近所を散歩、日本のグミパーティー、トランプ遊び

二日目、カラオケ、折り紙遊び

三日目、三浦勝次美術館、アクアト、駄菓子屋

四日目、おはぎカフェ、善行寺で戒壇巡りと鐘突き、マーゴでショッピング

犬山市でのホストファミリーが食事では、お好み焼き、焼きそば、おにぎりを提供されたと教えてくれたので、そ

れ以外の日本らしい日常の料理ということで、(彼女はベジタリアン)ちらし寿司、茶わん蒸し、おでん、カレーライス、ポテトサラダ、かぼちゃスープ、サンドイッチなどを提供しました。どれも興味を持って食べてくれ、作り甲斐がありました。

Lena と一緒に会話したり歌ったりトランプ積み上げをしたり、たくさん笑って楽しい時間を共に過ごしました。

対面式の時、空耳で覚えたアルプスの少女ハイジの歌を歌おうとしましたが、緊張してぶつとび詰まってしまうことが、ドイツ団の皆さんがフォローして一緒に歌ってくれ嬉しかったです。孫たちにもこの歌がウケて、私たちの頭から離れなくなり、移動時はいつも車の中で大合唱！孫たちも空耳ですっかり覚えてしまいました。私の中では、車中でのこの時間が何よりの忘れられない思い出となりました。

6歳と8歳の孫たちもすっかり Lena が大好きになり片時も離れませんでした。彼らの人生においてこの経験はとても大きなインパクトを与えた時間になったことと思います。そして、私の母親にとってもまたとない刺激ある時間になりました。さよならパーティーにも参加させて頂き、そして車椅子を階段上に上げるため玄関前で待っていて下さったスタッフの皆様のお心遣いに母は感動していました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

今回、お互いの国の言葉や文化を肌で感じ交流できたことは素晴らしい経験でした。ドイツという国が身近に感じられるようになり、また今後も Lena と交流を続けていけることを嬉しく思います。本当に素晴らしい機会をありがとうございました。

Danke schon

Ich bin glücklich!



出会いに感謝！人生初のホストファミリー！

近畿 I (兵庫県) 竹添 昭弘

この度、日独スポーツ少年団同時交流事業に当たり、県スポーツ少年団本部からの受入要請があり、8月4日(月)～8日(金)の地方プログラムをたつの市が受け入れることになりました。(前回は平成26年度)

決定後、事務局を中心に5日間の交流日程表を作成し、たつの市の歴史や文化を少しでも多く体験して頂くための内容を工夫しました。私も本部長として全ての日程に同行し交流を深めました。その中でも5日・6日

の二日間、一人の団員が我が家にホームステイすることになり、私達夫婦も人生初のホストファミリーのため対面するまでは不安と希望が交錯する毎日でした。特別なおもてなしをするのではなく日本の文化、習慣、日常生活を少しでも体験してもらいたいと思いあえて「和」を感じる内容を考えてみました。朝食、夕食、風呂、就寝等をドイツ風にあわせるのではなく、私達と同じ日本風にしました。素直で明るく、礼儀正しい15歳の女の子は我が妻と一緒に朝食、夕食を調理して「おいしい！おいしい！」と言って食べてくれました。そして、折り紙(傘作り・箸入れ作り)、トランプゲーム(ばば抜き。七並べ・神経衰弱)をするなど本当に楽しい時間を過ごしました。

でも言葉のコミュニケーションは難しく身振り(手振り)や翻訳アプリに助けられながらもなんとか通じ合えました。ホームステイ最後の朝、体育館へ移動の車から我が妻に姿が見えなくなるまで手を振っていました。別れが本当に名残惜しかったです。帰ってしまった後、妻が布団等を整頓していたら、布団の下から一枚の紙切れが見つかり、彼女が英語でお礼の手紙を残してくれていたのを見つけ、妻は目頭が熱くなったそうです。私達夫婦にとってはたったの二日間という短いホストファミリーで十分なおもてなしも出来なかったのですが、彼女との生活は刺激的で楽しく、夢のような時間でした。この様な素晴らしい体験をさせていただきました本当に有難うございました。ドイツという国に親近感が湧き、「一生の宝物」が出来ました。最後に残りの人生の中でドイツを夫婦で訪問する夢が実現出来ることを願っています。

日独スポーツ少年団同時交流に参加して

近畿 I (京都府) 西村 敦子

この度ホストファミリーをさせていただき、2人の青年と過ごす経験をさせていただきました。我が家には20歳を筆頭に3人の子どもがおり、当日を迎えるまで“どんな風に接したらいいか”、“何をしたらいいか”、“言葉は通じるのか”と楽しみにしているというより不安の方が多かったように感じました。しかし時間と共に私の方が不安が大きくなるのに比例するように、「なんかワクワクしてきた。楽しみやで」「言葉なんかなんともなるつて」と背中を押してくれるようになりました。いざホームステイがスタートすると、拙い言葉やボディランゲージ、そして翻訳用のアプリを駆使し子ども達同士コミュニケーションを取り遊ぶ我が子の新たな姿に驚きを感じました。もちろんドイツ側の2人の積極性がある上で成立しているのだと思いますが、綺麗事で表面上を取り繕うとすることがいかに無駄なことなのか、人間として本質の部分で「楽しんで

でもらいたい」「相手が望んでいることはなんだろう？」と心でおもてなししようとする大切さをこの交流を通して知ることができました。ただ事前準備としてやはり言葉はもう少しだけ知っておくべきだったと思う一面もありました。ブルーノが体調不良を訴えてきたのですが、その際に何をしたいのかかわからず困ってしまいました。色々手を尽くす中で、もう一人のヨシュアが「ドインでは16歳は成人しているのと同じ。本人が一番自分の体のことはわかってるから、アクションがない限り何もなくていい」という言葉に驚きながらも、やはり外国の言葉も通じない中で体調を崩す事は心細い気持ちも不安もあったと思います。ホストファミリーとしてその部分のケアをもっとしていけたら良かったのに。と思うところが大きいです。

交流を通して様々なことを気付く事ができました。そして日本の歴史を改めて見つめ、やはり素敵などころがたくさんあるんだ。と実感することもできました。子ども達も含め素晴らしい体験をさせていただきありがとうございます。

文化の違いを食事で感じた 4 日間

近畿Ⅱ(大阪府) 吉川 真央

ホームステイを受け入れ、一緒に過ごした 4 日間はとても楽しく、心に残る素敵な経験となりました。ホームステイを受け入れるにあたって、最も心配したことは食事です。特にベジタリアンの対応が必要だったので食事メニューについては悩みました。(主に母が)

私はドイツの大学に留学していたことがあるのですが、大学の食堂には多くのベジタリアン対応メニューがありました。しかし、日本にはベジタリアンのための食材やメニューが少ないことに加え、「日本らしい」食事メニューを考えると肉や魚が必須となるため難しかったです。そこで、ちらし寿司とたこ焼きという具材にアレンジを加えることができるメニューを選ぶことで、肉や魚を除きつつ日本の食文化を感じてもらうことができたと思います。特にたこ焼きはたこ焼き器を使い、みんなで作りながら食べるという点が面白くて楽しいと喜んでくれました。「たこ焼きって知ってる？」と尋ねたときは「知らない」と言っていた彼女たちでしたが、一緒にたこ焼きを作り、食べた後にはとても気に入って「ドイツでもたこ焼き器買えるかな」と言っていたのが嬉しかったです。大阪らしく、かつ家庭的な食事を一緒に食べることができたことは良い思い出となりました。

また、ドイツの料理を一緒に作ったこともとても良い思い出です。Kartoffelpuffer というジャガイモでつくるパンケーキのようなものとリンゴのソースを食べました。日

本料理では見ることがないキロ単位のジャガイモに驚き、話をしながら一緒に料理が出来て楽しかったです。

このように日本人の私にとって、「食事」とは重要なトピックであり、思い出とも深く関係するものです。しかし、ドイツ団とともに過ごす中で、食事に対する考えの違いを感じたことが興味深かったです。日本人の食事に対する考えを話す機会があり、日本人は食事をとても重要視していること、文化と密接に関わっていることを伝えられたこともよかったです。言葉の壁があり、どこまできちんと伝えられたかはわかりませんが、文化の違いについて生活の中で実感しながら考えを交流させられる機会はとても貴重だと思いました。

ホームステイ受け入れという貴重な経験をさせていただきありがとうございました。スポーツ交流やディスカッションなどのプログラムも内容が濃く、楽しんでいるドイツ団の様子を見たり、私も一緒に参加したり、本当に楽しかったです。他のホームステイ受け入れ家庭の皆様も素敵な方ばかりで、素敵な出会いでした。関わってくださったすべての皆様に感謝いたします。ありがとうございます。

中国(山口県) 寺田 直樹

この度は、ホストファミリーという貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

まず、受け入れ前から 3 つの良いことがありました。1 つ目は家が綺麗になった事です。2 つ目は語学の勉強が出来た事です。3 つ目はプランを練る楽しみが出来た事です。ドイツ団が来るまでの間、ワクワクが止まりませんでした。

実際に 5 日間共に過ごして良かった事は 3 つあります。1 つ目はゲストとの交流が楽しかった事です。2 つ目は怖くて出来なかった英会話のハードルが下がった事です。3 つ目は新しい出会いが増えた事です。ゲストとの交流だけに及ばず、今まで出会う事が無かった、他のホストファミリーの方や、ディスカッションに参加された高校生の方や、校長先生、そして頼もしい通訳さん、また陰ながら私達を支えてくださった市町の担当者の方々との出会いは、とても良い刺激になりました。

5 日間の日独交流はあっという間に終わってしまいましたが、意外な副産物も生み出しました。なんと、知らぬ間に娘がドイツ語の勉強を始めていたのです。そして、私達もいつか「ドイツに行きたい!」という目標が出来ました。ドイツにいるもう一人の娘に会うその日の為にコツコツと頑張りたいと思います。

第 52 回日独スポーツ少年団同時交流事業を終えて 中国(山口県) 出雲市スポーツ少年団本部長 遠藤 和則

出雲市では、約 19 年ぶりの受入となりました。その時の経験から、可能な限り早期の段階から準備すべく努めて参りましたが、「言うは易し、行うは難し」の通り、気持ちばかりが先行し、実現が難しい現実を再び教えられた思いです。

しかし、出雲市スポーツ少年団事務担当者の精力的な尽力により、関係先との調整やホストファミリーさんとの事前研修実施等の準備が整い、不安なく本番当日を迎える事が出来ました。

初日、炎天下の出雲市到着時には、ドイツ団全員に晴雨兼用の傘が用意されていて重宝しました。事務局担当者の細やかな気配りに感謝します。市長表敬訪問では、市長から出雲市の紹介と共に団員一人一人に言葉を交わしてもらい、和やかなひとときになりました。歓迎パーティーでは、ホストファミリーさんと団員が初めて対面し、お互いを知る大切な場となりました。また、スポーツ少年団指導者により出雲市の紹介とスポーツ少年団の概要説明を行い、受入れに際しての事前説明としました。

2 日目、大社高校茶道部を訪問、茶道の作法を英語で説明しながら交流された部員の皆さんに感動しました。続く弓道部訪問では、矢を放つ実射には至りませんでしたが、弓の弦が想像以上に重くて引ききれない体験を通して、大勢の部員と交流が図れました。灯台として現役中の日御碕灯台に登り、出雲大社の 4 つの鳥居を通っての参拝等、工事中で歴史博物館を覗いてももらえない悔しさはありましたが、出雲ならではの体験を提供出来たと思います。

3 日目、あいにくの大雨となり、ホストファミリーの皆様には、計画変更を余儀なくされ大変だったかと存じます。ドイツ団員にとっては、この事業の主目的である日本の生活や文化・習慣を体験する中での大雨も貴重な体験となったことでしょう。ありがとうございました。

4 日目、大社高校陸上部員とのディスカッション、テーマ「ジェンダー平等」では、プロジェクターを使っての双方の発表に加えて、4 名ずつの小グループに分かれての意見交換をスマホ翻訳機の使用可能として実施しました。日独の青年同士が肩を寄せ合って対話する姿は、お互いの理解を深める上でとても効果があり、微笑ましい光景でした。お互いのプレゼントを説明し合うアイデアも良かったと思います。

出雲ドームでのスポーツ少年団交流は、屈託のない

小学生団員と年齢差のあるドイツ団との熱い戦いとなり、観ていても楽しく感動の連続でした。PK戦等、ハンディなしでも充分対等と思える内容でした。サッカー大会開催の当日中にも関わらず協力頂いたFCおろちスポーツ少年団のみなさま、誠にありがとうございました。

北陵高校でのなぎなた部訪問では、古着の袴を貸りて何人かは防具も着用して対戦の実技も行う等、ドイツ団にとって新鮮でエキサイティングな体験でした。

さよならパーティーでのドイツ団のダンスは、リズムの中に背筋腹筋のハードな動作が含まれていて驚きました。私と同年代の指導者ラルフさんがそのダンスに対応出来ている事にはもっと驚きました。彼は本当にタフです。ドイツの青年たちは、日本の伝統や文化・スポーツを体験し、積極的に交流を深めておられました。また、受入れて頂いた地元の皆様や高校生も、外国の方との意思疎通や意見交換など、貴重な経験をされたことと思います。

今回の事業で日独の友好と親善が図られたことに加えて、今後の出雲市における青少年の健全育成・国際交流においても貢献できたと考えています。多忙な中、この度の事業にご理解とご支援を賜り、積極的に受入れて頂いたホストファミリーの皆様をはじめとして、事業全体の統括を頂いた島根県スポーツ少年団様、市長表敬訪問や期間中のバス運用にご支援を頂いた出雲市文化スポーツ課様、高校部活動交流及びディスカッションに参加協力頂いた大社高校の茶道部、弓道部、陸上部のみなさま、北陵高校なぎなた部のみなさま及び FC おろちスポーツ少年団のみなさまに感謝申し上げます。

最後に、ご参加頂いた全ての関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

出会いに感謝 Danke!!

四国(徳島県) 住友 弥住

市役所に勤めている知り合いの紹介で、ホストファミリーの話聞きしました。

聞いた瞬間に面白そう!! と思い、高 1 の娘や同居している家族に相談しました。

家族はすぐに留学生の受け入れを快諾してくれました。また、普段できない貴重な体験をさせて下さった関係者の皆様ありがとうございました。

初めの自己紹介をマライケとフィオナは日本語で、私たち夫婦はドイツ語でしました。たどたどしいお互いの国の言語でのあいさつのおかげもあり、みんなが笑顔になり一気に仲が深まったと思います。我が家については、てんぷらやカレーを食べながらお互いの国のことをたくさん話しました。96歳の祖母にとっては初めてのドイツ

の子たち。3 人のやり取りを見るのはとてもほほえましかったです。

2 日目の夜、家に帰って来てから昼間のプログラムの話を、写真を見せながら楽しそうに話してくれました。また、娘とも英語でお互いの国の学校の事、流行っている音楽などの話など、若者同士で盛り上がっていました。一緒にコンビニで買い物して、アイスを食べながら近所を散歩もしました。最終日のさよならパーティーの後、鴨島の花火大会にも行き、かき氷を食べたり、ヨーヨーすくいもしました。近くで見える花火にも大興奮の 2 人。日本の夏祭りも一緒に楽しめてよかったです。

とてもステキで好奇心旺盛なマライケとフィオナ。我が家に来てくれてありがとう。

たった 3 日間だったけど 2 人のことが大好きになりました。娘や主人と連絡先を交換したので、ドイツに帰ってからメールのやり取りをしています。この出会いを大切にこれからもずっと交流していきたいと思っています。

言葉の壁を越えて 四国(香川県)畠山 ひなた

今回のホームステイ受け入れで良かった点は、翻訳アプリやドイツ語の本を買っておいたことです。言葉の壁はありますが、アプリやジェスチャーを交えながら日本のことを教えてあげたり、ドイツのことを教えてもらったりしてとても楽しかったです。今回来てくれた子たちは私や妹とも歳が近かったので流行りのものやゲームなどで盛り上がりました。

彼女たちが一番喜んでしたのはショッピングモールでした。日本でしか売っていないキャラクターもののグッズやガチャガチャなどは SNS などを通して海外のインフルエンサーが紹介していたみたいでよく知っていました。

改善した方がよかったと思うことは、食事面です。私たち日本人はせっかく日本に来たんだからと和テイストなものを選びがちですが、あまり口に合わなかったようです。私の家では祖母がおやつとお団子を用意してくれていましたが、徳島で食べたときにおいしくなかったと言って食べられませんでした。その他にも徳島でおそらく格式の高い和食のお膳料理を口にして薄口で野菜メインだったので食べれなくて困ったわ！と教えてくれました。ですので、まだ彼女たちは大人ではないので食事はしっかり味のついてお肉系の料理がメインでビュッフェ形式の方が喜ばれると思います。

また、いろんな場所に連れて行ってあげたい気持ちが強く様々なプランを考えていましたが、意外とお家での寝る前の時間が楽しかったので夕食を早くすまして寝る前の時間を長くとればよかったなと思いました。

来年受け入れされる家庭へのアドバイスは、まずは手土産についてです。彼女たちは国内線で預入できる荷物は何キロまでと決まっているのであまり重たいものは渡さない方がいいです。あれば荷物の重量を測定できる道具があると役立ちます。

また、海外の SNS の流行りをチェックしておく話題が広がるのでいいかもしれません。ショッピングも買いたいものを決めている場合があるので先に教えてもらうとお店を探しやすいです。

私自身も受け入れを子供の頃によくしていましたが大人になってからは初めてだったので不安なこともたくさんありましたが、家族やスポーツ協会の方々のおかげでごく楽しいホームステイ期間になったと思います。新しい友人もできたので、私もまたドイツに行った際には会いに行きたいと思っています！！

日独スポーツ少年団交流事業ホームステイを終えて

九州(長崎県) 松口 ますみ

日独スポーツ少年団交流の一環としてホスト活動の依頼を受け、Welcome ボードを準備してワクワクしながら当日を迎えた。

我が家の玄関をくぐってきたのは、17歳の Paul(パウ)と20歳の Leo(レオ)。バレーボールプレイヤーということで、二人とも長身の好青年だった。今までにも各国からのトラベラーのホストを体験してきたが、さすがスポーツマン。履物(スリッパ)を脱いだ時の揃えるマナーには実に感動させられた。

若い時に、このような異文化交流の体験をして視野を広げる。ましてやそれが世界共通のスポーツを通してというのだから、さらに次世代を担う若者への期待がふくらむ。



かけがえのない思い出 九州(福岡県) 平野 穂花

部活中に肩を怪我して夏休みに手術をしなければいけない。そんな中、ホストファミリーができるのか家族で悩みました。私の兄が、中学生の時ホストファミリーを経験し、とても良い経験になったので是非やるべきだと強く進めていました。そんな兄は社会人となった今、通訳としてやりがいのある仕事を務めています。どんな良い経験ができるのか想像もつかず楽しみで仕方なく、入院中も

どんな人が来るのか、自己紹介は何を言おうか等と考えていたらあっという間に退院でした。

退院して 3 日後ついにウェルカムパーティーを迎えました。私も緊張しましたが、ドイツから来たマレーネちゃんも緊張しているように見えました。良い思い出をたくさん作ってもらおう、と家族で話していたので、私は積極的に練習していた英語で自己紹介や質問をすると、マレーネちゃんも笑顔になってくれて、まだ出会って 1 時間位でお互いのライン等を交換し合いました。海外の人と交換したのは初めてだったので感激しました。

2 日目の夕食は兄夫婦も一緒にレストランに行きました。兄は通訳の仕事をしているので、発音も良くマレーネちゃんとの会話がスムーズにできていました。小学校の先生を目指していることやドイツにいる家族のこと等色々な話ができていました。私ももっと英語が話せて翻訳アプリに頼ること無く会話できたら、もっとマレーネちゃんと仲良くなれるし、マレーネちゃんも安心するだろうなど、兄を羨ましく思いました。

家では母も父も英語で頑張って接していました。こんなに英語を話す父や母を見ることは無いので面白くもあり新鮮でした。マレーネちゃんはベジタリアンでしたが、好きなものを聞いて、母が工夫して用意してくれたおかげで、「食事パーフェクト！」と言ってもらえました。朝も大好きなフルーツを中心にモリモリ食べていました。海外には環境保護や動物愛護、健康志向等、思想の違いで肉や魚を食べない人も多く、そういうベジタリアンやビーガンに対応したレストランやメニューが日本(福岡)にもたくさんあることを知り勉強になりました。

温泉やショッピング、一緒にプリクラを撮ったり、浴衣を着て花火等をして楽しみました。温泉に入っている間は翻訳アプリも見れないので、精一杯今分かっている英語で頑張りました。日頃、英語の授業や英検の勉強はしていますが、実際に海外の方と話すことは全然違い簡単ではありませんでした。しかし、英語で話さないと伝わらないし、楽しいホームステイにしてほしかったので、たくさん考えて話しかけました。本当にこんなに英語を使うことは無かったので貴重な経験になりました。終わった今でも、家族みんなが英語だと何て言うだろうとつい考えてしまいます。ホストファミリーを経験して家族が大きく変わりグローバル化した気がします。マレーネちゃんと過ごした時間は、私や私の家族にとってかけがえのない思い出となりました。

※地方プログラム記載内容及びホストファミリー等感想文については一部表記の統一等を除き原文ママで掲載

第三章 実施概要報告

【日独スポーツ少年団同時交流シンボルマーク】



日独スポーツ少年団同時交流25周年にあたり、日本スポーツ少年団(JJSA)によって作られたシンボルマーク。

この交流のシンボルとして、日本スポーツ少年団(JJSA)およびドイツスポーツユース(JDSJ)が双方で使用する。

(1) 日本団派遣

① 実施要項

第52回日独スポーツ少年団同時交流実施要項〔派遣〕

本交流は、日独両国のスポーツ少年団の青少年および指導者の相互交流により友好と親善を深め、国際的能力を高めると共に、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目的に、2023年に調印した「日独スポーツ少年団国際交流協定書」に基づき、次のとおり実施する。

1. 主催
公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団
都道府県体育・スポーツ協会都道府県スポーツ少年団
ドイツスポーツユース(DSJ)
2. 後援
スポーツ庁
3. 日本団派遣期間
2025(令和7)年7月30日(水)ドイツ着～8月13日(水)ドイツ発/14日(木)日本着
※各種事前研修あり(「12.事前研修」参照)
4. 参加人数・グループ編成
日本団:100名(11グループ97名(団員86名、引率指導者11名)、団長団3名)
※グループ編成の詳細は別紙『日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成(2024-2027)』のとおり
5. 共通テーマ
「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～

6. 参加資格

(1) 団員

以下の共通項目をすべて満たし、いずれかの推薦区分において所定の条件を満たす者。

※ 過去に本交流への参加経験がある者の推薦を妨げない。

※ 同一グループを構成する都道府県から人数枠を上回る団員の推薦があった場合またはグループ成立条件(引率指導者1名、団員5名以上)を満たさない場合には、被推薦団員が所属するグループとは異なるグループに編成することがある。なお、グループ編成は、日本団全体の推薦状況を踏まえ、日本スポーツ少年団が調整のうえ決定する。

※ 定員を上回る申込があった場合は、都道府県スポーツ少年団から推薦された者を優先する。また、総合型地域スポーツクラブ、大学・大学院から推薦された者については、それぞれの推薦上位者を優先することとし、グループ編成状況を踏まえ、日本スポーツ少年団が調整のうえ決定する。

<共通項目>

① 2001年4月2日～2010年4月1日生まれの者(2025年4月1日時点で15歳以上24歳未満の者)。ただし、次のいずれかに該当する場合は、これを満たさなくとも推薦することができる。

・第47回(中止)の本交流参加者として、都道府県スポーツ少年団から推薦された者

・第48回(オンライン)および第49回(オンライン)の本交流参加者

② インターネット通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者。

③ 協調性があり、集団生活において規律を守ることができる者。

④ 英語またはドイツ語等を用いて積極的に現地でコミュニケーションを図る意欲のある者。

<推薦区分>

① スポーツ少年団

次の1)、2)を満たし、都道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者。

1) 令和6(2024)年度にスポーツ少年団に登録し、令和7(2025)年度も引き続き登録する者

2) 次のいずれかに該当する者

・日本スポーツ少年団シニア・リーダー資格保有者

・日本スポーツ少年団指導者・リーダー規程第9条第2項に定める活動単位を20単位以上取得した者

・都道府県スポーツ少年団本部長が特別に推薦する者(将来、所属都道府県における日独スポーツ少年団同時交流〔受入〕をはじめとする国際交流に貢献する意欲があり、積極的にスポーツ少年団活動に関わることが見込まれる者)

② 総合型地域スポーツクラブ

次の1)、2)を満たす者。

- 1) 令和 6(2024)年度に総合型地域スポーツクラブ全国協議会(SC 全国ネットワーク)に登録するクラブに所属し、令和 7(2025)年度も引き続き所属する者(「日独スポーツ少年団国際交流協定書」に未参加の東京都、神奈川県に登録クラブを除く)
 - 2) 所属するクラブの代表者が推薦し、SC 全国ネットワークが認める者
- ③ 大学・大学院
JJSA が指定する大学・大学院に在籍する大学生または大学院生であり、当該大学・大学院の 代表者が推薦する者。
<JJSA 指定大学・大学院> 東京外国語大学、獨協大学

(2) 引率指導者

以下の条件をすべて満たし、都道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者。

※ 過去に本交流への参加経験がある者の推薦を妨げない。

① 令和 6(2024)年度にスポーツ少年団に登録し、令和 7(2025)年度も引き続き登録する者

② 次のいずれかに該当する者

- 1) 令和 7(2025)年度にスポーツ少年団に「指導者」として登録し、スポーツ少年団の理念を学習した者
- 2) 令和 7(2025)年度にスポーツ少年団に「役員」または「スタッフ」として登録している者で、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格(「JSPO 資格」)を保有(日本サッカー協会公認 C 級コーチライセンス以上、日本バスケットボール協会公認C級ライセンス以上の資格を保有する者、令和 6 年度 JSPO 資格養成講習会受講修了者を含む)し、スポーツ少年団の理念を学習した者
- ③ 日本を代表する立場の者としてふさわしい人格と行動力を有し、ドイツ滞在中の団員の心身両面のケアと成長をサポートできる者。
- ④ インターネット通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者。
- ⑤ 英語またはドイツ語等を使い、積極的に現地でのコミュニケーションを図る意欲のある者。
- ⑥ 原則として 20 歳以上、65 歳以下の者(今後もスポーツ少年団で活躍できる若手が望ましい)。

7. 推薦方法

別に定める推薦要領に基づき、JJSA へ推薦する。

8. 推薦期限

2025(令和 7)年 3 月 17 日(月)必着

9. 参加者の選考

JJSA で書類選考を行い、日本団参加者を決定する。

10. 経費(参加負担金)

(1) 参加区分:都道府県スポーツ少年団 1人30万円

(2) 参加区分:総合型地域スポーツクラブ/大学・大学院 1人40万円

※海外旅行保険代、ドイツ滞在中の基本滞在費(宿泊費、食事代、施設入場料等)を含む。

※次のものは参加負担金に含まれず、参加者の個人負担となる。

- ・ 渡航手続き(パスポート取得等)に要する経費
- ・ 【往路】居住地から日本団集合場所(国立オリンピック記念青少年総合センター)および
- ・ 【復路】日本国内空港(解散場所)から居住地までの交通費
- ・ 現地における各グループ内共通経費および個人的諸費用

11. 参加負担金の返金

参加負担金の納入後、参加者本人の都合により本交流への参加を取り消す場合には、実費(公式ユニフォーム、航空券キャンセル等)がかかったものの金額を差し引いて返金する。

12. 事前研修

(1) 日本団事前研修会(オンライン/全員参加):5月17日(土)~18日(日) 2日間

訪問国であるドイツおよびドイツのスポーツのスポーツに関する知識を習得するとともに、本交流の共通テーマ「スポーツと SDGs~スポーツが拓く社会の持続性~」について理解を深めることを目的として実施する。

<留意事項>

- ・ 参加者は、自己の責任において参加するために必要なパソコン、通信機器、通信回線その他の設備を準備し、管理する。
- ・ 参加するために必要な通信回線の利用料金は参加者が負担するものとする。

- ・参加者の各自が最新のコンピュータウイルス対策等がなされている機器を使用すること。JJSA は、参加よりコンピュータウイルスや第三者の妨害等行為による不可抗力によって生じた損害等の一切の責任をわかない。
 - ・参加者の都合により研修に参加できなかった場合は返金等の対応はしない。
 - ・やむを得ない事情により参加できないと認められた場合、別途 JJSA から課された課題(調整中)を所定期日までに提出すること。
 - ・研修中に派遣者として不適格と認められた者は、参加資格を取り消すことがある。
- (2) グループ別事前研修会(グループごとに実施):5月下旬~7月上旬
- (3) ドイツ側受入担当者とのオンライン交流(グループごとに実施):5月下旬~7月上旬
- (4) 日本団集合(全員参加):7月28日(月) 宿泊あり
※会場:国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)
- (5) 日本団結団式(全員参加):7月29日(火)
※会場:国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)

13. 日本団派遣の流れ

~3/17(月)	推薦期限(推薦者→JJSA)
~4月下旬	参加決定通知(JJSA→推薦者、参加者)
~5月上旬	参加負担金の納入 【スポーツ少年団】都道府県スポーツ少年団→JJSA 【総合型地域スポーツクラブ】参加者→JJSA 【大学・大学院】参加者→JJSA
5/17(土) ~18(日)	日本団事前研修会(オンライン/全員参加)
~7月上旬	グループ別事前研修会(グループごとに実施) ドイツ側受入担当者とのオンライン交流(グループごとに実施)
7/28(月)	日本団集合(国立オリンピック記念青少年総合センター)
7/29(火)	日本団結団式(国立オリンピック記念青少年総合センター) 日本出発(羽田空港)【NH217便 22:55発】
7/30(水) ~8/13(水)	全体プログラム(前半)ミュンヘン 地方プログラム(ドイツ各地) 全体プログラム(後半)フランクフルト
8/13(水)	ドイツ出発(フランクフルト空港)【NH204便 12:10発】
8/14(木)	日本到着(羽田空港)【NH204便 8:10着】

14. 海外旅行保険

JJSA は、本交流期間中(前後の各移動日を含む)、日本団全員を被保険者とした海外旅行保険に加入する。
<補償内容(予定)>
傷害死亡・後遺障害 20,000 千円(2,000 万円)
傷害治療 3,000 千円(300 万円)
疾病治療 500 千円(50 万円)
賠償責任 5,000 千円(500 万円)

15. 個人情報および肖像権の取扱について

- (1) 日本スポーツ協会は、本交流開催にあたり、以下の目的のために個人情報を取得する。
- ① 交流の申込み手続きおよび参加資格審査
 - ② 交流運営上必要なプログラム編成および各種資料作成
 - ③ 交流運営上必要な申込手続き
 - ④ 報告書の作成
 - ⑤ 交流運営に必要な連絡
- (2) 日本スポーツ協会は、個人情報を以下のとおり共同利用する。
- ① 共同して利用される個人情報の項目
推薦時および参加決定後に提出される情報、交流中に取得した情報(交流中に撮影した写真および映像)
 - ② 共同して利用する者の範囲
<運営団体>
公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団
ドイツスポーツユース(DSJ)および DSJ 加盟団体

<参加者が申込手続きを行う団体>

当該都道府県スポーツ協会、当該都道府県スポーツ少年団、当該都道府県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会、当該総合型地域スポーツクラブ、当該大学・大学院(当該参加者が申込手続きを行う団体以外には提

されない)

③ 共同して利用する者の利用目的

<運営団体> 上記15.(1)に記載の内容

<推薦手続きを行う団体> 交流の推薦手続きおよび参加資格審査

④ 個人情報の管理責任者

公益財団法人日本スポーツ協会 会長 遠藤 利明

東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 11階

- (3) 参加申込書に記載されている個人情報の一部(顔写真、氏名、性別、生年月日、年齢、得意なスポーツ・趣味、住所)および参加者決定後に提供される個人情報(アレルギー情報)は、dsjを通じて、ドイツ滞在中のホームステイ先にも提供される。
- (4) 取得した個人情報は、本交流の運営のため、旅行代理店に取扱を委託する。なお、日本スポーツ協会は、旅行代理店との間で個人情報の取扱に関する契約を締結し、適切な管理・監督を行う。
- (5) 交流の様子は、参加申込書に記載されている情報(氏名、道府県、年齢)とともに主催者および主管団体を通じた公開、交流関係機関・団体および報道機関等による新聞・雑誌および関連ホームページ等への掲載、次回交流プログラムへの掲載等で公表することがある。
- (6) 交流関係機関・団体又はこれらに認められた報道機関等によって撮影された写真、映像が新聞・雑誌・報書および関連ホームページ、インターネット等によって掲載されることがある。
- (7) 日本スポーツ協会は、本人またはその代理人から、保有する個人情報について、開示、訂正、追加、削除、利用停止、消去の請求があった場合、法令に則って、所定の手続に従い、誠意をもって対応する。また、本人ら利用目的の通知を求められたときは、本人に対し、法令に則って、所定の手続に従い、遅滞なく通知する。これらの請求については、日本スポーツ協会地域スポーツ推進部少年団課(jjsa@japan-sports.or.jp)まで連絡すること。
- (8) 日本スポーツ協会の個人情報保護方針は以下 URL から確認すること。
<https://www.japan-sports.or.jp/privacy/policy.html>



② 日本団事前研修会(オンライン)

第52回日独スポーツ少年団同時交流(派遣)
日本団事前研修会日程表

5月17日(土)		5月18日(日)	
団員	引率指導者	団員	引率指導者
10:30			10:30
11:00			11:00
Zoom入室			
総合型クラブ・大学参加者への基本レクチャー(45min) ※総合型地域スポーツクラブ・大学からの参加者のみ			
30			30
12:00			12:00
	Zoom入室		
	団長団・引率指導者ミーティング(1h)		Zoom入室
30			団長団・引率指導者MTG(30min)
13:00			13:00
Zoom入室		Zoom入室	
開会式、オリエンテーション(20min) ・日独交流について、派遣スケジュール		グループ別ミーティング(1h30min) ・グループスローガン ・グループ出し物 ・役割分担 ・グループ別事前研修会 ・グループ荷物、土産品 etc...	
30			
14:00			14:00
アイスブレイク(30min)			
休憩			
共通テーマレクチャー(1h) ・共通テーマ「『スポーツ×SDGs』～スポーツが拓く社会の持続可能性～」			
30			
<講師> 拓殖大学国際学部 准教授 石川 一喜 氏			
15:00			15:00
休憩			
研修プログラム(1h30min) ・グループディスカッションの進め方 ・グループディスカッション(共通テーマ)			
30			
16:00			16:00
17:00			17:00
休憩			
渡航手続きについて(30min) ・(株)JTBから説明			
30			
確認事項(30min)			
18:00			18:00
1日目終了	団長団・引率指導者ミーティング(30min)	2日目終了	団長団・引率指導者ミーティング(30min)
30			2日目終了
	1日目終了		
19:00			19:00

③ 日本団の編成

グループ	構成県	引率指導者・団長団			団員(少年団)			団員(クラブ)			団員(大学)			小計 (引指+団員)	備考
		男	女	小計	男	女	小計	男	女	小計	男	女	小計		
北海道	01 北海道	1		1名	0	1	3名	1		1名			0名	5名	福井県の2名を北海道グループとして編成
	20 福井県				1	1									
東北 I・ 東北 II	02 青森県	1		1名		1	5名			0名			0名	6名	
	04 宮城県				1										
	05 秋田県				2	1									
	07 福島県				1										
関東 I	10 群馬県			1名		2	3名			0名	1	1	2名	6名	
	12 千葉県		1			1									
関東 II	08 茨城県	1		1名		2	5名			0名			0名	6名	
	11 埼玉県					3									
北信越	16 長野県			1名		1	5名			0名			0名	6名	
	18 富山県				2										
	19 石川県					2									
東海	21 静岡県			1名		1	6名			0名			0名	7名	引率指導者は 千葉県からの推薦
	22 愛知県				1	1									
	23 三重県				1	1									
	24 岐阜県				1	1									
近畿	12 千葉県	1		1名		1	7名			0名			0名	8名	
	25 滋賀県				1	1									
	26 京都府					1									
	27 大阪府					2									
	28 兵庫県	1				1									
30 和歌山県				2											
中国	33 岡山県			1名		2	6名			0名			0名	7名	
	34 広島県	1			2	1									
	35 山口県					1									
四国	36 香川県			1名		1	5名			0名			0名	6名	
	37 徳島県	1			2										
	39 高知県				2										
九州	40 福岡県			1名		3	8名			0名			0名	9名	
	42 長崎県				1	1									
	44 大分県					2									
	47 沖縄県	1				1									
団長団	団長	1		3名										3名	
	総務	1													
	庶務(JSPO)		1												
合計		10	3	13名	28	25	53名	1	0	1名	1	1	2名	69名	

(2) ドイツ団受入

① 実施要項

第51回日独スポーツ少年団同時交流実施要項〔受入〕

本交流は、日独両国のスポーツ少年団の青少年および指導者の相互交流により友好と親善を深め、国際的能力を高めると共に、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目的に、2023年に調印した「日独スポーツ少年団国際交流協定書」に基づき、次のとおり実施する。

1. 主催

公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団
都道府県体育・スポーツ協会 都道府県スポーツ少年団
ドイツスポーツユエグント(dsj)

2. 後援

スポーツ庁

3. 期日

2025年7月31日(木)～8月14日(木)

4. 参加人数・グループ編成

ドイツ団：100名〔12グループ 97名(団員85名、引率指導者12名)、団長団3名〕

※グループ編成の詳細は別紙『日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成(2024-2027)』のとおり

5. 共通テーマ

「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～

※SDGsの17の目標のうち、以下3テーマからいずれか1つをグループごとに選択する

「3.すべての人に健康と福祉を」、「4.質の高い教育をみんなに」、「5.ジェンダー平等を実現しよう」

6. プログラム

(1) 受入日程

- ① 全体プログラム(前半)〔担当：日本スポーツ少年団〕
期 間： 2025年7月31日(木)～8月4日(月)
場 所： 相鉄グランドフレッサ 東京ベイ有明 等
- ② 地方プログラム〔担当：受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内〕
期 間： 2025年8月4日(月)～8月12日(火)
- ③ 全体プログラム(後半)〔担当：日本スポーツ少年団〕
期 間： 2025年8月12日(火)～8月14日(木)
場 所： 相鉄グランドフレッサ 東京ベイ有明 等

(2) 地方プログラム〔担当：受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内〕

地方プログラムの実施にあたっては、各受入グループ幹事県を中心とした委員会を設け、その計画と実行にあたる。

(3) 経費

- ① 「全体プログラム(前半・後半)」期間中の受入経費については、日本スポーツ少年団が負担する。(各グループの分散・集合費含む)
- ② 「地方プログラム」期間中の受入経費については、受入道府県スポーツ少年団が負担する。なお、日本スポーツ少年団が手配する受入通訳の謝金は日本スポーツ少年団が負担する。

7. 個人情報および肖像権の取扱いについて

(1) 日本スポーツ協会は、本交流開催にあたり、以下の目的のために個人情報を取得する。

- ・ 交流の申込み手続きおよび参加資格審査
- ・ 交流運営上必要なプログラム編成および各種資料作成
- ・ 交流運営上必要な申込手続き
- ・ 報告書の作成
- ・ 交流運営に必要な連絡
- ・ 日本スポーツ協会は、個人情報を以下のとおり共同利用する。

共同して利用される 個人情報の項目	・参加申込書に記載されている情報 ・交流中に取得した情報(交流中に撮影した写真および映像)
共同して利用する者の 範囲	●主催・主管団体 ・公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団 ・都道府県体育・スポーツ協会 都道府県スポーツ少年団 ・ドイツスポーツユエグント(dsj)、dsj 加盟団体

	<p>※当該参加者が申込手続きを行う都道府県スポーツ少年団以外には提供されない</p> <ul style="list-style-type: none"> ●参加者の滞在先 ・ドイツ滞在中のホームステイ先
共同して利用する者の利用目的	<ul style="list-style-type: none"> ●主催・主管団体 ・上記(1)に記載の内容 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・交流の申込手続きおよび参加資格審査
個人情報の管理責任者	<p>公益財団法人日本スポーツ協会 会長 遠藤 利明 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 11 階</p>

- (2) 交流の様子は、参加申込書に記載されている情報(氏名、道府県、年齢)とともに主催者および主管団体を通じた公開、交流関係機関・団体および報道機関等による新聞・雑誌および関連ホームページ等への掲載、次回交流プログラムへの掲載等で公表することがある。
- (3) 交流関係機関・団体又はこれらに認められた報道機関等によって撮影された写真、映像が新聞・雑誌・報告書および関連ホームページ、インターネット等によって掲載されることがある。
- (4) 日本スポーツ協会は、本人またはその代理人から、保有する個人情報について、開示、訂正、追加、削除、利用停止、消去の請求があった場合、法令に則って、所定の手続に従い、誠意をもって対応する。また、本人から利用目的の通知を求められたときは、本人に対し、法令に則って、所定の手続に従い、遅滞なく通知する。これらの請求については、公益財団法人日本スポーツ協会ブランド戦略部(link@japan-sports.or.jp)まで連絡すること。
- (5) 日本スポーツ協会の個人情報保護方針は以下 URL から確認すること。
<http://www.japan-sports.or.jp/privacypolicy/tabid/102/Default.aspx>



私たちは、「スポハラ」のないスポーツ界を目指します。

② ドイツ団の編成

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側交流 パートナー	受入担当 都道府県	指導者・団長団		団員		合計		
				男	女	男	女	男	女	男女
1	ベルリン	北海道	北海道	0	1	0	5	0	6	6
2	シュレスヴィツヒ =ホルシュタイン	東北 I	岩手県、秋田県	0	1	0	7	0	8	8
3	バイエルン	東北 II	宮城県、福島県	1	0	4	3	5	3	8
4	柔道	関東 I	栃木県、山梨県	1	0	4	3	5	3	8
5	メクレンブルク =フォアポンメルン	関東 II	埼玉県、茨城県	1	0	2	6	3	6	9
6	バーデン	北信越	長野県、新潟県	0	1	5	4	5	5	10
7	ヴュルテンベルク	東海	愛知県、岐阜県	1	0	3	5	4	5	9
8	潜水 I	近畿 I	兵庫県、京都府	1	0	3	2	4	2	6
9	潜水 II	近畿 II	大阪府、和歌山県	1	0	2	3	3	3	6
10	ザクセン/ ザクセン=アンハルト	中国	山口県、島根県	1	0	3	5	4	5	9
11	ニーダザクセン	四国	徳島県、香川県	1	0	3	5	4	5	9
12	ノルトライン =ヴァストファーレン	九州	長崎県、福岡県	1	0	4	4	5	4	9
13	団長団	JJSA	北海道、秋田県	2	1	0	0	2	1	3
				11	4	33	52	44	56	100

③ ドイツ団受入通訳一覧

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側 交流パートナー	通訳
1	ベルリン	北海道	津田 祐輔
2	シュレスヴィツヒ=ホルシュタイン	東北 I / 全体	斎藤 恵理
3	バイエルン	東北 II	柴田 晴大
4	柔道 ユーゲント	関東 I	高久 裕樹
5	メクレンブルク=フォアポンメルン	関東 II / 全体	ハフナー マックス
6	バーデン	北信越	岩間 智子
7	ヴュルテンベルク	東海	岩間 敏之
8	潜水 I	近畿 I	柴田 耕治
9	潜水 II	近畿 II	竹之内 悦子
10	ザクセン/ザクセン=アンハルト	中国	高坂 朋子
11	ニーダザクセン	四国	竹内 優
12	ノルトライン=ヴェストファーレン	九州 / 全体	阿部 利永子
13	団長団	団長団 / 全体	秋山 大輔

(※) 全体プログラム(前半・後半)の通訳を兼ねる。

(3) 日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2024～2027年〕

日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2024～2027年〕

日本スポーツ少年団（以下「JJSA」）とドイツスポーツユース（以下「dsj」）は、両組織間の国際交流を、2024年から2027年までの4年間継続することに同意する。

この国際交流は1967年以来実施されてきており、一般青少年教育としての成果を上げてきたばかりではなく、日本とドイツ間の友好関係にも寄与してきた。

また、この国際交流を機に、継続的な青少年交流のパートナーシップや姉妹都市関係が多く誕生している。2027年までの両組織間の国際交流の実施にあたっては、1977年より改定されてきた合意書・協定書およびそれぞれの附録の内容をふまえ、以下により協定書を締結する。

なお、2028年以降の両組織間の国際交流の継続については、本協定書の有効期限の前年である2026年から両組織間で協議を行うこととする。

I. 日独スポーツ少年団同時交流

1. 目的

本交流の目的は、ドイツ連邦児童青少年計画の基準および日本スポーツ少年団の育成計画に基づいた一般青少年教育を促進することである。同時に、本交流に参加する若者たちが、両国の文化・社会・政治・経済を知ることにより、友好と親善を深め、グローバル化した世界において、自分の現況と立場を認識する能力を身につけることである。

さらに、異文化適応能力の向上、青少年スポーツにおけるボランティア活動参加への動機付けを目的とする。

また、本交流を通して日独双方のパートナー同士の持続的な友好関係を促進・強化し、ひいては独自交流への発展の動機付けを目的とする。

2. 主催

日本スポーツ少年団／ドイツスポーツユース
道府県スポーツ少年団／ドイツスポーツユース加盟団体

3. 交流テーマ

本交流の目的達成と研修成果をより大きなものとするため、両組織間にて協議のうえ、「交流テーマ」を設定し、両国参加団員の研究課題とするともに、少なくとも2年間継続する。

交流テーマは、様々な形態と方法によって実施することとする。

4. 事前研修

参加者は、本交流の目的を達成するために、各自自己研鑽に努めなければならない。また、訪問国の理解とグループワークのため、JJSA および dsj がそれぞれ実施する事前研修会に参加する。そこでは少なくとも次の分野が扱われる。

- a) 本交流の目的
- b) 交流テーマ
- c) 訪問国に関するインフォメーション(地理・歴史等)
- d) 訪問国の文化・慣習
- e) 訪問国のスポーツと青少年に関するインフォメーション
- f) 訪問地に関するインフォメーション

また、引率指導者のために、本交流の目的および引率指導者の役割をテーマとして研修会を別に行う。

なお、受入プログラムの責任者や通訳も、本交流の目的、内容、パートナーを理解するよう事前の打合せを行う。

5. 参加者と編成

- ・ 派遣団の規模は最大100名とし、団長団、引率指導者、団員にて構成される。
 - ・ 団長団は3名以内で構成し、全体を統括する。
 - ・ 参加団員の年齢は、15歳から24歳までの範囲とする。
 - ・ 団長団を除く、引率指導者、団員のグループ編成は、日本団は11グループ、ドイツ団は12グループに編成する。各グループの引率指導者は原則1名とする。
 - ・ 欠員が10%に達する場合、両組織は事前に通告する。
- なお、派遣団の構成については、その実態を日独双方で確認のうえ、必要に応じて修正する。

6. 構成・パートナー

両国派遣団の構成およびパートナーの編成は、別に定める。

7. 時期・期間

本交流の時期は両国参加団員の夏季休暇期間中(ドイツ団基本日程:7月23日頃~8月7日頃、日本団基本日程:8月1日頃~8月16日頃)とし、期間については移動日を含めて最大16日とする。

8. 交流プログラム

本交流は一般青少年交流であり、「みんなのスポーツ」が重点的に扱われる。

異なる文化・言語を持つ双方の団員たちにとって、スポーツは「共通言語」といえることから、交流目的を達成するための手段として、スポーツを適切なかたちで積極的に取り入れる。

団員が訪問国での青少年交流やスポーツ体験、文化や社会について理解を深めるプログラム等を通じて、訪問国のスポーツや文化・社会、青少年活動に興味を持ち、協力的に参加するよう動機づける。また、本交流は持続可能(Sustainability)でインクルーシブ(Inclusive)な交流を目指し、世界情勢に基づいた重要なテーマを取り入れながら、その時々に応じた重要な課題やテーマを交流に取り入れる。

(1) 全体プログラム

交流プログラムには、交流の始めと終わりに JJSA および dsj が直轄する全体プログラムを設ける。

(2) 地方プログラム

交流プログラムには、各グループがそれぞれのパートナーを訪問する地方プログラムを設ける。なお、可能な限り、地方プログラムの期間中にグループの全員が同じ場所に宿泊する機会を設ける。原則として、数か所に分割する等、グループ活動に支障をきたすことは避けること。

青少年に身近なテーマでディスカッションが実施されることが望ましい。

団員に関する情報(スポーツ種目・趣味・健康に関する事項・希望)を交流開始前の十分早い時期に、受入先に提供する。

9. 青少年中心の運営

「青少年中心の運営」という原則に従い、団員は本交流の準備・実施・アフターケアにおいて、自ら積極的に行動し、交流に参加すること。

「若者が若者のために計画・運営する」という方針に向けて、受入側の青少年グループがプログラム作成および実施に参画できるよう努力する。

10. 民泊(ホームステイ)

訪問国の人・文化・生活を理解するうえで、民泊プログラムは非常に重要である。地方プログラムの作成にあたっては、民泊プログラムを取り入れる(数日間同一家庭に滞在し、ファミリーデイを設ける)ことが望ましい。地方プログラムの中での民泊は2回程度とする。

なお、参加団員の希望に応えられるよう、パートナー同士で訪問先家庭の家族構成について、交流開始前の十分早い時期に交換できるよう努力する。

11. 交流マーク

本交流25周年にあたり JJSA によって作られたシンボルマークは、交流のシンボルとして双方で使用する。なお、このマークは、地方の関係団体にも使用が許可される。

12. 通訳・言語

本交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。したがって、双方ともに適切な通訳を選任し、言葉の障壁を克服するよう努力する。

参加者は、日常会話程度の語学力(日・独・英語)の向上にも努める。

地方パートナー同士での直接的連携がはかれるよう、パートナー同士はこれまで以上に英語で情報交換ができるように努める。

13. 経費

国際交流の慣例により、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

14. 情報交換・伝達の仕方

- 本交流に関する基本的事項は、現行のとおり JJSA と dsj 間で協議・調整のうえ決定する。
- 日独双方は、情報の簡略化・情報網の整備を行い、本交流の成功と事務処理作業の軽減に努める。
- JJSA と dsj は、地方プログラムの効果的な情報交換のため、双方のパートナー(都道府県スポーツ少年団、dsj 加盟団体)の直接的連携を強化することに努める。
- JJSA は都道府県スポーツ少年団の中に幹事県を置く。
- dsj 加盟団体は、2年間の本交流に関するあらゆる事項の窓口となる担当者を置く。
- JJSA、dsj および双方のパートナーは、本交流の準備にあたり、オンラインツール等を活用し、円滑な情報交換・共有に努める。(日独双方で交換する情報については以下を参照)

(1) プログラム希望事項

(2) 写真付き名簿

(3) アレルギー・持病・疾患に関する情報

II. 日独スポーツ少年団指導者交流

1. 目的

本交流の目的は、JJSA および dsj の指導者が両国を相互に訪問し研修を実施することにより、それぞれの指導者の資質向上をはかるとともに、指導的任務への準備をし、日独スポーツ少年団同時交流の充実と、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目指すものである。

2. 参加者

派遣団の規模は、最大 10 名とする。10 名の中に組織を代表する団長を 1 名おく。

派遣団は、この本交流が青少年スポーツの今後の発展と青少年交流の資質の向上に寄与すべく、また情報交換および意見調整の場として、その時々必要性に応じて編成される。

3. 時期・期間

本交流は派遣と受入を隔年で実施する。期間は最大 2 週間とし、時期は毎年両組織間の協議で決められる。

4. 研修内容

本交流は、両国のスポーツ組織とその運営および課題、スポーツにおける青少年活動の実情などを研修するものである。

また、スポーツ・青少年に関すること以外にも訪問国の文化・社会について理解を深め、研修の成果をより充実させる。

講義による理論的説明の他、さらに地方におけるスポーツや青少年活動の実態を研修するプログラムを取り入れる。

5. 交流テーマ

本交流における研修成果をより大きなものとするため、両国にて協議のうえ「交流テーマ」を設定する。その際、参加者の希望もできるだけ考慮する。

また、両国指導者間における意見情報交換、フリーディスカッションの場を設けることが望ましい。

6. 通訳

本交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。正確な内容伝達のため、双方とも専門知識をもった通訳を選任する。

7. 経費

国際交流の慣例に従い、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

III. その他

1. 両組織は年に一度、役員レベルで事業の評価また今後の方針を協議する場を対面またはオンラインで設ける。対面で行われる場合は両国で交互に実施されるようにする。

1. それぞれの国内においても、両国間の今後の青少年交流の発展に、両組織ともに積極的に協力する。

2. 両組織は、将来の青少年育成に関する提携関係を開発・発展することに努力する。

3. 両組織間での青少年育成に関する提携関係は、青少年活動のグローバル化、またヨーロッパおよびアジアにおける発展に適応される。

4. この同時交流と、その文化政策上の意義が両国で認められるよう、両国政府機関へのコンタクトを今後も充実させる。

5. 本交流に参加する青少年が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することを目的とした保護措置について別紙の通り定めることとする。

6. 本協定については両国の協議のもと、内容を変更することができる。

IV. 問題処理

本協定書について問題が生じた場合、または本協定書に定めのない事柄が生じた場合は、双方で協議し、互いに誠意をもって解決にあたるものとする。

2023 年 7 月 27 日

(4) 日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成表(2024-2027)

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側 交流パートナー	構成県 (2024-2027)	定員
1	ベルリン ブランデンブルク	北海道	北海道	6
2	シュレースヴィヒ=ホルシュタイン 体操	東北Ⅰ	青森、岩手、秋田	8
3	バイエルン	東北Ⅱ	宮城、山形、福島	8
4	柔道	関東Ⅰ	栃木、群馬、 千葉、山梨	8
5	メクレンブルク=フォアポンメルン ハッセン	関東Ⅱ	茨城、埼玉	9
6	スキー 南バーデン	北信越	長野、新潟、富山 石川、福井	10
7	ヴュルテンベルク	東海	静岡、愛知、 三重、岐阜	9
8	潜水 重量挙げ	近畿Ⅰ ※1 ※2	滋賀、京都、兵庫	6
9	フェンシング モータースポーツ	近畿Ⅱ ※1 ※2	大阪、奈良、和歌山	6
10	ザクセン=アンハルト ザクセン	中国	鳥取、島根、岡山 広島、山口	9
11	ラインラント=プファルツ	四国	香川、徳島、 愛媛、高知	9
12	ノルトライン=ヴェストファーレン チェス	九州	福岡、佐賀、長崎、 熊本、大分、宮崎、 鹿児島、沖縄	9
13	団長団	団長団	団長団	3
				100

※1: 受入は近畿Ⅰと近畿Ⅱの2グループ(3府県ずつ)に分かれますが、派遣団は1つの近畿グループ(6府県)として派遣します。

※2: ※1に伴い派遣団における近畿グループの定員数は12名(引率指導者1名、団員11名)とする。

(5) 日独スポーツ少年団同時交流における青少年保護措置

日独スポーツ少年団同時交流における青少年保護措置

日本スポーツ少年団(JJSA)とドイツスポーツユースリーグ(dsj)は、日独スポーツ少年団同時交流を実施し、その成功にむけて協力する。

本事業の目的は両国青少年の人格形成、両団体のスポーツによる青少年の健全育成における協力と交流の促進である。その際に参加団員が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することは重要な課題である。

そのために、両団体とも共通の青少年保護措置の重要性を認識するものである。

青少年保護措置は予防的措置並びに不測の事態が発生した場合の対応方法を網羅するとともに、日独スポーツ少年団同時交流の実情に則したものでなくてはならない。

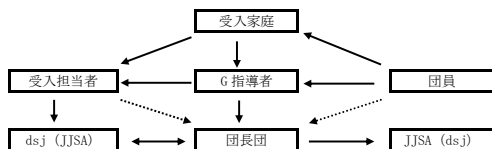
両団体はこの青少年保護措置を実施し、変更の必要性が生じた場合は、その都度両団体で協議の上、改善することとする。

1. 個人情報の取扱い

個人情報の取得は、利用目的を明確に定め、その目的の達成のために必要な限度においてのみ行うものとする。また、取得した個人情報については、利用又は第三者に提供してはならない。ただし、法令に基づく場合及び本人の同意があり、かつ業務遂行上必要な範囲においてはこの通りではない。

2. 緊急時の連絡方法と対応措置

緊急時において適切に対応するためには両団体での迅速な情報共有と対応策の検討が重要である。そのため、緊急時には以下の経路に則り連絡を取り、その都度適切な対応をする。



※実線・主となる連絡経路 破線・予備としての連絡経路

3. 参加団員のジェンダーに特有な関心(興味・欲求)への配慮

青少年の成長過程において、その性のあり方に基づく興味や経験は様々である。

そのため、本事業の実施に際しては、同性の指導者及び相談ができる立場となるための人選が求められる。

上記を踏まえ、そのような参加団員の年代の特徴に配慮し、両団体とも団長団、指導者及び班長の人選にあり、男女混合の人選に配慮する。

4. 民泊家庭の選定と民泊家庭への事前研修に関する基準

民泊プログラムは同時交流を実施する上で、不可欠な要素である。

また同時に、適切な民泊家庭を選定することは容易ではないことも事実である。従って、民泊家庭の選定に際して、下記の事項について配慮する。

- ・ 民泊家庭を選定した団体は、その民泊家庭に対し、事前研修を必ず行い、本措置の内容について取り扱うこととする。
- ・ 参加団員は可能な限り、同性、同年代の青少年が最低1人いる家庭へ滞在する。
- ・ 未成年に関してはできる限り1家庭へ2名の滞在とする。

5. 暴力・ハラスメント・差別の防止及び対応措置

青少年に対しての、または青少年間での暴力、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント、差別を防止し、社会的、民族的、文化的背景、世界観、宗教、政治思想、性的性向、年齢、性別に関わらず、すべての人間の尊厳を尊重し、フェアで平等に扱う。不測の事態が発生した場合については、両団体とも上記「2. 緊急時の連絡方法と対応措置」の内容に基づき問題解決へ向け積極的に取り組む。

団長団、指導者、団員、民泊家庭、通訳への事前研修では、本保護措置の他、必要と思われる事項に関し研修を行う。

6. その他

- ・両団体は、青少年、特に未成年者の心身に影響を及ぼすとされる、酒・タバコなしの交流を目指す。

●あしがき

第52回の本交流と昨年度までの交流の大きな違いは、従来のスポーツ少年団の枠組みを超え、総合型地域スポーツクラブや獨協大学の新たな仲間が日本団として参加してくださったことです。異なるバックグラウンドを持つ参加者が集うことで、活動に新たな視点と活気をもたらされました。多様な層が交わるこの経験は、親睦のみに留まらず、次世代を担う指導者やリーダーの育成、そして広い視野を持つ国際人の養成へと繋がる確かな一歩になったと確信しています。

現地では言葉が完璧に通じなくても、ジェスチャーを交えてコミュニケーションをとる姿や、遊びの中で共に笑い合う中で参加者たちが瞬間に打ち解けていく姿を何度も目にしました。まさに、言葉の壁を超えて人と人を結びつける「スポーツの力」を体現する光景でした。

今回の交流を無事に終えることができたのも、この素晴らしい交流の場を作り、温かく受け入れてくださった dsj の関係者の皆様、団員を送り出し、ドイツ派遣までのサポートをしてくださった所属団体の皆様、そして現地で団員を見守り、支えてくださった引率指導者の方々をはじめとするすべての関係者の皆様のおかげです。心より深く感謝申し上げます。

昨年度のドイツ団受入、そして今年度の日本団派遣。双方の立場からこの事業に深く携わることができたこの2年間は、私にとっても何物にも代えがたい財産となりました。

この素晴らしい交流が今後さらに発展し、その魅力がより多くの人々に伝わっていくことを願うと共に、参加者の皆様にもその経験を発信し、交流の輪を広げてほしいと思っています。参加した一人ひとりの未来がより豊かに開かれていくことを願い、あしがきの言葉とさせていただきます。

岡本 咲子(第52回日本団庶務)

まず初めに、52回日独スポーツ少年団同時交流(受入)の実施に当たり当協会と共催していただきました都道府県スポーツ協会並びに、ご協力賜りました市区町村スポーツ少年団をはじめ、単位スポーツ少年団、ホストファミリーなど、受入関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

今年度は、特に過去に日本団として派遣事業に参加した若者たちが、受入スタッフとして積極的にプログラム運営に携わってくれたことが印象に残っています。この交流を通じて生まれた絆が一過性ではなく、長く続いていることを実感し、大変嬉しく感じました。

コロナ禍を経て交流事業が再開されてからは、社会情勢の変化により事業運営が容易ではない場面もありました。物価高騰が続く中、限られた予算の中で内容と質を維持することは大きな課題であり、受入地域においても同様の困難があったことと存じます。こうした状況下においても、参加者から寄せられた温かい感想や前向きな声は、私たちにあって大きな支えとなりました。

日独交流の価値は、言語や文化の違いに触れるだけではなく、スポーツを通じ、言葉を超えて心が通じ合う瞬間や、日々の生活を共有する中で芽生える理解と尊重こそ、参加者にとってかけがえのない経験となっています。

本交流を経験した子どもたちやホストファミリーの皆様が、この出来事を一つの転機として、地域や社会と主体的に関わり続けるきっかけとなれば幸いです。スポーツには国籍や年齢を越え、人と人をつなぐ力があります。その力がこれから先も未来へ受け継がれ、多くの人に新しい視野と挑戦の機会をもたらしてくれることを願っております

白波瀬 まゆ(ドイツ団受入担当)

=====

第52回日独スポーツ少年団同時交流報告書

■発行日 2026年3月31日

■編集発行 公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-2 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 内



公益財団法人日本スポーツ協会
日本スポーツ少年団

Japan Sport Association
Japan Junior Sport Clubs Association